
『ときメロ』 - 恐怖のイケメン学園 -

みなと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『ときメロ』 - 恐怖のイケメン学園 -

【Nコード】

N7786S

【作者名】

みなと

【あらすじ】

活火山、伽羅燃岳^{きゃらもえだけ}。全国のオタク達の萌エネルギーが臨界点に達した時、大噴火が起こり夢の2次元への扉が開く。そんなトンデモ予言が実現し、気付けばおれは姉貴が夢中の乙女ゲーム『ときメロ』の世界にトリップしていた。ってなんでおれがヒロインになっちゃってるわけ！？ 奔放な同居人、クールな幼馴染、学園の王子様、年下プレイボーイ、妖艶な魔王様……迫り来るイケメンたちに戦々恐々。「この世界から抜け出すには全キャラ落とせ」ってそんなバカなー！（涙） 少女漫画の王道パターンを、ちよっ

とひねくれた設定でお届けします。あなたの好みは誰ルート？（笑）
精神的BLとのご指摘を受けましたので、苦手な方はご注意ください

『ときメロ』メインキャラクター紹介（前書き）

>	i	2	8	2	3	2	—	3	3	9	3	<						
i	l	l	u	s	t	r	a	t	i	o	n	:	ひ	な	む	う	さ	ん

『ときメロ』メインキャラ紹介

ゲーム『ときめきメロディ』の遥かなる金色の日々』メインキャラクター紹介

金城 煌（かねしろ・あきら）cv・浪川 輔
春からヒロインと同居することになる。高校2年。潑刺^{はつらい}として寛大、スポーツ万能。開放的な性格だが、どこか飄々^{ひょうひょう}としてつかめないとこもある。牡羊座B型。

蒼木 悠斗（あおき・ゆうと）cv・中 悠一
ヒロインの幼馴染で家はお隣さん。高校1年。クールで理知的。成績優秀、剣道も全国レベル。基本他人に無関心だがヒロインにはなんだかんだで甘い。水瓶座A型。

北王子 梓茶（きたおうじ・あずさ）cv・岸尾 だいすけ
ヒロインをバンドに引き込む。高校2年。穏やかだがさりげに強引。気品にあふれ、笑顔を絶やさない学園の王子様で理事長の息子。あだ名は「王子」「王子先輩」。魚座O型。

紫葉 静流（しば・しずる）cv・内 昂輝
ヒロインの後輩にあたる中等部2年。流行に敏感で頭の回転が速い。14歳にしてプレイボーイと名高いフェロモン系美少年。双子座AB型。

黒川 旺眞（くろかわ・おうま）c v・諏 部順一

対立バンドのカリスマボーカリスト。高校2年。煌と犬猿の仲。財閥の御曹司。圧倒的な美貌と妖艶ようえんを誇るが、傲岸不遜ごうがんふそんの無愛想で超マイペースの通称「魔王」。蠍座B型。

*7/24追記。ピアプロで一目惚れしたひなむうさん（<http://piaapro.jp/hinamuu>）にキャラデザをしていただきました！

ここに載せたかったのですが、一枚一枚が大きくなってしまいう仕様なので、小説の合間にキャラクターファイルを挿入し、そちらで順次一人ずつ掲載させて頂きます。

こちらは打合せでいただいたデフォルメイラスト。か、可愛すぎる

…！

ひなむうさん最高。h s h s

> i 2 7 9 3 1 — 3 3 9 3 <

『ときメロ』メインキャラ紹介（後書き）

連載作品があと一歩で終了、というところでの新連載ですが、
どうしても書きたくなっちゃったので書いています。

（もう一つもちゃんと終わらせるのでご容赦ください。）
こんな乙女ゲーやりたい、という願望から創作w

1・腐女子の休日とトンデモ予言

高校に入学してから初めてのゴールデンウィーク一日目。

おれがリビングのソファに寄りかかって漫画を読みふけていると、「おはよー」とやけに明るいつい声とともに二階から七つ上の姉貴が降りてきた。

『おはよー』ってもう正午だけだな。

すっぴんでパジャマ姿の姉貴は、鼻歌を歌いながら一間続きのダイニングキッチンで冷蔵庫を漁っている。

「やけにご機嫌じゃん」

「だって、今日は久しぶりになんの予定もない休日だよ！ もう嬉しくって」

頬緩みまくりで、よそった御飯の上に卵を落とす姉貴。

仕事だ人付き合いだで忙しい日々を送る社会人の彼女にとって、真の意味での「休日」はよほどありがたいらしい。

「で、ねーちゃんはその貴重な休日を、どう過ごす？」

何気なく尋ねたら、

「一日引きこもってゲーム三昧！！」

力強く、なんともダメな答えが返ってきて、苦笑するしかなかった。本来根っからのインドア派の彼女には、それが大事な充電時間なんだろうけどさ。

「若い女の休日としては、あまりに不毛だろ」

「いいの。もう腐ってるから。リア充なんてクソ食らえ」

きっぱりと宣言して、御飯をかきこむ。

「……そういえば、伽羅燃^{きゃらもえ}たんはどんな様子？」

ふと箸を止めて聞いてきたのは、うちの県で最近にわかに活動が盛んになってきてる活火山についてだった。

「たん付けすんな。伽羅燃^{きゃらもえ}岳は……今朝も一回噴火したみたいだな。外見てみるよ、灰で地面まっしろ」

おれの答えに、姉貴はなぜか「そつかあ」と笑った。

「なにが嬉しいんだよ？ 噴火して灰が降ると洗濯も干せないし、農家の畑だって大迷惑だろ。火山のすぐ近くじゃ空振でガラスが割れたりもしてるっつーのに」

「ふふふ、あんたは伽羅燃^{きゃらもえ}たんの秘密を知らないからねえ」
「秘密？」

首を傾げるおれに、姉貴は怪しい笑みを浮かべて頷く。

「伽羅燃岳は実は知る人ぞ知るパワースポットでね。日本全国のオタク達がキャラ萌えするたびにエネルギーが溜まっていつて、臨界点に達すると噴火するの。でもまだまだ今は序の口。もっともっと萌エネルギーが集まって大噴火が起こった時、『萌えー』という轟音と共にピンクの灰が舞い躍り、夢の2次元への扉が開くという伝説が」

「もついい」

ダメだこいつマジで終わってる。

「ご馳走様！」と卵かけ御飯だけの朝食を終えたまるでダメな女、略してマダオ（by銀）は、リビングにやってくると流れる動作でテレビの電源をいれ、家庭用ゲーム機に手を伸ばす。

「また乙女ゲーかあ？」

学園生活を送りつつ、色んなタイプのイケメンたちにちやほやされる逆ハーレムゲーム、通称乙女ゲーに姉貴は夢中だった。特に最近はこの『ときめきメロディ』遙かなる金色の日々』がお気に入らしく、平日などは寝る時間も削ってひたすらプレイしている。結果、睡眠不足で肌は荒れ、目の下にはクマ。部屋の掃除も滞りがちで、ハマればハマるほど『乙女』から遠ざかっているのに乙女ゲーとはこれいかに。

「『ときメロ』、何周プレイしてんだよ。こないだ全キャラ制覇したとか言ってなかったっけ？」

「まだ見てないイベントや揃ってないスチルがいっぱいあんのよ」

タイトル画面でスタートボタンを連打して、『はじめから』を選択。

馴れた手つきでさっさと入力されたプレイヤーの名前を見て、おれはギョツと目をむいた。

「ちょっと待て！『羽鳥 和希』ってなんでおれの名前！」

「あたしの名前のデータばっかだとわけわかんなくなるの。いいじゃん、ぶっちゃけあんた、あたしより可愛いし」

「いや意味わかんねえから。なんでおれが男に口説かれなきゃなんねーんだ！？」

「その嫌そうな反応を楽しみたいから（はあと）」

ニマニマとやらしい笑みを浮かべる姉貴だが、冗談じゃねえ！

「ふざけんな！ 消せ！ しかも愛称『バカちゃん』って〜はい、強制消去」

「やだ、返してよバカちゃん」

無理矢理おれが姉貴からコントローラーを奪った時だった。

「ぐぐぐぐぐ……」どこかから地鳴りのような音が響いてきたのは。

「な、なんだ!?!」

「何!?! ま、まさかこれ……」

伽羅燃たん、と姉貴が呟いた瞬間。

とんでもなく大きな爆発音と共に、辺りがビリビリと振動し、まばゆい光に包まれる。

何がなんだかわからないまま、とっさに姉貴を庇おうと抱きすくめた。

存在さえも溶け消えてしまいそうなほど強いピンクの光にぎゅつと目を閉じ、身をすくませながら、おれは確かに噴火音と共に「萌えええええええ」という怨霊のような叫びを聞いたのだった。

1 腐女子の休日とトンデモ予言（後書き）

マジでダメなお話ですみません。

2・乙女ゲーにトリップ

ピピピピピピ……

けたたましい電子音がする。なんだろう？ 目覚まし時計みたいだけど。

爆発は、おさまった、のか……？

おそろおそろ瞳を開く。光にやられてちかちかしていた視界が、徐々にだが焦点を結んでいく。

少しだけ空けられた窓から吹き込む風に、揺れるレースのカーテン。ピンク系でまとめられたファブリック。細々した小物やぬいぐるみの飾られたキャビネット。

……オイオイ、どこだ、ここは。

少なくとも自宅のリビングではない。姉貴の部屋も、こんな少女趣味ではなかったはずだ。

おれは、いつのまにやらベッドに横たわっていたらしく、ゆつくりと身体を起こし……息をのんだ。

部屋のドアの隣に、一人の少女の姿が見えた。

さらりと流れるちよつと茶色がかったセミロングの髪に、きょとんと見開かれた大きな瞳。

年の頃は15、6歳といったところか。けして美少女とまではいえないが、そこそこ愛らしい容姿をしている。

パジャマ姿で、ベッドの上に半身を起こしている彼女は、おれが右手を上げると左手を上げ、おれがその手をひらひらと振ると同じように手を振った。

……そしておれは、不意にそれがドアの隣に置かれた、目の前の等身大の鏡に映る光景であることに、気付く。

くあw瀬drftgyふじこ1p;@:」!!!!!!???

鏡の中の少女は、ムンクのように大きく顔を歪ませた。

「お姉ちゃん、目覚まし止めて！　うるさい！」

ありえない事態に呆然としていたおれは、そんななり声でハツと我に返った。

開け放たれたドアのところに立っているのは小学校3、4年生くらいのツインテールの少女。

頬を膨らませてツカツカとベッドの枕元に歩み寄ると、ひよこ型の目覚まし時計のアラームをOFFにした。

「何してるの？　もう起こしてくれるお母さんもいないんだから、ちゃんと自分で起きてよね。それに、今日は“あの”日だよ、早く着替えてた方がいいんじゃない？」

呆れたように首を傾げる少女。

「え、と……君は？」

「寝ぼけてるの？　妹の芽生めいでしょ！　まさかお姉ちゃん、自分のことも忘れたとか言わないよね」

「えーと……羽鳥はぐり和希かずき」

しどろもどろで答えると、少女はかすかに目を見開き、まじまじとおれの顔を見つめる。

やがて、ちよっとためらいがちに、言った。

「もしかして、弟の和希？ あんたもトリップしたの？」

ガラリと変わった少女のその口調は、慣れ親しんだものだった。

「ねーちゃん！　ねーちゃんまでそんな姿に！？　いったいどうな
ってんだ！？」

思わずベッドから飛び起きて、中身は姉貴らしき小学生の肩をガ
シツとつかむおれ。

一方姉貴は、ブフツとふき出すと、「マジで！？　しんじらん
ない〜」とこともあろうに爆笑しはじめたのだ。

「おい、説明しろよ！　笑ってる場合じゃねえだろ！？」

「ゴメンゴメン、だって……ぷぷぷ」

姉貴はまだ肩を震わせていたが、おれが本気で睨みつけるとコホ
ンとため息をつき、ようやく落ち着きを取り戻した。

「状況を整理するわよ。今さっきの伽羅燃たんの噴火。そしてその
時あたし達がやっていたゲーム。伽羅燃たんの大噴火にまつわる予
言は、さっき話したばっかよね？」

“萌エネルギーが集まって大噴火が起こった時、『萌えー』という
轟音と共にピンクの灰が舞い躍り、夢の2次元への扉が開くという
伝説が”

「……と言う事は、つまり、信じがたいことに。おれ達は『ときメ
ロ』の世界にトリップしたってことか！？」

青くなるおれに、姉貴はコクリと頷き、さらに追い討ちをかける

一言を告げた。

「そう。でもって、あんたがヒロイン」

「……………」

「ちょっと、なんでまたベッドに戻って布団をかぶってんの？」

「うるさい！ これは夢だ！ もう一回寝たら現実にもどるはず！

おやすみなさいい」

「真実から目を背けてもしかたないでしょ」

「いやだ！ マジでいやだ！ 最低すぎるだろー！？」

「やかましいつ。ホラ、朝なんだから着替える！」

姉貴は問答無用で布団をひっぱがすと、おれの上にまたがり、パジャマのボタンを開けていく。

「！」

目に飛び込んできたのは、ささやかだけれど確かに存在を主張する柔らかな二つの膨らみ。

「~~~~~っ」

見慣れぬそれにカーッと頭に血が上り、おれは慌てて右手で鼻を押さえると、左手で姉貴を制する。

「何すんだ、やめろっ」

「あんた何自分のオッパイみて鼻血噴いてんの！？ やーい、変態変態」

「おまえなーー！！」

動揺するおれの反応を楽しむように、いやらしい笑みをたたえた

姉貴はさらにズボンまでずり下ろす。

「ホラホラ、女子高生の生着替えよく？ ほっほっほ、さすがヒロイン、きめ細かい綺麗な肌をしておる」

「どっちが変態だ、やめるこのエロ女ー」

必死の抵抗も空しく、気付けばおれは初夏らしいコットンワンピースとパーカーを着せられていた。

「はい、完了。あんたってほんと純情よねー。からかい甲斐があるったらもう」

満足そうに頷く姉貴。……このありえない状況で一番ありえないのは、あんたのその平常心だよ。

3・鬼畜プレイのススメ

「それで、どうやってたら帰れると思う？」

おれの疑問に、姉貴はさあ？　と小首を傾げる。

「あたしはまだ帰りたくないし……ただ、一つ注意しておく、あんたは不用意な言動は慎んでね」

「不用意っつーと？」

「『ときメロ』はイケメンたちとバンドを組んで一つずつ障害を乗り越えて、11月に開かれる『けいおんこうしえん軽音甲子園』の優勝を目指すゲームなの」

「……つてのは建前で、目指すのはお目当てのイケメンとの両想いだろ？」

ズバリと指摘すると姉貴は「そうよ」と認めた。うむ、潔い。

「でも、練習不足で途中の予選で敗退すると、そこでゲームオーバー。メインキャラとの会話の選択肢で決定的な誤りを選んで、シナリオを崩壊させてもゲームオーバー。あたしたちがプレイヤーならリセットボタンを押せばやり直しがきくけど、2次元世界の住人になっっている今、もし同様のことが起こると下手したら」

姉貴はそこで言葉を区切ったけど、言いたいことは伝わって、おれはゾツと身をすくませた。

世界の崩壊と、おれ達の存在の消滅。

そんな最悪の可能性も、ないわけではない。

「けどさ、ゲームオーバーになった瞬間、元の世界に帰れるってこ

とだってあり得ないか？」

「そうね。でも、生死をかけた危険な賭けよ。それよりはあたしだったら、ベストエンディングを目指すわ」

なるほど。やることやったからハイさようなら、の図式は確かに自然な気がする。……けどオイ、ちよつと待て。

「ベストエンディングってあれか、お目当てのキャラとの両思い？」

頭痛をこらえながら恐る恐る尋ねたところ、姉貴は「甘いわね」と首を振り、人差し指をピツと立てた。

「全キャラから恋愛マックス状態で想われながら、誰一人選ばずに全国優勝シナリオよ！」

ってなんだそれえええええ。

「なんだよその鬼畜プレイ！」

「『ときメロ』はバンドの練習や学校行事をこなしながら、キャラと恋愛していくわけ。」

好感度がそれぞれの基準値までたまると、その都度、恋愛シナリオに突入。それを何段階か重ねて、マックスまで上り詰めたら告白されるわけね。でも、彼への返事は全国のステージのあと。つまり、かなりの努力とテクニクは必要だけど、やろうと思えば1回のプレイで何股でもできちゃうわけよ」

「いや、おれが言いたいのは、なんでそんなんがベストエンディングなのかという」

「『ときメロ』は仮に『軽音甲子園』で全国優勝しても、恋愛が誰とも最終状態まで進んでいなかったらやっぱりゲームオーバーになるの。あんたが言うとおり、全国優勝なんて建前の目標。乙女ゲー

ムの神髓^{しんすい}は、逆ハーレムなのよ！」

頼むから身もふたもないことを断言しないでくれ。つか、それのどこが乙女なんだ、乙女ってなんだ。腹黒すぎるだろ。

「……普通に誰か一人と恋人になるんじゃないやダメなわけ？」

「もちろん、たった一人との運命の恋だって超重要よ。そこがなくてない乙女ゲーなんて論外。

でも、全員のシナリオを堪能して、ちやほやされまくって、優勝後の後夜祭で全員から未練たっぷりの贈る言葉を受け取る瞬間の快感こそ、禁断の果実にして隠された醍醐味！ その後の攻略キアラのステルが流れるスタッフルールでも、全員分が映るわけよ。あの達成感と恍惚^{こうこう}……あれは、幾多^{いくた}の苦勞を乗り越えて成し遂げたものにしか味わえない代物^{しろもの}ね」

拳を握って力説する姉貴。

ダメなやつだと思っていたが、ここまでダメ人間だったなんて……。

「それに、その場合のエンディングを迎えた後だけ、ENDの文字が金色に光るのよ。だからこれが公式認定のベストエンディングってわけ。……ちよつと、なんでまた布団にもぐってるの？」

「うるさい！ 無理だから！ おれに男口説^{くど}き落とせとかありえねーから！！」

「大丈夫、あんたはもうその微笑みだけで周囲の男どもの魂を奪う、選ばれし天然魔性だから」

「いやだ！ マジでいやだ！ 余計^{なおよ}尚更^{さら}いやになった！ 悪夢よ早く覚めてくれー」

「往生^{せいじやう}際が悪いっ」

小学生の体とは思えないその怪力によって布団ごと床に引きずり落とされた時、ピンポンとチャイムが鳴った。来客だ。

瞬間、姉貴の顔がパアアツと輝く。

「ギター！！　いくわよ！　いい？　ゲームオーバーであぼーんしたくなかったら、メインキャラに嫌われるような言動は慎むのよ！？」

「って引つ張るな！　いやだ誰とも会いたくないー！　おれはもう一生この部屋で暮らすー」

「~~~~つともう、じゃかーしい！！」

ずるずると廊下に引きずりだされながらもまだ必死に抵抗をするおれに痺れをきらした姉貴は、おれの背中を思いつき蹴りつけた。こともあるうちに、一階へ続く階段のすぐ手前で。

「でっ！？　うわあああああ」

おれは急勾配きょへいのその階段を派手に転がり落ち、無残にも床に正面衝突　したかとおもったが、予想した衝撃はこなかった。

「……大丈夫か……？」

耳元で、やけに涼やかな美声が響いた。

おれは、そこで、誰かの力強い腕に抱きとめられて最悪の事態を免れたことに気付く。

ギョツと閉じていた目をゆるゆると開き、顔を上げると……心配そうにこつちをうかがう、どえらい男前がすぐ間近に！

3・鬼畜プレイのススめ（後書き）

「あぼーん」は古いだろうと思いつつ、
ネット小説なので新旧ネット用語で遊ぶのもアリかなと使ってみましたw

4・金城 煌

「ごめん！ そっちこそ大丈夫……っっ」

床に腰をついて抱きとめる男の上に被さるようになしていた体をあわてて離そうとしたら、足首に激痛がはしった。

「痛めたのか？ 見せてみる。……ああ、腫^はれてるな。ここが痛いのか？ こっちは？」

「平気……うわ、痛い、そこは痛い……！」
「……骨に異常はなさそうだし、ま、捻挫^{ねんざ}だろうな」

男はそう呟くと、ひょいとおれの体を横抱きにして立ち上がった
って待てい！（汗）

「は、離せつやめろっ！ 自分で歩ける！」

「下手に動かさない方がいいぜ」

それはそうかもしれんが、何が悲しくておれがお姫様抱っこされねばならんのだ！

大暴れして下ろせ下ろせと叫んだが、男は動じた様子も見せずさつさと歩を進め、結局リビングのソファまで運ばれてしまった。

く、屈辱……。

「あの……これ、使ってください」

ツインテールの小学生が、しおらしく救急セットを差し出した。
って姉貴！ てめーよくも突き落としゃがったな！ 2次元じゃなかったら捻挫じゃすまない落ち方だったぞ！

「ありがとう。気が利くな」

淡く笑った男にそんな言葉をかけられ、姉貴はみるみる真っ赤に染まるとうれしそうに顔をほころばせた。

こーいーっはー。

しかし姉貴のこの反応も無理のない、いい男であることは確かだった。

端正な顔立ちとかすらつとした長身とか外見的なものだけでなく、なんっーか颯爽さうそうとしていたというか、自信に満ちた潑刺はっせいとしたオーラがあつて、男のおれでも感心してしまうような男前。年はほとんど同じくらいに見えるのに。

かがみこんで、慣れた手つきでおれの足首に手当てをほどこす男の柔らかそうな髪を、窓から差し込む光が透かして金色に見せる。おれの視線に気づいたのか、ふと顔を上げ、目が合うとニツと笑った。

クツ、かつこいーじゃねーか。

「ほら、治療おわり。安静にしてれば問題ないと思うけど、あんまり腫れてくるようなら病院行こうな」

「ありがとうゴザイマス。ところで、あんた誰？」

「あゝ、悪い、挨拶遅れたな。金城煌かねしろあきら。カギしまつてたけど、合鍵あいかぎもらってたんで勝手に上がらせてもらった」

合鍵？

なおのこと怪訝けげんそうな顔をするおれを見て、ん？ というように煌が首をかしげた。

「もしかして……きいて、ない？」

「実はお父さん、イタズラ好きで、お姉ちゃんにだけはなんにも話してないんですー！」

やや慌てたように姉貴が声を張り上げると、「マジで!？」と煌がギョツとしたように目を丸くした。

「それはまたすごいドッキリだな……」

「ですよー」

姉貴はうんうん、と相槌を打ってから、おれの方に向き直る。

「あのねお姉ちゃん、うちのパパとママ、昨日からしばらく仕事で海外行っちゃったでしょ？ その間、女の子だけで留守番だと物騒だからって、パパの親友の息子さんである金城さんが今日からうちに住んでくれることになったの」

「……………はあああああああ！？ なんだよそれ意味分かんねえ！ 年頃の男女を親もいない一つ屋根の下で暮らせる方がよっぽど物騒だろー！」

「おまえ、そんな身もふたもない……！」

おれの驚愕っぷりや明け透けな物言いがツボったのか、ふき出す煌。

「笑ってる場合じゃねーだろ！ そんなハレンチな展開、おれが許さん！」

「『ハレンチ』って！ 死語だろそれ」

「思春期男子の脳内なんてエロエロパラダイスなの、知ってんだからなっ」

「おまつ……頼むからちよつとストップ、腹筋ヤバイ……！」

変な奴ー！と身をよじっていた煌だが、やがて眼のふちの涙をぬぐいながら、憤りのあまり真っ赤になったままのおれに、さとするように言った。

「安心しろよ、嫌がる相手を無理強いしてどーこーする趣味はねえから。……ま、おまえの親父さんは別に問題起こってもかまわないとか豪快なこといつてたけどな」

「はあっ！？」

またしても大きく顔を歪ませたおれの反応にニヤニヤしつつ、煌は更にとんでもねーことを言ったのだった。

「俺たち、生まれた時から決められた許嫁^{いいなずけ}同士らしいから」

おれが状況についていけずにぽかーんとしているうちに、煌の荷物が到着し、奴はさつさと引越しを終えてしまった。

部屋は2階のおれの部屋の隣の隣。おれはベッドに刃物を隠し持つことを決意する。妙な気を起こしやがったら、容赦なく刺す！

そして夕食。

食卓には、ありえないほど豪華で繊細な本格フレンチが並んでいた。

姉貴が目キラキラさせて、歓声をあげる。

「すごい、これ全部、煌さんが作ったんですか？」

「ああ、料理は特技。昼は時間なくてカップ麺だったけど……」

スープを一口すくって、ぶっ飛んだ。特技、の域超えてるだろこれ。

見た目の華やかさも、味付けも、十分プロでやっていけそうだ。

「おいしい〜幸せ！ もう夢みたい……！」

「今夜は歓迎パーティーってことで、気合入れてみた」

「って自分で主催してどーすんだよ」

「まあまあそう言うなって。これから毎日、料理は俺が担当するしさ。どーだ、同居も悪くないだろ？」

……確かに、毎日こんなんが食べられるなら……って、なに餌付えつけされてんだよ、おれ！

とはいえ、ぶっちゃんけ姉貴もおれも料理のスキルはゼロに等しいとうぶんは両親がいらないらしき状況で飯の心配をしなくていいというのは、非常にありがたいわけで。

黙り込んだおれに、満足げな笑みを浮かべる煌。

「明日から学校も同じだし、よろしくな。ま、1年と2年で学年は別だけど」

「え？ 学校まで変えてうちで暮らすわけ！？ ……なんでそこまでやるんだよ」

どう考えてもおかしいだろ、それ。いくら乙女ゲームが都合主義だとしても。

「もしかして、前の学校でなんかあったとか？」

「別に。ただ、真治しんじさんには借りがあるしさ」

一瞬、煌の表情に落ちる陰。真治てのはヒロインの父親の名前らしいが……？

けれど、おれが追及するより先に、煌は表情を緩めると、「それに」と飄々と言葉を継いだ。

「入籍前に同居するつてのも、いい予行演習になるだろ？」

「……入籍とか言うなおぞましい！ 親同士の約束だかなんか知らんが、今時ありえないだろ『許嫁』とか」

「照れるなつて」

「照れてねえ！！」

「おまえ、口悪いよな」

「ほつとけ！」

強い口調で突き放したのに、煌は特に凹んだ様子も見せず、あむ、とオードブルを口に運ぶ。

マ、マイペースな奴だな、オイ。

「しっかしビックリしたぜ？ 真治さんからかなりドジなところがあるとは聞いてたけど、まさかいきなり階段から落っこちてくるとはな」

クク、と思い出したように肩を震わせる煌。

そうか、ヒロインはドジっ子設定か。あの墜落はどさ姉貴のせいだけだな。

「悪かったな」

懔然としつつ答えたら、煌はいや、と首を振り、さらりと言った。

「昔からの定番だろ？ 天使が空から降ってくるつてのは」
「……………」

ぼちゃん、と思わずスープの中にスプーンを落つことしたおれに、ニヤニヤしながら「なんてな」と付け加える煌。

おれの反応で遊んでる感じが……この全身にたった鳥肌、どう責任とってくれる！？

なんか、すでに思いつきり乙女ゲーのシナリオが始まってる予感ビンビンだぞ、畜生！

5・蒼木 悠斗

翌朝。ひよこ型目覚ましの音で目覚める。

一夜明けたら何もかもが夢だった……なんて展開もほのかに期待していただけに、気の重い一日の始まりだった。おれはとりあえず11月まではこの世界で暮らさなければいけないのか……。

ちなみに、今日はゴールデンウィーク明けの、初めての登校日のこと。というわけで、なるだけ自分の裸を見ないように意識しながら（もろ見るとまた鼻血吹くから）ヒロインの通う私立美楠^{びなん}学園の制服を身にまとう。

藍色のセーラーカラーに、オフホワイトのジャケット。空色のリボン。胸元にエンブレム。

膝上丈の藍色のプリーツスカートにワンポイント入りの黒のハイソックス……というお嬢様っぽい制服の通り、美楠は全国でも有名ななかなかの名門校らしい。

ヒロインは憧れのこの制服が着たい一心で、賢い幼馴染に教えてもらいながら必死で受験勉強して、この春、見事入学を勝ち取った……という設定らしい。姉貴情報。

「おはよう。お、制服、似合うじゃん」

洗顔や歯みがきを終えて階下に降りていくと、エンブレム付きのライトベージュのブレザーに深緑のネクタイ、藍と緑が基調のタートンチェックのボトムという男子の制服姿の煌が出迎えた。
なんでもない口調で言っただけ。

「可愛い」

「朝から気が滅入るようなこと言っな、頼むから」

げんなりしつつ、食卓について、用意された朝食に手を伸ばした。
やっぱ、美味い。

ただのスクランブルエッグと野菜スープなのに、卵は絶妙のふわとろだし、スープも香味豊でこくがある。

サクサクのバタートースト。

甘いのに深みがあるホットカフェオレ。

思わず顔をほころばせてがつついていたら、ふと、煌の視線に気づいた。

「な、なんだよ？」

「いや……おまえって、すげー幸せそうに食べるよな。作る甲斐があるというか」

「そうかあ？ でもこれ、マジで美味いもん。っと、あんまりのんびりしてる時間はねーな。ご馳走様！」

姉貴はもう早々に小学校に行ったらしい。おれもあわてて靴を履いて……そこで、立ち止まった。

学校への道筋がわからないからだ。

昨晚、姉貴はこの世界でヒロインがすでに知っているはずの情報をいろいろと教えてくれたが、通学路については「心配しなくて大丈夫」の言葉だけで終わった。

何が大丈夫なんだよ、オイ！ と焦った瞬間。

ピンポーン。

インターフォンの音。

ドアを開けると　これまた、芸能人でもそうそういないような超イケメンが。

煌が目に入った瞬間パツと華やぐ太陽なら、こっちのイメージは
静謐な氷。せいひつ

凜として、すつと背筋が伸びて、いかにもデキる男って感じ。

理知的な光を宿す瞳、すつと通った鼻梁、びりようなめらかな肌……好み
はあるだろうが、美形度でいえば煌を超すかも。あまりにも整い
すぎて、無機的な印象さえ覚えるくらいだ。

煌と同じ制服を着ているが、ネクタイは青。1年生の色。

「和希、準備はできたか……？」
かずき

低めの、ちょっとだけ鼻にかかったようなイケボでそう言った男
は、そこで、かすかに目を見張った。

視線は、おれの後ろで同じく家を出ようと準備をしていた煌に注
がれている。

「あれ、和希、おまえ、彼氏いたんだ？」

トン、とつま先を床に叩いて靴を履きながら尋ねた煌に、新登場
のクール系男子が淡々と答えた。

「単なる幼馴染の隣人だ。おとななじみ蒼木悠斗。あおきゆうと美楠学園1 A在籍。やよい弥生さ
んに頼まれて、毎朝こいつを迎えに来てる」

こいつ、のところで、おれを首でうながす悠斗。弥生ってのは、
ヒロインの母親の名前。

「そっちは？」

「俺は、金城煌。高2。しばらくこの家で暮らすことになった。今
日から美楠にも編入するから、よろしくな」

「この家で暮らす……？　なんでまた」

悠斗が眉をひそめるや、煌の瞳が悪戯っぽい光を宿す。あ、嫌な予感。

瞬間、おれの肩をぐつと抱き寄せ、煌が言い放った。

「結婚することになったから」

「……って誰と誰が！　絶対しねーよ、ありえねえ」

「いいや。おまえは絶対、俺に惚れる」

「アホかあっ！」

なにを根拠にか自信満々に断言する煌と、真っ赤になって抗議するおれ。

一方、悠斗はそんなおれ達の騒ぎにも全く表情を動かすことなく、「とりあえず」といたって冷静に言葉を継いだ。

「詳しい話は、登校がてら聞かせてもらおう。このままだと、遅刻になる」

6・三角関係？

昨日の捻挫はそれほど悪化せずんだようで、歩くのもうほとんど支障はなかった。

並んで登校しながら、親同士の決めた許嫁なのだと説明すると、悠斗はそうか、とうなずいた。

「って、反応そんだけ！？」

まさかそんなにあっさり納得されるとは思わなかったので、ついツツコんでしまった。クールすぎ。

「婚姻^{こんいん}は、両性の合意のみに基づいて成立する。当人の意思が伴わない婚約なんて、今の時代で拘束力はない」

「だ、だよな！」

冷静なコメントに胸をなでおろすと、煌がひょいと肩をすくめた。

「『弥生さんに頼まれた』ってのは、どういうことだ？」

煌の質問に、悠斗が小さくため息を漏らした。

「和希は極度の方向音痴の上、注意力散漫でそそっかしく、おまけに重症のお人好しでトラブルに巻き込まれやすい性質でな。入学式の日も学校に到着したのは昼過ぎ、翌日も同じようなことになったため、朝だけでもいいからどうしても付き添ってやってほしいと泣きつかれたんだ」

そ、そんなダメな奴なのか、ヒロイン……（汗）

「ふーん。そりゃあまた、面倒の見甲斐^{みがい}があるな」

楽しげに口笛を吹く煌。いや、感心するところじゃないし。

「どうせ同じ通学路で、クラスも同じだからな。こいつが世話の焼けるのは昔からだ」と、諦めた」

「……昔から、ね。でも、次からは俺と一緒にいくから、大丈夫だぜ？」

ピシリ。

……な、なんだ、今の空気が凍るような気配は！？

ギョツとして二人を交互に見上げたが（こいつらム力つくくらい背が高いんだ）、なにやら不敵な笑みを浮かべる煌に対し、悠斗は相変わらず無表情のポーカーフェイス。

気のせいかな？ 気のせいだ、と、思いたい……。

「そうもいかない。少なくとも一年の間はついてやってくれと言われている。面倒ではあるが、約束は約束。勝手に反故^{はげ}にするわけにもいかない」

「律儀なことで」

バス停に到着。なんとなく一刻も早くこの場を逃れたかったおれは、ちょうど目的のバスがきていたのをこれ幸いと、早々に乗り込んだ。

「おはよー、『バカちゃん』！」

1 - Aの教室に入った途端、同級生からそんな挨拶をされて、おれは思いっきりつんのめった。

「あ、バカちゃん。元気だった？」

「おはよう。ゴールデンウィークどっかいった？ バカちゃん」

……そういや、姉貴のやつ、最初にヒロインのあだ名にそんなのを入力してやがったな。やっぱあの女、帰ったらシメる……！

周囲から次々と笑顔で罵倒^{はと}され、心の中で泣きながら、席に着く。窓際の後ろから二番目、悠斗の隣というそこに腰を下ろしたら、前の席の、セミロングのパーマヘアの活発そうな女子が振り返った。

「おはよ、バカちゃん」

いや、それはもういいから（鬱）

「今朝も蒼木ちゃんと登校か。ちょー羨ましいんだけど。本当に付き合ってたの？」

「ただの幼馴染だよ」

付き合うとか勘弁してくれ……と内心舌打ちしつつ、昨夜、集合写真を見ながら姉貴に教えてもらった名前を思い出す。

たしか、ヒロインの友人で、報道部の木鹿^{きしか}かな。

ワインレッドのフレームのスタイリッシュな眼鏡が、よく似合っている。

「そっいえばね、2年に、すごいカッコいい編入生がきたって話なんだけど」

「……ふーん」

「って何しれつと素知らぬ顔してんのさ！ あんたが今朝、蒼木くんの他にもう一人、見慣れぬイケメンと歩いてた情報はすでに入ってきてるんだよ」

キラリ、とレンズの奥の目を光らせるかな。
ちっ、情報通って設定は伊達じゃねえ。

「どういう関係？ なんでも彼、例の奨学制度で編入してきたらしいじゃない」

「奨学制度？」

「ホラ、この春からうちの学校に導入された、特に優秀な生徒だけ入学費も授業料もその他もろもろ全額免除っていう太っ腹な奨学金制度。」

ただ、そうとうのレベルじゃなきゃ該当できなくて、20年に1人であるかってくらいの難度だったはずなのに、いきなり蒼木くんが第1号で入学して全国紙でも取り上げられたりしたでしょ？」

懇切丁寧こんせつに教えてくれる。便利なキャラだな。

「それにまた、2年の編入生も受かったってんで、学園の教師陣は大騒ぎって話だよ。」

金城煌、だっけ。彼、何者なの！？ 白状なさい！」

「おれもよく知らないんだ。ただ、親同士が知り合いだから、なんてか、その、仲良くするように言われてて……」

かななは報道部。許嫁だ、なんていったら、どんな記事書かれるかわかったもんじゃねえ。

ただ、すぐバレそうなことだけは、あらかじめ口止めしてる方がいいかもな……そう考えて、おれは、慎重に切り出した。

「それで、これは絶対誰にも秘密にしてほしいんだけど、その……
実はあいつ、昨日から家に住んでんだよ」

「っ……！？」

叫びが飛び出そうになった口を、あわてて自分の両手でふさぐかなな。

目をパチパチさせて、驚天動地きょうてんとうち、て感じだったけど、おもむろに好奇心満々の顔つきに変わっていく。

「何それ何それ、どういうこと！？」

「えと、うちの両親、昨日から海外行っちゃったんだけど、その間おれと妹だけじゃ危険だからって、用心棒としてうちに暮らすように親父が勝手に向こうと約束したらしくてさ……」

「うっわー、とんでもないスクープゲット！ 記事かかなきゃ！

『うわさの転入生、同棲中どうせい！？』」

「待て待て待て！ 言っただろ？ 内緒にしてくれって」

焦って制すると、かななは渋々といった様子でうなずいた。
ホッ、悪い奴ではなさそうだ。

「それに、『同棲』とか誤解をまねく表現すんなよ……はあ、マジで最低」

「何が最低よ？ イケメンなんでしょ？ いいじゃん！ 私と代われ！」

かななは羨ましそうな声を上げたけど、おれだってできるなら代わってほしいって！

7・授業中

一限目。窓の外では、どうかのクラスが体育でサッカーをやっていた。

やたら足が速くて運動神経のいい奴がいる、と注目してみたら、煌だった。すごいドリブルテクニックですいすいと他の生徒たちを抜いて、鮮やかにゴールシュート。

スポーツまで万能とか、チートすぎるだろ……と呆れつつも、見事な身体能力にいつい目奪われていたら、いきなり頭に何かか飛んできた。

「いてっ！」

「こら、羽鳥！ どこを見とる！」

中年の数学教師の怒声を浴びつつ、机に落ちた飛行物体を確認して、思わず目をむいた。

チヨークだ！

おれ、チヨークを投げつけられた！

滅茶苦茶めっちゃくちゃありがちだけど現実世界ではそうそうないベタな教師の必殺技、『チヨーク投げ』を実体験してしまった……！

感動に打ち震えるおれにはお構いなしで、教師はいかめしい顔で命じる。

「授業中によそ見とは、ずいぶん余裕じゃないか。なら、この問題を解いてみる。私の授業など聞かなくても簡単だから、上の空なんだろう？」

イヤミな教師だな。ああクソ、分かったよ、解いてやればいいんだろ……と黒板をみて、固まった。

難しすぎるだろ!?

そーいや名門校つってたっけ……授業内容も高度なわけね。やべー。

なーんて焦ったのは、でも一瞬のこと。

だって、隣の席は学年トップの成績を誇る秀才、蒼木悠斗。少女マンガ的展開じゃ、こっそり答えを教えてくださいに決まっている。

ほれ、早くノートなり答えを書いた紙切れなりをプリーズ!

小さな声で教えてくれるのもアリだぜ!?

じりじりと右側の悠斗のアクションを待つが、クラスメートたちの視線がおれに集中する中、こいつは一人我^{われ}関せずといった具合で、教科書のずいぶん先のページをめくって自発的な予習を進めている。オイオイ、なにその突き放した反応! ヒロインが困ってるんだぞ??

「どうした、解けないのか? もういい、座れ。そんなことだろうと思ったんだ。まったく、補欠入学のくせにいい気になるから……」
「先生」

いたたまれない気持ちで着席し、あからさまな侮辱に頬が紅潮するのを感じた瞬間、凜とした声が教室に響いた。

「その一番左の例題ですが。下から三行目の方程式に誤りがあります」

事実を事実としてだけ述べるような、静かな悠斗の指摘に、教師は目を白黒させて訂正にとりかかる。結果として、おれはそれ以上の糾弾^{きゆうたん}を免れた形になったわけだけだ。

「助けてくれるなら、もっと早く助けてほしかったぜ」

休み時間。

ちよつと恨みがましくそういったおれに、悠斗は「甘えるな」と切り捨てた。

「よそ見をしてるおまえが悪い」

「まあ、そりゃ、そうだけど……」

ちゃんと聞いてても、あんな問題は解けないぞ、たぶん。

情けない気持ちで肩を落としたら、少しだけ顔を曇らせて、悠斗が聞いてきた。

「授業についていけないのか？」

「ああ。やばい。全然わかんねえ」

そついや、ヒロイン、必死で勉強して滑り込み合格って話だったしな。

もともと勉強は苦手だけど、せめてゲームの中でくらいは賢く生まれたかったぜ。トホホ。

「……放課後、部活開始までの30分くらいなら時間がとれる。もしくは週末だな。教えてやるから、あきらめるな」

そんな言葉にハッと顔を上げると、真摯な瞳とぶつかった。でも、目が合うや、ふいとそっぽを向いてしまう悠斗。

そーいや、姉貴が言ってたっけ。EDまでの間に、ヒロインはバンドだけでなく勉強やらスポーツやらファッションセンスやらいろんなステータスを上げなきゃ、お目当てのキャラは落とせないって。

キャラを落とすとかそんな気はさらっさらないけど、毎日の授業でこんな調子じゃ、正直厳しいわけで。

「さんきゅ。助かる」

おれが両手を合わせて拝むと、悠斗はうなずいて、そっけなく言った。

「難しくて、ちゃんと授業はきいとけよ、馬鹿」

8・北王子 梓茶

昼休み。

天気がいいから、とかんなに誘われて外でお弁当を食べた流れで、そのままふらりと一人学校探検に繰り出した。

あまり人気のない校舎裏にも、足を延ばす。

理科実験室、家庭科実習室、音楽室……特別教室が並ぶ一角に差し掛かった時、流れるような旋律が鼓膜をくすぐった。

繊細なピアノで奏でられていたのは、おれがとても好きなJ - p
opソング。

かつて90年代に流行って、最近また人気の女性シンガーにカバーされたこの曲は、あたたかくて、でも切なくて、どこか懐かしくて、メロディを聞いただけで胸をぎゅっと握られたみたいになる。

雨上がりの澄んだ空気、木漏れ日の差しこむ森の小道……そんな光景を思い浮かべながら、いつのまにか、おれはその歌を口ずさんでいた。

そして、驚く。

すげ、ヒロイン。超いい声。

淀みなく響く優しい音色のピアノ伴奏も、心地よい。

つつい、一番をまるまる歌いきってしまった。

って、口ずさむだけのはずが、これじゃ熱唱じゃん。

学校で何やってんだよ。恥ずかしい！

「はあ……」

ほのかに火照った頬を抑え、ため息をついた時。

パチパチパチ……

拍手をしながら、音楽室の窓のところに、すらりと均整のとれた影が現れた。

その第一印象は 『王子様』。

ゆつくりと歩み寄り、窓枠に手を添える、ただそれだけの動作も洗練されて気品がある。

さらりと揺れるライトブラウンの髪。

色白の肌、甘いマスクに柔和な微笑みを浮かべた彼は、まるで少女たちが夢見るおとぎ話の王子様像をそのまま具現化したかのようなだった。

そして王子は、優雅な仕草で長めの前髪をかきあげると、こうのたまった。

「見つけた 僕のナイチンゲール」

頭のほうも王子だー！！

「ナイチンゲール……って、看護婦？ なんで？」

頬をひきつらせながらも疑問を口にしたおれに、王子（もうこれをあだ名にしよう）はクス、と息を漏らす。

「そつちじゃなくてね。西洋のウグイス、とも言われる鳴き声の美しい鳥の名前。

びつくりしたよ。ピアノで遊んでいたらいきなり 天使が舞い降りてきたんだから」

キラキラキラ……

台詞とともに、王子の周囲に謎の光が飛び交った。

なんだ！？ 目の錯覚か！？

「僕は、2 - Eの北王子梓茶。きたあつじ あずさ 別にあやしいものではないよ 羽は鳥和希さんとり かずき」

「ってなんでおれの名前知ってんだよ！？ めちゃめちゃあやしいだろ！？」

「実は以前、君の幼馴染の蒼木悠斗くんをスカウトしようとしたことがあってね。その時に、彼の親しい人物として自然と情報が入ってきたんだ」

「スカウト……？」

首をかしげるおれに、そう、とうなずく王子。

「そして、今回のターゲットは君ってわけ。羽鳥さん、バンドに興味はない？」

きたな。

唐突な質問だったが、思い当たる節はあった。姉貴が言ってたよな。

『ときメロ』はイケメンたちとバンドを組んで一つずつ障害を乗り越えて、11月に開かれる『軽音甲子園』の優勝を目指すゲームだって。

「こういうと見境なく勧誘しているように思われるかもしれないけど、けっしてそんなことはない。蒼木くんの時も彼のベース歴7年

という事実を踏まえてのことだし、今は……才能を直に体感したからだ。ぜひ君に、ボーカルとして歌って欲しい」

なるほど……こういう流れでスタートするわけか。

「だが 断 る（きっぱり）」

仁王立ちしてそう言いたい気持ちをグツとこらえたのは、ゲームオーバーの警報ランプが脳内で点滅していたから。

けどこのまま、イケメンどもとキャツキャウフフの日々に突入するのも受け入れがたかった。

言葉を探していると、掃除時間の開始を告げる予鈴。

「すぐには決められないかな。でも、考えておいてね」

甘く爽やかな声音でそう言い残し、王子はその場を軽やかに立ち去った。

9・場外ホームランといえば

その日最後の科目は体育で、ソフトボールだった。

おれはたまりにたまった鬱憤^{うっぷん}を晴らすように思いっきりバットを振り切り、球はクリティカルヒットして場外ホームラン。

このパターンは、と冷や汗をかいたのもつかの間、案の定、渋い顔をした教師に呼び出しを食らう。

おれの飛ばした球は、理事長室の高価な花瓶にもクリティカルヒットしたのだった。

あーあ、やっぱりな。

「どうしてくれるんだ！　今は理事長はお留守だが、この花瓶は20万円の代物だという話だぞ」

「……意外と安かった」

「なに！？」

「いえいえなんでも！！」

ウン千万円、とか下手したら億単位かも、なんて思ってたから、ついぼろつと漏らしてしまったが、20万円だって十分大金だ。てか、妙にリアルで嫌だ。

でもさ、そんな貴重品を学校に置いておく方が悪いと思う……。

運の悪いことに、理事長が部屋を留守にしている間の責任者は、あのイヤミな数学教師であつたらしい。ねちねちと一対一で説教を受け続けた。

窓の外でカラスの鳴き声が聞こえだす頃。

とりあえずまた後日ご両親と相談をさせてもらう、という方向でようやくその場はおさまり、教室に戻るともうとっくにホームルームも終わっていて、中にいたのは悠斗一人。

夕日差すオレンジ色の教室で、静かに本に没頭する美形の姿は、一枚絵のように様になっている。

おれの足音が近づくとパタリと表紙を閉じ、真顔で見つめてきた。表情に乏しい奴（汗）

「待っててくれたのか？」

「いや……勉強を教えるという約束をしただろう」

悠人はそう否定したけど、部活開始時間も過ぎてるはずなのにまだ残ってるってことは、心配してくれてんだろうな、たぶん。

「花瓶、20万だって。はあ、どうやって工面しよう」

自分の机に突っ伏して大きくため息をついたら、

「20万円ほしいの？」

教室の入り口から、落ち着いた甘い美声。

顔を上げると、例の王子が戸口に手をかけて微笑みを浮かべていた。いつのまに。そして情報早すぎだろ、王子……。

「ほしい」

正直に答えると、さらに笑みを深くして歩み寄ってくる王子。

おれの席の前に長い脚を組んで腰かけると、手に持っていたプリントをひらりとかざして見せた。

軽音甲子園。

優勝賞金……20万円。

「君が歌ってくれば、いける気がするんだ」

さりげなく、けれど熱を帯びた声で囁く王子に、おれは観念して、コクリとうなずく。

「やる」

そうしないとストーリーが始まらない。きっと、どうしたってやらされる羽目になんだったら、腹をくるしかないよな。

「あとはベースさえいれば、メンバーがそろっただけ……」
「……………」

おれと王子、二人からじっと見つめられ、頬をヒク、と引きつける悠斗。

「……なぜ、俺を見る」

「だっておまえ、ベース歴7年だろ!？」

「お父さんが元ベシストで、君自身、相当のスキルがあると聞いているよ」

「俺は剣道部が……………」

「別に毎日全員で合わせる必要はないよ?」

「ああ、休みの日だけでいいから! 勉強はできるだけ自分でがんばるし、頼む!」

拝み倒して、おそろおそろ仰ぎ見ると、腕組みして洪面じゅうめんを作っていた悠斗が、重い嘆息をもらした。

不承不承ふじょうふじょう、といった様子で。

「…………協力は、できる範囲内でだぞ」

その日はそのままお開きということになって、帰宅。
リビングに行くと、姉貴　この世界では妹の芽生めいの姿だけがテレビゲームをしていた。

ゲーム世界でもゲームってシユールすぎる。さすがに、『ときメロ』ではないようだけど。

「どうだった？　学園生活一日目」

「悠斗、かなな、梓茶が登場。なりゆきで、バンドやることになった」

「ふんふん、順調じゃない。いいなあ、あたしも早く悠斗さんと梓茶くんに会いた〜い」

「やつぱあの二人も攻略対象キャラなんだよな？」

「そうよ。見たらわかるでしょ。でも他にも、攻略キャラには共通点があるのよね〜」

見たらって、まあ……そうなんだけどさ（ため息）
しかし、あいつらの共通点ってなんだ？

「『ただしイケメンに限る』以外に？」
「そ」

姉貴は首を縦に振ったが、おれはまだピンとこない。

10・目指せハイスペック・ヒロイン

ま、いつか。

疲れた〜とカバンを放り出してソファに寝そべったら、コラ！とハリセンで足をはたかれた。

「痛ってえ……ってどこから出した、そのハリセン!?!」

「んなことはどうでもよろしい。パンツ見えてる！ 女の子でしょ、はしたない!」

「女の子じゃねえ!」

「今は女！ そんな姿、彼らに見られたら幻滅されちゃうじゃない。それに、あんたはそんなごろごろしてる余裕はないのよ。今日から半年で、全員が骨抜きになるようなハイスペック・ヒロインにならなきゃいけないんだから!」

「はあ!? 冗談じゃ……」

思いつきりしかめられたおれの顔の前に、不意に数枚の写真がでんと提示された。

目が点になった後、徐々に、かあ〜と頭に血が上っていくのを感じる。

「おま、そんなもの、いつのまに……!」

「あんた、なるべく見ないようにって目をつぶってるんだもの。簡単簡単」

ホーッホッホッと高笑いしながら姉貴がかざす写真には、おれ………というか、ヒロインの着替えや入浴シーンが赤裸々せきはくさに写し撮られていた(!!)

「これをばら撒まかれたくなかったら、大人しく従いなさい！」

「ふざけんな！ 返せ！」

奪い返そうととびかかるが、姉貴はひよいひよいと身軽にかわし、全くつかまらない。

「ふふふ、純真な小学生妹キャラは男にも女にも愛される無敵ポジション。あんた如きにやられるものですか！」

「なぐにが純真だ、邪念の塊のくせして！」
「邪念の力をなめるなよ……」

伸ばした手をグツと握られたと思ったら、おれの体は反転して床に沈んでいた。

マジでこの妹、半端ねえ（汗）

「……で、なにをやれと？」

絶対スキ見て取り返しちやる……と心の中で誓いながら、とりあえず降伏の姿勢を示すと、鬼畜姉は「そうね……」と人差し指を唇に当てた。

「まずは、『学力』アップのため今日の宿題は当然として、予習復習。その後、腹筋、腕立て、背筋各50回。これは『運動』ステータスを上げると同時にボイストレーニングの一環として重要な『バンド』ポイントも上がるから効果抜群よ。食事中は『マナー』に気を配って、お風呂上りは『美容』目的でフェイスマッサージとストレッチ。ファッション雑誌に目を通して『センス』をみがくのも忘れずに。大丈夫、たまには『社交』のためテレビを見る時間も作っておくし。あとは……明日から早起きして毎日マラソン2キロく

「らいやればたぶん大丈夫」

「……………」

絶句するおれに、目の前の小学生は、一見無邪気そのものの笑顔でいった。

「元の世界に帰るために、がんばろうね？」

「あゝもう、全然分かんねえんだけど！」

「最初はそんなもんよ。でもやったぶんだけ間違いなくステータスが上がっていくのがゲーム世界のいいところ」

「ほんとにできるようになるのか、こんなんが!？」

ぶちぶち言いつつ、半泣きで問題を解いていたら、

「宿題？ 教えてやろうか？」

いつのまにか帰ってきていたらしい煌が、ネクタイの首元を緩めながらテーブルの向かいに腰かけた。

「どれ？」

「問3……帰り、遅いな。なんか部活でも入ったのか？」

「うんにゃ、ちょっと寄り道してきただけ。和希は帰宅部？」

「……だったけど、明日から軽音部に入ることになった」

「へえ？」

20万円の花瓶と北王子梓茶のことを話すと、煌は苦笑とともに大きなため息をもらした。

「そりゃ災難だったな……で、バンドのあと一人のメンバーとは明日の昼休みに初顔合わせ、か。いい奴だといいな」

思いつきり他人事のようなこの台詞に、ちよつと意表を突かれる。こいつもてつきりバンドの一員になるもんだと思ってたけど、違うのか？

「ん？ どうした、不思議そうな顔して」

「いや、おまえはなにか楽器弾けたりしないの？」

「楽器？ 全つ然」

きょんとした顔で全否定される。むむ？

……つと、それはおいといて、また別に一つ、言つとかなきゃいけないことがあつたのを思い出した。

「そうそう、許嫁^{いいなすけ}ってことや、一緒に住んでるってことは皆には秘密だからな」

唐突なおれの言葉に、煌は首をかしげる。

「なんで？」

「当たり前だろ！ 許嫁は親が勝手に決めただけでおれは認めてないし、家と一緒になんて妙な邪推をする輩が出るに決まってる」

からかわれたりするところなど、想像するだに憂鬱だ。

「まさかもう誰かに話した！？」

「いや……別に誰にも」

「じゃあ今後も絶対口外禁止！ 悠斗にも口止めしとくけど、万が

「バラしたりしたら出て行ってもらうからな！」

「……ま、おまえがそういうなら黙ってるけどさ」

ぼりぼりと頬をかいていた煌だが、おれが「朝の登校時間もずらすこと！」と続けた途端、形の良い眉がピク、と動いた。

「なんでだよ？」

とがめるような口調に、戸惑う。

「だ、だって、毎日一緒に登校してたら、家と一緒にバレル可能性高いじゃん」

「あいつは毎日一緒に行ってたんだろ？」

「あいつって……悠斗？ 悠斗は幼馴染でお隣さんってもう皆知ってるし……」

「俺だって近所に住んでるってことにすりゃいいだろ？ 前からずっとそうだったから、皆が知ってるから、ってだけで許されるなんて不公平だ」

不公平って、なんだよそれ（汗）

「ま、俺が邪魔で、二人っきりで通いたってんなら仕方ないけど」

頬杖をついたまま、こっちを見る目が、急に真剣みを帯びた気がした。

「あいつのこと、好きなわけ？」

「な、に、言ってるんだよ。それはない！ 断固としてありえない！」

ギョツとして全力で否定するおれを、じっと観察するように見つ

めてくる煌。

うひゝ頼むから、そんな目で見つめないでくれ、心臓に悪い！！

「別に悠斗が特別とかじゃないから！ わかったよ、もう勝手にしてくれ」

緊張感に堪えられなくなってついそう叫ぶと、煌の口元に大きな弧が刻まれた。

「ああ、好きにさせてもらっ」

11・イケメンバンド結成

料理担当は煌だが、皿洗いはおれと姉貴の受け持ち。

それにしても、この日の夕食もうまかった。

ちよつと懐かしい風味のケチャップライスを、黄金色に輝くふわふわ卵で包んだオムライスのドミグラスソース添え。魚介のうまみが溶け込んだクラムチャウダー。

食事時ばかりは、この世界も悪くないと思えるんだよな。

ぶくぶくと泡立った洗い場でガチャガチャと作業しつつ、自然と唇から零れだした歌は、昼間に音楽室から流れていたメロディー。
ヒロインの声、歌いだすとほんと澄んでて、優しくて、自分でも（？）聞き惚れる。

今はここにはいない、大切な人を想う歌。

辛いことや迷うことが色々あるけれど、眩しい君とのあの日々が僕の希望。

どこか懐かしい曲調に、前向きな歌詞。だけど、この歌がどうにも切ないのは、その強さと優しさが痛みを秘めたものだから。

絶望からの静かな再生。

限らない憧憬と愛おしさ。

どこかできつとまた、逢えるから……。

楽曲の世界観にどっぷり浸っていい気分で歌っていたけれど、ふと、扉のところに立ちすくむ影に気づいて、目を見張った。

ニヤニヤしたり、唇をとがせたり……いつも生き生きして表情豊かな煌が、その時は全身の力が抜け落ちたかのように、呆然と突

っ立っていたから。

その瞳は、おれの姿を映しながらも、同時にどこか違う世界を見つめているようで。

そして、まるで無防備なその無表情の頬に伝う、一筋の雫^{しずく}。

「……………煌？」

おれはビックリして、ちょっとためらった後、そっと呼びかける。途端に、ハッと我に返り、手の甲で涙をぬぐう煌。

「悪い。…………シャワー、使うから」

目を伏せてそれだけ言うと、リビングダイニングから続いた浴室へと姿を消す。着替えを持参していたから、最初からそのつもりだったんだろうけど。

「…………おい、あいつ、なんで泣いてたんだ？」

歌に感動して、とか、そんなレベルの反応じゃあなかった。

混乱しながらのおれの質問に、隣で一緒に皿を洗っていた姉貴が「無理」と即答した。

「そーゆー類の質問にはお答えできません。妹が助言できるのはキヤラのちよつとした特徴や攻略ヒントまでって制約があるの。当然、まだ登場していないキャラについても何も教えられないわ」

「なんだよ、ケチ！」

しかめっ面で「イー」して見せてから、皿洗い作業に戻る。

黙々と泡を流しながら、それからもしばらく、どうしてもさっきのあいつの顔が脳裏に焼き付いて離れない。

「あゝ、もう、なんなんだよ！」

しつこくまとわりついてくる残像を振り切るように叫んだ瞬間、持っていた皿をパキッと真つ二つに割ってしまい、姉貴に何しとんじやとどつかれた。

シャワーから上がってくるともう煌はいつもの煌で、なんとなく蒸し返すこともできなくて、その日はそのまま暮れたのだった。

翌日の昼休み、王子から悠斗と二人で呼び出しを受けた。

校舎の離れに建っている部室棟の一番奥が、軽音部らしい。

近づくにつれて、軽快なドラムの音がかすかに耳に滑り込んできた。

まだ新しそうなドアを開いた瞬間、あふ溢れ出だした音の洪水に、

全身が飲み込まれる。

息もつかさぬ怒涛どとうの打ち込み。

奔放に飛び回ったかと思えば心地よいリズムに引き込まれ、また弾ける。

力強い音にからだのあちこちが揺すぶられて、まるで目の前でいくつもの大きな花火が炸裂さくれつしてるみたいだった。

なんだこれなんだこれ。

からだが熱い。めちゃくちゃ、ワクワクする。

心臓がバクバクして、頬が火照る。

ジャーン、ダダダンッと演奏を終えて、顔を上げたのは 金城煌。

ド迫力の演奏と、目にした光景、両方の衝撃からぱかんと口を開けたおれの姿をとらえた途端、してやったりとばかりに、満面の笑顔。^{いたすら}

悪戯を成功させた子どもみたいな煌のその表情を眺めてるうちに、だんだんと状況が飲み込めて、さっきとはまったく違う理由で、かーっと体が発熱する。

あんにやる……ハメやがったな！

なーにが「楽器？ 全っ然」だ！

きつとおれがバンドやることになった顛末も全部知ってた上で、飄々^{ひょうひょう}と初めて聞いた風を装ってたに違いない。

こんな風に、おれの度肝を抜きたいがために。

「紹介するよ。金城煌。昨日から2年に編入してきたんだけど、僕は以前からの知り合いでね……あれ、君たちも、実はすでに面識があつたりするのかな？」

「ああ、まあ、ちよつとだけ」

首をかしげる王子に、拳をプルプルさせながら頷いたところ、隣の影が動いた。

仏頂面の、悠斗。

朝の登校時間、ベースケースを背負う悠斗にも煌は素知らぬ顔で「バンドやるんだってな。がんばれよ」なんて声かけてたからな。一杯くわされた気持ちは、おれと同じかもしれない。

悠斗は持参した青のベースをアンプにつなぐと、煌の方を仰ぐ。

「テンポ140で叩いてくれ」

ぼそりと告げられた言葉に、煌は小さく口笛を鳴らして承諾を示

すと、アップテンポのリズムをシンプルに刻みだす。

ベースの低音が唸るように空気を切り裂いた、と思った瞬間。

信じられないようなテクニクを駆使した悠斗のスラップ演奏が始まった。

まるで早送りを見ているような、正確無比で無駄のない手の動き。こんなに早いのに、沸き起こるグルーブ感に、鳥肌立つ。

一つ一つの音が、ビンビン来る。

やべえ……なんだこの音。

今まであんまりベース音だけで聞いたことなく、なんとなく地味な印象だったけど、深いところからドクドク煽られる感覚というか。

すげーカッコいい。

こいつも、めちゃくちゃ巧い。

演奏が終わってから、まだしばらく体の中に湧き上がったうねりの余韻が残っていた。

思わず深々と息を吐き出すおれ。いつの間にか、呼吸も忘れて聞き入っていたらしい。

「やるじゃん」

煌の素直な賞賛に、冷たい視線で応える悠斗。

「いけしゃーしゃーと」

それだけ呟いて、顔をそむけた。あ、やっぱ、担^かがされたのは悔しかったんだな。

「煌の演奏を聴いた直後にこの反応……見た目はクールだけど、か

なりの対抗意識を燃やしているようだね、蒼木くん」

笑みを含んだ声で耳打ちされてそちらを見れば、王子がなんとも楽しげに瞳を煌めかせていた。

「まさか即興でこのレベルなんて、うわさ以上の実力だ。ずっと一緒にやりたいと思ってた煌が転校してきたその日に、こうしてバンドのメンバー全員が揃うなんて、運命的だと思わないかい？」

運命、とか、形容が大げさだろう王子。でも、気持ちはずっと、わかった。

立て続けにすごい演奏を目の当たりにして。

実はおれも、こいつらと一緒にやるのもけっこう楽しいかも……なんて、思い始めていたから。

しかしそんなほのかなやる気は、ウインクとともに放たれた王子の一言で砕かれた。

「これからよろしくね……和希ちゃん」

「か、和希ちゃん……って！ キモいからやめろ」

「つれないなあ。僕らのお姫様は」

クス、と笑みを漏らして人差し指と親指で顎をさわるような仕草をする王子。そんな謎の動作も、こいつがやるとなぜか優雅に見える。

……果たしてこのゲームをクリアするまでにおれの精神がもつか、それが問題だ。

11・イケメンバンド結成（後書き）

和希が歌っていた曲のイメージソングはMY LITTLE VERの

『Hello, Again 〽昔からある場所〽』。

去年はJUJUがカバーして再スポット当たってましたが、私はマイラバ派かな。

初聴きした時は煌じゃないけどうるうるしました。

ところで、ついに拙作初のお気に入り登録100件突破

「なろう」様では全然底辺ですが、嬉しいものです。

いつも読んでくださっている皆さまに感謝v

これからもマイペースにがんばります。

12・こんなネタで大丈夫か？

「あ……んっ、だ、だめ、これ以上は……」

「クスッ。真っ赤な顔して、可愛いね。でも、まさかこれだけでもう、こんなにビチョビチョになっちゃうなんて……」

からかうような王子に、おれは紅潮していた頬をさらにカッと火照らせた。

押さえつけてくる腕の力が、口惜しい。

「違っ、こんなの、おれのカラダじゃ……!」

「恥ずかしがらなくてもいいんだよ。……最初はちよっとキツイだろうけど、我慢してね」

「やっやあっ痛っ! ……痛い痛い痛い痛い!」

「そのうち、これが気持ちよくなってくるんだよ」

「やだーっ。離せっ。このどS野郎」

涙目で訴えると、やれやれ、と吐息をつきながら王子は身を離れた。

「せっかくストレッチに付き合っただけなのに、その言い草はあんまりなんじゃないかい？」

そんなふうにはやきながら、部室の扉まで歩み寄ると、すっとそれを手前に開ける。

同時に、ツインテールの小学生が、悲鳴を上げながら倒れこんできた。

姉貴!? もしや扉にかじりついてたのか……?

「大丈夫かい？ ゴメンね、お客さんだとは思ってたんだけど、まさか寄りかかっていたとは思わなくて……」

（？？益？） こんな面して起き上がった姉貴だったが、ちよつと焦ったような王子に手を差し伸べられると、途端にほにゃくつと顔面がとろけ落ちる。

「ありがとうございます……」

立ち上がってからこの女、瞳孔ハート型にしてもじもじしてるだけで埒が明かないので、オイツと引っ張り寄せた。

こしょこしょと小声で問う。

「何しにきたんだよ！？ 学校だぞ」

「放課後だし、いいでしょ。あんただけ毎日毎日イケメンパライダスしてるなんてずるい！ と思って出向いてみたんだけど……びびったわ」

そこで、何かを思い返したように、深々とため息を吐く姉貴。

「いつのまに18禁ゲームになったのかと思った」

「なんのこつちゃ」

わけがわからず首を傾げたら、ひたいの汗が目に入ってきて染み

た。
クソツ、ボイトレのためにちよつとストレッチしただけで全身汗だくつて、どんだけ運動オンチなんだ、このヒロイン。体も異常に硬いし。

姉貴に言わせると、最初は何をやってもダメダメがデフォらしいが……。

「妹さん？」

王子の言葉に、姉貴は「はい！」と素直な小学生・芽生モードで元気に応えた。

「最近、お姉ちゃんいつも帰りが遅くって、何してるのか気になっちゃって……勝手に学校に入り込んで、ごめんなさい」

しゅん、としたように下を向く。この女、演技派だ……。

「大丈夫だ、問題ない」

そしておまえはイーノックか王子。

「初めまして。僕は北王子梓茶。君のお名前はなんていうの？」

視線を合わせるように屈んで、優しく尋ねる王子。

「羽鳥芽生。10歳です」

「芽生ちゃんっていうのか。可愛いね……お姉さんに、よく似てる」

さらりと零れた殺し文句に、口に含んでいたポカリを思わずぶつと噴き出した。

王子のほうは殺し文句だとか全く意識してなさそうなところがまた恐ろしいわけだが。

「あの、梓茶さんは、お姉ちゃんの彼氏なんですか？」

こらバカ姉貴！ おつまえなんという嫌がらせを……！

てんしらんまん

天真爛漫な小学生を装った腹黒女の質問に、王子は少しだけ目を丸くしてから、穏やかな笑みとともに答える。

「違うよ。そうだったら、素敵なんだろうけどね」

「おーまーえーは！ 誰にでもそういう歯の浮くような台詞いうのやめろ！」

耐え切れずについつい掴みかかったおれに、王子は戸惑うように瞬きする。

「君みたいな子と付き合えたら、幸せだろうなって気持ちは嘘じゃないんだけど……気に障ったのなら、謝るよ」

心底すまなさそうなその様子に、脱力した。

どうやらこの王子様、悪気とか女をタラしてやろうとかそういう他意は全くなく、ごく自然にこんな恥ずかしい言葉が口に出るらしい。

根っからのフェミニストっつーか、天然の口説き魔っつーか。

「でもね。まだ恋愛感情かはわからないけど、君に興味があるのは、本当なんだ」

ふわりと微笑みながらそんなことを言われ、おれはますますゲッソリしたのだった。

12・こんなネタで大丈夫か？（後書き）

いつも以上にダメすぎるネタですが、本当に大丈夫でしょうか。ドキドキ。

そしてこんな話をよりによって誕生日にアップする私（＾o＾）／あ、プレゼントは評価ポイントで結構です。一番いいのを頼む！w（嘘です、ただのネタなので許してください。）

それにしてもエルシャダイ、発売日は割と最近にもかかわらず、すでにもう懐かしい感じがしますw

13・2人練習 with王子

北王子梓茶。

理事長の息子で、容姿端麗、温厚博識。

恵まれた立場を鼻にかけることなく、氣どつた言動も不思議と嫌味に感じさせない、この美楠^{ひなん}学園でもトップレベルの知名度と女子人気を誇る「学園の王子様」。

まー、おれとしては「学園の奇術師」と改名してもいいんじゃないかなーかと思う。

どんな空間でも謎のキラキラを自家発電するし、朝の下駄箱を空けたらどーやって入ってたソレ！？　ってなくらいの大量のラブレット^{てっぺき}の山を取り出してみせるし。

そして基本、鉄壁^{てっぺき}笑顔のポーカーフェイス。根は悪い奴じゃなさそうなんだけど、なんとなく底知れない。

約1週間前に軽音部に入部したおれだったが、放課後の活動はこいつと二人で過ごすことが多かった。

というのも、最初の顔合わせ以来、悠斗はまだ一度も部室に来ていないし、煌もしばらくバイトが忙しいとかでほとんどいないのだ。まだ個人練習も満足にできてない状態だから、無理に合わせなくてもいいんじゃないかということで、初セッションは来週の月曜日ということになっている。

それまでは、配られた楽譜を各自好きな時間や場所で練習する決まりになっていた。

「でも個人練習って、ベースはともかくドラムは家じゃ無理だろ？　やる気あるのか、あいつ」

うちには当然、ドラムセットなど置いてないのだ。

「空き缶や箱、雑誌を並べて、それをスティックで叩いてイメージトレーニングしてるって言うていたよ。本当は彼も本物を叩きたくて仕方ないんだろうけど、ね」

一緒に暮らしているおれより煌のことに詳しい王子。そういえば、前から知り合いだって話してたっけ。

「いつからの知り合いなんだ？」

「小学校が同じだったんだ。でも、2年生の時、彼が転校してしまっ
つて」

「転校してからも、ずっと続いてたのか？　すごいじゃん」

「うっん、音信不通だったよ」

ん？　と眉をひそめるおれに、王子は笑みを濃くして、説明を続ける。

「去年の秋、ライブハウスの客席でたまたま隣に居合わせたんだ。8年ぶりだったんだけど、彼、すごく印象的だったから、面影も残っていたしもしかして……」と思っ
てね。思い切っ
て声を掛けてみたら、ビンゴ。幸い、向こうも僕の事を覚えてくれていたみたいで、会話も弾んでね。それ以来、時々遊ぶようになっていたんだ」

ほお、なるほどね。

「煌のこと、気になる？」

さらっと零れた質問に、一瞬固まってから、首をブンブン横に振るおれ。

「彼もよく女の子に声をかけられるけど、全然興味ないみたいだね。本当にそっけないんだ。ずっと好きな子がいる、ってのは聞いていたんだけど、君と一緒にいてすごく楽しそうな煌を見て、もしかしてその『ずっと好きな子』って君なんじゃないかと思ったんだけど……」

「いや、あいつとはつい1週間前に会ったばかりだし」

「そうなんだ？　じゃあ、僕の思い過ごしかな」

そこでまた、やけに嬉しそうににつこにつこ頬をほころばせる王子。

勘弁してくれよ……。

視線を泳がせると、部室の隅でパイプ椅子に腰かけて、空気に徹している姉貴と目が合った。

「おい芽生、せっかく来たんだからもっとこっちきたらどうだ？」

「いえいえ、おかまいなく。私はここで見てるだけで十分です」

うつとりと頬を染めて、ご満悦な姉貴。

いや、おれとしてはあんたの存在を混ぜることで、怪しい雰囲気になるのを少しでも防止したいのだが。

「可愛いお客さんもいることだし、二人だけでも合わせてみようか？」

「そーだな」

同意すると、王子のすらりと長い指が、流れるようにキーボードの鍵盤を滑り始めた。

明るく前向きな、無条件で飛び跳ねたくなるようなポップス。
ちよつと厭世的えんせいでシニカルな、ロックティスト。
永遠の愛を誓う、ロマンティックなバラード。

王子が作詞作曲したという3曲を、立て続けに歌い上げる。
どれもメロディアスで歌詞もそれなりにこなれていて、素人レベルを超えていると思う。

演奏が終わり、芽生の拍手が部室に響いた。

「すごいすごい、みんな素敵な曲。でも……なんでだろう、全然違う曲なのに、お姉ちゃんの歌、全部同じに聞こえる」

うぐつ。

いわれてみれば、その通り。声質は最高にいいけど、表現力はまだまだだよな。

「音程も、まだちよつと不安定？」

メロディーが早いとこまかしてる部分もあるな。

「声もけつこつ、小さいような」

確かにこの声量では、ライブハウスじゃ響かないかも……。

「まだ始めたばかりだから、こういうものだよ。芽生ちゃんのお姉さん、毎日すごくがんばってるから、きつとどんどん上手になるよ」

容赦ない指摘に凹みまくったおれに、王子のフォローがじんわり

と沁みる。

「王子」。おまえ、変だけどいい奴だよな〜」

「あはは、変って！ それじゃあ褒められているんだか貶^{けな}されているんだかわからないよ」

微妙なおれの言葉さえも、爽やかに流す王子。

「ところで和希ちゃんは、この3曲の中ではどれが好き？」

確か、一番完成度の高い曲で『軽音甲子園』都大会に臨むのだ。
その参考に……ってところだろう。

「おれは、一曲目のポップなやつかな。歌ってて、単純に楽しくて
ハッピーな気分になれる」

「本当？ 僕もその曲が一番気に入ってるんだ」

パツと王子の顔が輝く。その背後で、姉貴が親指をグツと立てて
るのが、ちよつと気になった。
なんだあ？

13・2人練習 With王子（後書き）

誕生日ポイントをくださった方、ありがとうございました。

もちろん、以前から入れてくださっていた方々にも、とっても感謝しておりますv

拍手もそうですが、やはり、目に見える反応をいただけると、更新意欲もてきめんにアップしますので

無論、閲覧してもらえただけでありがたい、という気持ちも真実。今後も妄想ばく進していきますので、よろしくお付き合い下さい。

14・球技大会と親衛隊

その週の金曜は、球技大会だった。

「金城先輩のバスケット？ ああ距離からのダンク！ ドリブル早いしフェイクもすごいし、信じられない運動神経と反射神経！ ちやうどカッコいいんだけど！」

「蒼木くんもサッカー、かなり上手いよね。どんなときも平常心で、360度に目があるんじゃないかってくらい絶妙のパスの連発。うちのクラスのメンバー貧弱かと思ってたけど、彼のおかげで優勝しちゃったりして」

「なんと言っても王子先輩のテニスでしょ！ あんなに激しく動いてるのに、どんなプレイも優雅にみえるし、真剣なお顔つきでもやつぱりどこか余裕があつて……飛び散る汗も眩しくて、ミントの香りが漂ってきそうだわ」

イケメン君たちがそれぞれにご活躍なさってるらしきことが、周囲の女子たちのキャピキャピした会話から聞こえてくる。しかしミントの香りの汗って、体組織おかしいだろソレ。

「バカちゃん、次のサッカー、でるんだよね？」

「ああ、おれ、サッカーはわりと得意だし。男女でクラスW優勝狙ってやる」

がぜん燃えるおれに、かんなが「気を付けて」と声をひそめた。

「相手のクラスの女子、王子先輩の熱狂的ファンが何人かいるから。通称『王子様親衛隊』。バカちゃんが王子先輩とバンドを始めたって聞いて、嫉妬に狂ってるらしいから……なんか仕掛けてくるかも」

親衛隊キター。

そして、かんなの忠告は当たり、おれは試合中、審判の際に乘じては髪を引つ張られたり足を踏まれたり引つかかれたり、相手チームから何度も執拗しつようないやがらせ行為を受ける。

「……………痛うっ……………」

派手に転倒し、すりむいたひざ小僧を押さえるおれを、縦ロールのいかにも意地悪そうな目つきをした女子が薄笑いで見下ろした。

「あゝら、ずいぶんと鈍くさいこと。何もないところで転ぶなんて、ダッサーい」

「おまえが足をひっかけたんだろ!？」

カツとして喰いかかったところ、周囲の女子たちが声高にさわぎ始める。

「言いがかりは止していただける?」

「そうよそうよ、薫子かおるこさんは何もしてなかったわよ」

「薫子さんがお美しいからって、ひがまないでちょうだい」

うーん、こういう役って可哀想だよ……。誰からも愛されない完全なザコキャラ。

近寄ってきた審判の指示で、おれは試合をぬけて保健室にいくことになった。

「バカちゃん、大丈夫? ゴメン、私、もうバスケの試合行かなきゃ

いけなくて」

「ああ、こんくらい、一人で平気だって。がんばれよ」

申し訳なさそうに体育館に走っていくかなを見送って、ふと隣のコートに目をやったら、悠斗がじっとこっちを見ていた。

「バカ！ 試合中だろ！ 集中しろー」

大声でしかってやると、うなずきを返して、ボールへと駆け出す。あいつらしくないやけに好戦的なプレイで強引に球を奪って、そのままキラーシュートを放った。

「ナイシュー！」

やった！ 決勝点！

ゲームの中とはいえ、こういう勝負事ではつい熱くなってしまうおれ。単純だつてよく姉貴にはバカにされるけど、性格だから仕方ない。

「いいぞ悠斗！」

ハイテンションの声援を送ってから、よたよたと治療へと向かった。

こういうシチュだとまた誰か手当てにくんのかなと戦々恐々と構えていたが、保健室にはちゃんと保険医さんがいた。

順番待ちで時間を食ったけど、消毒して、でっかいバンソーコー

を貼っただけで普通に終了。

廊下に出ると　もう試合は終わったのか、さっきのイジワル女子軍団が待ち構えていて、こっちがメインだったのかと悟る。

数にまかせて薄暗い廊下の隅へ追い立てられ、バケツで水をぶっかけられた。

「あんたにはそれがお似合いよ、雌豚^{めすぶた}！」

「こんなちんちくりんが王子先輩の目に留まるなんて、ありえないし」

「どんな汚い手を使ったのか、吐きなさい、このアバズレ女！」

絵にかいたような集団イジメ。

てかおまえら、さっきはお嬢様言葉使ってたくせに、キャラ固定しろよ！

「ブス！　デブ！　超キモいし！」

「存在自体罪なんだよ。消える出来そこない。このゴミが！」

……哀れに思ってたけど、こう延々と酷い暴言を浴びせられ続けると、さすがにムカついた。

「ふざけんな！　言ってるいいことと悪いことがあるだろ！　水ぶっかけるとかやりすぎだし！　人の痛みがわかんない、わかるうとしない、おまえらみたいな奴こそゴミだから！　群れないと何もできないくせに、優位に立ったと思った途端つけあがんじゃねーよ、恥を知れ恥を！」

ああ、おれ、なに真面目に説教してんだろ。どーせ単純だよ、ちつ。

しかし、この啖呵たんかは親衛隊たちの怒りにさらに火を注いだらしい。複数の手が伸びてきたと思ったら、おれは無理やり床に押さえつけられた。体操服の上着をまくしあげられ、短パンまで脱がされそうになる。

そして、ボスの薫子の手には、カメラ。

「なっ、おまえら、ここまでやると完全に犯罪だから！」

この乙女ゲーがどこまで過激なことをやるのか予想もつかず、おれはさすがに蒼白になって暴れた。

クッソ、離せ、冗談じゃねえ　！！

「学校中に、ばらまいてやる」

醜いとかいいいようなない笑みを浮かべながら、薫子がレンズを構える。

ブラのホックが外され、短パンもずり下ろされ、世界が真っ黒になつたような錯覚に陥った

14・球技大会と親衛隊（後書き）

和希大ピンチ。果たしてヒロインの行く末は！？（白々しい）

15・王子の怒り、悠斗のいら立ち

その瞬間。

「何をしている!？」

鋭い声が、空間を切り裂いた。

クモの子を散らしたように逃げていく親衛隊。
おれはあわてて、着衣の乱れを直す。

階段を降りてきて登場したのは、王子だった。

いつになく顔をこわばらせ、「ひどいな……」と呻きながら、手を差し伸べる。

「おまえさ、自分のファンの管理はしっかりしてくれ」

全身に広がる安ど感に大きく息をはきだしてから、ちよつと恨みがましい声で告げると、王子は衝撃を受けたように瞳を見開いてから、唇をかんだ。

いつもよりトーンの低い声で「ごめん」とうそぶく。

「まさか彼女たちがここまで暴走するなんて……しかるべき処置は、講じさせてもらう」

全身にゆらり、と静かな怒りをまとう王子の、その瞳に浮かぶ残忍とでも形容できそうな光を見た途端、おれはさつき以上の恐怖にゾツと背筋を凍らせた。

「いや、一応、未遂で済んだし！もちろん、ちゃんと指導してや

るのは大事だろうけど、あくまで穏便に……」

とっさに、かばうようなことを言ってしまう。

だって、すっげー、恐いんだもん、王子。

放っておくと、何をどこまでするかわからないカンジ（滝汗）

「あの、だから、頼む。あんまり酷いことはしないでやってくれ」

あいつらだって、好きであんなキャラやってんじやないだろうから。悪いのは製作者だし、うん。

「おまえに嫌われるっただけであいつら相当ダメージ受けるだろうし、さ。衝動的にいろいろやっちゃうバカな奴らだから、追い詰めすぎると自害しかねないし」

散々な目に合わされたのに、なぜか必死で弁護するおれを、王子は少し驚いたように見詰めていた。

やがて、ふつと苦笑する。呆れるみたいに。

「こんな目に合わされたのに、君も相当のお人よしだね。わかったよ、君がそこまで言うなら、罰は軽減してやることにする。でも……大丈夫？ 怖かったらどう？」

「はあ？ 別にあんな奴ら、なんでもねー、よ……っ！？」

ようやく表情を緩めた王子に心底ほつとして、そう答えたけれど、その瞬間、ぽろりといきなり目からでっかい雫が飛び出てきて、おれは口をつぐんだ。

ちよつと待てちよつと待てちよつと待て。

この反応はまずいだろ！ オイ！

「ちが、これはなんかの間違い！ たぶん、緊張がゆるんだせいで、なんかおかしくて……」

焦るおれの意志に反して、次から次へと零れ落ちる涙の粒。

その様子を呆然としたように見ていた王子だったが、やがて、堪えきれなくなったように両腕を伸ばし おれは、強く抱きしめられていた。

ぎゃああああああああ。

嫌ああああああああ。

「本当に、ごめん……」

切なげにそう耳元で囁く王子。

一方、おれは完全に硬直し、今にも魂魄が口から抜け出しそうだとすると、その時。

「和希……？」

向こうから、新たな人影が登場した。

蒼木悠斗。

「！？」

この状況を見て息を飲んでから、おれの顔が涙でぐしょぐしょなのに気づくや、顔色を変えた。

「何、泣かせて……！」

グツと拳を握り、突っ込んでくる。
まずいつ。

「違うんだ、こいつに泣かされたわけじゃなくて!」

王子の腕を振りほどき、両手を広げて立ち塞がった。……おれのために戦うとか、本気でやめてほしい。もう、切実に。

親衛隊にやられたのだと説明すると、悠斗は忌々しそうに顔をしかめたが、多少冷静になったようだった。

「とりあえず危機一髪のところ、助かったよ、王子。じゃあな、また来週! 行こうぜ、悠斗」

とにかく王子から逃げ出したい一心で、悠斗を促してその場を後にした。さすがに今日は部活も出る気にならない。

「保健室から戻るのが遅いようなので探しにきたんだが……もっと早く、くるべきだったな」

艶つやのある悠斗の低音には、悔悟かいごがにじんでいた。

「あー……ま、王子が来てくれたわけだし。心配してくれてサンキユな」

「……おまえは、ここで待ってる。着替えをとってくる」

悠斗が促したのは、あまり使われていない女子トイレ。

そっか、このずぶ濡れの姿のまま教室戻っても、むやみに注目浴びるだけだよな……。

素直に従ってしばらく待つと、おれの制服とスポーツタオルを手にした悠斗が戻ってきた。

「　　ありがとう、助かった」

着替え終わってでていくと、悠斗はふうつと嘆息^{たんそく}をもらし、おれの頭にタオルをかぶせる。

「まだ濡れてる。ちゃんと乾かさないと、風邪をひくぞ。おまえは一度寝込んだら、長いんだから」

「わっ！？　自分でやるから、いいよ」

「……………」

悠斗は無言のまま、わしゃわしゃと拭^ふく。タオルの隙間から見えたのは、ブスツとした仏頂面。

16 デートのお誘い

……なんとなく、すげー、機嫌が悪い感じ？ 何かに対して、怒ってるみたいな。

でも、頭を拭く手つきは、丁寧で優しい。

グツと押さえたり、ぼんぼんと挟んだり……なんだかマッサージを受けてみたいで気持ちよくて、ま、いっか、とそのまま身を委ねることにした。

「そうだ、試合、どうなった？ うちのクラスの結果」

ふと思いついて尋ねたところ、短い沈黙の後、ぽつりと「負けた」という声。

「あの後、立て続けに2点連続で入れられて、逆転負けだ」

「……そっか」

力なく相槌を打つおれに、悠斗は淡々と続ける。

「うちの女子は選手数がギリギリだった。おまえが抜けると10人でのプレイになったからな」

「畜生、おれのせいかな」

「おまえのせいじゃなく、あの卑怯な女たちのせいだろう」

それでも、やっぱり、悔しい。
でも待てよ。

「女子は負けたけど……男子は？」

タオルを外して見上げると、悠斗が、少しだけ笑った。

「優勝だ」

「……やったー！　すげーじゃん！　おめでとう」

一気にテンションあがって手をかざすと、瞬きしてから、パン、と手をたたき返してくれた。

「……単純」

笑いを含んだような声で、からかわれる。

「いーじゃん。嬉しいことは思いっきり喜ばないと損なんだし！」

おれの言葉に、呆れたように漏らした悠斗のため息には、どこかホッとしたような響きも感じられた。

土曜日。高校も休みなのでゆっくりと起きて階下に降りていくと、煌が玄関で靴を履いていた。

「お。おはよ」

こっちの姿を見るやくしゃつと顔をほころばせて、はいはい、今日もイケメンですね。

「出かけるのか？」

「ああ、バイト」

「よく働くな。そんなに貯めて何に使うんだ？」

「ん、将来のための資金作りかな」

「将来？」

「ホラ、結婚式とか？」

は？ と呆れるおれに、煌はニヤツと笑ってから「朝食は冷蔵庫にあるから」と言い残し、出て行った。

……はぐらかされた気がする。あいつ、屈託なくて開放的な性格っぽいけど、さりげに秘密主義なんじゃないだろうか。そんなことを考えていたら、ケータイが鳴り始めた。

「もしもし？」

『和希ちゃん？ おはよう。北王子です』

王子！？ なんで番号知ってるんだ……と思ったけど、入部届けに記入したな、そういえば。

『昨日は本当にごめんね。風邪引いたりしてないかい？』

「ああ、全然。で、どうした、いきなり」

『突然なんだけど、今日の午後って、空いてるかな？』

「特になにも予定はないけど……」

答えながら、ハツと気付く。やばい、このパターンはまさか。

『昨日のお詫びをさせてほしいんだ。今日午後2時、君の家に迎えに行くね。それじゃあ』

「ちょ、待て、王子！ おれはまだ……」

一言も行くとか言っていないぞおと続ける前に、通話は切れていた。

強引すぎるだろ、王子……。

ガクツと首を垂らしていたら、含み笑いをしながら姉貴が近寄ってきた。

「梓茶くんからデートのお誘いきた？」

「ああ、よくわかったな」

「ほら、こないだ部室で演奏した後、『3曲の中でどれが好き？』って聞かれたじゃない。あれで梓茶くん好みのポップスを選んだ場合だけ、今日のデートイベントが起こるのよ。グッジョブ！」

なんだとー！？ あんな普通の会話にもそんなトラップが……。

「ま、いいや。フケてやる」

悪いが、男とデートとがあり得ないし……とそのままリビングに入ろうとしたら、「アホか！」と脳天にハリセン攻撃。

「いつて！ 何すんだよ！？」

「ちゃんと全員落とさなきゃ元の世界に戻れないつつてんでしょ！？ いーかげん、かんねんなさい。もし従わなければ……」

ニタリ、と嗜虐的な笑みを浮かべながら写真を取り出す姉貴。

……あの親衛隊とやってること変わらねーよな。むしろこっちのがタチ悪い気がする……orz

「ほらほら、さっさと朝食済ませて、服選ばなきゃ！ 男性キャラたちにはそれぞれ好みのファッションがあつてね。煌くんは普段は可愛いけど気取らないカジユアル系が好きみたいだけど、デートの時は清楚なお嬢さんっぽい感じが受けがいいのよね。もちろん行き先にも寄るんだけど、いつものギャップっていうの？ で、悠斗くんは、普段はわりとなんでもいいみたいだけど、デートでは少し

だけ大人っぽく、肌見せしたりしてセクシーに。これも、幼馴染の
あの子が、気付けばこんな成長を……みたいな感じよね。ただしや
りすぎは厳禁。そして、梓茶くんが」

「あーもー、どーでもいい！ 服くらいは勝手に選ばせろよ！」

17・甘いものは好き？

2時ピッタリに、チャイムがなった。

ドアを開けると、ライトブラウンの髪の毛、甘い微笑を浮かべた美青年が。

仕立ての良さそうなシャツにコットンジャケット、グレンチェツクのボトムというその姿はさながら英国紳士風。それをけして気負った感じはなく、肌に馴染むように実に自然に着こなしている。

手には大きな薔薇の花束。……似合いすぎる。

「今朝、うちの庭で摘んだばかりなんだ。見た瞬間に、君を思い出した……もらってくれるかな？」

うちの庭って、どんな豪邸住んでんだよ王子（汗）

「えっと……荷物になるから、置いてくぞ？」

「もちろん、構わないよ。ところで、君の私服姿は初めて見たけど……」

ちよっとビッグサイズのＴシャツに、デニムのショーパーン。

男受けとか知ったことかと着心地重視で選んだ服だったのだが、次の瞬間、王子の周囲に無数のキラキラが飛び交った。しかも、いつもより30%増量バージョン！

「すごく可愛いね。澆刺はいつしとした君の魅力が、よく引き立つ」

……意外にもボーイッシュがお好みでしたか。

家の前には黒いいかにもな高級車が停まっていた。ちなみに王子

は毎朝、こいつで学園に送迎されている。

扉を開き、「どうぞ」と優雅に促す王子に、深々とため息をつきながら乗り込む。

内部は思ったよりもずっと広くて、座席もふかふか。いーよなあ、セレブは。

「で、どこに行くんだ？」

「和希ちゃんは、甘いものは好き？」

「好きだけど」

「じゃあ、とびきり美味しいケーキを食べに行こう」

ケーキか……そーいや、しばらく食べてないな。

デートとか、いったい何をするようになるのかと心配していたが、そーゆーことなら悪くないかも……。

なんてうっかり油断したおれが、馬鹿でした。

「一度、ここで降りてもらえるかな？」

停まった場所は、なにやらパンピーには敷居が高そうなブティック店の前。

「ごめんね、その格好、よく似合うし本当に可愛いんだけど、これからいく場所はそれだと入れないから……」

「??? おい、王子？ ちょっと待て、どういうことだ!？」

「北王子様、お待ちしております」

中には気品のある柔和そうな女性店員がずらりと立ち並び、王子は「頼むよ」とだけ告げ、混乱するおれを引き渡す。

直後、おれは女性店員に群がられ、あっつと言つ間に髪型から靴まで全身をドレスアップさせられていた。顔にはほんのりとメイク

まで施^{ほどこ}されている。

「うん……いいね」

「素材がよろしいので、腕のふるい甲斐がありましたわ」

特撮ヒーローもビツクリの早着替えにポカーンとしているおれをみて、満足げにうなずく王子。

「こんな素敵なレディをエスコートできるなんて、幸せだな」

「ケーキ食べにいくんじゃなかったのか……？」

「もちろん。さあ、行こう」

そして着いた場所は、都心にある、おれでも知ってる超ど級のラグジュアリーホテル。海外セレブが来日した時もよく泊まったりするあそこだ。

都会の景色が見渡せる45階の展望レストラン。

まるで宝石のような繊細なスイーツの乗ったアフタヌーン・ティーセット。

「お味はいかがかな？」

「ありえないほど美味い……」

感動に打ち震えるおれを、「よかった」と最高の笑顔で眺める王子。

「おまえは紅茶だけなのか？」

「僕は、君の笑顔をご馳走になってるから」

よく出てくるよな、こういう台詞。

半ば感心しつつ、フォークを口に運ぶ。うーむ、絶品。

「……でもおれ、絶対小遣い足りねえ。週明けには返すから、貸してくれるか？」

「デートで女性に出費させるなんて、恥ずかしいことしないよ」

「いや、それはおかしい。お互い学生なんだし、男も女も関係ねーだろ？」

思わず強い口調でそう言ったけれど、続けて「この洋服代まで入れるとどんくらいになるんだ……？」と尋ねる声はビクビクしたものになってしまった。

王子はパチパチと瞬きしてから、苦笑する。

「本当に、君がお金のことを心配する必要はないから。それに、最初にも言っただろう？ 昨日のお詫びだって。全部、僕からのプレゼントだから、受け取ってよ」

「でも……」

なおも食い下がろうとしたおれの口に、何かが押し込まれた。ケーキに添えられていた、苺。

もぐもぐ、と仕方なくそれを租借するおれを見ながら、自分の指についたクリームをペロリと悪戯いたずらっぽく舐なめて、王子が微笑む。

「それ以上うるさいことをいうお口なら、今度は別の方法で塞ふさがなぐちやいけないかな？」

「……ここで発狂せずにこらえたおれの精神力は、大いに褒め称たたえられてしかるべきだと思う。」

「貴重な君の一日を、僕にくれてありがとう……」

おれを送り届けた自宅前でそんな台詞を残し、王子の乗り込んだ車は立ち去って行った。最後まで気障きざな奴……。

疲れた……とふと視線をずらすと、煌がカバンを肩にかけて佇たたずんでいた。

こいつもちようど帰ってきたところだったらしい。

おれのめかしこんだ姿に、ちよつと驚いたように目を丸くしていたが、気を取り直したように話しかけてくる。

「梓茶と出かけてたのか？」

「ああ。びびったぜ。いきなり全身飾り立てられて、連れて行かれたのはあのホテルリッ。ケーキ食るとは聞いてたけど、大仰おおまげすぎ……」

凝った首をひねったり押さえたりしてほぐしながら、家に入る。煌も後に続いてきた。

「へえ……すごいじゃん。美味かっただろ？」

「マジで半端なかった！ けど……やっぱあーゆーとこつて、肩凝るし、苦手だ。ぶつちゃけ、家でおまえの飯食う方がいい」

ハイヒールを脱ぎ捨てながら率直な感想を述べただけだったのだが、一瞬訪れた沈黙に振り返ると、虚をつかれたような煌の顔。直後、頭をぐしゃぐしゃとかき回された。

「なっ！？ なにすんだよ！？」

「ベーツーに。……そんじゃまあ、バイト疲れたけど、がんばって

夕食つくってやりましょうかねえ」

ひらひらと後ろ姿で手を振って、ダイニングへと消える長身。

「ったく、髪ボサボサ……あれ、芽生、いたのか」

いつのまにか階段のところに立っていた姉貴は、おれをじっと見つめていたが、一言、白目でこう言った。

「和希……恐ろしい子!」

なにが!?

18・黒川 旺眞

翌月曜日が、初めての音合わせ。

とりあえず候補の3曲を立て続けに流してみたけど……なんだろう、本当に「流してみた」感じというか。

ドラムもベースもキーボードもそれぞれレベル高くて、演奏も完璧なのだが、なんていうか、えーと……バラバラ？

「ま、しかたねーよな。和希も梓茶も悠斗も、バンドは初めてだろ？ ポリユームのバランスとか、タイミングとか、一人で弾くのと他人と合わせるのは全然違うから、練習を重ねていけばよくなってくつて」

沈んだ空気を打ち破るように、あっけらかんとそう言ったのは煌だった。

「周りの音を聞けつつたつて、そんなすぐにできるようになるもんでもねーしな。これからは俺もなるべく練習来るようにするし、悠斗もできる範囲で頼む」

「ああ……。金城、おまえは、バンドの経験があるのか？」

「前の学校でちよつとだけな。ほんの数か月。一次選考に送る録音テープの締め切りはいつだったっけ？」

「6月5日。日曜日。……いまからちょうど、2週間だね」

王子の言葉に煌はうなずいて、おれたちを見まわす。

「2週間もあれば、このメンバーなら大丈夫だ。とにかく回数を重ねて、調整しながら、カンをつかんでいくこと。……曲はしぼった方が良くもな。どれにするか、意見を出し合おうぜ」

いくつものスポットライトに照らされ眩しく輝くステージの上で、ボーカルが激しいラップをがなり立てている。

ジャカジャカと鳴り響く電子音。体を揺らす観客たちを一番後ろの壁際から眺めながら、おれの唇からは無意識のため息がこぼれた。

「どうした？」

この喧騒けんそうの中、小さな吐息が聞こえたはずもないのだが、隣にいた悠斗が敏感に反応する。

「いや……こんなとこにいる暇あるなら、練習した方が良いんじゃないかと思って」

その週は他に水、金、土と集まって練習したが、相変わらず、今一つしっくりこないままだった。

そして日曜日の今日は、王子の提案で、メンバー全員で集まってキャパ300人ほどのライブハウスに来ているところ。

人の演奏を聞くのも参考になるんじゃないかということだったのだが……今はそれよりも、少しでも多く音合わせをしたい気分だった。

もし優勝できなきゃ、ゲームオーバーで存在が消えてしまうかもしれないのだ。できることはやっているつもりだが、本当にこのやりかたで大丈夫なのか、焦る気持ちはあった。

「たぶん、おれが一番足を引っ張ってるんだよね……声量たりないし、おまらの音に引きずられて、ふらふらしちゃってる」

ボイトレ量を増やしたくても、家では姉貴に「バンド練習ばつかしててもダメなのよ！ ステータスはバランスよく上げなきゃ！」と阻まれ、やりたくもない勉強や美容などでスケジュールがびっちり埋まっていた。

「演奏が合わないのは俺たちの力不足だ。和希が落ち込む必要はない……おまえは、よくやってる」

悠斗はそんなふうに言ってくれたが、不安はおさまらない。

「正直、参考になりそうなステージでもないよな」

いら立ちからついそんな悪態をついてしまったところ、バーカウンターから戻ってきた王子が「あと少し待ってて」とグラスを渡してくれた。

「この次のバンドは、なかなかおもしろいから。高校生バンドだけど、間違いなく今度の大会での優勝候補だ」

「へえ……？」

オレンジジュースでのどを潤し、からからとストローで氷をかき回したりしていたところ、やけに会場が込み合ってきたことに気付いた。

客が、どんどん増えている。しかも、女ばっか。

「まだ？」

「この次よ！」

「今のうちに前に行かなきゃ」

……そんな会話を耳にしている間に、いつのまにか超満員。

「なんていうグループ？」

「『Der Luxustod』……ドイツ語で『悦楽死』」

王子の答えに、煌の顔がなぜかこわばったように見えた。
なんだ？

直後、ラップグループの退場後にインターバルで点灯していた照明が、パツと落とされた。同時に巻き起こる、大歓声。

うわっ、うるせえ！！

鼓膜を引き裂くようなギターの音が鳴り響き、幕が上がると、更にポリリズムを増した黄色い声援が沸き立つ。

「キヤアアアアアアアア」

「旺真様ああああああああ」

青白いライトに照らし出されたステージの上には、黒を基調にしたゴシック調の衣装をまとった男3人、女1人の姿。

高校生のくせにヴィジュアル系！？と度肝を抜かれたのもつかの間、ステージの中央に立つ男の姿から、眼がそらせなくなる。

漆黒の、腰まで伸びたサラサラの長髪。

物憂げな切れ長の鋭い瞳に、恐ろしいまでに整った鼻梁。

陶器のように白くなめらかな肌。

シャツの大きく開いた襟元で、チカチカ光るライトに浮かび上がる
神秘的な鎖骨のライン。

しなやかでたくましく、完璧な均衡を誇るその長身からゆらりと立ち昇る、なんとも言えない妖艶さ
日本人離れした、なんて言葉では全然足りない。

人間離れした、まるで魔性の如き悪魔的美貌。

そしてイントロが終わり、その男が口を開いた刹那　その場の全てがそいつに吸い込まれたような錯覚を受けた。

やかましく飛び交っていた嬌声きょつせいもピタリと消え、女たちの表情が一斉に陶然とうぜんとしたものへと変わっていく。

体の奥底を擦くすくられるような、ハスキーな低音。

有無を言わせずひきよせられ、飲み込まれ、存在の全てがその甘美な檻おりに囚とわれる。

時も、空間も、思考回路も、何もかも支配され、めくるめく退廃と耽美に翻弄せんりつされるのみ。

全身を驚嘆の戦慄せんりつが駆け巡る。

なんという、圧倒的なボーカル。

これが　『カリスマ』というやつか。

18・黒川 旺眞（後書き）

昨日になって急にアクセス数が伸びたのですが、何があつた！？
ともあれ、新キャラ登場です。

登場人物紹介を読んで「あのキャラっぽい」と思ってる方もいらっ
しゃるかもですが

男性キャラは基本オリキャラなので（鉄板設定は色々張り付けてま
すがw）、

予想と違ってくるだろうことはご容赦くださいm（
|（
|（
m

19・最悪のファースト・コンタクト（前書き）

すみません、下ネタ入ります。

19・最悪のファースト・コンタクト

「ちゃん、和希ちゃん」

「えっ……あ、王子……？」

ハッと我に返った時には、もうライブは終わり、ホールもガラガラになっていた。

心配そうにこちらを見下ろしていた王子、悠斗、煌が、反応を見せたおれに一樣にホッとしたように表情を緩める。

「悪い、すごすぎて、ボー然としてたわ。にしても、みんな、撤回早いな」

「女の子たちは、出待ちをしにいったみたいだね」

既にいつぱしにファンがついてるのか……ま、あの美貌と実力なら、無理もない。

「おれ、トイレいつてくるから、先に外で待っててくれ」

「一人で大丈夫？ 迷子にならないようにね」

「子どもじゃねーんだから」

王子の言葉を鼻で笑ったおれだったが 見事に迷った。(ドーン)

おれが悪いんじゃない。このヒロインの方向感覚がおかしいんだ、絶対。

限界を訴える膀胱をなだめつつ、しばらくウロウロと歩き回っているうちに、ようやくトイレマークを発見し、飛び込む。

小用便器の前に立ち、ベルトを外しつつ何気なく横をチラ見して、ビビった。

で、でけえ！ ナニコレ珍百景。

思わず顔を確認して二度ビツクリ。

さっきのカリスマボーカルじゃねえか……！

女どもに「旺眞」と呼ばれていたそいつも、なぜか、ひどく驚いたように切れ長の眼を大きく見開き、おれを凝視^{ぎょうし}していた。

ん？ なんだあ？？

一拍の空白の後、ようやくその視線の意味に気づき、血の気がザーンとひいた。

間違えたー！

おれ、今、女になってんだった！

しかし、今更女子トイレを探しに行く余裕はもはやなく、そのまま男性用の洋式トイレに飛び込み、用を済ますと高速で飛び出した。

「失礼しましたー」

「待て」

絶対零度の声に呼び止められ、足がピシリと固まる。

恐る恐る振り返ると、不機嫌を絵にかいたようなしかめっ面の旺眞が、両腕を組んでにらみ付けていた。

なまじ凄まじく顔が整っているせいで、迫力があることこの上な

い。

「虫けらが……どこから潜り込んできた!？」

む、虫けら!？ と内心大いにツツコミつつ、おれは勢いよく頭を下げた。

「ごめん！ トイレを探してたんだけど迷っちゃって、漏れそうだったからよく確認せずに飛び込んだじゃって」

「見え透いた嘘をつくな！」

ビリビリ、と空気を震わせるような低音の一喝。

思わず言葉を失っていたら、「魔王サマ、何事？」と歌うような調子とともに脇の扉が開き、さつきステージで見たメンバーがぞろぞろと出てきた。

魔王、か。確かにこいつにぴったりのあだ名だ……！

こっそり感心するおれに、前髪を長めに伸ばしたド派手な赤い頭の男 たしかすっげークレイジーなギターをかき鳴らしてた奴だが、ニヤニヤしながら言う。

「ありゃ、ダメじゃーん。お嬢ちゃん。楽屋までは追っかけ禁止だぜ？」

「そつだ、ここは貴様のような下等生物が入り込んでよい場所ではない」

下等生物……！

いちいち台詞が大仰だぞ、魔王！

「だから、間違えただけなんだって。わざとじゃないし、すぐ出ていくから」

「身の程をわきまえず楽屋傍までやってきただけでは飽き足らず、よもやこのような変態行為にまで及ぶとは……覚悟はできているのだろうか」

弁明など聞く耳持たず、魔王はいきなりおれの胸倉につかみかかった。

「く、くるし……」

「女だからと言って、容赦はせぬ」

魔王の両手が掲げられ、グツとおれののどが締めつけられる。目が、本気だ。

呼吸が詰まり、視界が白くかすんでいく。

やべえ、殺される。

ゾツと全身が恐怖に包まれた瞬間。

「和希！」

新たにその場に現れた影が叫び、おれはドン、と地面に投げ出された。

「大丈夫か!？」

駆け寄ってきたのは、煌だった。

ゲホゲホ、と激しく咳き込むおれの背中を撫で、怒りに燃えた瞳で魔王をねめつける。

「てめえ……！ 和希に何しやがる！」

「金城、煌……」

一方、魔王の方は、意外そうにその名を呼ぶや、みるみるとその表情を凍りつかせた。

その瞳に浮かぶのは、さっきおれに向けていたもの以上の、激しい憎悪。

「貴様こそ、今更なんのつもりで俺の前へ現れる！？」

……こいつら、知り合いなのか？

張りつめた空気を破ったのは、赤い髪の男だった。

「オレ様はとくに気づいてたぜ。ライブの時から客席にいたよな」

「ロン……」

煌に『ロン』と呼ばれたそいつは、頭の後ろで両手を組み、ひょろりとした細身を傾ける。

「もしかしてえゝまたオレ達と組みたくなっただ？ なーんてありえねーか。ヒヤハハハハッ」

返事も待たずに、一人でゲラゲラ笑い始める。こいつも、やべえ（汗）

「おまえらと組むことは生涯ねえよ。それに、俺は今は、こいつとやってる」

拳動不審なロンに臆することなく、そっけなく返す煌。ロンが爬虫類めいた瞳を、んあ？ と丸くした。

「煌と同じバンドをやってて、オレ達のファンなわけ？」

「だからおれはファンじゃねえって！ ここには迷い込んだだけ！ 今日だって、軽音甲子園のための参考になるかもってきただけ」

「へえ？ あの大会、あんたらも出るんだ。お嬢ちゃんの担当は？」

「ボーカル」

おれが答えた途端、ハッ！ と嘲笑が響いた。魔王だ。

「笑止！ こんなひよつ子がボーカルとは……バンドの力量もたかが知れたものだ」

「聞きもせずにはざくんじゃねーよ。相変わらず、心底ム力つく野郎だな」

「貴様こそ目障りだ。その変態女を連れて、とつと俺の視界から消え失せろ」

「言わせておけばこの野郎……」

恐ろしいほど険悪な眼差しでにらみ合う二人。

「和希、先帰ってろ」

グツと拳を握って一步を踏み出そうとした鬼気迫る煌を、おれは必死で押し留めた。

「待て、落ち着け！ 暴力沙汰はまずい！」

「おまえのことまで侮辱されて退けるかよ……！」

「決着をつけるなら　音楽でだ!!」

とっさに叫んだ一言で、その場の全員が黙り込んだ。

……あ、やっぱ、クサかった？

照れたのもつかの間、ククククツと肩を揺らし始める魔王。

「いいだろう……決着の日までせいぜい足掻くがよい。貴様らの貧弱なプライドはおるか存在基盤さえ粉々になるほど、完膚なきまでに叩き潰してやる……!!」

クツクツク……ハッハッハッハッハ！ と高笑いを響かせながら、カツカツカツ……と足音も大きく反対方向へと歩いていく。

「キヒヒ、おもしれーことになってきたじゃん！　せいぜいガツカリさせないでくれよ」

口笛を吹きながら、ロンや、その他のメンバーも後に続いていった。

楽屋はすぐそこなはずだけど、どこにいくんだろう、あいつら。

魔王軍団の姿が完全に消えるまで、呆然と見送っていたが、「帰るか」と煌に肩をたたかれ、持ち直した。

煌の表情はまだ苦々しいが、大分平静を取り戻したようだ。

「あいつらが、前のバンドのメンバー？」

「ああ」

「それはまた……大変だったな」

しみじみとコメントを寄せると、煌も重々しく首肯しゅくけんした。

それにしても魔王　あまりにも残念なイケメンだ。

19・最悪のファースト・コンタクト（後書き）

それにしてもこの魔王、ノリノリであるw

前回更新日、なんとジャンル別日間ランキング第4位をいただきました。

ランキングなんて雲の上すぎて完全にノーマークだったので親友にメッセをもらって仰天した次第です。まさかこんなミラクルが起こるとは……

これも応援してくださっている皆様のおかげです。 心から感謝！！

そしてその次の回が下ネタとか我ながら何やっとなだという感じですが。

活動報告のほうではダメ小説らしくダメ企画でこっそりお祝い中です。その名も

<勝手にキャラソン@ボカロ曲【歌ってみた】>

ニコ動のアカウントをお持ちで「もうちょっと妄想に付き合ってやろう」という

奇特な方はのぞいてみて下さい……美声パラダイスなので損はさせませんよ！w

イラッ ときたかたは何卒スルーで。

（ニコニコ動画は本当に「才能の宝石箱」だと思ってます。大好き）

20・ミーティング@ファミレス

ライブが終わった後、ファミレスで夕食がてら、その日の感想を語り合うことになった。

「『Der Luxustod』は確かにすごかったけど……あんなアクの強いバンドの何を参考にすりゃいいんだ？」

ハンバーグをほお張りながら首をひねるおれの口元を、王子が「クスッ。ケチャップついてるよ」とナプキンでふいた。グハッ。

「メンバー全員がすごく個性的なんだよね、あのバンド。魔王くんの存在感は圧倒的だけど、それだけじゃなく、全パートのレベルが高い。そして、どの楽器も尖^とがってるし、すごく自由に演奏してるのに、バラバラにはなってないだろう？」

王子の言葉に、うなずきつつ、考えをまとめるように目を細める悠斗。

「自己表現と協調性のバランス……というよりは魔王の歌声で有無を言わせずまとめあげている、という印象を受けたが。確固たるバンドの世界観や方向性が定まっているというのも大きいだろうな」

「似てるところもあると思うんだ。僕は、せっかく和希ちゃんという稀有^{けう}な才能を秘めた歌姫がいるんだから、その声を生かせるような曲作りをしたいと思ってる」

相変わらず、真面目な顔でこそばゆくなるような台詞を言う王子。

「俺も、それでいいと思うぜ。やっぱボーカルが華だしな」

「同感だ。今度の大会出場はそもそもこいつの花瓶代のためだし、曲や音について自己主張を始めるときりがないと思っている。だから演奏も極力、和希を立てるようにしたいとは意識しているんだが」

三人の言葉に、あわてたのはおれだ。

「ちょっと待て、でも、おれに気を遣って勢いが消えたらもったいないだろ!? おまえら皆、すっげー上手くて、とびきりいい音もつてんのに、今のままじゃそれが全然出てない気がする」

そうか、しっくりこないのはこの辺も原因だったのかも。

「経験一番浅くて、実力がないのは間違いなくダントツでおれだ。おれは魔王とは違う。おれのレベルまで落とすことねーよ。おれは、とにかくおまえらに負けねーようにがんばるから!」

面食らったような男どもを見回しつつ、おれは、必死で言葉を紡ぐ。

「だから、おれに、ボーカルに合わせるんじゃないかって……ドラム! そう、煌に合わせようぜ。煌のリズム感は抜群だし、悠斗だって初めての顔合わせであんなかつけーセッション決めてたじゃん?」
「リズムの主体はドラムだけど、グルーヴを司るのはベースだよ? その双方の絡み合いは無視できない。……でもそうか、リードは煌で、蒼木くんが煌のドラムに合わせてメロディとの架け橋になる、和希ちゃんはその二人のビートを感じて歌う……」

「でもって梓茶は全体をみて調整しつつ彩を添える……ってスタンスなら、悪くないかもな」

王子の意見を、煌が引き継ぐ。

うん、いい感じいい感じ！

悠斗も同意を示すようにうなずいた後、鞆から楽譜の束を取り出した。

「じゃあ次は、曲の解釈だな。おまえ達はこの曲では特にどのフレーズを意識して弾いてるんだ？」

・その後も意見の交換は続き、閉店時間の23時まで居座ってしま
う。

・週明けの練習、今までの停滞が嘘だったように気持ちよくそろっ

・回数を重ねることに完成度UP！

・締め切り前日、録音完了。CDを一次選考に応募。

・予選通過を信じ、都大会のステージに向けてひたすら練習するこ
と2週間。

・ついに予選通過通達が届く。 イマココ

「ご機嫌だな、和希」

「そりゃそーだろ！ 祝、予選突破！ 今夜はケーキ焼いてくれ」
「気が早すぎだろ」

部活後の帰り道、舞い上がるおれの様子に肩をすくめる煌。呆れ
たように笑いながら、その目に浮かぶ光は柔らかい。

悠斗は今日は剣道部だったから、帰りは二人だけだった。

「だって、大半がこの予選で落とされるんだろ？ ま、おまえらの実力なら受かるとは思ってたけどさ、やっぱがんばったのが報われると感慨が……」

「あぶねっ」

弾むような足取りで喋り続けていたおれを、煌がとっさに引き寄せた。それまでおれがいたすぐ真横を、車が高速で突っ切っていく。

「住宅街であんなスピード出しやがって……和希、おまえはそっち歩いてろ」

大きな手で二の腕をつかまれたまま、守るように歩道側に誘導された。

あわてて振り払う。

「やめろよ、そーゆー変な気を遣うの」

「俺が恥ずかしいんだよ。女に車道側歩かせるような、気の利かない奴だと周りに思われると」

そついわれると、反論もできない。

畜生、女じゃねーんだけどな……。

「……魔王たちと同じバンドだったってことは、おまえもヴィジュアル系の衣装着てたわけ？」

ちよつとからかうような口調で尋ねたところ、煌の顔が微妙にひきつった。

「悪かったな。どうせ柄じゃねーよ」

「いや、似合うと思うけど」

どうせイケメン。

軽くいじけるおれの内心など知る由もない、煌の説明は明快だった。

「ドラム叩けば、何でもよかったんだ、俺は」

「じゃ、『Der Luxustod』を抜けたのは、転校が原因？」

「いや、価値観の不一致」

キツパリ宣言する煌。

確かにあの魔王軍団と渡り合っていくのは、並の神経じゃ無理だろうが。

「おまえって、どんな相手でも気後れしないで上手く付き合えるタイプだと思ってたけど、さすがにあの魔王……黒川旺真、だっけ。あいつは例外だったんだな」

ニヤニヤとほおを緩めて感想を述べたところ、返ってきたのは、わずかな沈黙。

お、これは反撃のチャンス？

いつも振り回される一方なので、今が好機とばかりに、言葉を継ぐ。

「あっちの剣幕も相当だったじゃん。よっぽど派手に喧嘩別れしたんじゃないの？」

「……和希」

名前を呼んだ煌の声が、なんだか妙に深刻な色を帯びているものだったので、ちょっと動揺した。

「なんだよ？」

「実は、さ……」

21・通り雨

ためらうように瞳を揺らしながら、煌が口を開いた時。
ポツリ。

大きな水滴が、頭の上に落ちてきた。

「!？」

二人して見上げた空は、いつのまにかどんよりとした灰色の雲に埋まっていた。

そこから、次から次へと大粒の雫が零れてきたと思うやいなや、あつという間に土砂降りになる。

「やべえ……」

「走るぞ!」

そこから家まではほんの数分、という距離だったけれど、玄関をくぐった時にはもうお互い全身ずぶ濡れになっていた。

「なんだよ、このバケツをひっくり返したような雨!」

スカートを絞りながら悪態あくたいつくおれを見て、煌がぶつと噴き出す。

「和希、おまえ、ひつでー格好!」

「なっ、おまえだって人のこと言えた義理かよ!」

「俺は『水も滴るイイ男』だから」

ふてぶてしく言い放った煌だが、否定できないのが腹立たしい。

髪をかき上げてもお、端正な鼻筋やほおに流れ落ちていく雫と
いい、ほどよくたくましい肢体に張り付いた制服のシャツといい、
姉貴がみたら盛大に鼻血をぶっ放しそうな色気が漂っている。

「自分で言うなよ、バカ」

悔しかったのでそれだけ返して、びっしょりで気持ちの悪い上着
を脱ごうと、セーラー服のすそに手をかける。

「おい、やめろ、こんなところで……！？」

ギクリと焦ったような煌の声を無視して勢いよくガバツと脱いで
みせた。

「！」

「ふはははは！ 期待させて悪かったな。タンクトップ着てました

」

「……にやろっ」

拳を握ってうめいた煌は、心もち赤面しているように見える。
ざまーみる。おれだって、やられっぱなしじゃねーんだ！

少しだけふてくされたように半目になっていた煌だが、おれの肩
に視線を留めるや、小さく息をのんだ。

「和希、それ……」

実はおれもわりと最近気付いたのだが、ヒロインの右肩後方
には、掌サイズほどの傷跡があった。

一見淡いピンクの痣のようにも見えるそれは、痛ましさを覚える

ような類の傷ではなかったが、ヒロインの色白の肌では目立つといえどそこそこ目立つ。

「なんか、ガキの頃に火傷やけどした跡らしい。おれは、もう全然覚えてないんだけど」

ただれたり引きつったりはしていないが、今でもまだ残っているということは、それなりに大きな怪我だったのかもしれない。

「……………」

ポタリ、と伝った雫を顎あごから滴らせ。

煌が、吸い寄せられるように、そつとおれの傷跡に手を伸ばす。

「煌？」

おれの声に、ピクツとその指が制止し、どこか虚ろだった瞳が、いつもの光を取り戻した。

「タオルとってくる。和希、先にシャワー使えよ」

何事もなかったかのようにそう言いながら、家に上がっていく煌。

……………そういえば、さっき道端で言いかけてたことってなんだったんだろう？

気になったけれど、今更もう一度蒸し返しても、またいつものようにはぐらかされてしまうだけだという予感がした。

あつという間に日々は経過し、今日は6月最後の土曜日　都大会当日。

予選を突破した10組が、ステージ発表に臨む。会場には6名の審査員の他に、500名ほどの観客が集まっていた。

女子更衣室で姉貴に渡された衣装は、肩がむき出しのベアトップに、ウエストから下がふんわりと膨らんだカラフルな水玉柄スカートに切り替わった80年代風ワンピース。髪の毛は高い位置でポニーテールに結び、腕や足にもコサージュつきのリボンをくるくると巻きつけて、ポップで華やかな雰囲気だ。

「ちょっと派手じゃねーか？」

「ステージではこれくらいでちょうどいいの。今日の選曲との相性やキャラ受けの効率も考慮してのベストセレクトなんだから文句言うな」

キャラ受けねえ……とため息をつきつつ、着替え終わって廊下へ出ると、黒いゴシック調の衣装に身を包んだ背の高い男が向こうからやってきた。

……魔王……！

稀代きだいの彫刻家が精魂込めて創りあげた芸術品のように美しいその顔が、おれに気付くやピクリと眉を跳ね上げた。

「誰かと思えば……あの時の変態女ではないか」
「変態じゃねえ！　間違っただけだっつってんだろ」

魔王はおれの抗議なんて聞こえていないように、黙ってまじまじ

とおれの全身を見つめてくる。

「なんだよ？」

「……馬子にも衣装だな」

「悪かったな！」

気色ばむと、フツと唇の端を吊り上げ、そのまますれ違った。

「せいぜいあがいて見せるが良い。もとより貴様らの俚俗しやくな演奏に期待なぞしておらぬが、あまりにも手応えがないのも興醒めだ」

傲慢な台詞を残し、すれ違っていく。

「そつちこそ、吠ほえ面おもてかくなよ！」

21・通り雨（後書き）

今回から章を設けてみました。

あと、本編とは関係ないですが、短編を一つアップ。

「4歳児が『桃太郎』を語ったらこうなりました。」

<http://ncode.syosetu.com/n1214u/>

完全実話です。よろしかったらどうぞ。

22・OK, Are you Ready?

ひかえしつ
控室に入ると、まず扉のそばにいたのは悠斗だった。

「……！」

こつちをみて一瞬目を見張ったが、無言ですぐ視線をそらしてしまつ。

ん？　これって外してんじゃねーか？
続いて王子がにっこり笑顔で出迎えた。

「やっぱり女性には華があつていいね。特にそのポニーテール！　髪型を変えると、君のまた別の魅力が引き出されてちよつとドキドキしちゃうよ」

そして煌。

「いいじゃん。似合うし、曲の雰囲気にも合ってるぜ」

「さて問題です。一番好感度が上昇したのは誰でしょう？」

こそつと姉貴が耳打ちしてきた。

知るか！　と舌打ちしたい気分だが、下手にスルーすると反撃が恐ろしい。

「あーつと、王子？」

その辺が妥当かと思つたのだが、ブブーッと手でバツテンされた。

「答えは悠斗15、梓茶10、煌5、旺真5でした。ああ見えて悠

斗くん、内心ドッキドキなのよムフフ」

「ツンデレって奴かよ……って待て、旺真って、あの魔王も攻略対象！？」

「当たり前でしょ」

マジでー！？

「おまえらあんなのと付き合いたいのか！？ あんな彼氏が理想なのか！？」

「ま、リアルではありえないけど。天上天下唯我独尊てんじょうてんげゆいがどくそんの俺様っぷりはいつそ清々しいくらいだし、可愛いところもあって、結構クセになるキャラなのよ。そしてなんといつても エロいところがい

ニタリ……、と怪しい笑みを浮かべる姉貴。

駄目だこいつ……早くなんとかしないと……。

我が姉ながらドン引きしていたところ、スタッフが呼びに来た。

いよいよか！

ギクリ、と緊張に身をこわばらせるおれの肩を、悠斗、王子、煌がすれ違いざま、順に叩いて先に行く。

「ここまできたら、あとは余計なこと考えずに、音にだけ集中しろ」
「あれだけ練習したんだから、大丈夫」
「本番は、思いつきり楽しんでいこうぜ。音楽は『音を楽しむ』ものだからな」

よし、やってやるぜ！

「エントリーナンバー7、私立美楠学園『COLORFUL』」

それぞれのカラーが溶け合って目の前の景色を塗り変えるような音楽を作るう、曲ごとに違った魅力や色彩を引き出せるようなバンドを目指そう……そんな意図で名づけられたバンド名。

そういえば、こいつらの名前って全員色が入ってるよな。黒川旺眞もそう。

そっか、前、姉貴の言ってた攻略キャラの共通点って「色」だったのか……

ドキドキ跳ねる鼓動を抑えながらそんなことに思いを巡らせていたら、アナウンスと共に、幕が上がった。

「曲は『Let's party』」

瞳に飛び込んでくるスポットライトの光が強烈過ぎて、視界が真っ白になる。眩^{まぶ}しくて観客が見えないのは、緊張せずにすんでちょうど良かった。

煌のシンバルの4連打がスタートの合図。

ベースとキーボードが、曲の中で幾度も繰り返されるキーフレーズを同時に奏で、一気にテンションが膨れ上がる。

最高のリズム感で打ち鳴らされる、心躍るようなドラム。

安定感抜群の、低音ながらコロコロと可愛らしくステップを踏むようなベースライン。

イントロからグツと惹きつける、明るく弾むキーボのメロディ。やべえ、こいつら、むちゃくちゃいい音出してくる。おれだって、負けないぜ。

願わくば、聞いているみんなも一緒に参加してくれよ レッツパ

ーリー！！

ステージが終わり、幕が完全に下りると、おれはへなへなとその場にへたり込んでしまった。

「大丈夫か？」

一番傍にいた悠斗が、手を差し出してくる。

「ごめん……おれ、まさか、こんなことになるなんて」

たぶん、おれの顔色は真っ青になっていたと思う。

最初は良かったんだ。バンド演奏に合わせて無心に歌ってただけなんだけど。

途中から目がなれて、客席の様子が見えてきて。

高校生を中心に集められた観客が、みんな、顔を輝かせて、身体を揺すって、おれ達の音に乗ってくれてるのがわかって、テンションが振り切れた。

客席には、腕を組んでしかめっ面でこっちを睨む魔王もいたけど、かななや学校の知り合いの姿も見つけて、そいつらのとびきりの笑顔がまた嬉しかった。

気分がグングン上昇していつて、いつのまにか飛び跳ねて、ステージを走り回って……やっべー、楽しすぎる〜と舞い上がりまくったせいで、なんと、2番のサビの歌詞が頭から丸つきり抜けてしまったのだ。

どうしようもなくて、以降、全て「ラララ〜」で乗り切ったとい

う力技。

……みんな、本当にいい演奏してたのに、おれのせいでぶち壊しだ。

頭を抱えるおれに、悠斗の反応は意外なものだった。

「いや、上出来だろう」

「どこが！？ そんな遠慮せず、罵^{ののし}ってくれたっていいんだぜ」

食ってかかるおれの肩に、「落ち着けて」と手を置いたのは煌。

「おれも、別に問題なかったと思うぜ。梓茶のフォローも上手かったし」

「そうだ、王子！ マジで助かった！ ありがとうな！」

おれが「ラララ」しか言えなくなったと悟るや、コーラス用のマイクを通して王子が「皆さんも一緒に！」と客席に声をかけてくれたのだ。

おかげで、観客もそーゆーノリだと思って一緒に歌ってくれていたフシはあった。覚えやすいキャッチーなメロディだったし。

王子はゆるゆると首を横に振ると、にっこりと微笑む。

「和希ちゃんも、パニックを表には出さずに楽しそうに歌っていたからね。そもそも楽曲のコンセプトが『皆で楽しむ』だったし、お客さんも参加できる形になって、怪我の功名^{こうめい}だったんじゃないかと思うよ？」

「……本当に？」

とても信じられなくて、三人の顔を見回すと、全員が自信たっぷりにほっきりとうなずいた。

うっ、マジで大丈夫だろうか……怖ええよおお。

23・奪われた

そして、運命の結果発表。

「優勝は エントリーナンバー4、私立真海学園『Der Lu
xustod』」

…… 負けた。

目の前が真っ暗になったような気がした。

ああ、やっぱり、ダメだったんだ…… バカバカおれの大バカ者。
もう、悔やんでも悔やみきれない。

都大会ごときで、まさかのゲームオーバー。

短いおれの人生よ、さようなら。

そつだ、消えるとしたら姉貴も一緒なんだな、ごめんな、ふがいない弟で。

さも当然といったように、表情を変えずにステージ前方へと出て行く魔王たちの姿をみながら、絶望にのまれかけていたところ、次のアナウンス。

「また、惜しくも優勝には届きませんでした。今後の成長に期待するバンドとして、エントリーナンバー7、私立美楠学園『COLORFUL』には審査員奨励賞が贈られます。以上の2校は、関東大会のステージでもがんばってください。」

ベタだー！！

くそつ、このあまりにベタ過ぎる展開につっかり気付かなかった

自分が悔しい！！

客席では、動揺するおれを姉貴があらさまにm9（ハハ）プギヤーと嘲笑あざわらっているのが見えて、ますます凹んだ。

あーもー！ どーせバカだよ、この野郎！

帰りの準備をするといっても、ボーカルとドラムは楽ちんだ。

「玄関で待つてるぜ」

何かと持ち運ぶ機材の多い二人に声を掛けて、煌と一足先に楽屋を出た。

「にしても、おまえって、度胸あるよなあ」

並んで廊下を歩く道すがら、感心したようにそう言われて、おれは危うく転びかける。

「なんだよ、イヤミ？ いや、叱責は甘んじて受けるけどな」

恨みがましく見上げると、「そんなんじゃないくて」と苦笑する煌。

「本心から。歌詞は飛んだけど、それって、ステージに夢中になりすぎてって感じだっただろ？ 初めての大会で、そこまで楽しめる奴もそうそういないって」

「それは……おまえらが、あまりにもいい音出すからさ。勝手に体がガーンと熱もって、抑えきれなくなっただんだよ」

あまりにも短絡的かつ衝動的なこの行動パターンは、自分で分析

してみても少々情けない。

案の定、煌の口からはプツと息が漏れた。

「おまえって……マジで、単純だな」

「そーだよ、どーせ単細胞の熱血バカ。それはもう、よーっく身に染みだから!」

ふてくされ気味に言い捨てるおれに、ハハハツと愉快そうに身を揺すってから、煌は言った。

「俺はおまえのそーゆーところ、好きだぜ」

「ああ、ハイハイ、ありがとな。……けどさ、魔王との勝負を考えると……」

途端に、煌の表情もさつと曇る。

優勝と、審査員奨励賞。どっちが上かと問われれば、敗北を認めざるを得ないだろう。

あんたん暗澹とした気分で自動扉をくぐって会場の外へでたおれ達は、ギリと足を止めた。

なんとというタイミング。

入り口付近に、えらくど派手な集団が溜まっていたのだ。

そう、今もつとも遭遇したくなかった相手……真海学園の魔王軍団。

赤い頭に極彩色ごくさいしきの奇抜な衣装をまとったロンを筆頭に、ゴスロリワンピースに身を包み蜘蛛柄くもものパラソルを差した青鈍色あおにひいろの髪の少女、ショッピンピンクのサテン地のシャツにヘソ出し、ショートパンツにガーターベルトというパーマヘアの男など、私服になったこいつらはステージ衣装よりむしろ目立ってやりたい放題。

そんなければいい連中の中でも、全身黒一色のコーデイナー

の魔王が一際圧倒的な存在感を放っているのは、その外人モデルのような長身と絶世の美貌のためだけでもなさそうだった。

「おーっと、負け組さん達じゃありませんか」

こっちの姿を見つけたロンが、嫌な笑いを張り付かせながら、近寄ってきた。

緊迫して全身を強張らせるおれ達。

「『決着をつけるなら音楽で』つってたけど、この結果には、こういうアクションとってくれるのかなあ？ とりあえず、ジャンピング土下座でもいっとく、煌ちゃん？」

ロンのいたぶる様な台詞に、煌はグツと拳を握り締めていたが、やがてふーっと息をもらした。

覚悟を決めた瞳。

「負けは負けだからな」とドサリと鞆かばんを投げ出し、ひざを突くような気配を見せたので、おれは焦ってその腕をつかんで制止する。

「待て！ 煌は完璧だった！ 負けたのは、おれのせいだ。土下座でもなんでもおれがするから、それで勘弁してくれ！」

「和希、おまえ何言って」

「うるせえ！ 煌も悠斗も王子も、プロ顔負けの最高の演奏してたんだ。減点対象になるのは、どう考えたって歌詞忘れたボーカルだろ。足引っ張ったのは、おれだ。おれが責任取る！」

断固として宣言して、進み出た。

「ほづ……おもしろい」

口元に笑みを浮かべながら、ゆらり、と前に歩み寄ってくる魔王。長身の煌や悠斗よりも更に高い位置にある艶麗な面立ち、その中でもとりわけ印象的な切れ長の瞳が、強い光を宿して、こちらを見下ろした。

その威圧感に、ゾクリ、と背筋が震えたが、気力だけは負けじとにらみ返してやった。

「旺真！ 和希に近づくんじゃねえ……畜生、離せ、てめーら！」

煌が、ニヤニヤと成り行きに注目するロンともう一人の男メンバーに羽交い絞めにされて身動きできなくなってるのが視界の隅っこに映ったが、おれは目の前の魔王と対峙^{たいじ}するだけでせいっぱいだ。ちよつと気を抜けば、ひざが崩れ落ちそうだった。

それにしてもなんだろう、かすかに妙な香りのようなものが鼻について、くらくらする。不快なものではなく、どっちかというといい匂いなんだけど……？

不意に、魔王の手が、伸びてくる。

殴られる！

とっさに目をつむったおれは、次の瞬間、顎^{あご}をクイッとつかまれ唇を、塞がれていた。

。
。
。

コノ クチノナカ ヲ ウゴメクモノ ハ ナンダ？

ブブーッ、ハンベツ不能。

思考回路、カンゼン停止。

人間離れた美しい顔が、満足そうな微笑を漏らしながらゆつくりと離れていくのを、おれは、ただ呆然と見ていた。

「……フン、いかにも稚拙ちせつであるのに、不思議と昂たかぶる。勝利の証、確かに受け取った」

それだけ言って、悠然と立ち去っていく。

自分のひざの力が抜けて、その場にへたり込んだ、気がした。

「ざけんな、ぶつ殺してやる！」

激怒した煌が声を半分かすれさせながら吠え、両腕に絡まっていたロンたちを力任せに振りほどくのも、そこで到着した悠斗と王子が、魔王に殴りかかろうとする煌を慌ててまた押さえつけるのも、まるで別世界の映像をみるようで。

「離せ！ あいつ、絶対許さねえ！」

「落ち着け、何があつたかは知らないが、こんな場所で暴れるな」

「問題を起こして出場停止にでもなったら、一番困るのは誰だかわかつてる！？」

いさめられた煌が、悔しそうに大きく顔を歪めるのまでは覚えていたが。

そこで、おれの意識は、ぷつりと途絶えた。

23 奪われた

(後書き)

アーメン(ちーん)

24・もう一つの可能性

目覚めたのは、医務室だった。

すぐ近くで椅子に腰かけていたらしい悠斗と王子が、のぞき込むようにして尋ねてくる。

「大丈夫か？ 和希」

「ごめんね、寝ている女の子の顔を見ているなんてマナー違反かとも思ったんだけど、心配で。気分はどう？」

気分はむろん、最悪だ。

「悪い、ちよつと貧血。別に体を壊したとかじゃねーから、心配すんな」

とにかく怠かったが、いつまでもここに寝ているわけにもいかなidろう。

起き上がりながら部屋を見回すと、少し離れたところに座る芽生と、入り口付近で壁にもたれて立っている煌の姿もあった。

煌は、おれと目が合つと、痛みをこらえるような複雑な表情になり、そのまま黙って部屋を出て行った。

「何があつた？ 金城に尋ねても、言葉を濁すだけだった」

悠斗に聞かれたが、おれも、とても説明する気にはなれない。

ギュツと掛布かけふのシーツを握りしめていたところ、芽生のはつきりした声が響いた。

「お姉ちゃん、真海学園の人にいきなりキスされちゃったんです」

くくくくしっかり見てたのかよ！ てか思い出させるな、クソ姉貴！

改めて、全身が栗立った。

ぐああああああ、おぞましい！

「……黒川……とかいったか」

低く唸り、拳を握って立ち上がった悠斗の全身には、なにやらメラメラと赤いオーラがたぎっていた。

「繰り返すけど、暴力沙汰はまずい」

その腕をグッと引き留めた王子も、凍りつきそうな冷気をまとって見えるのは気のせいか。

「僕だって、はらわた煮えくり返ってるよ？」

気のせいじゃなかった。てか目だけ冷たく光らせて薄笑い浮かべるとか、怖すぎなんだけど！
しかし。

「そうか……倒れてしまうくらい、ショックだったんだね」

おれに視線を向けた王子は、またいつもの穏やかな王子に戻っていた。気遣わしげな、慈しむような眼差し。

こいつらからしたら、ヒロイン、めっちゃ純情少女に見えるんだろっな。

おれの受けたはかりしれないダメージなど、想像できるはずもない……。

「悪いんだけど、しばらく一人にしてくれ」

視線をそらし、不愛想にそう言い捨てると、男どもは素直に立ち去っていった。

部屋に残ったのは、おれと芽生。

「まあ、そこまで落ち込むことでもないんじゃない？」

ポリポリ、と頬をかきながらそんなことを言いやがる姉貴。

「ほら、しょせん、たかがキスだし」

……そう、だよな。

うん、たかが、キス。

「これがファーストキスだったりしたら悲惨だけど」

「……！！」

グサツ。

「初めての相手が男で、しかもディーブだとなると、さすがのあたしでも同情を禁じえないわね」

「……！！」

ザクツブシュツ。

言葉のナイフでMPに痛恨の一撃を食らいまくり、瀕死状態のお

れに、姉貴は一転キラキラと顔を輝かせ。

「で、レモンの味はした？ Mr・不幸（はあと）」

「わかってて言ってるやがったなこのクソ姉貴！！」

半泣きでつかみかかったおれを、鬼畜姉はどうどう、となだめる。
おれは馬かよ！

「旺真くんはすごいテクニシャンって設定だけど、キスも上手だった？」

「っっっ知るか！」

「ふふふ、言葉に詰まったわね！ あんたってほんと、嘘つけないんだから。実は感じちゃったんでしょ？」

「うるさいうるさいうるさあああああい」

おれはあらん限りの大声でわめくと、布団を頭からかぶった。

……そうなのだ。

心の底からものすごおおおおく嫌悪感を覚えながらも、なぜか！果てしなく理解しがたいことに！

……ほんのちょびつとだけ気持ち良かったりしたものだから、それが何よりのショックで、自我崩壊寸前なのだ。

ああ、おれってば変態だったわけ！？

いや、でも、マジでありえん！ 勘弁してくれ！ という気持ちも嘘ではなく……

「ま、あんたじゃなく、ヒロインの体が反応してるのかも」

……なんかちょっとエロい（汗）

「いいじゃない、せつかくの機会なんだしwwどんん女としての快感も味わっちゃえばwwww」

「キモいこと言うなー！」

ゾーツと全身を突き抜ける悪寒の嵐に身をすくませながら、おれは、意識を改めた。

忘れちゃダメだ、この世界は異常なのだ。

バンドが意外と楽しくて、口説き文句にもちよつとずつだが免疫がついてきて、どうせ逃れられないならと最近微妙にこの生活を満喫していた節があつたが、あまりにもものんき過ぎた。

一刻も早くここから脱出しなければ、「おれ」という存在が危うい気がする。

……とはいえ、どうしたらいいのか見当もつかないのだが……。

「この世界から抜け出したい？」

おれの心を読んだように、姉貴が囁きかける。

「たりめーだろ」

「じゃあ、バンドに励む以上に、確実に全キャラと親しくなることね。都大会を乗り越えたことで、また大幅に親密度も上がったし、イベントも増えてくる。」

今後、彼らからの誘いは断らない、あからさまに冷たくふるまわない。もし至高EDを達成できなかった場合　ゲームオーバー以外にももう一つ、考えられる可能性があるの」

淡々と説明する姉貴に、おれは布団から少しだけ顔を出し、ごくりとのを鳴らした。

「それは……？」
「無限ループ」

24・もう一つの可能性（後書き）

ご愛顧に感謝して、ウェブ拍手をちょっと工事しました。自己満足乙。

それから、もいっちょ短編投下。

「4歳児の《日常》を切り取ったらこうなりました。」

<http://ncode.syosetu.com/n3159u/>

25・都大会終了

「……………！」

地獄行きを宣告されたような衝撃だった。

「『ときメロ』は全キャラ制覇の至高エンディング以外のエンディングを迎えた後、『セーブしますか？』ってテロップが流れるのね。で、セーブするしないにかかわらず、その後しばらく放っておくと、またオーブニングが始まるのよ。もし、今回もそのケースが当てはまるとすれば――」

「完全にクリアするまで、何度でも同じ時間やシチュエーションを繰り返し、体験する羽目になる……？」

「冗談じゃねえ。果てしない時空の輪をぐるぐるとまわり続けるなんて、気が狂いそうだ。」

「必ずしも同じとは、限らないけどね。今だって、あんたが体験してる世界は、あたしが知ってる『ときメロ』とは結構ずれてきてるの」

「ずれてきてる……？」

「そう。登場キャラは同じだし、基本設定や重要なイベントはたぶんそう変わってないと思うんだけど、例えば旺真くんとトイレで遭遇したり、今日のアナタがぶっ倒れて彼らに介抱されたり……なんてのは、ゲームの時にはなかったシナリオ。普段あなたと彼らが交わす言葉なんかも、ゲーム『ときメロ』にはない台詞ばかりよ。」

キャラもこの世界で怒ったり笑ったり悩んだりしながら『生きてる』わけで、それに絡むヒロインもテンプレの女の子じゃなくて『羽鳥和希』って人格を有する、しかも特異な状況におかれた個なわ

けだから、別の物語が生まれていくのは当然なのかもしれないわ」

……難しい話になってきたぞ。

「正直、あたしも自信たっぷりこの方法でいけば大丈夫、って言い切ることはできないの。この先どういう風に世界が展開していくか、把握できているわけじゃないんだもの。もちろん、基盤となる攻略知識は汎用性はんようせいがあるとは思うけど」

「……よくわかんねーけど、バンドをしつつ、男どもに言い寄られまくるという構造は変わってないんだよな？」

「ええ。そこだけは揺るぎようがないわね。つまり、無限ループに陥ると、延々彼らに迫られる日々が続くってこと」

「それはいやだ！ 拷問以外の何物でもねえ！ でもおれがあいつらを口説くなんてのも出来そうな気がしねえ……！」

悶絶し、頭を抱えるおれ。

一方、姉貴は「まー、そう悲観しなさんな」と一転、能天気な口調でたしなめた。

「あからさまに拒絶しなきゃ大丈夫な気がするわ。今までのところそうとう順調に仲良くなってるみたいだし……あんたはたぶん、天然の乙女ゲーマスターだから」

「悪い、最後の方、よく聞こえなかったんだけど？」

「あゝ気にしないで。とにかく、変に攻略とかは意識せず、バッドエンドだけは避けるように行動すること。あとは、これまで以上に真剣にステータスUPに励むこと。OK？」

ピツと人差し指を向けられて、おれは、重々しく頷いた。

ここから脱出する最短のルートがそれ以外ないなら、やってやるしかねえよな……。

あ、でも全員と親しくつてつまり、魔王との接近も避けられない
ってことか？

……やっぱやだああああああ！

その日は、行きは電車だったのだが、帰りは悠斗も一緒に王子が
車で送ってくれた。

おれが「もう忘れたいからあの話は蒸し返すな」と伝え、努めて
普段どおりにふるまったせいか、二人もそれに合わせてくれた。

煌はすでに荷物ごと会場を去っていて、自宅へ帰ってきたのも、
深夜になってからだった。

大会でへとへとながらも期末試験に向けて『勉強』ステータスの
増強に励んでいたおれは、午前2時過ぎのその時間でもまだ起きて
いて（夜更かしは『美容』が下がるから諸刃の剣らしいけど）、た
またトイレに行こうと玄関前にいた時だった。

「おかえり」

ガチャリと鍵を開けて中に入ってきた煌は、出迎えるおれを見て
ギクリと全身を硬直させてから、うつむいたまま靴を脱ぎ、無言で
2階へ上がろうとする。

なんか、無性にムカついた。

「無視すんじゃないよ！　なんでおまえがそんないかにも傷ついた
って顔してんだよ！」

おれの一喝に、煌の背中が立ち止まった。それでも、振り向こう
とはしない。

「おれはもう、アレは犬に噛かまれたもんだと思って忘れることにした！ けどおまえがいつまでもそんな態度じゃ、忘れようにも忘れられねーだろ！」

「……………」

背を向けたまま、ただその両の拳が握りしめられたのがわかった。

「目の前で何もできなかった、そういう男のプライドみたいなヤツがあるのはわかるけど、当事者はおれなんだよ！ おまえまで被害者ぶってんじゃねえよ、情けねえ！」

『ゲームオーバーであぼーんしなくなったら、メインキャラに嫌われるような言動は慎むのよ！？』

芽生の忠告が脳裏に蘇ったけど、感情を抑えられなかった。

いつも潑刺はつらつとして、屈託なくて、飄々ひょうひょうとなんでもこなして。

2次元キャラってわかってても、こういう男になれたらいいよな
って憧れみたいな気持ちがあった。

だから。

「おまえのそんな女々しい面つら、いつまでも見ていたくねーんだよ…

…」

「……………」

「そもそも責任取るって前に出たのはおれだし、おまえはどーしよ
ーもなかっただろ？」

どうしても自分が許せねえっつーなら、明日、おれのために超豪華な夕食作れ。それで全部キャラにしてやる！」

有無を言わせない命令口調で言い渡しても、しばらく煌は無言だ

った。

怒らせたか……？

大声を出したせい次第に冷静が戻ってきて、言い過ぎたかも、と内心ビクビクしながらも、早く何か言ってほしくて、また横柄おうへいに付け加えた。

「関東大会進出のお祝いだ！ 文句あつか？」

ふーっと大きなため息を漏らし、煌が振り返った。

「……ケーキも焼くか？」

ちよつと疲れたような笑顔で、そう尋ねてくる。

心底ホツとして、おれの顔はきつとめっちゃめっちゃ緩んできたと思っ。

「当然！」

25・都大会終了（後書き）

以前に拍手メッセでいただいた「天然乙女ゲームマスター」の表現が
とてもツボったので、
使わせていただきましたv

恋愛ってどこでするんでしょうね……。心？ 脳みそ？ 体？
たぶんそれぞれが影響を及ぼしあうものだと思うのですが、その割
合が人によっていろいろなのかな。

……今のところまだBLEタグを付ける予定はありません（笑）

とりあえず、これにて都大会編は終了。

メインシナリオは煌ですが、今後は他のキャラのシナリオも動き出
します。

出番を魔王に飛ばされた誰かさんも、そろそろ出てくる……はず（
笑）

2ndシーズンも、どうぞよろしくお願いします。

キャラクターファイル？

名前：羽鳥 和希

身長：158

星座：獅子座

血液型：O

年齢：15

一人称：おれ

二人称：煌。悠斗。王子。静流。魔王。

趣味：漫画。ゲーム。サッカー。カラオケ。音楽鑑賞。

花に例えるなら：タンポポ

イメージボイス：佐 利奈

（＊身長や声はヒロインバージョン。）

単純、熱血、素直な純情少年。

普段からいじめられまくりに違いはないお姉さんも、ピンチの状況では助けようとする、いい子。

お人よし度合いはテンプレのヒロインといい勝負かも。

イケメンたちのアプローチやステータスアップにひーひー言いながらも、持ち前のプラス思考と打たれ強さで2次元ライフにしっかり順応。

本人は無自覚ですが、素で男どもの心を乱す自爆系天然魔性。

次の煌からはなんと！ イラストつきです

キャラクターファイル？

名前：金城 煌

身長：181

星座：牡羊座

血液型：B

年齢：17

一人称：俺

二人称：和希。悠斗。梓茶。静流。旺真。

趣味：ドラム。料理。スポーツ全般。F1観戦。放浪。

花に例えるなら：ひまわり

イメージボイス：浪川 輔

>i28033—3393<

ひなむうさん（<http://piaapro.jp/hinamu>
u）に描いていただきました！

ありがとうございますv

まだまだ謎多きキャラクター。

一応メインシナリオという位置づけなので、出番も一番多いかと。

前向きで活動的、けっこう兄貴肌。社交的だけど、ちよつと秘密主義。

テーマは「一途」。

彼の一番の魅力は、実は料理スキルじゃないかと思ってます（笑）
専属コックちょー羨ましい！！

奔放って設定のわりに常識的な振る舞いばかりでちよつと無念。

もって色々やらかして和希を翻弄できるように仕向けたいのですがw
どのキャラにも言えますが、シリアス要素とコメディ要素、お話の

流れと乙女ゲーシナリオをどんな割合でどう不自然じゃなく融合させるのかは一つの悩みどころです。

キャラクターファイル？

名前：蒼木 悠斗

身長：182

星座：水瓶座

血液型：A

年齢：15

一人称：俺

二人称：和希。金城。北王子。静流。黒川。

趣味：ベース。剣道。天体観測。読書。微分積分。

花に例えるなら：あやめ

イメージボイス：中 悠一

>i28034—3393<

ひなむうさん(<http://piaapro.jp/hinamu>
u)に描いていただきました！

ありがとうございますv

「自分だけの和希だと思っていたのに、いきなり怒涛のように現れたイケメンたちに気がでない毎日でしょう」とのメッセをいただき、吹きました。確かに！ 不憫な子です。

煌は天才肌ですが、悠斗は努力家タイプ。

力を抜くということが苦手なので、人知れず勉強も部活も黙々淡々と真面目にとりくみます。

テーマは「幼馴染」：「ってそのまんまやん！（笑）」

先輩を呼び捨てとか、さりげに不遜ですが。

常に冷静沈着、律儀で根はいい奴だけど、態度や言葉を取り繕うことがないのでトラブルの元になることも。不器用なツンデレです。

キャラクターファイル？

名前：北王子 梓茶

身長：176

星座：魚座

血液型：O

年齢：16

一人称：僕

二人称：和希ちゃん。煌。蒼木くん。紫葉くん。魔王くん。

趣味：ピアノ。作詞作曲。芸術鑑賞。ダーツ。乗馬。薔薇の栽培。

花にたとえるなら：バラ（これしかない）

イメージボイス：岸尾だすけ

>i28035—3393<

ひなむうさん（<http://piaapro.jp/hinamu>）に描いていただきました！

ありがとうございますv

とにかく器量がでかくて底知れない人。

彼ならきつとかぼちゃパンツでも笑顔で履きこなして見せるに違いないw

温和で気さくな天然口説き魔。

でも誰にでも……というわけでもなく、好きになった相手に誠実。どんな気障な言動もイヤミに感じさせないのは育ちの良さの賜物。でも実はこっそりストレスも溜めていたり？

テーマはまたしてもまんまで「王子様」。

乙女ゲー的優等生で、とても描きやすい反面、ギャグ担当みたいになっってしまったても可哀想かなという気持ちも。

カッコいい部分も見せられるようにがんばりたいものですがはてさて？

残りのキャラはまた今度。2nd Phaseの合間に挿入予定です。

26・星空デート（前書き）

タイトルちょっといじりました。

26・星空デート

都大会翌日の日曜日。

おれは睡眠不足でボーツとする頭で、繁華街へ来ていた。

本当は家で勉強していたのだが、今日は特大セール日だから絶対に夏服を揃えろと姉貴の厳命を受けたのだ。

煌対策にはこの店、悠斗対策にはあの店、小物を買うならあの雑貨屋……などと渡されたメモの細かい指示を守りながら任務を遂行し、最後に本屋に入った。

読めば『勉強』ステータスが大幅に上がる、という反則のような素晴らしい参考書が売っているらしい。

「『サルでもわかる数？虎の巻』……これか」

本棚のちょっと高いところにあるそれに背伸びして手を伸ばしたら、ちょうど同じタイミングで同じ本に興味を持ったらしい誰かと指が触れあった。

すらっとした細身の長身に、理知的な容貌。眼鏡をかけていたので一瞬戸惑ったが、見知った顔だった。

愛想の欠片も無いのになぜか甘く響く低音が、耳を撃つ。

「和希……」

「悠斗じゃん。奇遇だな」

言うてから、んなわーけねーな、と気づいた。このいかにもな出会い方、どう考えても図られたイベントだ。

悠斗はうなずいてから、ひょいと参考書を抜き出し、ホラ、とそれで軽くおれの頭をたたいた。

譲ってくれるらしい。

「最後の一冊だけど、いいのか？」

「かまわない。もともと、おまえにどうかと思って手を伸ばした」

「そう、なんだ。サンキュな。……眼鏡って、珍しいな」

「今朝はコンタクトの調子が悪かったんだ」

そついや、悠斗は小学校高学年で視力が下がって眼鏡になったのだが、中学からは剣道で不便だからコンタクトに変えたのだと姉貴が言っていた。

それにしてもよく似合う。

超、頭良さそう。实际いいんだけど。

ついまじまじと眺めていたところ、悠斗の眉間に、かすかなしわが寄せられた。

「……おまえ、昨夜はちゃんと眠れたのか？ 顔色がよくないぞ」
「ああ、テスト勉強で夜更かししちゃって……ベッドに入ってから
も、嫌な夢ばつかみちゃってほとんど寝れなかったんだよ」

これは魔王のせいだ。奴に迫られる悪夢を見ては飛び起きての繰り返しだった。

悠斗は気遣わしげにちらりと瞳を揺らしたが、出た台詞は毒舌だった。

「馬鹿か。買い物なんかにくてる場合じゃないだろう。家で寝てろ」
「今日はどーしても外せなかったの！ んなことより悠斗、これから空いてる？ 帰って勉強教えてくれねーか？ 今度の期末、ヤバそうなんだよ」

両手を合わせて拝み倒すおれに、悠斗は「それはかまわないが……」と言いかけ、何かを考えるように目を細めた。

「そうだな……その前に、ちょっと俺の用事に付き合え。とりあえず、昼をその辺で食べてからだな」

悠斗が向かったのは、そのショッピングモールに併設されたプラネタリウムだった。

おれのプラネタリウム経験は小学生の時、しかもわりと小型でシヨバイ場所だった記憶があるのだが、ここは全然違う。

ゆったりとした座り心地のいいクライニング・チェアーから見上げたドーム型の天井には、信じられないほどリアルで、息をのむほど美しい星空が広がっていた。

作り物だとわかっていても、感動してしまう。

「すげえ……」

思わず、感嘆の囁きを漏らしたら、隣の席の悠斗が小さく笑ったような気がした。真っ暗で見えないんだけど、なぜか。

耳なじみのいいアナウンスとともに、幻想的な星物語が語られていく。

どこかから、優しい花の香り。

美しい満天の星の下、小さく流れるヒーリングミュージックに誘われるように、おれの意識はふわふわと漂い始めた。

「和希」

「ん？ あつ、悪い、おれ、寝てた！？」

気が付いたら、悠斗の肩にもたれかかるような態勢で。急いで身を離す。

「熟睡だ」

言いながら、悠斗がハンカチを差し出した。

「よだれ垂れてるぞ」

「ゲッ、マジ!? うっわ、恥ずかしー」

さすがに赤面してこすったら、悠斗の肩が震えた。
顔を見るともういつものお面顔だったけど、絶対笑われたよな、
今。

「せつかくいいところ連れてきてくれたのにな……」

「いや、寝かそうと思ってきたんだ。このプログラムのテーマは『癒し』だからな」

それでアロマがたかれてたりしたのか……。

「寝ぼけた頭で学習しても効率が悪いからな。1時間の睡眠でもすつきりするだろう?」

「ああ、なんつーか、上質の眠りをもらった感じ。でも、やっぱりもったいない。ちゃんと見たかった!」

「……また連れてきてやるから」

そう言うと、背を向けてさっさと出口へ向かう悠斗。おれも返事のしようがなかったから、ちょうどいいけどさ。

「おい、自分で持つからいいって」

「重いものを持ってフラフラされると、危なっかしい」

買い物の荷物を全部奪われた状態で、帰途につく。
……ま、いっか、楽し。

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

おれが黙ると、会話はなくなった。無口な奴……。

「星、好きなんだよな」

これまた姉貴情報を掘り返しつつ、話しかけてみる。

「ああ。5歳の夏、うちと羽鳥家と合同で石垣島に行ったのを覚えているか？ あの時の星空は忘れられないな……」

悠斗が話し出したとたん、脳内に、ヒロインの過去の記憶が映画のように流れ始めた。

26・星空デート（後書き）

過去の追憶は幼馴染の鉄板ですね。

27・年上の恋人？

ペンションの傍でバーベキューしながら談笑する両家の家族。
そこからちよつと離れた静かな場所で、両足を投げ出して芝生に
座り、無心に降るような満天の星空を見上げる幼い悠斗。

今よりずっと無防備であどけなくて、くりくりした目がなんとも
可愛い。

その、吸い込まれるように空に向けられていた瞳が、ふと、何か
を探すように左右を彷徨い、一か所に止まったとたん、ギョツとし
たように見開かれた。

『和希！ 何してんだよ』

5歳のヒロインが、その辺で一番高い木に登ろうとしていた。（
おれはヒロインのはずなのに、他者視点なのはゲーム的ご都合
主義ってやつだろう。）

『悠ちゃんに、お星さまとってあげるの！』

『バカ！ とろいくせに何やってんだよ！ あぶないから早くおり
ろ！』

『だいじょうぶ……だって、おじさんのベースをきいてるとき以外
で、そんなに何かにむちゅうになつて悠ちゃん、初めてだもん。
大好きなんですよ？ お星さま』

そういうヒロインの声は、震えている。まだそれほどの高度では
ないが、高いところは得意ではないらしい。

『ケガするぞ！ 早くおりてこい！』

『へいきだって ！！』

不意に、ヒロインが足をかけた枝が嫌な音を立て、小さな体が落下する。

『!!!』

『うつ……!!』

幸い、ヒロインは無傷だったらしい　とつさに飛び込んだ悠斗が下敷きになったおかげで。

大きく顔を歪めて、声もなく痛みに震える幼い悠斗の姿を見て、ヒロインは蒼白になり、慌てて大人たちを呼びに行った。

『悠斗、大丈夫か!?!』

『肋骨が折れてるかもしれない。救急車を!』

……………。

「和希、どうした?」

うつむいてしまったおれに、現在の15歳の悠斗が怪訝そくに首を傾げた。

「その旅行でおまえに大怪我させたこと思い出して……まさかそんな昔から迷惑かけまくってるとは……」

自分のことではないとはいえ、面目なくて、深々とため息をついてしまったおれに、悠斗は肩をすくめる。

「何を今更。それに、あれもそう嫌な思い出でも」

そこで、おもむろにバツが悪そうに口ごもる悠斗。

「なんで？ 肋骨折るくらいの大怪我だろ？」

「……覚えていないなら、それでいい」

仏頂面で先に行ってしまう。

「おい、待てよ……」

後を追いかけたが、ふと、何かの予感がして、視線を横に流した。

その時通りかかっていたのは、ちょっとした休憩スペースとして
屋内に設置された噴水広場。

若い女性達やカップル、家族連れなど様々な客で賑わうその場所
の向こう側に、これまた、知り合いの姿があった。

ライトブラウンの髪、甘さと気品の漂う美青年……間違いなく、
王子だ。

隣に、すげースタイルのいい、大人の女って感じの美女を連れて
いた。

このモールの名物にもなっている噴水はイルミネーションにより
刻一刻と鮮やかに色彩を変化させているが、それを眺めることもせ
ず、お互い喋るのに夢中になっているように見えた。

その近い距離感は、まるで恋人同士のようにうだ。

ああ、こーゆーのって、姉とか従姉いとこなんだよなあ……。

と苦笑した瞬間、美女が王子のネクタイをグイッとつかみ、王子
が前屈みになる。まえかが

二人の唇が重なった。

うおおおおお！？

美女からの強引なキスに見えたが、王子のほうも、拒む気配はない。
い。

人目をはばからない情熱的なキスだ。

「和希？」

悠斗が振り返る。

「い、今行く！」

見てはいけないものを見てしまった気がして（てか冷静に考えれば見なければいけないものなんだろうけど）、おれはあたふたとその場を立ち去ったのだった。

その後、悠斗の家で約束通り勉強を教えてもらった。

要点を押さえて非常にわかりやすい上、辛抱強く丁寧しんぽうに指導してくれたおかげで、なんだかずいぶん頭が良くなったような気がする。

夕方までみっちりやってから帰宅すると、エプロンを外しながら煌が出迎えた。

「おかえり。ちょうど夕飯、できたところだぜ」

関東大会進出のお祝い、ということでは煌が本気を出した夕食は、計10品が皿に並ぶビュッフェ形式だったが、どれもキラキラ光って見えるほど見目麗しく、一口食べると天にも上る心地がするほど美味かった。

特に牛肉の赤ワイン煮の、口に入れた瞬間ほろほろと崩れ、同時にぶわーっと肉汁が広がっていく感動たるやもう……筆舌に尽くし難いとはこのことだ。

ふと我が家のエンゲル係数が心配になったが、月頭に親の仕送りの中から一定額しか渡してないはずだった。やりくり上手にもほどがある。ビバ2次元。

「ご馳走様！ もー、最高だった。煌様天才！」

「ケーキもあるけど、さすがに明日にしとくか？」

「ん〜……食べる！」

迷ったが、煌が取り出したそれがまたあまりにも美味そうだったので、見た瞬間叫んでしまった。煌が吹き出す。

「なんつー顔してんだよ。おまえは犬か！」

「だってだって、マジ美味そうなんだもん。くれ！ 早く食べたい！」

おれのがつつく姿にカラカラ笑いながら、煌はおれ達の前に綺麗にデコレーションされたケーキを切り分けてくれた。

「ああ……今なら死ねる」

隣の芽生の言葉も、あながち大げさでもない。

「幸せすぎ……」

陶然とケーキを食^はんでいたら、「そんなに美味しいか？」と煌。

「美味しいよ！ おまえも食べてみろって！」

思わずフォークをブンブン振って力説したら、煌はうなずいて、おれの手首をつかむと自分の方へ引き寄せ、そのままフォークに刺さっていたケーキをパクリと口に入れた。

「……………！」

「お、こっちにも」

絶句して固まってる、今度は顔を近づけてき…………て、うわあああああああああ！

こここいつ、あろうことがおれの頬ほおについていたらしいクリームをペロリと舐なめとりやがった…………！

「ん、美味い」

「アホかあああああ！ おまつ、信じられねえ、こーゆーのやめろ！」

「おまえが食べてみろつつったんじゃん」

「ふざけんな！ もしまたこんな真似したら即行追い出す！ 二度とすんな！」

「はいはい」

真つ赤になって怒り狂うおれに、しかし煌は悪びれた様子も見せず飄然ひょうぜんとしている。マジで叩き出してやりたい。

28・魔王の悪評

「まったく、どっちが犬だよ……！　　そっぴやさ、王子って彼女いるの？」

モールで見た光景がふと頭をよぎり、尋ねてみた。
煌は少し不思議そうに首を傾けながら、「いいや」と否定する。

「去年はいたって聞いたけど、今はフリーなはずだぜ」

「去年はいたんだ！　いいな……ってそうじゃなかった。じゃ、実はあいつ、すっげー遊び人だったりする？」

「んなこたあない。梓茶は確かに色んな女にいい顔するけど、それは筋金入りのフェミニストだからで、だからこそ不実で女を泣かせるようなことは絶対しない」

淡々と語りつつ、おれの内心を探るような瞳で見つめてくるから、またちよつと居心地が悪くなってくる。

「女たらしつつたら、黒川旺真だな。おまえ、もうあいつには絶対近付くな」

はき捨てるように飛び出したその名に、おれはギクリと身を強張らせた。

できるならおれも近付きたくないけど、クリアするためにはそういうわけにもいかない。となると、情報収集も必要になってくるわけ……。

「あいつ、そんなひどいんだ？」

「最悪だ。片っ端から女を落としまくってはべらせてる。あいつの

そばに寄ると、なぜか女はおかしくなる。あいつからは『魔王フェロモン』が出てるんだ」

ま、魔王フェロモンー！？

やだ、なにそれこわい。

「そして手を出すのは早い、飽きるのも早い。さんざん放蕩の限りを尽くしていよいよ收拾がつかなくなると……あちこちに圧力かけまくって『金で解決』だ」

不機嫌に言い放つ煌。ひいゝ最低すぎる。

「そのくせ『俺は誰も愛したことなどない』とかほざく、傲慢ごうまんで身勝手なナルシストだ。とにかく関わるなよ」

おれだつて関わりたくないよ！ 心から！

けど、なるほどな。煌と魔王が陰悪なのって、その辺が原因か？魔王のあまりにひどい振る舞いに、煌が食って掛かってこじれたとか……？

んゝ、でも、煌は基本的に個人主義だ。魔王の行動を毛嫌いしても、あくまで他人事と割り切って、そこまでつつこんだ追及はしない気がする。この2カ月くらい一緒に生活してこいつを見てきた印象からすると。

あそこまで徹底的に決裂するには、もっと他の原因があったんじゃないかって思えるんだよな……。

それをきこうかと口を開きかけた途端、

「食事が不味くなるような話して悪かったな。この話はこれで終わ

りにしよう」

と打ち切られてしまい、またしても機会を逸したおれなのだった。
がくり。

週が明けて登校したおれは、ちょっとした学園の有名人になっていた。

というのも、かんなが朝一で校内新聞を掲示板に貼り付けて、各クラスにも配って回っていたから。

記事には、おれ達のステージのでっかい写真つきで、軽音甲子園都大会での活躍が報告されていた。仕事早すぎだろ。

「なんだよこの煽り文句。『美楠が誇るハイパーイケメンバンド、ここに見参！』『世紀の歌姫の光臨を、次は君もじかに体感しよう！』……って、大げさすぎるだろ！ 周りの視線が痛いんだけど！」

昼休み。

弁当をつつきつつ、校内新聞の文面をピシピシと叩くように抗議したが、かなは「こーゆーのはちょっとしたくらい誇張するもんよ？」と反省する様子もない。

「ま、私はあながち誇張とも思っていないけどね……美楠のアイドル神スリーが集結してるのは事実だし、バカちゃんもステージの上に立つと、すごいキラキラしていつもと別人みたいに見えたもん。オーラがあるというか。歌もうまい、以上に、なんていうか、胸に直球で飛び込んでくる感じで。とにかく、めっちゃカッコよかったよ。興奮した！」

「え、マ、マジ？　さんきゅ……」

慣れない賞賛の嵐についてデレデレになってしまった。仕方ねえなあ、記事のことも今回は大目にみてやろう……。

「でも見に来てたなら、声かけてくれてもよかったのに」

「開場前はバタバタしてそうだから、結果発表の後ケータイにかけたんだけど、全然通じなくてね。仕方ないから、先に帰ったのよ」

あ、そっか。ステージの前に電源オフにして、その後はあのいざこざで夜までずっとそのままにしてたんだった。

「悪い、ちょっとトラブルがあつたんだ」

おれがそう答えると、ちうーっとパツクのカフェオレをストローで吸っていたかんなのメガネがキラリと光った。

「そうそう、あんたさ、黒川旺真にキスされたらしいじゃん？」
「！」

思わず箸でつかんでいたおかずを落としてしまふ。
なんでこいつまで、んなこと知ってんだよ！？

「あそこのバンドの追っかけの子達が目撃したらしくて、すっごい騒いでたよ。ま、あの男の手の早さはファンの間でも有名っぽいから、皆またただの気まぐれだろうとは言ってたけど、悔しがってたわ」

「……そう、なんだ」

追っかけ、か。また女の嫉妬に巻き込まれるのは心底かんべんし

てほしい。王子様親衛隊の方は、あれ以来さっぱり出番も接触もないけど。

「けどバカちゃん、気をつけなよ。黒川旺眞は銀行とか百貨店とか色々やってるあの黒川グループの御曹司であると同時に、『一晩で20人の処女を落とした魔王』の異名を持つ、超危険人物なんだから」
「ぶっ」

かんなの突拍子もない台詞に、おれは口に入れてたおにぎりを嘔き出しかけた。

なんだよ、そのふざけた異名！ どーゆー状況なんだそれは！？でも、魔王の話題になったのは、チャンスなのかもしれない。

「……煌は前に魔王と同じ学校通ってたっぽいんだけど、なんかすげー仲悪くてさ。同じバンドをやってて決裂したのまでは知ってるけど、その二人の間に何があったかとかまでは……さすがにかんなでも、知らねーよな？」

駄目モトで尋ねたところ、かんなの表情にかすかな困惑が浮かんだ。

「……ちよつとは知ってる、けど、そうホイホイと広めていい話題じゃあないのよね」

「な、なんだあ？ 絶対に他言しないって誓うから、教えてくれよ。頼む！」

勝手に他人の秘密を探るのは気が引けるが、煌にはまだ謎の部分が多すぎる。追究できる時に、しておきたかった。

かんなはためらうような様子を見せていたが、真剣に頼み込むおれの姿に、「バカちゃんなら大丈夫か」と吐息を漏らした。

声を潜めて、ぼそぼそと語り始める。

29・二人の因縁

「一昨日、あんたが魔王と接触を持ったって知って、すぐに真海^{まかい}学園に通ってる一個上のイトコに連絡とったのよ。で、魔王のことに
ついて、だけでなく、キスの前、なんか魔王軍団と金城先輩がもめ
てたらしいってのも小耳にはさんでたから、そこになんか因縁ある
のかってのも聞いてみたのね」

すごい好奇心と行動力だ……とこっそり感心していたおれだったが、かんなの次の言葉には、度肝を抜かれた。

「なんでも、魔王の父親と、金城先輩の母親、不倫してたんですっ
て」

なんか急に昼ドラ始まったぞオイ！

「金城先輩の父親はついぶん前に亡くなったらしいんだけど、魔王
にはちゃんと父親も母親も存命してるのよ。」

魔王も金城先輩も、親たちのそんな関係は全然知らないで一緒に
バンドをやっていたんだけど、ある日、魔王とバンドのメンバーの
もう一人が、二人の親と一緒に夜の街にるところを目撃したらし
くて……結果、金城先輩はバンドを脱退」

かんなの話を聞きながら、おれは情報を整理しようと努めた。
えーと、煌は確か、ヒロインの父親の親友の息子っつー話だった
よな。その親友って、不倫してた母親？ それとも死んだ父親？
どっちにしろ、煌はついぶん複雑な境遇もちみたいだが……。

「ってことは、もしや時期はずれの転校は……それが学校中に広ま

って居辛くなつたから、とか？」

「ううん、それはないみたい。バンドを脱退したのは去年の夏頃だ
って話だし、バンド内では相当もめたみたいだけど、その事実が学
校にまで広がったってことはなかったみたいよ」

「じゃあ、おまえのイトコはなんでそんな事情通なわけ？」

「もしや、イトコも報道部？ と心の中でつつこんだのだが、かん
なは何故かちよつと顔をしかめ、こう答えた。

「実はその真海のバンドのメンバーなのよ、うちのイトコも」

「……そのメンバーってもしかして」

「ギター弾いてた、道家どっけロン」

ド派手な赤い頭をした、壊れ系のニヤニヤ笑いが脳裏に蘇る。

「親戚とはいえ、普段は極力関わりたくない奴なんだけどね……」

と、ため息をつくかな。

一方おれは、とりあえず、まさかとは思いつつ奴が攻略キャラで
はないことがはっきりと判明して、その点には心の底から安堵した
のだった。

よかった。本当に、よかった。

「和希。今日は向こうに出るから」

放課後。ホームルームが終わり、竹刀を軽く掲げる悠斗に、おれ
は大きくうなずいた。

「ああ、おまえ、先週も先々週もずっとバンドに付き合ってくれたもんな。ゴメンな……大丈夫か？」

「謝る必要はない。やると引き受けたからには、中途半端は嫌だっただけだ」

きつぱりと答えて、去っていく。男前。

軽音部の扉を開くと、一番乗りだった。いつも通り、からだをほぐすストレッチから始める。

歌うのにどうしてストレッチ？ と最初は疑問に思ったのだが、歌が上手くなるには、『歌うためのからだ』を作ることが必要なのだという。そのからだ作りこそがボイストレーニングであり、ストレッチはその大切な準備運動、というわけだ。

首を左右、前後に倒し、くると回転。これを5回。

首の横の筋肉をもみほぐした後、顔面マッサージ。

そして、開脚。からだを前に倒す。始めたばかりの頃よりは多少、柔らかくなってきた気がする……などと思っていたら。

「うひゃひゃう!？」

いきなり首の後ろに冷たい何かを当てられて、おれは弾かれたように身を起こした。

「早いね、和希ちゃん」

振り返ると、缶ジュースを手にした王子が楽しげに瞳をきらめかしていた。

「何すんだよ！ 心臓止まるかと思ったぞ!？」

「ごめんごめん。暑くなってきたし、水分補給はちゃんとしようね。終わったらこれ、飲んで」

確かに、のどはちょうどカラカラだった。くっ、もう少し抗議してやりたい……が、差し入れは正直ありがたい。

「~~~~さんきゅ！」

しばしの逡巡しゅんじゆんの後、複雑な表情で受け取ったおれに、王子はクスクスと肩を揺らした。

「手伝おうか？ ストレッチ」

「やだ。おまえ、すぐ痛いことすんだもん」

この男、爽やかな顔してさり気に少しSだと思う。それを指摘してやったら、王子は驚いたように瞬きしてみせた。

「そうかい？ うーん……確かに、和希ちゃんに対してはそういう面もあるかもね。ごめん。だけど、君の反応がいつもあんまりにも可愛いものだから、つい」

につこりと微笑みながら、相変わらずとんでもないことを告白してくる。ったく、この男は！

「んなこといって、見たぞ？ 昨日、年上美人とデートしてるとこ。彼女いるなら他の女にまでいい顔すんじゃないよ」

ズバリと言ってやったら、王子の顔色がさっと青ざめた。

「和希ちゃん……誤解だよ」

「言い訳無用。キスまでしてて、ただの友達なんかのわけねーだろ！」

怒るような口調になってしまったのは、誤魔化しがキライだから。煌はこいつのこと不実な奴じゃないとか言ってたが、あの時、王子だって、しっかりキスに応えていた。にもかかわらずヒロインにまで手を出そうなんて、やっぱ節操なしじゃん！？

魔王に与えられた屈辱がよみがえり、王子にだぶって見えたのかもしれない。

冷たい目で睨みつけてやると、王子はハッと息をのみ、うつむいた。

……そんな傷ついたような顔したって、知るものか。

30・おまえはもう惚れている……？

「……どうした？」

新たに入ってきた煌が、その場の不穏な空気を察したのか、微妙な顔をした。

「なんでもねー。悠斗は今日は剣道だから、ミーティング始めようぜ」

王子はこちらを見て、一回、何か言いたげに口を開きかけたが、おれが素知らぬ顔で「次の関東大会でやる曲はどうする？」と話を振ると、少しだけぎこちのない笑みを浮かべた。

「……関東大会は、8月下旬のステージ発表のみ。演奏曲を今焦って決める必要はないと思うんだ。その前に、もっと色々な曲に挑戦してみて、バンドとしての実力や幅を広げるのはどうだろう？」

「……賛成」

怪訝けげんそうにおれ達を見やっていた煌だが、とりあえずそつとしておくことに決めたらしい。王子に同意を示して、言葉を継ぐ。

「なにより、ステージに立つ経験をもっと積んだ方がいい。関東前に、ライブハウスでできるだけライブやろうぜ」
「いいな、それ！」

舞台慣れしてないのが、都大会のおれの敗因だった。経験を重ねれば、舞い上がることもなくなるだろう。

「やろうぜ、ライブ！」

「俺がバイトしてるライブハウスなら、わりと規模もでかいし、いい予行演習になると思う」

「へえ、おまえ、ライブハウスでバイトしてたんだ？」

「ああ。オーナーは気さくな人だし、ときどきドラムも叩かせてもらえるし、いい所だぜ。設備も充実してる。ただ、持ち歌がオリジナルで5曲あることと、オーディションで合格することが、ステージに立つ条件」

おおっと、条件付きかい。

王子がうなづく。

「楽曲のストックはあるよ。前練習してた3曲にあと2曲加えればいいんだから……あ、でも明日からテスト週間で部活禁止だね」

「楽譜だけ今日配って、あとはしばらく各自、個人練習だな。……和希、おまえは無理すんなよ」

テスト……と思いだし、ずーんと落ち込むおれの肩をポンポンと叩いて、苦笑する煌。

ああ、どうせおまえらは焦って勉強したりする必要ないんだろうなあ。（やっかみ）

テスト爆発しろ。賢いやつら爆発しろー！

部活後、校門前でかんなに会った。

「バカちゃん、ちょうどいいところに！ 明日から遊び自重しなきゃだし、寄り道して帰ろーよ」

この季節になると、下校時刻でもまだずいぶんと明るい。

そうそう、制服も今日から夏服になったんだ。白の半袖ブラウスに赤いリボン。ダークグレーのボックスブリーツのスカートは裾に一本ラインが入って、黒レースがチラリとのぞくように付けられているのがちょっと特徴的。

「駅前に、すつごく美味しいクレープ屋さんがきたんだって」

おお、それは行かねばなるまい！ とついていった先のクレープはなかなか美味かったが、その後でかんなが「あ、セールやってる。ちよつとみてつていい？」と入った店を見てギョツとした。

女性用下着ショップ。無理！

「この辺にCD屋ねえかな？」

「二つ先の通りにあるよ」すぐわかんと思う」

「じゃ、そっちで待つてる」

と、分かれたのが運の尽き。

迷った。（ドドーン）

やっぱこのヒロイン、絶望的方向音痴。

しかも、なんか薄暗い、怪しい雰囲気的路地に来てしまった。早く引き返さなきゃ……

「お嬢ちゃん、激カワイイね」。オレらと遊ばない？」

ホラきたー！

出ると思ってたんだよ、こーゆー奴らが！

「美楠の制服ってことは、けっこつお嬢様じゃない？」

「学校のベンキョー以外のことも、いろいろ教えてあげるよ」

「全力で断る！」

きっぱり言ってチンピラ達の囲みを抜けようとしたが、腕をつかまれ、拘束された。

「エンリヨすんなよ」

「一緒に愉しいことしようぜ？」

べろり、と唇の周りをなめ回して、いやらしい笑みを浮かべる男ども……ひいゝキモいキモいキモい！

と、チンピラ達の表情が変わった。一点の方向へ、ガンを飛ばしている。その視線の先を辿ると、逆光に佇む一つの黒い影。

おれの中に、ピアノの重低音の和音の連打と「おとうさんおとうさゝん」と泣きわめく子どもの歌詞が印象的な、シューベルトの超有名曲が響き渡る。魔王。

「ああん？ 何見てんだ……ひでぶ」

体をかしげてイチャモンつけようとしたチンピラAは、仏頂面の魔王が繰り出した拳にあっさり吹っ飛んだ。

「チ、チンピラA……！ てめえ、何しやが……あべし」

「ぐぶえゝ」

「ふぎっ」

「ギャビー！」

「ぱっびっぶっぺっぽおっ」

……まさに瞬殺。

魔王はピクリとも表情を動かさず高速の拳や蹴りで迫りくるザコどもをやすやすと屠^{ほふ}ると、フンと不遜^{ふそん}に鼻を鳴らした。息一つ乱していない。

「あ、ありがとな。助かった」

「別に貴様を助けようとしたわけではない。腹の虫が悪いところで目障りな蠅^{はえ}どもが煩^{わづら}かったから、駆除したまでのこと」

不機嫌そうに言い放つと、ギロリとこちらを一瞥^{いちへつ}した。

「気分が優れぬ。憂さ晴らしに付き合え」

「は？ いや、おれは友達ときてるし……」

「先に帰れと命じればよい」

問答無用でおれの腕をつかみ、ずんずんと勝手に歩き始める魔王。振りほどきたくても、ピクともしない。

ぎゃー！ 拉致^{らち}られるー！

助けられたはずが、余計ピンチに陥^{おち}ってる気がするんですけどー！？

31・魔王、襲来

魔王が入っていったのは、地下の高級そうなバーだった。ちょ、未成年！！

店内には、アクアリウムっていうんだっけ………たくさんの水槽が展示され、緻密ちみつに配置された色とりどりの熱帯魚やサンゴ、水草などが、青白い光に照らされて幻想的な水中世界を演出している。

「貸切だ」

魔王が告げると、オーナーらしき人物は「かしこまりました」とすつと腰を折った。（まだ早い時間だから、他の客はいなかった模様。）

奥にはちよつとしたステージとマイク。

その前の大理石のテーブルに魔王が腰を下ろすと、さつとウェイターがきてボトルを差し出した。ピンクのドンペリ………だから未成年だろおまえ！！

「和希」

鼻にかかったような艶美えんびな低音で名前を呼ばれ、あごでくいつとステージを指し示された。

「何か歌え」

「はあ！？ いきなり何言って………」

「聴いてやるから、俺のために歌えと言っている」

な、なんつー無茶苦茶な。しかもこんなオサレなバーでなにを歌えと！？

ちょっと悩んだが、運ばれてきたカラオケ機にええい！ と入力したのは、かつて社会現象も巻き起こしたというロボットアニメの有名なOPテーマ。残酷な〜で始まるアレ。

中途半端なJ-Popなんかよりは魔王の雰囲気にしっくりくる気がしたから。「使途」とか「原罪」とか好きそうだし、こいつ。生ハムをつまみながらグラスを傾ける魔王（すごく慣れてる感じがするのがどうかと思う）の前で、マイクを握る。いくぞ。

上等のスピーカーなのか、流れ出した伴奏は高音質だった。

ああ、やっぱ、ヒロインの声、いいな。

ボイトレのおかげか、音量もでてきたと思う。

とにかく歌いやすいし、テンションあがる曲なので、またいつのまにかノリノリで気持ちよく歌っていた。

最後のフレーズを叫ぶように歌いきり、魔王に視線をやると、肘（ひじ）をついて両手を前で組み、そこに口元を隠すように神妙な面持ちをしていたので、すっ転びそうになった。

「おま、そのポーズ……！」

「？ どうした」

怪訝（けげん）そうに眉をひそめる魔王。

「初めて聴いた曲だったが……悪くない。もつと歌え」

無自覚のゲンドウ！？

実はこいつ、天然キャラ！？

内心大いにツッコみつつ、次におれが入力したのは、奇抜な衣装やパフォーマンスで何かと話題の女性シンガーのヒット曲。ちよつと前に来日報道でよく流れてたのが頭に残っていたし、純粹に好き

だったから。

もうカラオケにきたと思って気ままに歌うことにした。いかにもなデートより、正直助かるし。

魔王も、聴いているのかいないのかイマイチよくわからないが、マイペースにグラスを傾けながら、視線はずっとこっちに向けられていた。

そんな感じで何曲か流していたときだった。いきなりふらつと魔王の体が傾いたと思うと、ソファに埋まるように倒れこんでしまった。

「魔王！？ バカ、飲みすぎじゃねーかと思ってたんだ……」

駆け寄ってみたが、呼吸が荒く、ただの酔っ払いではなさそうだった。ひたいに触れたら、めっちゃめっちゃ熱い。

「たわけが。酒に酔ったことなぞ一度もないわ……！」

憎憎しげに言葉を吐き出す魔王は、無理やり身体を起こしたが、ひどくしんどそうだった。

「不覚。俺ともあろうものが、ウイルス如きにここまでやられるとは……」

「『ウイルス如き』ってじゃあ、風邪か！？ 単なる……！」

重病もちとかじゃあねーんだな？ はあーっ、びびらせやがって。

「体調悪いなら家で寝てろよ」

「フン、風邪など酒を飲んでいれば治る」

「てめーはどこののんべえ親父だ！」

おれのツツコミに魔王はムツとしたように口を開きかけたが、その気力もわかないらしく、ぐったりとしていた。

「病院行くか？」

「……医者は嫌いだ」

「子どもみてーなこと言ってんじゃねえよ！」

ああ、もう、なんなんだこいつ。

それでも魔王が頑として拒むので、結局家に帰すことになった。店の前にタクシーを呼んでもらって、乗り込む。気だるげに囁かれる住所をなんとか聞き取って運転手に伝え、たどり着いたのは都心の高層マンション。

でかい身体をやつとかつと支えて運び、最上階の一つしかない玄関のインターフォン（この階全部魔王の家らしい）を押したが、応答はなかった。

「当然だ。一人で住んでるからな……」

弱りながらも尊大に呟いた魔王が出した鍵で扉を開き、なんとか寝室のベッドまで連れて行った。

あーっ、重かった！

横たわった魔王は、ハアハアと荒い息を吐き、頬を紅潮させている。玉のような汗で生え際の髪がしっとり濡れ、なんだか艶かしい。

乱れたシャツの襟元えりからのぞく、くつきりと浮かび上がった鎖骨。ってなんかおれ、妙に心臓ドキドキしてるんですけど！？

心なしか頭がボーッとなって、体も熱い。そういえば、いつのま

にかどこから、前も嗅いだようなほのかないいい香りが……ま、まさかこれが煌の言ってた『魔王フェロモン』ってやつ！？
ひいゝ勘弁してくれ！ おれはそーゆー趣味ないから！

ビシツと自分の両頬を叩いて気合を入れなおすと、氷水を洗面器に張って、探し出してきたタオルを浸して魔王のひたいに載せてやった。

苦痛にゆがんでいた口元が、心地よさげに少しだけふつと緩む。

「実家の電話番号は？ 誰か来てもらったほうがいいだろ？」

「両親は……ともに、仕事最優先だ。忙殺されて、滅多に家には戻らないし、別々に暮らす前から、俺が倒れたからといって帰ってきたことなぞ……皆無だ」

途切れ途切れに語られる内容に、一瞬言葉を失う。

設定としちゃ、よくある話だ。けど、魔王本人にとっては『設定』なんかじゃない『現実』で、『よくある』なんて割り切れるもんじやないだろう。

寂しい、よな……。

だからといって、同情の言葉をかけてもこいつが喜ばないことはわかった。から、「そっか」とだけ応えて顔をしかめて見せた。

「つたく、風邪引いてるのに遅くまでフラフラしてんじゃねーよ」

「俺も、さっさと帰るつもりで、いた……」

「じゃあなんで……」

眉をひそめたおれに、魔王は呼吸を乱しつつ「貴様のせいだ」と吐き捨てるように言う。

「貴様にさえ、会わなければ……」

「はあ！？ 人のせいにすんなよ！」

呆れてそう返すと、魔王はチツと不本意そうに舌打ちした。
こいつ、ほんと態度悪いな……とため息を漏らした時だった。
不意に、熱い掌が伸びてきて、おれの手首をつかむ。

あ、と思ったときにはベッドに引きずり込まれていた。

31・魔王、襲来（後書き）

さあ、どこまで自重しよう（笑）

32・魔王宅にて

おれの頭の左右に両ひじをつきながら両手首を押さえ、上から覆いかぶさるような体勢をとった魔王は、苦しい息を吐きつつも、煽情的な笑みを浮かべている。

ぎよえええええ。

エマーゲンシー。エマーゲンシー。緊急事態発生……！

「アホか！ おまえ、こんなことしてる場合じゃねーだろ！？」

「汗をかけば、風邪の治りは早いという……」

魔王の目は間近で見ると、翠がかった不思議な色で。その瞳でじっと見つめられた途端、また例の匂いがして、全身の力が抜けていった。

魔王の舌先が、首筋に触れる。

背筋に奔った震えに、おれはビクリと身を弾き

「ふっざ、けんなー！！！」

渾身の力をふりしぼり急所を蹴り上げてやったら、魔王は無言で悶絶した。その隙に、即脱出。

ああああああ危なかった……！

鳥肌！ マジで全身チキン肌！

「心配したおれが馬鹿だった！ そのまま朽ち果てて冥界へ帰れ！」

叫んで、部屋を飛び出す。

まったく、腹立たしい！

あんにやるー、恩を仇で返すような真似をしゃがって……！

マンションの廊下を、ドスドスと突き進んだ。

……けど。

全身の恐怖がおさまるに従って、脳裏に浮かび上がったのは、ぐったりとした魔王の弱りきった様子だった。

あいつ、本当に、具合悪そうだった。

ガランとだっぴろい、魔王の家。家具はどれも凝ってて高級そうで、でもどこか無機質で殺風景なあの場所で、たった一人でゼエゼエと苦しむあいつの姿を想像すると、なんだか胸がモヤモヤした。家族がダメなら友達とか呼ぶならいいけど、そーゆータイプとも思えない。

……があーっ、クソ！ 知ったことか！

おれはむしゃくしゃする気持ちを持て余したまま、エレベーターの降下ボタンを連打した。

「氷枕！ 買ってきてやったから使え」

戻ってきたおれを見て、魔王は虚をつかれたように小さく口を開いた。いつもむっつりと不機嫌そうないつが、こんな無防備な顔をするのもけっこう稀少価値なんじゃないだろーか。

「レトルトがゆと薬も買ってきてやったから大いに感謝しろよ！
言っておくが、今度妙な真似しやがったら本気で刺す」

おれが目を据わらせて果物ナイフを突き出すと、魔王は2、3度
瞬きしてから、掌を広げて自分の顔面を覆った。その肩が、ククク
クク……と震えだす。

「奇妙な女だ……なぜ、そこまでする。俺に惚れてるのかとも思っ
たが、そうではないらしい」

「当たり前だ！」

「当たり前ではない。俺を拒む女など、未だかつていなかった」

真顔で言うものだから、シバキ倒したくなった。落ち着けおれ、
一応こいつは病人だ……。

「ほら、おかゆ、これ食ってから薬だ」

さしだしたおかゆを素直に受け取り、咀嚼^{そしゃく}する魔王。

「味はどうだ？」

「不味い」

……ま、レトルトだしな。

その時、おれのケータイが鳴り出した。表示は、煌。

「もしもし」

『和希？』

煌が、受話器の向こうでホッとため息を漏らしたのが伝わった。
そーいや、もう21時を回ってる。今まで、こんな時間まで出か

けてたことなかったな……。

「悪い、夕食、帰ったら食べるから。ラップして置いていてくれ」

『ああ。気をつけて帰れよ……今どこだ？ 迎えに行つてやろうか？』

「あーうー……つと、その、かんなの家、だけど、勉強してるうちに遅くなったただけだから。まだ何時になるかわかんねーし、迎えはいいよ」

とつさに嘘、ついてしまった。

かんなに、煌と魔王の因縁を聞いたばかりだったから、魔王と一緒にいるなんて言えなくて。

『……………』

沈黙がなんだか気まずくて、おれは早口で言葉を継ぐ。

「大丈夫、一人でちゃんと帰れるって。もうそこまで子どもじゃねーんだから、心配すんな」

『……馬鹿。子どもじゃねーから、心配なんだろ』

少し怒ったようにそう言ってから、あんまり遅くなったらタクシー使えよと言いついて、通話は切れた。

……もしや夕食、待つてくれたんだろーか。かんなには連絡したんだけど、家にも一言言つてた方がよかったな……と反省しつつ、顔をあげると、魔王が怒りの形相でこちらを睨^{にら}んでいた。

「貴様……金城煌の女だったのか」

通話の声が漏れ聞こえたのか？ 音楽やる奴は耳がいいっていうけど、さすが魔王、地獄耳……ってうまいこと言ってる場合じゃねえ！

「だーれーが！ 失礼なことほざくな。おれは誰の女でもねえよ！ おれはおれ自身のもんだ！」

本気でムカついたので全力で怒鳴りつけてやったら、魔王の両目が意表をつかれたように見張られた。

「あいつとは訳あって、一緒に暮らしてるだけだ」

「一緒に暮らしていて、何もないわけがない」

「全人類がためーみたいにな下半身主体で生きてると思うなっ！」

ふむ……？ と魔王はいかにも不可解そうに首をひねっていたが、それ以上は何も言わなかった。まあ、また体調悪くなってきたみたいだし、もうそんな体力もないのだろう。

「ほら、食べ終わったなら薬、飲め」

「……口移しでなら飲んでやっても良い」

「いっそ息の根止めてやろうか……？」

32・魔王宅にて（後書き）

マンションのセキュリティはようになってんだとか
酒飲んだ後の薬は……とか、細かいこと（？）は気にしない。

33・嘘がばれて

その後しばらく様子を見ていたが、薬が効いてきたのかだいが落ち着いてきたらしいので、さすがに帰ることにした。

「待て……アシ代だ」

魔王が懷から取り出した万札の束に、盛大に吹いた。何センチあったソレ。

「おれは海外在住だよ！……釣りは次会えたとき返す」

一枚だけありがたく頂戴したら、魔王は不服そうに唇を尖らせたが、何も言わなかった。眠くなってきたてゐるっぽい。

「ちゃんと治るまで夜遊びは控えろよ」

「俺に意見するなど、小癪こしゃくな……」

偉そうな口調も、弱っているせいだ、妙なおかしみがあつた。思わず口元が緩んだまま、「養生ようじゆうしろよ」と声をかけ、部屋を後にした。

帰りついた自宅のリビングでは、煌がテレビを見ていた。

「ただいま。腹減った！」

「ああ。おかえり」

ソファからちらりとこちらに投げた視線を、すぐにまた液晶画面

に戻す。

なんとなく、よそよそしい……と思ったら、椅子におれの学校指定の補助バックを見つけて、一気に血の気が引いた。

「これ……!？」

「クレープ屋に忘れてたって、かんなが届けにきた」

ぐわーん。

自分の馬鹿加減に本気で泣きたくなった。

おれ、さっきこいつに、かななどいるって言っちゃったのに……。

「嘘ついてゴメン！ ちょっと、事情があつて」

回り込んで真正面から頭を下げた。

「……別に、俺にはおまえの行動の全てを知る権利なんてないけど……」

慥然とした表情でそういう煌の瞳には、なんとも言いがたいやるせなさが翳^{かげ}っていた。

……傷つけた……！

その事実が、胸をえぐり、のどが詰まる。
心配してくれてたのに。

「……ごめん」

心底自分に嫌気が差して、申し訳なさにいっぱいになって、うな

垂れていたら、煌が立ち上がるのが気配でわかった。

緊張に身を強張らせるおれの頭に手が伸びて、前髪をかき上げるように、軽く上向かされる。

「!？」

キュッキュッキュ

黒マジックで、ひたいに何か書かれた。

……………は!？

「似合うぜ」

口元に大きく弧を描きながら煌が渡した手鏡、それに映るおれのデコには、はつきりと「肉」の一字が。

「なんじゃこりゃー!」

意味不明の展開に絶叫するおれに、煌は腹を抱えて爆笑してから、
「嘘ついたバツだ」と胸を張った。

バツって……小学生のイタズラじゃねーんだから……。

「でもおまえ、嘘下手すぎ。どうせ最初からバレバレだったっつーの」

からかうような口調でそう言われて……やべ、またちょっと、泣きたくなってきた。

せっかく、フォローしてくれようとしてんのに。

だからこそ、余計。

唇をかで黙り込むおれに、煌はふと真顔になって、言った。
まっすぐこっちを見つめながら。

「俺はおまえが無事なら、それでいい」

「……………って、おまえはおれの保護者かよ！」

言葉を失って、ようやくしぼり出したのがそれだった。

「ほんとだな、兄貴かよって思う、我ながら」

明朗に笑う煌に背を向けて、2階に駆け上がった。って飯食う前に自室に戻ってどーすんだよ、おれ！　なんかパニクってるじゃん

……………！

きつと、こんなに真っ向から好意をぶつけられたのは生まれて初めてで、無性に照れくさくなったんだと思う。

あいつの視線の先にいるのは、あくまでこのゲームの「ヒロイン」で。その根底に恋愛感情があるのは間違いないのに、どうしてだろう、嫌な気持ちは生じなかった。

……………たぶん。この時あいつから感じられたのは、男とか女とかを超えた、相手の存在の全肯定だった……………から、かもしれない。

確かに「保護者」の言葉が、しつくりくるような。

そんな恋愛感情が実在するか知らないけど、この時は確かに、そんな感じがしたんだ。

それにしても、都大会が終了した途端になんだこの怒涛どとうのイベントラッシュ……と思いきや、それから一週間のテスト期間は逆にぱったりと何もなく過ぎていった。部活もないし、ひたすら勉強中心で、ときどき新曲の個人練習をしながら日々を送る。

心配していた期末の手応えは、結果がまだ出てないので不安も大きい。が、現時点のおれの實力にしてはそこそこできた方じゃないかと。

必死のがんばりの甲斐あって、追試はまぬがれた、と思う。

最後の科目が終わった7月5日火曜日の放課後。

テスト休みが明けて顔をだした久々の軽音部は……暑かった。

今日は全国各地で猛暑日だとか。

窓を開け放して扇風機を回すが、温い風が吹き付けるだけでなんともきびしい。

「年々暑くなってるよな、絶対……」

「熱中症には気をつけなきゃね。食べるかい？」

ハンカチで汗を押さえつつ、王子が塩分補給えんぶんほきゅうあめ飴を渡してくれた。

お得意のキラキラも、今日は飛んでいない。どこことなく疲れて見えるのは、さすがの王子も暑さでまいってるからか。

「コンビニでアイスでも買ってくるか」

煌の提案に、「じゃあ」と手を挙げた。

「ジャンケンで負けた奴がみんなの分の買い出しな！ はい、じゃくんけくん……」

ポン、でその場に出されたのはチヨキ、チヨキ、チヨキ、おれだけパー。

「がんばれよ、言い出しっぺ」

ちえーつとぶーたれながら炎天下の中、校門へと向かっていたところ、「和希ちゃん」と呼び止められた。後ろから駆け寄ってくるのは、王子。

「どうした？」

「今日の部活のあと、時間くれないかな？　どうしても、聞いてほしい話があるんだ」

いつになく真剣な表情で頼み込まれて、思わずたじろぐ。

「別に、いいけど」

承諾すると、王子はホッとしたように目元を緩めた。

「ありがとう。……買い出し、一緒に行こうか？」

「んにゃ、たかがアイス4人分だし。先にボーカル抜きで練習しとけよ。早くオーディション受かってライブしたいし」

きっぱり断ると、王子は少し残念そうにうなずき、戻っていった。

34・謎の美少女

容赦なく降り注ぐ熱光線。ジジジジジ……とうるさいアブラゼミの泣き声。

アスファルトの歩道にはゆらりと陽炎が浮かび、コンビニでゲットしたアイスもたちどころに溶けてしまいそうだ。

ああ、これならガリガリ君じゃなくてアイスボックスにすりゃよかった……！

学校への帰路を急ぎ、駆け足で角を曲がったとたん、向こうからきた誰かと思いつきり衝突した。

「！」

「うわっ」

ドン、とお互い路面に尻餅しつもちをつく。

「いててて……すみません、大丈夫……？」

腰を押さえながら相手に視線をやったおれは、ハッと息をのんだ。
……なんだ、この美少女……！

レイヤーの入ったセミロングヘアに、長い睫毛にふちどられた利発うすべにいろそうな大きな瞳。

暑さのためか薄い薄紅色うすべにいろに色づいた、透明感のあるみずみずしい肌。形の良い小さな鼻に、木苺きいちごのようにぷるんとした唇。

ノースリーブブラウスやシフォンのミニスカートから伸びた、すらりと長い手足。

あどけないのに、凜とした雰囲気があって、ぶっちゃけ超タイプ

だった。

「うん、平気。あなたこそ、ケガとかしなかった？」

立ち上がり、ポンポンと汚れをはたきながら、感じのいい微笑とともに紡つむがれた声は、意外にも落ち着いたアルト。どこか艶を感じさせるその美声と、童顔の容姿とのギャップに、鼓動がまた跳ね上がった。

ああ、可愛い。マジ可愛い。

って舞い上がってる場合じゃねえ！　アイスが全壊しちゃうだろ！

「大丈夫！　ごめんな、注意せず曲がっちゃって。じゃ、おれ、急いでるから」

ちよつとだけ心残りだったけど、それだけ早口でまくし立てておれはまた走り出した。

「ただいまー」

「おゝ、お疲れさん」

「お疲れ」

「暑かったでしょう？　ありがとう」

もともと開け放たれていたドアをくぐると、ちょうど演奏も一区切りついたところで、三人がそれぞれの楽器から顔をあげてねぎらってくれた。

「うつわ、ドロドロ……」

「しゃーねーだろ！　それでもダッシュで帰ってきたんだから」

「次からは自分で買いに行つてすぐに食べるべきだな」

「でも美味しいよ。ありがとう、和希ちゃん」

苦笑しつつ、みんなで半分溶けたアイスを食べた。

ふう……んまい。

シヤリシヤリとした歯ごたえと共に口に広がる冷氣に、生き返る心地がする。

「そーいやさ、悠斗、たぶんうちのクラス、もうすぐ転校生来るぞ」
「！」

パタパタと下敷きをうちわ代わりに扇あおぎながらそう言ったおれに、悠斗が少し首を傾げた。

「木鹿にでも聞いたのか？」

「いや、そんな情報はないけど。さつき道の角ですっげー美少女と衝突したんだ。あれが転校生でないわけがない！」

「……暑さでやられたか？」

悠斗の返事は氷のように冷たい。なんでだよ、少女漫画的にこのパターンはどう考えても転校生だろー？

でも、考えてみりゃこれって乙女ゲーなのに、女の子が転校してくるってのはどーゆーことだ？ あ、もしかして、ライバルキャラ？？

その後みっちり練習して、下校時刻。

「ああ、バテた〜」

「やっと期末も明けたし、どっか寄ってくか？」

「腹も減ったしな……バス停近くのお好み焼き屋は？」

煌や悠斗の誘いに、いや今日は……と口を開きかけた時。
ぐいっと腕をつかまれて、王子に引き寄せられた。

「ごめんね。今日の和希ちゃんに僕が先約済み」
「!？」

爽やかな笑顔で言い切ると、呆氣にとられたような男どもを残し、おれの手を引いたまま、ずんずんと校門へ進んでいく王子。

「おい、王子？」
「たしかにお腹も空いてきたし、何か軽くつまみながらでもかまわないかな？」
「別にいいけど……」

強引な雰囲気にとちよつとたじたりながらもうなずくと、王子はニッコリと微笑み、すでに停車されていた高級車におれをうながした。

で、気付けば瀟洒なレストランで夕景を見ながらこいつと向かい合っていたわけだが。

「おいおいおい！ 全然軽くねーだろコレ。」
メニューを開いても、舌を噛みそうな単語が並ぶばかりで、どんな料理がよくわからない。

「オススメは姫帆立ひめほたてのエスカベツシュ」
「んじゃそれで」
「あと数品、適当に頼んじやっていいかな」
「任せる」

王子がウェ이터に呪文のような言葉をペラペラと告げると、間もなくグラスが二つ運ばれてきた。中にはシュワシュワと細かい泡を立てる淡いゴールドの液体。

「君の瞳に、乾杯」

淡い笑みと共にさらりと超定番の台詞を口にし、チン、とグラスを鳴らす王子。こいつのこーゆーところはつくづくすごいと思う。

「シャンパン……？」

「ノンアルコールだから、大丈夫」

口をつけると、やたらいい香りがするソーダ水、て感じだった。ウマー。

34・謎の美少女（後書き）

28万PV&5万ユニーク達成しました。いつも本当に、ありがとうございます。

お祝いに、掌編をアップ。他愛もない話ですがよろしかったら、どうぞ。

つ『ときメロ』番外編　く和希ダイエットするの巻（<http://ncode.syosetu.com/n9094u/>）

時期は7月下旬頃。静流も本編にフライングして登場してますw

35・王子の事情（前書き）

珍しくシリアスな王子です。

35・王子の事情

「……で、話って？」

おれが振ると、王子は少し緊張したように唇を引き結んだ後、両手を机の上に組んで話し始めた。

「都大会の翌日、僕と一緒に出かけていた女性のことなんだ。彼女は、綾小路麗華さんあやのこじれいかといつて、去年、半年だけお付き合いをしていた人でね……」

「またよりを戻したってことか？」

「そうじゃない」

語尾も消えないうちに強い口調で否定されて、おれは口をつぐむ。ここは黙って聞くことにしよう……。

「もともと、両家の親たちが熱心に勧めてきた交際だったんだ。北王子家と綾小路家はビジネスの上で互いに太いパイプを欲していたから、彼らの思惑はその先を見据えた『結婚』だということは明白だった」

ふむ、政略結婚ってやつか。金持ちも大変だな……。

「僕は生涯のパートナーは自分で選びたいと断ったんだけど、うちの父は一度決めたら頑として譲らない人で、とにかく一度会ってみるとしつこくて……仕方なく、一度だけ一緒に食事をする事になった。」

実際、会話してみると魅力的な女性で、どうやら彼女の方もこちらと状況はまったく同じで、親がうるさくて辟易へきえきしていると言うん

だ。僕らは互いに共感を覚え、意気投合した」

そこで食事が運ばれてきた。

王子に促されて、おれはエスカベッシュとやらを口にする。……マリネみたいな感じ。ぷりぷりと新鮮な帆立の甘さとソースの酸味が絶妙だ。

頬をほころばせるおれを見て少し瞳を和ませてから、王子はまた続きを語り始めた。

「しばらく話が弾んだところで、麗華さんが言っただ。

『どちらかに好きな相手が見つかるまでは、付き合ってみるのも一つの手じゃないかしら？』って。付き合って、上手くいかなかったと報告すれば、うるさい親たちも諦めてくれるんじゃないか。それまでは、契約上の『恋人』になるのはどうだろう　って。

まるでゲームを思いついたかのように悪戯っぽく微笑む彼女の提案に、僕はおもしろそうだと思った」

「……なるほどな」

確かに、他に好きな人がいなくて、あんな美女に付き合おうって言われたら、そりゃ悪い気はしないだろう。

「実際付き合ってしまったえば、もう親たちも干渉してこないだろう……逆に言えば、付き合うまでは、そうとう執拗しつように食い下がることは確実だったし、他に好きな相手ができればすぐに尾を引かずに別れる、という条件も気に入った。

それで半年間『恋人』として過ごして……去年の冬に、彼女の方から好きな人ができたと報告を受けて、僕らの関係はすっぱりと終わった。……はずだったんだけど」

そこで王子ははあっと重い吐息をもらし、グラスを持ち上げた。

「終わってなかった、のか？」
「そうなんだ」

こくりと一口ジュースを含んでのどを潤してから、憂鬱^{ゆううつ}そうに王子は言葉を継いだ。

「突然、彼女から、また『恋人』になってくれないかと頼まれた。僕はお断りしたんだけど……彼女はあんなに煩わしく思っていたはずの『家』を通して、再び話をもってきたんだ。折しも綾小路との商談の真っ最中で、なんとしても向こうの機嫌を損ねたくない父の圧力はすさまじくて……さんざんに揉^もめた末、一日だけという条件である日、もう一度『恋人』に戻ったんだ」

「……………」
「デート中、請われるままに甘い言葉を囁いて、彼女に触れて、『恋人』の笑顔を浮かべながら、そんな自分に吐きそうだった。親に反抗する力もなく、『一度だけ』『一日だけ』そんな言葉で結局ずるずると家の言いなりになって……カネのために、自分にも相手にも嘘をつく」

唇を歪めて自嘲の笑みを浮かべる王子に、どんな言葉をかければいいかわからなかった。

「でも、もう絶対に、こんなことは繰り返さない。誓うよ。不条理のいいなりには、ならない」
「……そっか。わかった。おまえにも事情があったのに、責めるよなこと言つて、悪かったな」

やっとそれだけ伝えると、昏^{くら}かった王子の瞳に、ほのかな光が灯った気がした。

「よかった……」

と心から安堵あんどしたように、深々と息を吐く。

「一刻も早く誤解を解きたかったんだけど、試験期間中だから我慢してたから、本当に苦しかったよ。こんなに何をして手につかないことなんて、初めてだった」

「ハハッ、期末の結果が恐いんじゃないか？」

からかうように言ってやったら、王子はコクリとうなずいた。

「10位以内すら厳しいね」

……いつも何位なんですか？ 真顔で言うから始末悪いよなこいつ。

それからは他愛もない会話をしながら料理をつまみ、王子の表情にいつもの明るさが戻ってきた、と思った時だった。

「梓茶くんじゃないか」

でっぷりと体格のいい見知らぬおっさんが、あからさまな愛想笑いを浮かべながら近づいてきた。

「ああ、田野尻さん、お久しぶりです」

立ち上がり、如才じょうたいない笑顔で腰を折る王子。

「いやいや、座りたまえ。それにしてもまた、立派りっぺになって。君に

最後に会ったのは西園寺家のパーティーでだったかな。学校の方はどうだい？ なにか困ってることはないかい？」

「はい、素晴らしい先生方と友人に恵まれて、充実した日々を送っています……」

澱^{よど}みなく応じる王子の言葉に、おっさんは「そうかいそうかい」と表向きは親密そうに空虚な相槌^{あいづち}を打ち、ポン、と王子の肩をたたく。

35・王子の事情（後書き）

もうちょっと王子のターン続きます。

全然関係ないのですが、先日3DSの録音機能の再生ボタンを押したら、

娘の声で「王様の耳はネコの耳」 王様の耳はネコの耳」。
王様にそんな萌え属性が……！ と驚愕しました。

36・夜の遊園地

「何かあつたらいつでも頼ってくれよ。そういえば北王子グループは最近、四菱^{よっぴし}系列の株を積極的に集めているようだけど……」

「申し訳ありません。経営に関してはまだ僕はノータッチなので」

「ああ、そうだよなあ。だが、古池グループとのホテル事業における合併の際には、君の提言^{ていげん}が大きなヒントになったと……」

探りを入れるおっさんを、やんわりとあしらいつける王子。

攻防はしばし続き、長いな、とおれが思ったそのタイミングで、王子が言った。

「申し訳ありません、今日はそろそろ……」

ちらりとこちらに視線を投げると、おっさんもようやく「おお、これは失礼」と諦めたようだった。

「くれぐれも、ご両親によろしく」とくりかえしながら、席へと戻っていく。

それを微笑みとともに見送ってから、こちらに向き直り、王子は「ごめんね」と肩をすくめた。

「そろそろ出ようか」

「……王子、これから予定は？」

「予定？ 帰って今日の課題をやるくらいだけど……」

「おまえ賢いんだからそれくらいすぐ終わるよな？ じゃあ、今度はおれにちよつと付き合え」

有無を言わせない口調で立ち上がったおれに、王子は驚いたように目をきよとんとさせたが、やがて、ゆるゆると笑みを広げ、「喜

んで」と会釈した。

低速でジワジワと上昇していく高度と緊張感。

それが臨界点まで達した直後、急降下とともに全身に襲い掛かる風圧。無重力状態。

満点のスリルに自然、歓喜の叫びがあがる。

「あーっ、最高！ 特にあの観覧車の隙間くぐり抜けるとことが、めっちゃドキドキした！」

都会のと真ん中にあるこの遊園地は、入園料無料なので、ふらっと寄って好きなアトラクションだけ遊んだりできるところが便利。

「見て、途中で撮影された写真。アハハ、僕、ひどい顔だね」

出口で販売してた写真を手に破願する王子の心から楽しそうな様子に、おれは胸を撫で下ろした。

さっき、おっさんと話していた後に、王子の顔に一瞬よぎった深い翳。疲弊したようなひどく辛そうなその様子に、いつも笑顔のこいつが実はすごいストレスを抱え込んでるんじゃないかって、そんな気がしたから。

さっきのレストランからの景色で、観覧車やジェットコースターが近くにあるのが見えたので、ちょうどいいと思ったのだ。

今日は、ここで思いっきりストレス発散させてやる！

「次はあれ行こうぜ、水の中落っこちるやつ！」

「あれは、けっこうビショビショになるみたいだよ。大丈夫？」

「いいじゃん、夏なんだし。濡れるのが楽しいんだろー？」

時刻は20時を回った頃。昼の熱気はおさまって、いい感じの風が吹いていた。これなら濡れてもきつとすぐに乾くだろう。

「つと、ちよつといいか？」

先週と同じ愚^ぐは犯すまい、と家に連絡することにする。

王子は入部届けを出した時点でおれと煌の住所が同じ事に気付き、おれ達の同居を知る数少ない人間の一人だったから、気兼ねなく目の前で電話をかけた。

「……あ、煌？ ……うん、今、王子と遊園地にきてるんだけど、夕飯もし作ってくれたなら食べたいから、残してて……ひゃんっ」

妙な奇声をあげてしまったのは、王子がいきなり耳に息を吹きかけてきやがったからだ。

「お、王子！？ 何しやがる……」

不意打ちに力のぬけたおれの手からケータイを奪うと、王子は

「和希ちゃん、僕は僕が責任を持って送り届けるから、心配しないでじゃあ」

と告げ、そのまま通話を切ってしまった。

「……君が煌と一緒に住んで、その事実が、どれだけ僕の心をかき乱してるか、君は想像もつかないだろうね」

「……！？」

「今だけは、君を独り占めさせて」

切なげに見つめられながら請^こわれて、ズガン、とショックを受けた。

勢いで誘^うちまったけど……この状況、もしかして思いっきりデート！？

「じゃ、水上コースター乗ろうか。あそこでポンチョ売ってるよ」

がらりと雰囲気を変えて、まるで子どものように無邪^{むじゃ}気に相好^{さうごう}を崩^{くず}す王子。

あゝもう、深く考えないことにする！ 遊びまくるぞ！

目ぼしいアトラクションをひとしきり回り、最後に乗ったのは観覧車だった。

個室に2人きりは危険な気がしたが、こいつは魔王とは違って紳士キアラだし、そう無茶な真似^{まね}はしないだろう。

いざとなったら、鞆^{かばん}に潜^{ひそ}ませたナイフもある……て悲壮すぎて我ながら泣けてくる。よよよ。

初めて乗った夜の観覧車は、昼とは違った魅力があった。

目前に広がる宝石をちりばめたような都会の絶景に、思わず感嘆のため息が漏れる。

「すげー。綺麗だな……！」

張り付くように見ていた窓から王子の方を振り返ったが、こいつは外の景色なんて大して興味がないらしく、こっちを見て甘く微笑むだけだ。

「君の方が、ずっと綺麗だ」

……言うと思ったたよこん畜生（脱力）

「君みたいな子、初めてだよ。……幼稚舎時代から、僕は美楠に通っていてね。理事長の子どもだってことで、教師も保護者も周りもみんな、どこか僕を特別視していた。そんな大人の意識は子どもにも伝わるみたいで、クラスメートたちと親しくしても、どうしてもみんな遠巻きなところがあって、壁を感じて……」。

でも、君は初めて会ったときから、物怖ものおじせずに、自然体で接してくれて……肩書きや外見だけでない僕自身を見てくれて、すごく嬉しかったんだ」

「煌は？ 仲良さそうにみえるけど」

こいつ、基本的に他人には「さん」や「くん」付けなのに、煌だけは呼び捨てなんだよな。

王子は目元を緩めて、うなづく。

「そうだね。煌も、特別。とても稀少な……心を許すことのできる、初めての友人だった。実は最初に君に会った時、彼に似てて、驚いたんだ」

「似てる？ おれと煌が？」

それは意外な指摘で、ついつい頓狂とんきやうな声をあげてしまった。だが、王子は「うん」と、はっきりと肯定する。

「君たちは、まっとうしている空気がとても似てるよ。明るくて、まっすぐで、優しく……否応なしに他者の心の中に飛び込んでくる。でも、君と接する時間が増えるにつれ……僕にとって、君は煌とはまた全然違う存在として、輝き始めた」

「……おまえさ、他人に壁を感じてつつたけど、それ、おまえが壁をつくってる部分もあると思うぞ？」

おれの言葉に、王子は少し沈黙してから、そうかな？ と首を傾げた。

「ああ、おまえって、いつもニコニコしてとっつきやすそうだけど、周りのこと考えすぎて、あんまり感情を表に出さないとこねえか？それで逆に、人当たりいいけど何考えてるかわかんなくて、近づけない感じになってんじゃないかなあ。

でも、おれに対しては最初からわりと強引だし、好きに振る舞ったりするじゃん？ その辺が違ったんじゃないかな、今までとは」

王子は人差し指と親指で自分の顎あごに触れながらしばらく考えるような仕草を見せていたが、やがて、なぜか苦笑しながら言った。

「うん……そういう面も、たしかに、あったかも。壁を壊したかったら、自分から心を開けてことだよ。それが難しいんだけど」「おまえは気を遣いすぎるんだよ、きつと。親にもさ、もつと自己主張していいんじゃないかと思うぞ？ そこまで物分りいい振りしなくていいって」

おれは心から思ったまんまをアドバイスしたんだけど、この無責任な台詞を、おれは後にとっても後悔することになるのだった。

37・紫葉 静流（前書き）

やっと出せたー！

37・紫葉 静流

翌日の放課後。

軽音部で、練習を始めようと各自チューニングやマイクのポリウム、ドラム位置の調整などのセッティングをしていたら、トントン、とノックの音がした。

「あっ……」

思わず声をあげる。暑さ対策でもともと開け放たれていた扉のところに佇んでいたのは、昨日道でぶつかったあの美少女だったのだ。しかし前回とはガラリと雰囲気が変わり、ずいぶんとボーイッシュだった。

えりにポリウムがある黒のパーカー型ベストとタンクトップに、ハーフ丈のデザインカーゴ、足元はレザーサンダル。パーカーのダブルジップは上まできっちりしめられ、下の少し空けられた部分からのぞく赤いベルトと、フード裏のチェック柄がアクセントになってオシャレ。

髪型はラフにくしゃりと後ろで一つにまとめられて、肩には、ギターケースを抱えていた。

美少女はおれの方を見ると、目を輝かせ、にっこりと微笑む。うわ、やっぱり可愛い！

「こんにちは。オレのこと、覚えてるかな？」

その花びらのように可憐な唇からとびだした声は……記憶のそれとは、なんか違った。はつきり言つと、低くて、ちょっと男っぽい。……ん？ 『オレ』？

「昨日、道の角でぶつかった女の子、だよな……？」

なんとなく腑^ふに落ちない気持ちで確認したところ、美少女は「あははっ」と楽しげに笑い声を上げた。

「ごめん、あれは知り合いの悪ふざけでちょっと女装させられてたの。オレほんとは、正真正銘、男」

ドッカーン！ と背後で何かが爆発したような衝撃が走る。

男！？

しかし、たしかにそう思って眺めれば、今のこいつは確かにちゃんと男である。

最初のインパクトがでかすぎたが、冷静に判断すれば、女の子みtainな綺麗な顔をした、細身の今風の少年。

「でも、声は……？」

「ああ、あれは咽喉^{のど}のこの辺を締めるようにして発声したら、女っぽくなるんだ。『こんな風に』」

途中でガラリとトーンが上がり、艶っぽいアルトに変わる。すげー。両声^{じょうせい}類^{るい}ってやつ！？

「あのカツコで男の声もキモイかと思って、とつさに声作っちゃった」

「それで、いったいここになんの用だ、静流？」

悠斗の一言に、静流と呼ばれた美少女もとい美少年は、くいつと口の端を吊り上げた。ん、こいつら、知り合いか？

「お久しぶり、悠斗さん。でも用があるのはあんたにじゃなくて…

…」

美少年はお邪魔します、と一言断ってから、おれの方にツカツカと寄ってきて、何かを差し出した。

「昨日、ぶつかった時に落としてたよ」

「あ、生徒手帳」

サンキュ、と伸ばした手をつかまれて持ち上げられたと思ったら、次の瞬間には手の甲に軽く口付けられていた。

「!?!」

「ようやく会えて嬉しいよ、シンデレラ」

ギョツと目を見張るおれに、美少年はクス、と蠱惑的こわくてきな笑みを浮かべてみせる。

「なんちゃってね。オレは、中等部2年の紫葉静流しはしずる。『軽音甲子園』の都大会でセンパイのファンになって、ずっと会いにきたいと思ってたんだ」

「ファン!?!」

頓狂とんきやうな声をあげるおれに、大きくうなずく静流。

「でも、しばらく高等部は試験休みっぽかったから、お預けをくらつてて……昨日はビックリしたよ。まさか、あんな状況で憧れの人に再会するとは思わなかったから。センパイの歌を聴いた日から、ずっとセンパイの声が頭から離れないんだ。同時に、あの時の輝くような笑顔も……」

熱っぽい視線で見つめてくる静流にドギマギしていたら、

「ギター弾くのか？」

煌がドラムの椅子から下りて、近付いてきた。顎で、静流のギターケースを指す。

「うん、まあ手遊び程度にね。あ、それでね、センパイ達、よかつたら一回でいいから、オレとセッションしてくれない？」

「セッション？」

意外な申し出に、みんなして顔を見合わせてしまった。

「ん、都大会とまったく同じに演奏してくれたら、それにオレがギターで混ざるから。あの曲……『Let's Party』、すごく気に入っちゃったから、一緒に弾いてみたいんだ」

……ダメかな？ と心なしか潤んだ大きな瞳で頼み込まれて、言葉に詰まる。

何ドキドキしてんだよ、おれ！　いくら好みの顔してたって、こいつは男なんだって！

「いいんじゃない？　おもしろそうだ」

「そうだね」

「……練習前の肩慣らしになるか」

なにやらやる気になって準備を始める面々。ま、断る理由もないか。

軽快に響く、煌のシンバル4連打。

ベースとキーボの奏でるフレーズに、ギターが被さり、いきなりおおっと思った。

なんか、音にぐんと厚みが！

静流は不規則に弦をかき鳴らしたり、メロディーに重ねたり、かと思えば細かくリズムを刻んだり、一見気ままに弾いているようだったが、曲全体が賑やかになって迫力が増していた。

そして、間奏。いかにも楽しげに瞳を煌かせながら静流が始めたギターソロに、おれはぽかんと口を開けた。

背筋がゾクゾクするようなすっげーエキサイティングな音が、超カッコいいオリジナルのフレーズを奏でながらビートを刻む。

これは……巧すぎるだろオイ！ センスありすぎ！

細い指先が魔法のように閃き、絶対難しそうなのに、なんでもなようにさらに弾いてやがるのが信じられない。

ぐあーっ^{あお}と煽られるように全身に高まっていく、熱。うわあああ、燃えてきた！

最後のサビ以降は、ひたすら激しく弾奏して、全員で揃えるラストで完全燃焼。

……すげー、ダイナミック。

華やかさと躍動感が増し、パーティーの規模が格段にでかくなっていた。

こいつ、この曲、都大会で一回聴いただけなんだよな？

なんでこんなとんでもねー演奏がいきなり合わせられるんだ？

「最高！」

無邪気に微笑む静流に対し、あまりの凄さに半ば呆然とする一同

……いや、悠斗だけは冷静で、小さなため息を漏らしていた。

「……紫葉くん、君も僕たちと一緒にバンドやらないかい？」

頬をかすかに紅潮させ、勧誘を始めた王子に、静流はふるふると首を振った。

「いえ、練習とかめんどいし、大会目指すとか熱血すんの、好きじゃないんで」

ん！？ 仲間になるんじゃないのか？？

「でも」

と静流は大きな目をくりりとさせ、言葉を継いだ。

「ときどき部室には顔出させてもらっていいかな？ バンドはしないけど、軽音部には入りたい。センパイたちの音楽、凄く好きなんです。曲のアレンジとかもアドバイスさせてもらえるなら、協力できると思うし」

38・熱帯夜

「俺が中1まで通ってたギター・ベース教室に、あいつも通ってたんだ」

部活の終わった下校途中。バス停前の売店で買ったソフトクリームを舐めながら、「どーゆー知り合い？」と尋ねたおれに、悠斗は淡々と答えた。

「やめてからは会ってなかったから、だいたい3年ぶりだな。中部にいたということは小耳に挟んでいたが……」

「可愛くなってたから思わずトキメいちゃったんじゃない？」

擲^{ちや}掄^{ちや}するように言ってやったが、悠斗は意味不明というように眉をひそめた。ジョークのわからん奴だな……。

「たしかに小学生の頃はしょっちゅう女と間違えられていたようだが。あいつもそれをネタにわざと騙^{だま}すような悪戯^{いたずら}もしていた記憶がある」

まあ、今でもあんだだけ美少女然としてるんだから、幼い頃はさぞかし可憐^{かわい}だったことだろう。

「思い出した！ 紫葉静流！」

たこ焼きをつつきながら何やら目を眇^すめていた煌が、不意に声をあげた。

「『天才ギター少年』って、ガキの頃けっこうテレビ出てたよな

？」

「ああ。あいつは天才だ……ギターの技量も、アレンジの才能も。本気になれば、きっとプロでも通用する」

「一時期かなりメディアに出まくってたけど、パタッと見なくなっただよな。なんかあったのか？」

「……さあな」

煌の疑問に、悠斗はそっけなくそれだけ返し、飲み終わったペットボトルを傍らのゴミ箱に投げ捨てた。

ん、なんか知ってそうだけど、話す気はないって感じか？

「でも、王子ってば勧誘してたけど、そもそも『軽音甲子園』に中學生が出るわけ？」

「たしか『軽音甲子園』の出場条件は年齢が18歳以下であることと、メンバーに一人でも高校生が入っていること。途中メンバーの追加や交代も一人までは認められてたから、その点は問題ないはずだぜ？」

そーなんだ。

「ギターも加われば更に演奏の自由度は広がるけど……ま、今の4ピースでも十分だろ。この調子なら、オーディション受けて、再来週末にはライブってのもギリいけるかも？」

話しつつ、ホレ、とばかりに煌が差し出た爪楊枝つまようじのたこ焼きにかぶりついていたおれは、むぐつとあわててそれを飲み込んでから、問い返した。

「え……そんなトントンと出れちゃうもんなの？」

「ちょうど24日に、いくつかのバンドが出演するライブイベント

が予定されててな。異例ではあるけど来週前半までにオーディションをクリアできれば、出てもいいってオーナーが。俺の人望のおかげだな。ただ、もちろんオーディションはいつさい妥協しないって」「うわ、それは出たい！……けど、来週前半ってことは、あと一週間か」

うーん、本当にギリギリだな。第一、悠斗がどれくらい練習に参加できるのか……。

おれがそつと右隣を仰ぎ見ると、悠斗は小さく嘆息した。

「わかった。オーディションまでは、毎日来よう」

「で、でも、ずっと都大会練習でこっちに付き合ってくれて、その後すぐ試験休みだったろ？ で、昨日も今日もバンドに顔出して……

…剣道、ほとんど出れてないじゃん。大丈夫か？」

「基本的に個人スポーツだから、周りに迷惑はかけないし、自己鍛錬を怠っていなければ問題ない」

「次の大会は団体戦もあるんだろ？ 剣道部の他の奴らは、何か言ってきたりしねーの？」

煌の指摘に、悠斗は泰然^{たいぜん}と言い切った。

「そういう奴らは、実力で黙らせればいい」

すげー自信。

でも、こういうのってめっちゃ反感買いそうだな。大丈夫か？
とはいえ、バンドに協力してくれるのは、非常にありがたいわけ
で。

おれと煌は、不安の混じった視線を互いに交差させたが、言葉を見つける暇なくすぐにバスがやってきて、その話題は終わってしまった。

その晩は熱帯夜だった。どうにも寝苦しくて、外の空気に当たろうと窓辺によると、隣の家の庭で竹刀の素振りをする悠斗の姿が見えた。

……こんな遅くまでやってんのか、あいつ。

朝も、早くからジョギングしてるのに遭遇したことがあった。

おれはせいぜい2キロコースだけど、あいつは毎日もっとずっと走りこんでるっぽかった。

「お疲れさん」

一段落ついて、ふうつと大きく息を吐きながらタオルで汗を拭っていた悠斗は、庭に入ってきたおれを見てギクツとしたように身じろぎした。

いつも沈着冷静なこいつが、こんな反応をするのは珍しい。

「おまえ、そんな格好で……」

やべ、パジャマのままってのは、やっぱ非常識か。でも着替えるのめんどくさかったんだよ……。

「いーじゃん、すぐ隣なんだし。ほい、差し入れ」

冷蔵庫から見つけてきたポカ리를渡すと、悠斗は無言のまま少し怒ったような顔で受け取った。

「なんだよ、礼くらい言えよ」

「……おまえは、隙が多すぎる」

いら立たしげに告げられた言葉の棘^{とげ}に、カチンときた。

「はあ！？　なんだよ、人がせつかく……」

「そんなんだから黒川にも襲われるんだ。誰にでも無防備に色気をふりまくな」

「い、色気って……そんなもん出してるつもりねーし！　変なこと言うな！」

あんまりな言い草にかあつと頭に血が上った。なんだよ、すげーム力つく！

クソ、こんなことなら来なけりゃよかった。そのポカリ返せといたい。

「いくらなんでも魔王の前にパジャマで出てったりしねーよ！　おまえならいいと思ったの！」

こいつは他の奴らみたいな口説き文句やあからさまな好意をほとんど見せないし、そーゆー面では一緒にいて一番気楽な相手だった。普通の男友達みたいな感じで。

真面目で理性的な奴だから、いきなり馬鹿な真似もしないだろうし……そんな信頼があつたから来たのに。

「別に誰にでもってわけじゃねーよ。見くびるな！」

ビシツと言ってやったら、悠斗は複雑そうな表情で黙り込んだ。竹刀を持つ手をグツと握り締めて、のどに絡んだようなかすれ声で何か呟く。

「……………だからそういうところが……………」

「
？
なんだよ？
」

39・勝利の誓い

「……もういい」

悠斗はムスツとしたままペットボトルのふたを開けると、唇に流し込んだ。月明かりに、ゴクッゴクッと震える咽喉のどが照らし出される。

勢い余って一筋口の端はしから零れ落ちたそれを手首でふくと、こちらを鋭い瞳で一瞥いちべつしてからフイツと逸らした。その射るような眼差しに、心臓が一回ドキッと大きく跳ねる。

静寂が訪れる。

庭に植えられた白い花が、柔らかい月光を浴びながらぼんやりと闇夜に浮かび上がって綺麗だった。

確か、この花は『クチナシ』……無口なこいつにぴったりだ、と思うとちよっとおかしくなつて、次第に怒りもほどけていく。

静かな夜の空間で、ふわりと漂ってくる芳香をしばし堪能たんのうして心を落ち着けてから、おれは、「あのさ」とかたわらの仏頂面を見上げた。

「バンドに引き込んだのはおれで、こんなこと言つのもおかしいんだけど、あんま無理すんなよ」

これが伝えたくて、出てきたんだ。

「おまえ、適当に力抜くとか苦手そうだし、さ。 kann に聞いたけど、団体戦の大將に指名されたいじゃない？ にもかかわらず、練習出れないってのは……」

「黒川に、負けたくない」

おれの台詞を遮るように放たれた一言。その静かだけれど熱のこもった響きに、気^け圧^あされた。

「おまえのためじゃない。俺が、勝ちたいんだ。……絶対に」

揺るぎない意志の宿った、瞳。

「……でも」

「しばらく早朝から道場を開放してもらえるように、学園に交渉するつもりだ。実現すれば朝稽古ができるから、練習量も補える。……朝は一緒に登校できなくなるが、金城がいるから大丈夫だろう？」

有無を言わせない口調で淡々と説かれると、何も言えなくなった。もどかしい思いでただ見上げていたら、悠斗はかすかに表情を緩め、安心させるようにおれの頭をポンポン、と叩いた。

「ライブ経験を積むことは、確実にバンドのプラスになる。……最高の演奏をしよう」

その時みせた強気の小さな笑みは……悔しいけど、男のおれから見てもすげーカッコよかった。

「無理……」

ゲーセンのアーケードマシンの前で撃沈したおれに、右後方からひよいと静流がのぞきこんできた。

「あれ、ゲームオーバー？」

「ああ、この曲はいくらなんでも鬼過ぎる」

肩を落とすおれに、静流はクスツと笑みを漏らし、ポケットから取り出したコインを投入するとコンティニューを選択した。

怒涛のドラムビートに合わせて、画面上部から雨霰あめあられのように降り注ぐオブジェの弾丸。それらが下部の赤いラインに重なった瞬間、一寸の狂いもなく対応するボタンを高速連打していく。

絶え間なく点滅する、虹色に輝く GREAT の文字。

抜群のリズム感と驚異的な情報処理能力を否が応にも見せ付ける神業プレイだった。

最後の GREAT を軽快に叩き込むと、静流は「リベンジ完了！」とピースサイン。

…… おみそれしました。

「週末限定でアイスクリーム・フェスティバルってのがあるんだけど、センパイ、興味ない？」

そんな誘いにつて、試験明けの初めての日曜日、おれは静流と繁華街にきていた。自慢じゃないが、アイスは好物なのだ。

イベント会場であるショッピングビルに向かう途中、ゲーセンにちよつと寄り道していたのだが……

「おまえ、もしかしてゲーマー？」

「どうだろ？ ゲームは好きだけど……それよりセンパイ、はい、これ」

プレゼント、と静流が差し出したぬいぐるみに、おれは目を丸くした。

これは……リラッ マのお祭りシリーズ！

ゲーセン限定の激レアものだった。ねじり鉢巻とハッピーが、めちやめちや可愛い。

思わずほにゃ〜と顔が溶けかけたが、あわてて引き締める。

「なんだよ、突然」

おれのリラッ マ好きは誰にも話したことはなかったはずだ。ぶっくらぼつに尋ねると、静流はちよつと首を傾げた。

「好きなんでしょ？ さっきUFOキャッチャー通りかかった時、目線釘^{くぎ}付けだったじゃん」

「す、好きじゃねえっ」

思わず赤面して否定すると、静流は不思議そうに大きな瞳を瞬かせる。

「可愛い女の子が可愛いものを好きで、何を恥ずかしがることができるのさ」

……目からウロコが落ちた気がした。

そうか、今のおれは女、堂々とファンシーグッズ好きでもおかしくないのか！

「……ありがとう」

なんかおれ……初めて女になってよかったと思えたかも。ぬいぐるみを抱きしめて思う存分もきゅもきゅしていたら、静流が口元に笑みをたたえながら自分のケータイを見せてきた。

「実はオレも好きなんだ。いいでしょ、コレ」

待ち受けには、超キュートなりラッ マのイラスト。

「素材サイトで落とせるよ。よかったらアドレス送るけど」

「頼む！ おれのメアドは……………」

「了解」

鮮やかな手つきで入力をすませ、キラリと瞳を閃かせた静流に、ハッとした。

もしかして今こいつ、おれのアドレス聞きだすためにわざと……………！？

39・勝利の誓い（後書き）

活動報告では先日お知らせしましたが、ひなむうさんにキャラデザをしていただきました。

最初のメインキャラ紹介のページに5人のデフォルメイラストを、1st phase終了後の位置にキャラクターファイルを挟んで煌、悠斗、王子のイラストをアップ。

残り二人は次回更新後に順次up予定です。

綺麗に仕上げていただいたので、よろしかったらチェックしてみてください
下さい^^

40・アイスクリーム・フェスティバル

アイスクリーム・フェスティバルは、全国各地の人気行列店のアイスを始めとして、イタリアンジェラートやトルコの伸びるアイス、台湾風かき氷など世界のアイスも販売されている盛り沢山なイベントだった。

「うわ〜うわ〜どれも美味そう！迷う！」

「好きなだけ食べていいよ。オレ、奢おこっちゃう」

「は？ いや、中学生に金を出してもらう筋合いは……」

「付き合ってくれたお礼。ちょうど先日、一儲ひとまうけしたとこだし」

一儲け？ と眉をひそめたおれに、静流は両手を頭の後ろに回しながら、さらりと「株取引かぶとりひき」と答えた。

「か、株……！？ って中学生で！？」

「保護者に口座さえ作ってもらえれば年齢関係なくできるよ」

な……なんつー14歳だ。

咂あぜん然とするおれを、静流は「あれテレビでみたやつだ。いってみよう、センパイ」と誘導した。実にさりげなく手を握って。

「センパイ、毎日アイス食べてるもんね。絶対こーゆーの喜んでくれると思うんだ」

椅子に腰掛けて戦利品を堪能するおれを眺めながら、顔をほころばせる静流。

「そのシュシュ、可愛いね。華やかなイエローは元気なセンパイによく似合う」

「ごくごく自然に零れるほめ言葉は王子にも通じるものがあるが、こいつの場合は……確信犯だ。」

「おまえ、そうとう遊んでるだろ？　けど、おれにはそーゆータラシ文句は無駄だから」

ズバリと言ってやると、静流は不意をつかれたように少し黙り込んだ。

「おれのファンだとかも嘘なんじゃねーの？　ただ単に、新しい獲物に近付くための口実」

「……ほんと、調子狂うなあ」

静流はひよいと肩をすくめると、クスリと唇の端を吊り上げた。

それは、今までの可愛い笑顔とは全く別種の、皮肉な色を帯びたもの。

「あんた、本当に女？」

全てを見透かすような視線でまっすぐに問われて、今度はおれが言葉を失った。

な……にを言い出すんだ、こいつ！？

動揺するおれだったが、静流は「なんてね」とペロツと舌を出した。

「失礼なことってごめん。でも、ほんと、不思議で仕方ないんだ。」

オレの知る限り、女の子ってのはどんなに素直で純粋な子でも、みんな必ず無意識の媚こひってやつを備えてるものなんだよ。オレはそれを糾弾きゆうたんするつもりはなくて、むしろ健気けなげで可愛いとさえ思う。それは性格の良い悪い無関係に、遺伝子を残そうとする生物として当然の行動。でも……センパイには、それが無い」

テーブルに頬杖ほおづえをつきながら人差し指で示されて、おれは静流の分析力に感心すると同時に、衝撃も受けていた。

こんなゲームのシナリオは、あるはずがない。こいつは、たしかに『おれ』をみて話をしている。

「あれだけイイ男に囲まれていながら、少しも舞い上がることなくどこまでもあけすけで天真爛漫てんしんらんまんで……そんな女の子、初めて見たから、すごく興味深いんだ。これは、心からの気持ち。それから、フアンつてのも、嘘じゃないよ。センパイの歌は、本当に好き」

真顔で、じっと見つめられながら宣言された。……うーん、どうなんだろう。

「信じてやりたいけど、信じられないって感じ？」

その通りだったのでコクリとうなずくと、静流は特に気落ちした様子もなく「だろうね」と応じた。

「オレは恋愛は駆け引きを楽しむゲーム、人生のスパイスみたいなものだと思ってるし、重いのは真っ平ゴメン。それが信条で遊んできたから、女の子の喜ぶ言葉ももうクセみたいにどんどん出ちゃうんだ。」

実際、ほめればほめるだけ女の子は可愛くなるものだし、世の中に可愛い女の子が増えればオレも嬉しい。全然悪いことじゃないで

しょ？」

「自分の言動が相手にどんな影響を及ぼすか、わかってやっているけど、悪意はないといたいのか？」

「うん。オレの言葉は軽薄で、性格もひねくれてるところがあるって自覚してるから、信用ならないと警戒するのも無理ないけど……でも、センパイには嘘はつかない。それだけは、約束するよ」

リラッ マも本当に好きだしね、と茶目っ気たっぷりウィンクする静流の目は澄んでいて、「センパイには嘘はつかない」この言葉は、信じてもいい気がした。

「センパイはオレみたいなの、きつとタイプじゃないだろうけど……オレはもつともつとセンパイのこと、近くで見て、知っていきたい。『女』を感じさせないようなのに無性に男を惹きつける神秘性も、まだまだ底知れないデユナミスとしての音楽的な才能も、わかりやすい明るさも素直さも無邪気さも、全てが魅力的でスリリングだから」

なんだよデユナミスって……。それにしてもよく回る口と頭だ、と内心舌を巻いていたら、テーブル越しにくつと顔を寄せて、囁^{ささや}いてきた。

「ね、いいでしょ？ センパイ」

近い近い！ ……確信犯とはいえ、やはりこいつも天性の女たらしなのは間違いなかった。

7月中旬の水曜日、煌がバイトするライブハウスでオーディショ

ンを受けた。

収容客数280人のそのライブハウスは、音楽活動をする人たちの間ではなかなか有名で、プロ志望者もよく利用する場所らしい。とはいえ、知名度は問わない完全な実力主義で、オリジナル5曲の生演奏オーディションに受かりさえすれば、すぐにライブに出演できるとか。

ぼさぼさ頭に無精ひげぶしようの熊みたいなオーナーは、大らかで人懐っこい感じの人だったけれど、オーディションが始まると、真剣な顔でおれ達の演奏に耳を傾けていた。

ぶっちゃけ都大会より緊張したが、最後の一曲が終わるとオーナーは満面の笑顔でパイプ椅子から立ち上がり、大きな拍手をくれた。

「さすが煌が強気で売り込んできたバンドのことだけある。お客さんの反応が楽しみだよ」

「ありがとうございます！ それでは来週24日のイベントの参加も許可していただけるのでしょうか？」

「ああ。君たちの出番は3番目あたりにしようか。それから、うちは基本的にはチャージバック制だけど、初回だけはチケットノルマが……」

バンドの代表者である王子とオーナーの打ち合わせが始まると、ようやくふつふつと実感が湧いてきた。ふらつとひざが崩れかけたところを、煌に支えられる。

「おい、大丈夫か？」

「ああ……なんか、安心して力が抜けた。……でも、ほんとよかった。おれ、あんまりライブハウスって行ったことないけど、ここがいい場所なんだってのはわかる。緊張したけど、音の響きがよくて歌いやすかったし、店の雰囲気も好きだ」

まだ半ば放心しながらのおれの言葉に、煌が少し誇らしげに目を細めた。

「ここは、俺も中学の時から客としてよく通つてさ。オーナー達に顔を覚えてもらつて、15歳になると同時にバイトするようになったんだ」

「そーいや、おまえ、ここでどんな仕事してんだ？」

「主に受付とパブ」

パブ？

「つつても22時前は酒は売らないから、俺はジュースを出したり、軽食とかノンアルコール・カクテル作つたり……」

「煌がカウンター入るようになってから売り上げがグッと上がったよ。ただの軽食でも一工夫あつて美味しいし……」

打ち合わせが一段落ついたのか、オーナーが話に混ざってくる。なるほどな。まあ、こいつがバーテン服着て立つてるだけで、女性客の反応は上々だろう。

「それにしても、ようやくお目にかかれて感無量だよ。ずっと会つてみたかつたんだ、煌の『天使』……っ」

鷹揚おつようと語っていたオーナーが、おれの肩をポンとたたくや否いなや、おもむろに屈かがみこんだ。

「こんな時間からなに酔っぱらってんすか？ 奥さんに言いつけますよ？」

彼の向こう脛^{すね}を思いつきり蹴りつけた煌が腕組みして、顔面の下半分だけで笑う。よく見るとひたいがヒクヒクと震えていた。

キャラクターファイル？

名前：紫葉 静流

身長：168

星座：双子座

血液型：AB

年齢：14

一人称：オレ

二人称：センパイ。煌先輩。悠斗さん。王子先輩。魔王サマ。

趣味：ギター。ゲーム。ショッピング。ビリヤード。インターネット。株取引。

花にたとえるなら：フジ

イメージボイス：内 昴輝

> i 2 8 0 3 6 — 3 3 9 3 <

ひなむうさん（<http://piaapro.jp/hinamu>）に描いていただきました！

ありがとうございますv

美少女と見まごうばかりの美少年で両声類。趣味爆発ですみません
（笑）

空気を読むのが得意な今風の少年。

相手の話をよく聞いて覚えていて、要領がいい気配り上手。

誰にでも愛想が良いけど、クールに一步引いてる部分があり、ひねくれているところもあります。根はいい子。

テーマは「年下小悪魔」。

遊びだったのがだんだん本気になっていく、てのは個人的に萌えま

すね。

男は女の初めての男になりたい一方、女は男の最後の女になりたい
そうです。

悠斗とは過去になにやらあった模様。堅物キャラと遊び人ってのも
萌える組み合わせです（

キャラクターファイル？

名前：黒川 旺眞

身長：185

星座：蠍座

血液型：B

年齢：16

一人称：俺

二人称：和希。金城煌。蒼木悠斗。北王子梓茶。紫葉静流。

趣味：オペラ鑑賞。チェス。水泳。昼寝。酒。タバコ。女（

花にたとえるなら：黒蝶（黒ダリア）

イメーヂボイス：諏訪部 一

>i28037—3393<

ひなむうさん（<http://piaapro.jp/hinamu>
u）に描いていただきました！

ありがとうございますv

圧倒的な美貌と妖艶を誇る『ときメロ』のエロ担当。

でもただのワガママなお子ちゃまという気もしないでもない俺様魔王様w

本人は無自覚ですが親の愛に飢えてるので女で満たしてるのでしょ
う：元から女好きなのは間違いないですが（おい）

彼自身は積極的に口説き落とそうとするタイプではなく、生まれな
がらの『魔王フェロモン』で勝手に女が寄ってくる状態です。

そんな絶対の自信をもっていた自分の魅力の通じない和希は、彼に
とっては衝撃以外の何ものでもなく、すっかりご執心。

テーマは「本能の愛」。考えるんじゃなく問答無用に惹かれる遺伝

子的戀愛。

ヒロインとの体の相性は最高という裏設定……って作者自重！

キャラクターファイル？

名前：羽鳥 芽生

身長：143

星座：乙女座

血液型：AB

年齢：10

一人称：あたし

二人称：お姉ちゃん（和希）。煌お兄ちゃん。悠斗お兄ちゃん。北王子さん。紫葉さん。黒川さん。（素では男性キャラは名前に「くん」づけ）

趣味：ゲーム。妄想。イケメンウォッチング。お絵かき。グルメ。弟（姉）イジメ。

花にたとえるなら：見た目はスマレ。実態はラフレシア。

イメージボイス：釘宮 恵

一見淡々と社会的役割をこなしているけれど、脳内は常に妄想の花が咲き乱れているという、それこそ世間に腐るほどいるっつかすでに手遅れなまでに腐りきっていますか何か？ 的腐女子の一人。ほぼ作者の分身みたいなキャラ……とはいえ私はこんなドSじゃないし腹も据わっていませんが。

ヒロインは色々と努力を強いられる一方、気楽な小学生に転生し、毎日煌の料理を食べてイケメン見放題、可愛い弟をいびり放題の彼女こそ真の勝ち組。

恋愛沙汰に関わりたいたいという気は皆無で、彼らを愛することができれば幸せなので、普段は空気に徹していますが、姿が見えないときもストーリーキングや隠しカメラ、盗聴器で、ほぼ読者と同レベルにイベントを把握していると思われますw

ちなみに2nd Phase以降は和希の服装や髪型は基本彼女が毎日コーディネートしているので、見た目の好感度もバツチリです。

41・絶体絶命！？

「言ってたじゃないか」天……」

「言ってねえから！」

珍しくうつろたえるような煌に、プツと吹き出したのは、見学に来てた静流だった。

「煌先輩、意外とロマンティスト？」

「なっ……」

食って掛かろうとした煌の肩をグツとつかみ、うんうん、と頷いたのは、王子（キラキラつき）。

「わかるよ……和希ちゃんは、天使だ。事実なんだから、そんな恥ずかしがらなくてもいいのに」

「だからそんな事実はねえっ！　こら悠斗、てめーも口押さえて、笑うのこらえてるだろ！？」

「……よくもまあ……そんな気障おきな台詞を口にできるものだな……」
「だから誤解だっつーの！」

「……たぶんあれだろ、最初に会った時、おれが階段から降ってきたから、その話をした時にジョークで……おまえ、『天使が空から』とか言ってたしな」

あまりにもいたたまれず、助け舟を出してやったのだが、オーナ―は「いやいや」と即座に否定した。

「ジョークじゃなく、たしかにそんなことを中学の時に……」

中学？

「だから全部オーナーの勘違いなんだって。いい加減怒りますよ？」

これまで聞いた事のないような冷ややかさで煌が言い切ると、オーナーはハツとしたように頬を強張らせ「すまん」と呟いた。

「じゃあ次は音響機材についてだけど、うちはアンプやキーボードの貸し出しもやっていて……」

そそくさと話題を移すオーナー。

……ヒロインが知らないところで、過去に会っていたのか？ けど、なんで隠すんだろう？

オーディション翌週の7月21日木曜日。

この日は一学期の終業式が行われた。明日からは夏休み……つつても、進学校であるここは、8月に入るまでは全員参加が義務付けられた補習授業が毎日みっちり7時間あるらしい。そんなの全然夏休みじゃねーじゃん！ 詐欺だー！^{さき}

終業式の後も普通に授業があつて、清掃時間。

むわつとした熱気と焼けつくような陽射しにうんざりしながら外掃除に向かっていたおれは、焼却炉の方からなんとなく挙動不信心な男子生徒が二人、やってくるのに遭遇した。

妙な胸騒ぎを覚えて、まだ火のついていない焼却炉を確認し、息をのむ。

中に捨ててあったそれをつかむと、ダッシュでさっきの生徒達に

追いついた。

「待てよ！
なんだよこれ！」

呼び止めると、二人はギクリと身を弾き、バツが悪そうな様子で互いの顔を見合わせた。

おれが掲げたのは、「蒼木」とかかれた竹刀と胴着セツト。

「……ム力つくんだよ、あいつ。練習サボってばつかのくせに、レギュラーとかふざけんな！」

「中学で全国レベルだったか知らねーけど、普段ろくに竹刀も握ってなくて大將なんか務まるわけねえ。部長もコーチも、えこひいきしてんだよ!」

開き直ったように言い訳を並べる男たちは、いかにも小物つて感じでモブキャラ臭が漂い、気の毒なくらいだ。

「そう思うなら直に悠斗と勝負するなり、部長やコーチに訴えるなりすればいいだろ？ 陰険インケンなことしてんじゃねーよ」

「……うるせえええええ！」

とつとつと諭さとそうとしたおれに、突然男達は奇声を発しながら襲いかかって来た。

ゲゲッなんだ、この急展開！？

中庭の木々の生い茂った影に押し倒されて、二人がかりで押さえつけられる。

ぎよえええええ、ちよ、おまえら、まだ昼間だし！　ここ学校だし！

さっきまでおどとして気弱そうに見えた男子生徒たちは、ゼエゼエと荒い息を吐きながら血走った目でおれを見下ろし、歪んだ笑みを浮かべた。

「おまえ、蒼木のオンナだろ？ おまえを滅茶苦茶にしてやったら、あいつもさぞかし悔しがらるだろうなあ？」

「毎日毎日受験勉強しながら必死に部活も両立させてきたのに、最後の大会もレギュラー落ちして、明日からはひたすら勉強漬け……たまには愉^{たの}しませてもらってもバチあたんねーだろ！？」

やべえ。こいつら、ブチキレてる。暑さ、受験ストレス、コンプレックス……色んなもんが混ざり合って抑圧されてた衝動が一気に爆発した感じ！？ って冷静に分析してられる状況じゃねえっ。

手足はがっちり拘束されて、ピクリとも動かせない。半分まくれあがったスカート。

「や……！」

大声を出そうとした口は、手で塞^{ふさ}がれた。興奮もあらわな生臭い息が顔にかかる。

汗ばんだ掌がせわしく太ももをなで、血が凍るような感覚に包まれたその瞬間、おれの上に馬乗りになっていた男が勢いよく吹っ飛んだ。

「あ、蒼……グエツ」

もう一人も、現れた悠斗に容赦なく腹を蹴^けられて転がる。

よよよよかった〜！ ……来るとは思ってたけど！ 絶対来な

いわけがないとわかりきってたけど！ それでも寿命縮んだぞ。

ドッキンバツクンとけたたましく跳ねる鼓動をなだめつつ、深々とため息を吐いていたら、

「センパイ、大丈夫？」

少年っぽいのに低くも響く、独特の声音とともに、目の前に手が差し出された。

「静流……なんでおまえが」

「中等部はもう授業終わってね、早いけど部室に行こうと思って通りかかったんだけど……すごいな、完全にネジ飛んじゃってる」

そう言って肩をすくめた静流の目線をたどり……おれはサーツと青ざめた。

というのも、今度は悠斗の方が無表情ながら完全にブチキレて、悪役コンビを延々タコ殴り。一向にやめる気配がなかったからだ。

「まで、悠斗、ストップ！ もう終わり！ それ以上やったらこいつら、ヤバい！ それにおまえの手も 怪我したらベース弾けなくなるぞ！」

必死で背中にしがみついて叫んだら、ようやく悠斗の動きが止まった。怒りに染まってけぶるようになっていた瞳にも、理性の色が戻ってくる。

「う……訴えてやる……」

ボコボコにされた悪役Aが、恨めしそうに呻いた。

「無抵抗のオレ達に暴力ふるって……これでおまえは剣道もバンドも出場停止だ。ざまーみる！」

41・絶体絶命！？（後書き）

二人きりなら気障なことも言えるけど、第三者に指摘されると恥ずかしい煌

周りとかお構いなしの天然口説き魔 王子

状況に応じては人目も気にせず口説きまくりの確信犯 静流

口説き文句とか恥ずかしくてほとんど言えないし、簡単に言うもんじゃないと思ってる 悠斗

口説き文句なんか必要ない、行動あるのみ 魔王

……こんな感じ。

そしてまたやってしまった「ヒーローがピンチに現れてヒロインを助ける」パターン。大好物なもので。お許しを。

42・ライブイベント到来

「見苦しいね」

その場を切り裂くように軽蔑^{けいべつ}交じりの響きを発したのは、静流だった。その手には……ボイスレコーダー。

「オレ、実はセンパイがあんたたちを呼び止めるところから見ててさ。なんか不穏な雰囲気だったから、録音してたんだ」

静流が再生ボタンを押すと、『ムカつくんだよ、あいつ。練習サボってばっかのくせに、レギュラーとかふざけんな!』と言う悪役Aの声がクリアに流れてきた。

更に早送ると、『おまえを滅茶苦茶にしてやったら、あいつもさぞかし悔しがらるうなあ?』やら『毎日毎日受験勉強しながら必死に部活も両立させてきたのに、最後の大会もレギュラー落ちして……』といった台詞も飛び出し、二人はみるみる色を失くしていく。

「あんたたちが訴えたら確かにこっちも出場辞退になるかもだけど、同時にあんたたちは婦女暴行未遂で刑事告発、よくて退学処分ってところ? 受験前にこの不祥事は致命的だと思うけどなあ」

嘲^{あざわら}りを含んだ静流の言葉に、「お、覚えてるよ……」とみじめな捨て台詞を残し、よろよろと立ち去ろうとする悪役達。

「待てよ! おまえら、悠斗が練習してねえとか竹刀握ってねえとか言ってたけど、こいつは毎日家で素振り1000本と走りこみ10キロはやってるぞ。おまえらはそれ以上のことしてるのか!？」

おれが呼びかけると、奴らの背中が一度止まったが、やがて、無言で遠ざかっていった。

「……よくもつてたな、ボイスレコーダー」

「ふつと音が浮かんた時とか、忘れないように録音するために持ち歩いてるんだ。……言っとくけど、ただのうのうと見物決め込むつもりはなかったよ？ いい加減シャレになんないぞって飛び出そうとした瞬間に、悠斗さんに先越されたんだからね？」

「ああ、助かったよ。……悠斗も、ありがとう」

仰いだ悠斗の面持ちは、沈痛で、自責の念に覆おおわれていた。

「……俺のせいで、こんな目に合わせて……悪かった」

録音内容から、事情を察したらしい。

「おまえのせいじゃねーよ。悪いのはあいつらだ」

「でも、確かに悠斗さんが日頃のフォローを怠った感は否認めないね。学校の部活は、ただ成果を上げればいいってもんじゃない。あんたが剣道部内の不和を乱してるのは、きつと事実だよ」

静流の辛辣しんぷつな指摘に、悠斗はぐつと唇を引き締め、そのまま黙って立ち去った。

「……おまえって、なんか悠斗に冷たくねえ？」

基本誰にでも愛想がいい静流だが、悠斗にだけは妙に温度差があるような気がしていたのだ。

おれの言葉に、静流はあっさりと同意した。

「うん、オレ、あの人キライだから」

「……」

「堅物だし、クールに見えて実はスポ根全開で暑苦しいし、いちいちかつこつけすぎ。そのくせベースだけはあんな音出してきて……あんなイライラする人、他にいないよ」

冷ややかに言い切る静流に、言葉を失った。

「センパイの幼馴染なのに、ゴメンね。でも、ほんと、対人関係不器用な人だよねえ……もう少しうまく立ち回ったらいいのに」

夏の日差しに手をかざし、目を^{すが}眇めながら、「そーゆーところがまたイラつくんだ」と静流は呟いた。

いよいよライブイベント本番当日。

前日にリハも済ませ、まだ時間に余裕があったので、一人散歩がてら外に出た。

会場近くの通りをぶらぶらしていたところ、全身黒ずくめで漆黒の髪を腰まで伸ばした長身と、^{じくさいしき}極彩色の独創的な衣装をまとう赤頭という、対照的だけどもめちやめちや目立つ二人連れに遭遇する。

「魔王！ もう体調はいいのか？」

「……フン、^{ろかせいびょうげんたい}濾過性病原体ごときにいつまでも屈する俺ではないわ」

魔王はおれを見るとわずかに切れ長の瞳を開いたが、すぐにいつも通りの傲慢さ^{ごうまんさ}で鼻を鳴らした。

「そうそう、こないだのタクシー代のお釣り……」

「見^み縊^{くひ}るな。そんなはした金、無用だ」

「それはおれに対する挑戦状か？　ぶっちゃけおれの一ヶ月の小遣いとそう変わんねーぞ……」

グツと手を握り締めて怒りをこらえていたら、ロンが「なあなあ」とこそつと耳打ちしてきた。

「アンタ、いったい全体どんな超絶テク使ったわけ？　魔王サマ、都大会以来な〜んかおかしいんだけど？」

「テクって……んなもんねーよ！」

「またまた〜。なんか病気の看病したりもしたらしージャン？　禁断のお医者さんゴツコ？　いいクスリあるなら紹介してほしーんだけど」

ニヤニヤ笑いながら囁^{ささ}いてくるロン。う、うぜえ。

「今日だって、お嬢ちゃんがライブに出演するって話を聞きつけるなり問答無用の即行でチケット手配したんだぜ？　しかも昨日の深夜にいきなり！　あちこち奔^{はし}りまわされたオレ様の苦勞たるや……」

「五月^{ごがつ}蠅^{ぶん}い」

魔王にギロリ、と鋭利な視線で凄まれて、ロンは首をすくめた。

「え、今日、おまえらも見に来るのか？」

「暇つぶしだ。せいぜい恥をかかぬようにな」

不機嫌そうにそう言って、身を翻^{ひるがえ}す魔王。

偉そうなことこの上ないが、それでもこいつなりのエールってやつなのかもしれない。

今日の舞台衣装はちよつとオシャレな普段着で、ということ、
ふわつとした白いチュニツクにパールブルーの花柄ショートパンツ、
グラデイエーターサンダル。別に変なところはないよな??

楽屋の鏡前でそわそわとチェックをしていたおれに、静流が安心
させるようににっこり笑う。

「大丈夫、可愛いよセンパイ」

そう太鼓判を押してくれた静流は、クラッシュ加工のタンクトッ
プに、ベルト飾りがいっぱいついたシャーリングクロップドパンツ、
ブーツサンダル。ハット、ネックレスに指輪までつけて、おれより
よほどスキなく決まっている。

「おまえって普段から、いつでもステージ上がれそうなかっこして
るよな……」

「人は誰でも常に、人生というステージに立っているからね」

おどけるように答えながら、「ピンはこっちのがいいかな」とお
れの髪の毛飾りピンの位置を動かした。ちよつと止め方を変えただけ
でグツと垢^{あか}抜けて見えるのが不思議。

「よかったらアメ、食べる? 大丈夫、あれだけ練習してきたんだ
から、絶対成功するって」

差し出してきた飴玉を口にいれると、その甘さに、緊張がわずか
にほぐれていく気がした。やたら気が利くよな、こいつ……いねー
だろ、こんな14歳。

「それにしても王子のやつ、どうしたんだろうな?」

楽屋に王子の姿はまだない。遅れてくるという連絡は朝もらったのだが、さすがにそろそろ時間が……と心配になってきたその時、ノックの音。

「うわさをすれば……てやつか?」

駆け寄って開けたドアの向こうにいたのは、かなだった。

43・現れない王子

「やつほー。舞台直前突撃インタビュー　どう、緊張してる？」
「ああ、朝から何度もトイレ行ってる。来てくれてありがとな！
ところで、チケット大丈夫だったか？　ちゃんと全部さばけた？」

ノルマとして課されていたチケットは、かななが「まかせて」と
全て買い取ってくれたのだ。

「当然よー。　神スリー　のバンドだもん。むしろ争奪戦で高額取
引。報道部の資金潤沢にご協力ありがとうございますー」

ご機嫌でブイサイン。あ、さいでつか。

かななは「では早速」とメモ帳を取り出すと、バンドについての
インタビューを始めた。

おれへの簡単な質問が終わると、今度は煌、そして悠斗へと順番
に向かっていく。

「蒼木くんは一昨日、剣道部に休部届けを出したってきいたんだけ
ど、それはこのバンドへの意気込みの表れと受け取っていいのかし
ら？」

かななの言葉に、一瞬頭が真っ白になった。

「悠斗！　それ本当か！？　剣道部やめたって……」

部屋のすみでベースのボディを磨いていた悠斗は、いつもの無
表情で「ああ」とうなずく。

「まだ受理されたわけではないが……一区切りつくまで、こっちに集中したいと思った」

「そんな……あんなに、がんばってたのに」

「どっちつかずになるのは嫌だった。今の俺にとって何が一番大切なを考えて、選択した結果だ」

「……」

動揺するおれに、「ごめんバカちん」とかんなが手を合わせる。

「まさか、知らないとは思わなくて……演奏前に、不用意なこと言つてごめん」

「いや……大丈夫」

「ところで、王子先輩は？ もうまもなく開演でしょ？」

かんなの疑問に、煌がいつになく焦りがにじむ表情で答えた。

「さっきから何度もかけてるんだが、ケータイ通じないんだ。家に電話したら留守だっていうから、もうでてるはずなんだが……何かトラブルがあったのかもしれない」

「あいつがすっぱかすような真似するはずねえ。大丈夫、王子はきつとくるさ」

おれはきつぱりとそう言い切ったけれど　胸の中には、どうしようもなく不吉な暗雲が急速に立ち込めていた。

「もうスタンバイの時間だ。　これ以上は待てない」

険しい表情でおれ達を見回す煌。

「舞台に穴を空けるわけにはいかない。キーボード抜きで、やるしかない」

「ソロパートは、俺達がアドリブで埋めることにするか……」

とはいえ、今日予定してた3曲は、キーボ、ベース、ドラムの全てが重要な役割を担っている曲ばかりだし、どの楽器がかけてもガクツとしよぼくなるのは間違いない。他でフォローすると言っても、限界があるだろう。

このライブ目指して、がんばってきたのに。いいバンドやグループばかり出てるイベントなのに、全体のレベルを落とすようなことはしたくなかった。

どう……したらいいんだろう。どうしちゃったんだよ、王子！

グツと唇をかみ締めて、深刻な顔を見合わせていたら、ふうつと大きなため息が聞こえた。

「オレが出る」

無理矢理のように唇の端を吊り上げてそういったのは、静流だった。

「オレがギターで、キーボのパートがなくても不自然じゃないようにカバーするよ。センパイ達は、いつもどおり演奏してくれたらいい」

煌がうなずいて、オーナーに許可もらってくる、とすぐさま部屋を出て行った。

「……いいのか、静流」

歩み寄り、真正面からじつとのぞきこむように尋ねた悠斗から、すつと視線を逸らして「オレならできるもん。でもってオレしかできないでしょ、この場合」と肩をすくめる静流。

それは、諦めと悟りと興奮と皮肉が織りまざったような、複雑な表情だった。

おれが見つめていることに気付くと、さつと笑顔を形作って、ウインク。

「終わったらちゃんと褒美^{ほうび}ちょうだいね、センパイ」

「ああ、もうなんだってくれてやる！ 頼むぞ！」

満員の客席には、うちの学校の生徒らしき顔もいっぱいあった。舞台上上がったメンバーの中に王子がいないことに気付いたのだから、ざわめきが起こる中、マイクから煌のよく通る声が響き渡った。

「こんにちはー『COLORFUL』です！ 今日ほ事情があつてキーボードの梓茶がいないけど、代わりに強力な助っ人がきてくれた。紫葉静流！」

名前を呼ばれた直後、かき鳴らされたギターの音色に、散漫としていた会場の空気が一変する。

「今日はみんなを思いっきり気持ちよくしちゃうから、覚悟しててね」

圧倒的な実力を見せ付ける先制攻撃とともにどこか艶^{なまめ}かしさを漂
わせて宣言する美少年に、会場のボルテージは急速に高まり、ライ
ブの幕は切って落とされた。

44・新メンバー加入

ステージが始まると、都大会と同じであつという間で。

演奏にはさすがに揃^{そろ}わないところや勢い任せのところもあったけど、それでも初合わせのアドリブとしては驚異的なレベルで、静流は見事にキーボの穴をフォローしてくれた。

舞台上上がった時に胸に渦巻いていた不安は、いつのまにか霧散^{むさん}していた。

おれはこんな状況にもかかわらず、溢れ出す音の洪水に全てをゆだね、血肉わき立つリズムやビート、響きあうことでいつそう輝くメロディの奔流^{ほんりゅう}を、そしてそれを共有し、更に高い段階へと誘ってくれる会場の熱気と興奮を、ただただ純粹に楽しんでいた。

ブウン、と半歩ずらしたベースの音を最後に演奏は終了し、割れんばかりの拍手や指笛に送られて、舞台からはける。

「……終わっちゃった」

ぽつり、と頼りない声で呟いた静流の、どこか上の空のような紅潮した顔を見た瞬間、両肩をつかんで叫んでいた。

「これからもずっと、一緒にやろう！ おまえが入ると、またもずっとずっと楽しくなる！ おまえもそうだろう？ おれ達とのライブ、めっちゃめっちゃ楽しかっただろ！？」

静流はおれの勢いにのまれたように、大きな瞳を見開いていたけれど、沈黙したままだった。

「おまえ、やっぱ嘘つきだよな」

「何……？」

突然のおれの指摘に戸惑う静流の左手をつかみ、目の高さに持ち上げる。その指先は、白く硬く膨らんで、つるつるで指紋もないくらいだった。

「弦だこ。悠斗の左手と同じだ。ギターを毎日弾いて弾いて弾きまくってないと、ここまでならねーだろ？　なにが『練習とかめんどい』だよ、大嘘つき」
「……………」

静流はパチパチと瞬きしてから、やがて、深々とため息をついた。降参したというように両手をあげる。

「あゝもう、わかったよ。オレの負け。バンドに入る。てか、入れてください！」
「よっしゃー！」

ガッツポーズをするおれに苦笑を浮かべていた静流の瞳が、ふと、不敵に煌いた。

へ？　と思った瞬間、ぐい、と引き寄せられて、頬に、柔らかい何かが触れる。

うわああああ！？

「な、何すんだよ、いきなり！」

キスされた頬を押さえながら大きくあとずさったおれに、「ご褒美くれるっていったでしょ？」と涼しい顔で微笑む静流。
そしてその目に挑戦的な光を宿して、言った。

「でもセンパイ、オレを本気にさせたんだから……覚悟してね？」
「ああ、一緒にいい音楽作ろうぜ」

なんだか、音楽的な意味だけじゃない何かが含まれてそうな台詞だったけど、そっちは華麗にスルーすることにした。

超好みの顔立ちだからこそ、煽情的な眼差しで見つめられると心臓に悪い。だからこいつはいくら可愛くても男なんだって！

……でもおれは今女だから、問題ないのか？ いや、ある！ なに惑わされそうになってんだよ、おれ！

視線を流した先で、硬い表情でケータイを耳に当てる煌の姿があった。

「……ダメだ、やっぱり、つながらない。おまえら、オーナーへの挨拶任せていいか？ 俺からもまた後で謝つとくけど……ちよつと梓茶の家まで行ってみる」

「あ、煌、おれも……」

一緒にいく、と言い終わる前に、煌は荷物もそのままに飛び出してしまった。ライブ中は快活でそんなそぶり見せなかったけど、そうとう心配していたらしい。

そうだよな、考えてみれば、何か事故とかに巻き込まれたって可能性もあるもんな。

王子はメインキャラだし、まさかいきなり命を落とすなんて急展開はないと思うけど……ステージに立ったとたん、あいつのことも頭から吹っ飛んじゃうなんて、おれ、すっげー薄情もんだ……。

自己嫌悪に襲われながら、どうか無事でいてくれ、と心から祈ったけれど。

結局、王子からの連絡はないまま、その日は終わったのだった。

翌日の学校にも、王子の姿はなかった。

「補習も休んでるらしいから、また家にかけてみたら、執事が出て『お取次ぎできません』って応じられた。昨日ライブハウスからあいつの家までたどったけど、特に事故の形跡なんかはなかったし、念のため警察に確認したけど、事件の報告もないって」

部室での煌の説明に、とりあえず体は無事っぽいなと一同、胸をなで下ろす。

「これは俺の勘だけど……監禁されてんじゃないかな、あいつ」
「監禁！？　って自宅に？」

びつくりして問い返したおれに、煌は神妙にうなずく。

「梓茶、最近、バンド活動を親に反対されてたらしいんだよ。あそこの親父さん、厳格で『バンドなど不良のやることだ』って思い込みがあるらしくて……理事長であるお袋さんの方はまだ理解があつて、この部室も作ってくれたりしたらいいんだけど」

「じゃ、昨日のライブも親父さんが出演させないように無理やり家に閉じ込めてた、ってわけ？」

「ああ。あそこの家は召使も大勢いるし、たぶんSPとかに囲まれて、抜け出すことができないにいるんだと思う」

「まさか、自分の親とそこまでこじれるとは……」

「王子先輩は、その辺の交渉は得意そうなのに、ちょっと意外だな」

三人の声を聞きながら、おれは、頭を抱えていた。

おれの、せいなのかもしれない。おれがあいつに以前言った言葉。

『親にもさ、もっと自己主張していいんじゃないかと思うぞ？　まだ高校生なんだし、そこまで物分りいい振りしなくていいって』

王子と父親が、実際にどんな親子関係にあるのかとか全然知らないくせに、無責任にアドバイスした。結果として、あいつをピンチに追い込むようなことに……！？

「俺たちはまだしょせん子どもだしな。養ってもらっている立場にある以上、成人までは、最終的な決定権は全部、親にある……」

煌らしくない台詞だと思ったけれど、妙に重みがあつて、胸を突かれた。そりゃあ、そうだけど……。

「でも、それじゃ王子の意志はどうなるんだよ！？　子どもは親の人形じゃねーだろ！？」

「そう思つて、王子先輩も行動した結果が、今の状況なんだろうね」
「梓茶の奴、ああ見えて頑固だから……基本的に柔軟だけど、一度こうと腹を決めたら、あいつも譲らない。このまま親父さんが折れなかったら、いつまで膠着状態じゅうちやうが続くのか……飯とか、ちゃんと食つてんのかな」

『COLORFUL』は王子が作ったバンドで、このバンドに一番思い入れが強いのもきつと王子だ。

毎日練習を重ねてオーディションをクリアして、ようやくたどり着いた大事なライブを放棄する形になってしまった、そしてその結果すらわからない今の状況は、どれだけあいつを苦悩させてることだろう。

このまま親との平行状態が続いたら、王子はどうするんだろう。絶望して自殺　なんてことはいくらなんでもしなないと思うが、交渉手段としての自傷……くらいなら、下手したらやりかねない気がした。

……おれが、余計なことを言ったせいで？

いや、これはあらかじめ決められたシナリオなのかもしれない。

どっちでも関係ない。そんなの、運命論と一緒に無意味だ。

人生のあらゆる出来事が、すでに運命で定められたものだとしても、おれ達はその時その時でできる選択をしてせいっぱい乗り越えていくしかないんだから。

青ざめて唇をかみしめるおれの肩に、悠斗が励ますようにぐつと手を添えた。

「とりあえず、北王子の家へ行ってみよう。何ができるか分からないが、ここでじっとしてるよりはましだろう?」

45・王子をとりもどせ！

最寄もよりという駅から歩くこと数分。なんだか白くて高い壁がずーつと続くのでなんの施設かと思ったら、これが北王子邸の外壁だったらしい。

複雑な装飾が施された外門は、竜を思わせる取っ手がついた分厚い鉄製。正面からの強行突破は、どう考えても無理そうだ。

「とりあえず、なんとかして王子に会いたいよなあ。どっかに秘密の抜け穴とかねえのかな？」

「そんなものあったら、防犯意識低すぎだろう」

「庭の木にロープを投げて結びつけて、それをつかんで壁をよじ登る！」

「そう都合よく侵入者を受け入れるような場所に木は植えないと思うよ？」

「じゃあロッククライミングみたいに壁に釘を打ちつけて登っていかとか……煌ならできそう」

「器物破損は避けたいし、中にはダブルマンが放し飼きういいされてるらしいぞ。ちゃんと躡しづけられてるから、睡眠薬入りの餌えさなんかも食べないって」

伝統的な侵入方法の数々を、片っ端から否定される。むづ。

「正攻法で行こう」

そう言った煌は、インターホンを押した。

『はい』と若い女の声。メイドさんだろうか。

「こんにちは。俺たち、梓茶くんと同じ学校の友人なんですが、梓茶くんにお取り次ぎ願えますか？」

『申し訳ございませんが、梓茶様は体調を崩されておりますので、本日はお引き取り下さい』

丁寧な口調でピシリと断られたが、煌はレンズをじっと見つめて食い下がる。

「インターホン越しに話すだけでも、無理ですか？　お願いします、笹木さん」

名前を呼ばれた女は少しだけ沈黙してから、「無理です」と困ったように答える。

『金城さんのお願いなら聞いて差し上げたいのですが、旦那様の命令なのです』

……なんか、ちょっと親密そうな雰囲気だぞ。

「じゃあ、梓茶のお父さんとお話させてもらうことはできませんか？　もちろん、今すぐでなくて、時間と場所をご指定いただければ、出向かせていただきます」

真摯^{しんし}に頼み込む煌に、笹木さんは『しばらくお待ちください』と一度離れた。

「煌先輩もスミにおけないね」

ふふ、と含み笑いをする静流に、「一緒にするなよ遊び人」と顔

をしかめる煌。

「たまたま前に遊びに行った時挨拶して、声と名札を覚えてたメイドさんだったんだ。名前呼ばれると心理的な距離も近づいて、頼みこともきいてくれやすくなるかと思って」

人の名前と顔を覚えるのが苦手なおれからしたら、羨ましすぎる能力だ。

「梓茶に会えないなら、親父さんを説得しよう。説得とか偉そうな立場じゃなく、頼み込む、が正解かもしれないけど」

煌の言葉にうなずいていたら、インターホンの向こうに笹木さんが戻ってきた。

『そちらに、羽鳥和希様はいらっしゃいますか？』

「は、はい！」

『羽鳥様とならご面会したいとの旦那様のご意向です。ただいまお迎えに上がりますので、お待ち下さい』

おれだけ……？ と戸惑ったが、心配そうな三人の表情に気付き、無理やり笑ってみせた。

「よし、王子はおれが必ず救い出して見せる。おまえらは、先に帰つてろ」

それにしても『お迎え』ってどーゆーことだ？　と思ったが、開かれた外門の中を見て、納得した。　広すぎる。アホみたいに広いのだ。庭が。

なんで東京にこんなベルサイユ宮殿もどきがあるんだよ！　遊びすぎだる製作スタッフ。

敷地内を車で運ばれ、お城のような豪邸へ案内される。

バロック調とロココ調が融和したキラキラした内装に圧倒されつつ、通された客間（というよりホール？）でしばらく待っていると、板垣退助のようにひげを伸ばした、いかめしい顔つきのおっさんが入ってきた。

なぜか紋付はかまを身につけてるのが、思いつきヨーロッパ的な周囲との間に物凄いギャップを醸し出している。

「梓茶の父親、北王子菊光だ。君が、羽鳥和希くんかね？」

ソファに腰を下ろし、ギロリ、と鋭い目線で睨んでくるおっさんは、全然王子に似ていない。その迫力にのまれないように、「はい」とはつきりと答えると、王子父は、「率直に言おう」と切り出した。

「これで、梓茶と別れてくれ」

同時に付き人が机の上に載せたのは、ピカピカ輝く金塊。

は！？

目が点になって固まるおれに、「足りないか、ではこれでどうだ」とひよいひよいと積み上げられていくまばゆい山。

「ちょ、ちよつと待った！　いや、別れるも何も、おれ達はまだ付

き合ってもいないし」

「なにに！ 梓茶とのことは遊びだというのか！？」

「いや、そうじゃなくて！ 王子は大事なバンド仲間であって、そういう関係じゃありません」

「嘘をつけー！ おまえがバンドを餌に純粋な梓茶をタラシこんだんだろう！？ この悪女が！！」

「なっ……」

言葉を失うおれに、王子父は「確かに梓茶はいい男だ……」と遠い目をして語り始める。

「優しく、賢く、美しく、数多くの才能に恵まれ、にもかかわらずそれを鼻にかけることもない生まれながらの貴族。まさしく神々の寵児。ちやうじ歩くノブレス・オブリージユ。感受性豊かで慈悲深く高潔、なのに少し天然なところもどうしようもなく魅力的だろう」

……なんだこのおっさん。驚異的な親バカ……！

「可愛い可愛い一人息子だ。幸せになってほしい。だから、親として最高の縁組を考えてある。君は辛いだろうが、梓茶にはすでに決まった女性がいるのだ。諦めてくれ」

「その女性つてのが、綾小路麗華サン？」

「そのとおり。あれは、いい女だ。才色兼備のナイスバディ。むしろ性格も悪くない。華族の血をひく由緒正しき家柄で、血統も申し分なし。何より……梓茶を深く愛してくれている。これ以上の女性
は他にいないだろう」

「……でも、親たちがうるさいから場当たりの契約での交際だったってきいたぞ？」

おれの指摘に、ふふん、と王子父は鼻を鳴らした。

「最初はそうだったらいいな。だが、麗華さんは話してくれた。付き合っているうちに、どうしようもなく梓茶のことを好きになってしまった。契約恋愛なのにこれ以上本気になると苦しいので、嘘をついて別れたけれど、どうしても忘れられない。梓茶のことを想うと気が狂いそうなほど愛している」と……あんな女性にこれほど想われるのだ、幸せにならないわけがない」

なるほどな……麗華サンは片思いの苦しさに、手段を選ばず一日だけとわかってでも王子とデートしたかったってことか。たしかに、ちよつと気の毒ではあるけど……。

「でも、王子の気持ちは！？ 王子は相手は自分で選びたいって言ってるんでしょう？ バンドもそうだよ。なんでも自分で決め付けず、まずちゃんと王子の話を聞いて下さい」

「うるさい！ 子どもの害になるものを取り除くのは親の責任。バンドなどくだらん不良の遊びだ！」

「ふざけんな！ 遊びかもしれないけど、おれ達は真剣だ！ くだらなくなんかねえ！ あいつがどんだけ自分のバンドを大事に思っ—一生懸命やってきたか、知らね—くせに勝手なこと抜かすな！ あいつのためつつつてもあいつの気持ちをくみ取ろうともしないで何が幸せだ！ そんなただの親のエゴの押し付けじゃん！？」

高圧的な怒鳴り声とあまりの独善つぷりに堪忍袋の緒が切れて、思いっきり啖呵^{たんか}を切ってしまった。

やべ、と思ったときには、王子父の顔は真っ赤で、怒りにヒクヒクと引きつっていた。

「この小娘を、つまみだせ」

45・王子をとりもどせ！（後書き）

いつのまにやら40万PV&7万ユニーク達成。

いつも妄想にお付き合いただき、心から感謝しております。

自分でもビックリのこの更新ペースはひとえに温かい応援あればこそ^^*

今後もしよろしく願います。

でもってまたしょーこりもなく、帰ってきたダメ企画。

『勝手にキャラソン@歌ってみた。Part2』

<http://www.nicovideo.jp/mylist/26470300>

今回は完全乙女専用の選曲です。

意外とヒロインが好きと言ってくれる方が多いので、和希のイメージソングも追加。

皆さまあまりにも美声vv 神曲&イケボ天国、ごちです

（ダメ企画その1 <http://www.nicovideo.jp/mylist/17544452>）

46・キタオウジ宮殿的一幕（前書き）

シリアスかコメディか迷いつつこんな配分に。

46・キタオウジ宮殿的一幕

命令とともに、SPたちに両腕をつかまれ、ドアの方へと引きずられる。

「は、離せっ！　なあ、よく考えてくれ！　王子はきつと今、すごく苦しんでる。大事なものを親に否定されて、奪われて、それが幸せなのか！？　王子を大切に思うなら、どうかあいつの話をきいてやってください！　お願いします！」

「うるさいうるさいうるさい！　いい加減に……」

「　　いい加減にするのは、あなたです」

わめくような王子父の言葉をさえぎるように、扉が開かれた。

現れたのは、王子。疲労が色濃く、少しやつれてはいたが、無事が確認できてホッとする。

王子はおれの方を見て、喜びと痛みが入り混じったように瞳を^{すが}睨めたが、すぐに厳しい顔つきに戻り、父親に向き合った。

「すぐに和希ちゃんを解放して下さい。彼女への無礼は、いかに父さんといえど、許しません」

背筋が凍るような冷たさで言い放つ王子に、王子父は顔をしかめ、「手を離せ」とSPたちに命じた。

「この女とバンドに打ち込むようになってから、おまえは変わった。昔のように素直でなくなり、わしと話をしてもどこか上の空。成績も下がったではないか……！　全てはこの女のせいだろう！？」

拳を握り締め、うなるように言う王子父に、王子はフツとこいつ

にはかなり珍しい、皮肉な笑みを漏らした。

「そうですね……たしかに、彼女のせい、とも言えるかもしれない。
でもそれは、僕が彼女に　恋をしたから」

瞬間、愁いに満ちた王子の背後に、大量の薔薇の幻が出現した。
うおおっ、新技！？

「バンドは、一人ではなく複数で音楽を奏でる喜びをくれると同時に、心を許せる友人を僕に与えてくれた、宝物です。一緒に試行錯誤しながら新しい音を作り上げる、その過程で、僕がいつも無意識に他人との間に築いてしまう壁も崩れていった。

みんなで合わせることで生まれる音は、美しくて、楽しくて、刺激に溢れて……彼らとの時間は、僕が今まで味わったことがなかったくらい、幸せで、満ち足りたもので……そして、そのきっかけをくれたのが、彼女だった」

……あ、穴があつたら入りたいというのは、こういう気分なのだろうか。なんとも気まずくて、おれは黙ってうつむくしかできない。

「馬鹿をいうな！　どこがいいのだ、こんなちんちくり……！？」

狼狽したような王子父の叫びは、不自然に途切れた。

何が起こったのかと顔をあげると、王子父の頬に一筋の赤い糸がはしり、その後ろの壁には、一本の薔薇が突き刺さっていた。

投げた！？　この薔薇、王子が投げた！！！！？？？

タキ　ード仮面様！？

「彼女への侮辱は許さない」

まっすぐに伸ばしていた腕を畳み、もう片方の腕に添えながら、王子は真剣な表情で父親を見据えた。

「和希ちゃんは世界中の誰よりも魅力的です。和希ちゃんに会って、世界は変わった。和希ちゃんは僕の太陽だ。和希ちゃんのいない人生なんて、もう考えられない……！」

あああああああ、助けてくれ。恥ずかしすぎて、死にそんなんですけどおおおお。

王子の告白に、しん、と静まり返った部屋。その片隅で悶絶するおれ。

静寂を破ったのは、凜と響く新たな声だった。

「あなたの負けよ、菊光さん」

どこから、と視線をめぐらせると、おれ達の頭上、左後方のバルコニー部分からゴンドラが下りてきて、それに乗ってる女性が発したものだった。

もう、どうなってんだよ、この家族……！

髪を高く結い上げた女性は、王子によく似た、気品漂う落ち着いた美人だった。王子は母親似なんだな。

「梓茶が今までこんなに自己主張したことがありましたか。梓茶は優しいけれど、自分の気持ちを押し殺すようなところがあって心配していたけれど……わたくしは、息子の成長を喜ばしく思います。そして、なにより嬉しいのは、梓茶がこんなにも心から愛せる女性

にめぐり合えたこと……」

玲瓏^{れいろう}とした声で語る王子母に、王子父はしばらく沈黙し、目を閉じていた。

やがて、どこか悟りを開いたような力の抜けた風情で、うそぶく。

「……もう、『パパン』と足に絡み付いてきた幼い梓茶ではないのだな」

パパン……！ そのナリでパパン……！

「わかった。結婚を認めよう」

「……って待てい！ 話飛びすぎだろ！？」

怒涛^{うたう}の展開からようやく持ち直してツッコんだが、この王室は聞く耳など持たないらしい。

「ありがとうございます、幸せになります」

晴れやかな笑顔の王子に肩を抱かれ、おれは抵抗することの無駄を悟り、ガクリと首を垂らした。もうやだ、こいつら。

車で外門まで送り届けてもらう途中、「ちょっと停めて」と同席していた王子の声。

「ちょっとだけ歩かないかい？」

立派な噴水や花壇、ブロンズ像などが配置された庭園の散歩道は、

木陰になっでいて、噴水から飛んでくる細かな水しぶきのおかげもあつて、とても涼しかった。

「おまえの父親、会社のために子どもを道具に使つてゐるのかと思つてたけど、そうじゃなかったな。会社の方は建前で、おまえに良かれと思つての縁談だったみたいだぜ」

おれの言葉に、王子は複雑な笑いをもらす。

「うん……知らなかった。そういうことなら、そう言つてくれたらいいのに……素直じゃない人だよな」

「表現方法は強引だけど、ちゃんとそこに『親の愛』ってやつがみえて、おれはホツとしたな。まー、思い込み強すぎて大変だろうけど、ちゃんと話し合えれば通じない人じゃないことがわかつたし」

「その『話し合う』まで持つていくのが、いままでできなかったんだよ。それで、お互いずっと誤解して……今日君が来てくれなかつたら、きつともつとこじれていたと思う。心から、ありがとう。君のおかげだ」

穏やかに、真心のこもつた感謝の言葉を述べられて、少し頬が紅潮した。

「おれは特になんもしてねーよ。カツとして怒りをあおるようなことと言つて、つまみ出されそうになつただけだし。おまえが勇氣出して本心ぶつた結果だろ」

照れてゐるのを誤魔化したくて仏頂面で応えたところ、王子はクスツと口元を緩めたけれど、次第にその表情にはみるみる陰が広がつていく。

「……昨日は本当に、ごめんよ。閉じ込められて、どうしても抜け出すことができなかった。いくら謝っても、謝りきれものじゃないけど……」

「大丈夫だ！ 静流と一緒にステージに上がって、フォローしてくれたから。完璧、とはさすがに言えなかったけど、いいライブだったぜ。それに、おかげで静流がバンド入るって言うてくれてさ。怪我の功名ってやつ？」

「へえ……それは、すごい収穫だね」

少し驚いたように目を見開いたが、それでも王子は落ち込んだ様子。おれは、明るい口調を意識して、続ける。

「オーナーも心配してくれてたから、ちゃんと事情を話して謝ればわかってくれると思う……もちろんおれ達も、また一緒に謝るし」

王子はしばらく沈黙してから、思いつめたような悲壮な表情で、苦しげに吐き出した。

「僕は……バンドを続ける権利があるんだろうか。許してもらえんだろうか。みんなに」

「はあ！？ あったりまえだろ！ だって」

ちょうどそのタイミングで、外門に到着した。

開いていく扉の外に立っていた三つの影が、王子の姿を目にした途端、それぞれの顔をパツと輝かせる。

「みんな、おまえのこと、すげー心配してたんだから。な？」

もみくちやにされながら、王子は少し泣きそうな小声で、「うん」と答えた。

47・召しませ浴衣

バンド練習を基盤にステータスアップに打ち込むうちに、日々はあつという間に流れ、カレンダーは8月に変わった。

補習授業が終わっても、おれ達はある限り毎日学校に集まって練習に励んだ。

メンバーが5人になったことでより演奏に厚みが出たし、自由度が広がり、更に楽しくなった。バンドの持ち曲も増え、個人個人の技術は磨かれ、互いの呼吸もかなりつかめるようになってきて、2度目に挑戦したライブは文句なしの大成功。

そんないい流れできていた8月中旬の日暮れ時。

「ただいまー」

「おかえり！　ここで会ったが百年目！　待ちわびたぞこんにゃろー！」

スーパーハイテンションで玄関先に飛び出してきたおれに、バイトから帰宅した煌は目を丸くした。

「何事だ？」

「今日、新譜が配られたんだ。王子と静流が二人で作った超名曲！　関東大会はこれで行こう！」

「へえ……どれどれ」

靴を脱ぎながら、おれが渡した楽譜の束に目を通していた煌の口元に、徐々に、大きな弧が描かれていく。すべてをめぐり終わると、はあーっと深い吐息を漏らした。

「これは、すげーな。難しい。けど、全パート文句なしで、マジでカッコいい」

「だろ！？ もうおれ興奮しちゃって……あいつら天才だよ！ これをステージで演奏するとか、想像しただけでドキドキする！」

「歌詞もいいな。でも、大会まであと2週間か……この難曲を仕上げようと思うと、今回も相当ギリギリになるんじゃないか？」

「だから来週のどこかにでも、王子の別荘で2泊3日で合宿やろうって話になってる」

「3日間練習漬けか……おもしれーじゃん」

煌はもう一度楽譜に視線を落とし、空いた片手でもう片方の腕をぐつと握った。

「やばい、イメトレだけでも今すぐしてえ……けど、先にメシ作んなきゃな」

「おまえ、バイトで疲れてるだろーし、今日は出前でもいいぜ。たまにはのんびりしろよ」

自分で作るうとは言わないおれ。だって作れないし。……ちょっとくらいは覚えた方が良くないかもしれないが。

煌は「じゃそーするか」とうなずき、リビングに上がってくる。

店屋物のメニューを取り出して渡した時、窓際の風鈴がちりんちりん心地よく鳴った。

「夏祭りって、いつなんだろうな」

おれの唐突な言葉に、テーブル向かいでメニューを眺めていた煌が不意を突かれたように顔を上げる。

「いや、夏と言えば海、花火、スイカ、かき氷にお祭りだろ？ 海、花火は合宿で補強できそうだけど、お祭りはどうなんだろうと思つてさ」

「そういえばお姉ちゃん。今日ちょうど、通販で頼んでた浴衣ゆかたが届いてたよー」

扇風機の前に陣取ってマンガを読んでいた芽生が発した一言に、
「浴衣！？」と食いついたのは煌だった。

「いいな浴衣！ 見たい。和希、着てみるよ」

「は！？ やだよ、祭りいくならともかく。面倒くさい」

そもそもおれじゃなく、姉貴が勝手に注文してたものだしな……。素っ気なく返すと、煌は「今日って13日だよな」と呟きながらケータイをいじり始めた。

しばらくして、ニヤリと会心の笑みを漏らす。

「折しもうちの地元の神社で夏祭りが絶賛開催中だ」

「って今日！？ 今から！？」

急展開にビビるおれに、煌は手を口元に添えると身をかがめ、「わたあめ。イカ焼き。かき氷……」と歌うように耳のそばで囁ささやき始めた。

「おまえ、おれがそんな簡単に食べ物でつられると……」

「焼きモロコシ。カルメ焼き。チョコバナナ。たこ焼き。焼きそば。ラムネ。リンゴ飴……」

催眠術をかけるかのようにうそぶかれる美声とともに、脳内を巡

る、甘い誘惑。なんだか、こうばしい香りが漂ってくるような錯覚まで覚え……いつのまにかのどにいつぱいたまっていた唾をゴクリと飲み込むと同時に、おれは自らの敗北を認めた。

「……行くよ、行きますよ、連れて行ってください！」

「あの子……そんなに、見ないでほしいんですケド」

電車の中、ドアのそばの隅^{すみ}っこに立ちながらおずおずと切り出したおれに、煌は「無理」と即答した。

「おまえの浴衣姿なんて、次いつ見れるかわかんねーじゃん。心のアルバムに活写しとかねえと。ってそうだ、写真！ 写メはOK？」
「NG！」

力いっぱい否定してやったら、煌は「ケチ」と唇を尖らせたが、またすぐに目元を和ませた。

「……おまえ、今日はお緩み過ぎだから」
「そりゃーそうでしょう、目の前にこんな和希がいるんだから」

堂々と言い切って、極上の笑顔。

「最高に可愛い」

……消えたい。

煌の地元は、電車を1回乗り換えて40分くらいの場所にあった。駅の近くの神社で催されていた夏祭りは、なかなか規模がでかく、ものすごい人の数だった。

「さ、どこから回る？」

そんな言葉とともにさりげなく手をとられて、あわてて引っ込めた。

「な、なにすんだよ！」

「だって、この人ごみだぜ？ ちゃんと繋いでないと、はぐれる」

「だからって手なんか握れるかよ！」

「じゃあどうするんだ？」

おれは少し黙考してから、煌の浴衣の袂たもとをギュツとつかむ。

「これでいこう」

「……………」

煌はぼかんとしたように少し口を開いてから、なぜかぱつと顔を背けた。ため息交じりにぼそりと呟く。

「……………とに、凶悪……………」

「なにが。おっと、イカ焼き発見！ 突撃　！」

47・召しませ浴衣（後書き）

なんだこの甘々モード……！

さりげに煌も浴衣着用。高校生の浴衣デートとか、当時はさほど興味なかったけど今は猛烈に憧れます。がんばるときゃよかった！色々と！

48・夏祭り

笛や太鼓の祭囃子。まつりはやし 屋台の呼び込み。喧騒けんそうとざわめき。
蒸し蒸しする真夏の夜だが、いくつもの提灯ちやうちんの光に照らし出される人々の表情は、興奮がにじみ、どこか浮かれている。この独特のお祭りの空気、どうしようもなく大好きだ。

「お祭りで食べるかき氷って、なんでこんなに美味しいんだろうな」
人の波から少し離れたところでほくほくと甘味を堪能していたら、煌が「……うん」とうなずき、かすかな笑みとともにしみじみとしたように言った。

「やつはおまえは、笑ってるのが一番いいよな」
「……んなこと聞いてねえし！」

クソッ、あまりの不意打ちでうつかり赤面しちゃったじゃねーか。
てかなんだよこのイベント、おれをいじめ殺す気が……！

「そつえば悠斗！ よかったよ。剣道部復活してくれて」

おれの言葉に、煌もラムネを一口含んでからこくりと首肯した。

「ああ。主将やコーチに泣きつかれるような形で慰留いりゅうされて、断りきれなかったんだって？ あいつ、あー見えて頼られるとほっておけない性質だよな」
「同感。いい奴だよな。なのに、なんで静流は悠斗を嫌ってるんだろっ」

おれの疑問に、煌は「そうか？」と首をかしげる。

「俺には、そうは見えないけどな。ほら、静流って可愛いけど、ちよいひねくれもんだし。……これはかなな情報だけど、あいつら、3年前に静流からの提案でユニット組んで、音楽コンクールのキッズ部門で全国大会まで行ったらしいぜ」

「マジ！？ あの二人が！？ まあ実力的には優勝とかでも全然おかしくないけど……結果は？」

「それが、全国大会当日に、ユニット解散で棄権したんだって。しかも、詳しくは分からないけど、どうも静流からの要望らしい」

……それはまた奇怪な。

自分から誘っておいて解散主張って超ワガママっぽいけど、静流は年齢のわりになかなりオトナな奴だ。気まぐれなところはありそうだが、ただ感情的に周りを振り回すようなタイプじゃない。……まあ、3年前のあいつはまだ小5だから、精神的にも今よりずいぶん幼かっただろうけど……。

でも、そんな過去があるなら、むしろ悠斗の方が静流を嫌っていてもよさそうなのに、悠斗は自分にだけ冷淡な静流の態度にも特に傷ついたそぶりは見せず、普通にしているのも不思議だった。

「本当に嫌いな奴になら、ユニット組もうなんて持ちかけないだろう？ 組んでから性格が見えてきて険悪に、て可能性もなくはないけど……なんか事情がありそうだよな」
「たしかに」

煌の言葉に同意してから、おれは半分溶けたかき氷を一気に飲み干して 首の後ろがキンとなってしばらく悶絶するはめになった。

……コラ煌、てめえ、笑いすぎ……！

その後も気ままに縁日をのぞきつつ、金魚すくいや食べ歩きをしていたら。

「あーっ！ 煌じゃん！」

「うそっ煌！？」

「うわー、会いたかったー！！」

にぎやかな声とともに、見慣れない男女グループが近付いてきた。

「なんだよ、いつのまに帰ってきたの？」

「金城先輩、ひどいですっ！ 何も言わずにいきなり転校しちゃうなんて……」

あっという間に取り囲まれた煌は「おお、久しぶりー」と破顔はがんしながら、「前の学校の友達」と説明してくれた。そっか、地元だもんな。

「その子、誰？ 煌、とうとう彼女つくったの？」

一人の男子の質問に、無邪気そのものの笑顔を浮かべていた女子グループが一斉に値踏みするような視線を送ってきた。マジこええ。

「ああ、こいつは」

「友達！ ……煌、おれあっちの境内けいだいの方で待ってるわ。久しぶりだろうし、ゆっくりしていいから」

それだけ告げて、その場から離れた。

電車で40分ならまだ通えない距離じゃないし、前の学校でも友

達多かったみたいなのに、本当にどうして転校までしたんだろう、あいつ。

屋台の列から外れた境内の方には、祭りの喧騒けんそうを逃れ、親密そうに話し合ったり、身を寄せ合うカップルの姿が目立った。

賽銭箱さいせんのそばの石段に座り、ちらほらと目の前を行き交う祭りから帰る人、逆にこれから行こうとする人々を眺めていたら、やけにきんきやんとテンションの高い女子グループの声が神社の階段の下から近づいてきた。

「ねえ、何から回る？」

「まゆか、リンゴ飴食べたあゝい」

「旺真様は、リンゴ飴好き？」

……ん？ 旺真？

耳に入った名前に思わず目をやると、果たして階段を上ってきたのは派手めのナイスバディ美女を何人もはべらせた魔王だった。

「……和希」

いつもの不機嫌そうな仏頂面だった魔王は、おれに気づくと目をかすかに見開き、フツと唇の端を吊り上げた。

「ねえねえ、旺真様あゝ」

「うるさい」

からみ付いていた女達を振りほどくと、ズンズンとこっちに近づいてくる。

「ちょっと、旺真様、何……」

「貴様らは即刻立ち去れ。邪魔だ」

振り返り、冷徹に言い放った魔王に、女達はぽかんとあっけにとられたように、魔王とおれを見比べる。

「聞こえなかったか。俺を怒らせなくなったら、帰れ」

ビシリと響き渡った宣告に、大きく顔を歪めながら、女達は上ってきたばかりの階段をまた降りていく。全員が去り際、おれを憎悪のこもった瞳でにらみ付けてから。

なんでここで恨むのが魔王じゃなく、おれなんだよ……不条理だろ。

「久しぶりだな」

「久しぶり……だけど、おまえ、今の扱いはあんまりだろ？」

立ち上がってパンパンと砂をはたきながら、非難の言葉を投げたおれを、魔王はフン、と鼻であしらう。

「いつのまにやら勝手についてきた有象無象どもよ。俺の行動の決定権は俺のみにある。俺は、今宵はおまえと過ごす」

勝手にそう宣言すると、おれの肩を抱きさつさと歩き出す魔王。

「行くぞ」

「ば、馬鹿言っな！」

「浴衣姿ともなれば、おまえでも多少の色気が出るようだ。なかなか

かに艶やかでよい……」

「んなことどーでもいいから！ 離せ、おれだって連れがいんだよ」

「関係ない」

「ないわけあるか！ おまえワガママすぎ。いつもなんでもかんでも自分の思い通りになると思っなよ」

手を振り払いきっぱり言っでやると、魔王の顔がみるみる険しくなつた。

「なぜ……おまえは……！」

いら立たしげに呻うめいてから、鋭い目で見据えてくる。

「何が欲しい？ 欲しいものは、なんでも与えてやる」

「！？」

「金か？ ダイヤか？ ブランド品か？」

「んなもん……興味ねーよ」

いいながら、ゆらりと迫ってくる魔王の迫力に圧されて、徐々に足が後ずさる。

「目が眩くらむような宝飾品も、頬が溶けるような美酒美肴びしゅびやくも、甘美な忘我むじくと恍惚くわくも……俺の元にくればいくらでもくれてやる」
「なに言っで……」

ドン、と背中が大きな木にぶつかり、行き止まる。衝撃で、アツプした髪に挿したかんざしの鈴がシャランと大きく音を立てた。

おれの左右に両手について見下ろしながら、艶美な低音で魔王は囁ささやいた。

「あんな女ども、千人集まろうと、おまえには及ばない」
「……！」

すぐ間近で切なげに揺れる、翠がかつた瞳。
蠱惑的な香りが鼻腔をくすぐり、脳が痺れ、力が抜ける。

「俺の女になれ……和希」

耳元で吐息交じりに懇願され、ゾクリ、と自分でもよく分からない
感覚に肌が粟立った刹那

「和希から離れろ。旺眞」

鋭い刃物のような、絶対零度の怒りを秘めた声が空間を切り裂き、
魔王はぴたりと動きを止めた。

48・夏祭り（後書き）

一転、修羅場です。

49・転校の理由（前書き）

色々辛いけど、どうかお付き合いくださいorz

49・転校の理由

「また俺の邪魔をするのか、金城煌」

「邪魔なのはおまえだ。和希はもともと俺と来た。いまずぐ離れな
いと」

ゾツとするほど冷酷な光を目に宿しながら、両手を強く握りしめる煌。

魔王は凍りついたような無表情でゆるゆると身を起こすと、フン、と嘲るように鼻を鳴らした。

「もともと？ だからどうした。これは俺のものだ。貴様などに譲る気はない」

「譲るとか譲らないとか、人のこと物みたいに言うんじゃない
！」

響き渡ったおれの一喝に、二人がかすかに身じろぎした。

「魔王、煌の方が筋が通ってる。悪いけど……」

そう言いながら離れようとしたおれに、魔王の眉が跳ね上がった。

「……なるほど」

愕然^{がくぜん}としたような表情から一転、美しい冷笑を口元に浮かべながら、その次に魔王が吐き出した言葉は。

「泥棒猫の息子も、泥棒か」

「！」

パン、と乾いた音が響いた。

切れ長の目をいっぱいに見開く魔王。煌も、飛び出しかけた拳もそのままに、固まっている。

「いい加減にしろ。……行こうぜ、煌」

赤みを帯びていく魔王の片頬を一瞥してから、おれはくるりと背を向けて、早足で歩きだす。本気で叩いた右の掌が、じんじん痛かった。

『キャラに嫌われるような言動は 』

また、芽生の言葉が蘇ったけど、その時のおれは本当に怒っていたので、どうしようもなかった。

黙ったまま歩き続けて、ずいぶん遠くまで来たときに一度だけちらりと振り返ってみると、黒いシルエツトがさっきと同じ場所^{たす}でまだそこに佇んでいた。

祭りを冷やかす気分でもなくなってしまつて、結局その後すぐに家に帰ることにした。

電車でもお互い言葉少なだったが、駅からの歩きの道で、おれは長く胸に抱いていた疑問を、ついに口にした。

「おまえが真海から美楠にわざわざ転校してきたのって、どうして

「？」

誤魔化さないでほしい……そう気持ちを込めて横から見上げていたら、目線は前に向けたまま、煌がぼつりと語りだした。

「俺の母親、旺眞の父親の愛人なんだ。俺が中3になったばっかの時から……今も」

「……」

おれの歩幅に合わせた、ややゆっくりの速度で歩きながら。端正な横顔のまま、淡々と続ける。

「うちは父親が、俺が小さい頃に亡くなって、その後母親は一度再婚したんだけど、また離婚して……でも、彼女は一人じゃ生きていけない人なんだ」

彼女。一歩引いたような言い方に、胸がギリツと痛んだ。

「俺は、彼女の新しい恋人が旺眞の父親だなんて知らないで、旺眞とバンドを組んで……夏頃、その事実を知って、脱退した。その時母親に問い詰めて、俺の真海学園への学費は全部旺眞の父親に出してもらってる事を聞いた。……学校やめてやるって一時は本気で考えたけど、どんなにしんどくても、高校は出た方がいってオーナーやバイト先の人たちに説得されて……我慢して通ってたけど、苦しかった」

『俺たちはまだしょせん子どもだしな。養ってもらっている立場にある以上、成人までは、最終的な決定権は全部、親にある……』

いつかのこいつの台詞が蘇って、そこに込められていた重みと痛

みに、やりきれない思いがした。

「住んでるマンションも、旺眞の父親に買ってもらったものだったから、家に居るのも辛かった。俺の日常は、人の家庭をぶち壊した歪みの上に成り立ってる、汚物にまみれたものと思えなかった。俺は、とにかく早く一人立ちしたくて、オーナーに無理言っただけ遅くまで働かせてもらってた。そんなさなか……真治さんに、再会したんだ」

「おれの父親に？ 再会って……」

青白い蛍光灯の下、煌はそれまでの感情を押し殺すようだった表情を少し和らげて、おれの方を見た。

「真治さんは、俺の父親の親友で。父親が死んだ直後や、母親の離婚の時……大変なとき、いつも親身になって助けてくれたんだ。でも、母親は真治さんを避けるようなところがあって、引越したりして連絡不通になってただけど、今年の四月の半ばに俺のバイト先にたまたま来てくれて。

どうしてこんな遅くまで働いてるんだって問い詰められて、事情を話したら、うちに……羽鳥家に泊まりなさいって言ってくれた。難しいけど、美楠には今年から学費全額免除の奨学制度もできたから、それも駄目モトで受けてみたらどうかって教えてくれて……そこまで甘えていいか悩んだけど、もし奨学制度に受かるなら許されるんじゃないかって、そう思うことにしたんだ。自分ルールってやつ」

「……なんだよ、それ。横断歩道で白だけで渡りきれたら今日はラッキー、みたいな？」

いったいどんな言葉をかけるべきか、全然わからなかったけれど、最後は煌が少しおどけるように言っていたので、無理矢理、苦笑し

てツツコんだ。

「そうそう」

「なるほどな……時期外れの転校は、そういう理由だったのか」

「うん。あ、あとさ、せつかくなら許婚いいなずけと一緒にの学校に通いたいじゃない」

「許婚……そーいやそーだったっけ。本気で忘れてた」

「あっひでえ。俺達は生まれたときから決められた許婚です。大事なことから二回言います。俺達は……」

「おれは認めてねえもん」

いつのまにか軽口うろこの応酬おうしゅうに変わっていて、煌がこのやるせない話を終わらせたがってるのがわかった。けど。

「ごめん、もう一つだけ質問。おれ達、この五月より前に、会ったことあるのか？」

ちえーつと拗ねすたふりをして歩き出していた背中が、止まった。

ゆっくり振り返った煌の顔は、影になってよく見えなかったけれど、闇の中から、「あるよ」と、静かな声が聞こえた。

「いつ？」

「中学の時、俺が見かけたの。おまえは、気付かなかったけど……歌、うたってた」

「どこで？」

「おまえ、一つだけって言ったじゃん。もう二つ答えたから、終わり」

「ケチ！」

むっ、と膨れて近寄ると、口の形をイーッとするように笑ういつ

もの煌の顔が見えて、なんかわかんないけどホッとした。

でも、謎は一つ解けたとはいえ……まだ色々隠してそうだな、こいつ。

49・転校の理由（後書き）

唐突ですが私、今まで「ヤンデレ」って「ヤンキー+デレ」かと勘違いしてました。

調べてみれば「病む+デレ」で、好きすぎてキャラがおかしくなっちゃった状態なのですね。おもしろそう！

と妄想刺激された勢いで、ガガッと短編一つ仕上げて同時アップ。

「『ときメロ』番外編？　〜和希バースデーを迎えるの巻」

<http://ncode.syosetu.com/n8332v/>

本編の流れガン無視の、一部キャラがポジティブに病んでるお馬鹿話。

みんないつもより壊れ気味ですが、よろしかったら、どうぞ。

追記。番外編、これは『ヤンデレ』とは違うところご指摘をたまわりました。あれ、勘違い（汗）ただキャラが暴走してるだけのようです……失礼しましたー。

50・合宿スタート

「……海だあああ！」

朝早く駅に集合して電車に揺られること約1時間半。窓の外に見えてきた、キラキラ日差しを反射して輝く青の広がり、おれは歓声を上げた。

「海！ 海！ ああ、早く泳ぎてえ〜」

「和希……遊びに行くんじゃないんだぞ？」

「センパイ、はしやぎすぎ。子どもみたい」

隣で悠斗がため息を漏らし、向かいの席では静流がプツと吹きだした。

「そーゆー静流は、せつかくの合宿初日だったのに、やけにテンション低くねえ？」

「昨日ちよつと夜更かししちゃって……あ、言っとくけど、女の子じゃないよ？ オレ、そーゆーのはもう止めることにしたから」

「『もう』って……おまえの親はその乱れた生活について何も言わないわけ？」

呆れて指摘すると、静流はぺロリと舌を出した。

「オレ、大学生の従兄いとこと住んでるから。美楠中等部に合格した直後、親の転勤が決まっちゃって、両親だけ九州に引っ越したんだ。オレの保護者兼監視役ってことになってる従兄も、彼女の家ごうせいに同棲状態どうせいでほとんど帰ってこないから、それを黙ってあげる代わりにこっちも遊びたい放題。成績さえちゃんと維持しとけばバレないもんだよ」

な、なんという由々しき事態。こうして不良少年が一人出来上がつてしまったというわけか……。

「けど、そーゆーのって、普通親父さんの単身赴任だよな。息子置いてまで母ちゃんもついてくって、そうとう夫婦仲いいんだな」

「それ言ったらセンパイの両親だってそーじゃん。まあ、思春期の子どもを野放しにしていくなんで迂闊すぎるよね……親がいたら、自分の娘に男4人と泊まりで遠出なんてまず許可しないと思うし」

さらりと言われて固まった。そーいや、おれ、すっかり男友達と旅行みたいなノリだったけど……よく考えたらけっこうヤバイシチュエーション!?

「そうだ、センパイ。悪い狼が夜這いかけたりしないようにオレが添い寝してあげようか?」

ポン、と名案を思いついたというように手を打つ静流に、「アホか」と通路を挟んだ席から煌がツツコむ。

「おまえが一番危険だっつーの」

「和希ちゃん芽生ちゃんと同室でいいかな? あとは僕と煌、蒼木くんと紫葉くんがペアになるうか」

王子の提案に、「はい」とご機嫌で姉貴が手を挙げる。小学生一人で留守番は不安だからって連れてくることになったんだけど……そういう意味では、芽生が一緒でよかったのかもな。やれやれ。

到着した駅から、迎えの車に乗ること約30分。緑に囲まれた景色の中に、いかにも金持ちの別荘然とした2階建ての洋館が見えてきた。

「1階の広間にドラムセットがあるから、そこを練習室にしよう」

各自部屋に荷物を置くと、さっそく練習に取り掛かる。人里離れた場所なので、音量も気にせず、思う存分13時までみっちりやった。

管理人さんの作ってくれた冷やし中華を食べた後は、お楽しみの

「海だあああー！」

すでに別荘で中に水着を着てきていたおれは、浜辺に到着するや即行で服を脱ぎ捨て、真っ先に駆け出して行った。

輝くような白い砂浜。青く高い空。エメラルドグリーンとコバルトブルーのグラデーションが美しい海。

ってか、綺麗すぎる！ どの南の島だよってくらいの、綺麗な海。

そして、全然混んでない。ここ、2次元なんだなあとこんなところでもた実感する。

「和希、ちゃんと準備運動をしてから……」

後ろから近付いてきた悠斗は、振り返ったおれを見て、変なタイミングで言葉を止めた。

かと思つと秀麗なその面が^{おもて}無表情のままみるみる赤く染まっていたので、ビビる。

「ど、どうした？」

「……準備運動は、しっかりやれよ」

それだけ言っで、自分はそのままざぶざぶと海に入っでいっでしまっで。

「センパイ、ヤバい。センパイの水着姿、めっちゃめっちゃ可愛い！」

そっで声をかけてきた静流も、頬がやや紅潮し、テンション高め。

あ、そか、水着か……。

胸元にリボンを結んだマリンボーダーのホルタービキニ。ビキニは嫌だ、と言っでたのに姉貴に却下され、フリルや花柄の他の候補よりはまだマシかと選んだ一品だっで。

まあ、この水着イベントで好感度下げないために、必死でダイエットしたり発狂寸前の全身脱毛したり、いろいろ苦労したからな。この三か月、朝夕のスキンケアやヘアケア、風呂上りのボディマッサーおよびストレッチ……を毎日続けてきた成果もあっでたのかも？ 『女の子』するってマジで大変。

「オレ、今ほどバンド入っで良かつたっで思っでたことないよ。ありがとっ、渚なげなのマーメイド」

とろけるような笑顔でお礼まで言われてしまっでた。でもマーメイドっでっでおま……。

ちなみに、胸にはちゃっかり補正パッドが入れてあるのは内緒だ。まるで本物のようになぶる揺れ、更には寄せて上げる機能でヒロ

インの小ぶりのバストでも見事な谷間ができています。『美容』パラメータ大幅上昇（ただし一回限り）の必殺アイテムらしい……「バシなきゃいいのよ」って詐欺なまたるコレ。

王子が手をかざし、眩しそうに目をすが睨めた。

「……まいったな。あまりにも君が綺麗すぎて、直視できない」
「……………」

「和希ちゃん、あまり沖のほうへ行つては駄目だよ……海の神様が一目惚れして、君をさらってしまうかもしれない」

頼むから真顔で言わないでくれ……。

一同浮かれる中、煌はなんだか複雑そうな表情だった。

「ちょっと、露出しすぎじゃねえか？」

「あ、やっぱり？ 背伸びしすぎかと思つてたんだよ」

「いや、最高なんだけど……他の奴には、見せたくないっつーか」

……………あーっもう、泳ぐぞ！！ 今日泳ぎまくるぞこん畜生
！！（やけ）

50・合宿スタート（後書き）

明日から帰省で執筆ができなくなるので、更新もしばらく止めます。
再開は10日後の予定。

サイトのログインはちよこちよこする予定ですが……

では皆さま、酷暑が続きますが体調に気をつけて良い夏をお過ごしくださいv

51・海辺の夏

鮮やかな青空の一部をトリコロールの球体が切り取る。

煌の狙い済ましたアタックが相手コートすみに突き刺さった
と思いきや、悠斗がすべり込んで辛くもセーブ。静流が高くレシ
ーブを上げ、稼いだ時間で起き上がった悠斗がバックアタックを放
つ。

体勢が整っていなかったのか、威力がそがれていたそれを煌はい
きなりオーバーバースで弾き、

「和希！」

「おう！」

電光石火のコンビネーションでジャンピングアタック。

おれがネット間際から叩きつけたビーチボールはそのまま砂浜に
落下して、王子がピーツと試合終了の笛を鳴らした。

「煌、和希ちゃんチームの勝利！」

「よっしゃ！」

「ナイス和希！」

満面笑顔の煌と、ハイタッチ。イエーイ、勝った勝った！

「おまえ、最近からだの動きが良くなってきたよな。普段の動作も
きびきびしてきた感じ」

煌の指摘に、『運動』パラメータもあがってきたのかな、と思う。
勉強も前よりはわかるようになってきたし、歌もどんどん上達して

きている実感がある。

日々の必死の努力が、ちゃんと報われてきているのかもしれない。

「金城……あそこの岩場まで、泳がないか？」

悔しそくに表情を強張らせた悠斗がもちかけると、煌がニツと唇の端を吊り上げた。

「リベンジってやつ？ いいぜ、競争な」

ずんずんと連れ立って海に向かっていく二人の背中を見送りながら、「元気だねえ」と静流が呆れたようなため息を漏らした。

「あんな激しく動いた後なのに……。にしてもセンパイ、こっちはハンデありすぎだよ」

「ハンデ？」

「センパイの弾けるボディを真正面から見せ付けられるんだよ。集中できるわけないって」

「アホか！」

どうしてくれよう、このセクハラ小僧……と思いつつ、何気なく視線を巡らせた先に、二つの立派な洋館が見えた。

一つは、おれ達が滞在中の王子の別荘。そこからそう離れていない場所に、もう一つ……。

……そこはかとなく、そのうち知り合いに出会いそうな予感があった。

「ちょっと休憩するかい？ 芽生ちゃんも、よかったらおいで。お茶やジュース……チョコもあるよ」

大きなパラソルの下で、クーラーボックスから王子が取り出してくれたチヨコは、冷たくて美味しかった。こういう時、飲み物だけじゃなくちよつとしたお菓子もあるとか、うれしいよな。

「……ちよつと眠くなっちゃった。寝ていい？」

心地よい潮風に当たりながら、波紋が天然のレース模様を揺らめかすエメラルドグリーンの海にみとれていたら、隣に座っていた静流が少しとろんとした声で言った。

「ああ。おまえ、昨日寝てないって言ってたもんな」

うなずくと、「じゃあお言葉に甘えて」ところんと横になる……おれのひざを枕にして。

「なっ……こら、おまえ何……」

ギョツとして抗議の声を上げたが、この男、のび太もビックリの寝つきの良さで、すでにすーっと寝息を立てていた。

あまりに早かったのでタヌキ寝入りかとも思ったが、どうも本気で寝入ってるらしい。

「……ったく」

呼吸に合わせて小さく肩を上下させる静流の寝顔は、無防備であどけなくて、やっぱり女の子みたいだ。睫毛、長……。

こいつのこの容姿って、警戒心薄れさせるんだよな。だから普段から、ついついスキンシップを許してしまいがちな気がする。

あ、でも、それを武器に女の懐にもぐり込むのがいつもの手なの

かも……！

ハッと気づいてたたき起こそうかとも思ったが、あんまりにも安らかに、気持ちよさそうに寝ているので、結局げんなりしつつもそのままにしておくことにした。

「……うらやましいな」

ため息交じりに苦笑しつつ、静流にバスタオルをかけてやる王子。

「でも、本当に無邪気な寝顔だね。紫葉くんはいつも大人びてるけど、寝ているときはさすがに年相応なんだな……」

「ああ、こいつってニコニコしてても本心読めない感じあるよね。おまえも大概だと思うけど」

「そうかい？ 僕はいつでも真心で接してるよ？ あ、別に紫葉くんが気持ち悪いって言うわけじゃないけど……でも、紫葉くんは意図的に周囲から一定の距離を保ちたがるところがあるよね。常に客観的な立場にしようとしているというか」

王子もなかなか鋭い。確かに、そんな感じだ。

「でも、ギター弾いてる時だけは、急にそういうのが消えて素^すになる気がしねえ？ 特にバンドの時は、心底楽しそうで、だから一緒に演^やつてるこつちもすぐ楽しくなる」

「わかるよ。本当に好きなんだろうね。音楽は、一人で自由にやるのも楽しいけど、誰かと一緒に響き合ってもっと楽しくなる。それを共有して盛り上がってくれる人がいると、更に更に楽しい」

王子の言葉に、そうだよな、と何度もうなずいてしまった。

おれ、こんなとんでもねー状況で始めることになったけど、バン

ドは好きだ。ライブも。正直、すっかりハマっていた。

「さて、あと10分もしたら戻って練習再開だね。紫葉くんは僕が見てるから、和希ちゃんも遊んできていいよ？」

「いや、なんか疲れたし、いいや。ここで海眺めてるだけで、気持ちいいし。王子こそ、ビーチバレーでもずっと審判だったし、遊んでこいよ」

王子は「ううん」と首を振り、薔薇を背負った必殺笑顔で応えた。

「僕は、君とこうしていられる時間が、一番幸せだから」

……あ、さいでつか。

「……僕、この冬にイギリスに留学することになっているんだ」

おれは口に運びかけていたコーラをピタリと止めて、隣を振り向いた。

王子は目の前の海を見つめながら、静かな声で続ける。

「その後は、そのままあつちの大学を受験する予定。日本の僕の学生生活は高2の冬までで、それまでに、何か思い出を作りたくて……バンドをやりたいと思った。

自分で何か新しいことを始めるのは初めてで、すごく勇気のいることで……思い立ったのは4月だったけど、なかなかメンバーが集まらなかったし、あきらめかけていたんだ。でも」

そこでおれの方を見て、柔らかく微笑む。

「君の歌を聞いて、もう一度、夢をみたいと思った。必死だったか

ら、強引に引きこんじゃって、ごめんね。驚いただろう？ でも、あきらめなくて、よかったよ」

どこまでも続く果てしない空。コントラストで映える白く力強い入道雲。

寄せては返す透き通った波。

輝くような海の間こうで、不意打ちの大波をくらった煌と悠斗が笑いながら何か言い合っている。

ぶかぶかと浮き輪に乗って漂う芽生の姿。

さわさわと、海風。潮の香り。

静流の穏やかな寝息。

永遠のような、夏の日。

今、ここにある全てをまぶたに焼き付けようとするかのように、じつと瞳をこらしながら。

「本当に、よかったと思うてる」と、王子は呟いた。

52・お風呂でバツタリ

やべ、今何時だ!?

夕食後、ちよつとだけのつもりでベッドに横になったおれは、いつのまにか深く眠り込んでいたらしい。次に目覚めたとき、時計の針は22時を回っていた。

『お風呂は一つしかないから、19時から20時が女湯で、20時から21時が男湯にしよう』

そう王子に提案されたのだが、一度昼に泳いだ後軽くシャワーを浴びたとはいえ、寝汗もかいていたし、風呂にはちゃんと入りたかった。

さつと浴びさせてもらっていいよな……。

王子の別荘はホテル並みの内装だったが、風呂もすごかった。巧緻なモザイク模様のタイル、大理石の大きな浴槽、噴水や天使像まで設えられて、お湯は天然の温泉らしい。

「ふうー極楽極楽」

とろりとした乳白色にバラの花びらの浮かんだ湯はロマンティックだが、これに男どもも浸かったと想像すると、絵的にちよつと笑えた。

最初の頃は自分の身体見て鼻血噴いたりしてたけど、さすがにもう慣れてきた。

日々姉貴の鬼指導の下『美容』に励んでるだけあって、肌は玉のように磨^{みが}かれているし、ウエストはキュツとくびれて細いけれどやせすぎというわけでもなく、柔らかなラインは女性的。自分(?)で言うのもなんだけどなかなかのスタイル美人になりつつある。

よくアニメやドラマで見るとみたいに片足をピツと湯面に上げて、どうだ、この脚線美……って馬鹿かおれ。

ま、胸はもうちょっとあってもいいと思うけど……それでも当初よりは育ってきたよな、と視線をやりかけて、やっぱり逸らす。くっ、まだこの部分はおいそれと直視できねー！

解放感から心なしかはしゃぎつつ、のんびりつかって、さあ、そろそろあがるか……と立ち上がった時。

ガラリ、と突然扉が開いた。

現れたのは、しなやかな筋肉に覆われた、均整のとれた長身。

意表をつかれて呆けるおれを前に、同じく呆気にとられたように目をみはる、煌。

しまった油断したー！！

いつか起こるんじゃないかと家では常に細心の注意を払っていたお約束の『お風呂でバツタリ事件』、まさかこの合宿でもってくるとは……！ バカバカおれのバカ……！

脳内では自分をポカポカ殴ってごろごろと転げまわりたい気分だったが、現実ではシヨックでただひたすら瞳を見開いて固まるだけのおれ。

一方、我に返ったらしい煌はくるりと後ろを向いて、かすれた声

で叫ぶ。

「悪い！」

耳を真つ赤に染めながら閉められた扉の向こうで、立て続けにガコンボタンと何かが派手に倒れる音と「痛……！」とうめき声が聞こえた。

ゴミ箱につまずいたはずみに足の小指でもぶつけたのだろうか。いいから落ち着け……と、笑う余裕は、おれにもなかった。

扉の奥に消えるほんの一瞬、目に飛び込んできた光景。海ではラッシュガードで覆われていたあいつの背中。

そこには、ヒロインの肩にあるのと同じような、火傷の跡がみてとれたのだった……。

木造平屋の日本家屋の一室。

開け放たれた縁側からは、奔放に植物が萌えた、目にも鮮やかな緑の庭が見える。

パタパタと、洗濯したばかりの白いシートが風に揺れていた。

淡い煙をたゆたわせる蚊取り線香。時折ちりんと涼やかな音を鳴らす、朝顔の絵が描かれた風鈴。

ゆっくりと首を振る、年代物の扇風機。

ミーンミーンと蝉の聲が響く明るい夏の午後、簡素な長方形の机の周りを、4つの影が囲んでいた。

卓上には、スパイシーな香りが食欲をそそるカレーの盛られた皿が並べられている。

「へえ、これ、煌と和希が作ったのか」

感心したようにうそぶく男は、30代前半くらい。どこか余裕を漂^{たんせい}わせる端整^{ようほう}な容貌^{ようぼう}といい、大らかで快活そうな雰囲気といい、煌にとてもよく似ている。

「ううん、和希はさいしょにニンジン切るとき、包丁でゆびをきっちゃってね、ぜんぜん手伝えなかったの」

うさぎのぬいぐるみを抱きながら、しょぼん、とうなだれるのは、小学校に入るか入らないかというくらいの年頃のヒロインだ。この頃から、ドジっ子らしい。

「見せてみる……ああ、可哀想にな。痛かっただろう？ 大丈夫か？」

男に手を取られて心配そうにのぞきこまれ、ヒロインのほおがボツと色づく。

「大丈夫……」

消え入るような声で答えたヒロインに、男は目を和^{なご}ませるとよしよしとその頭を撫^なでた。

「まあ……美味しくできたこと！ 煌ちゃんはお料理が上手なのね。和希ちゃんも食べてごらん？」

腰の曲がつたばあちゃんにニコニコと勧められ、ヒロインもぬいぐるみをかたわらに置いて、スプーンを一匙^{ひとさじ}、口に運ぶ。

瞬間、その顔がまぶしいほどにほころんだ。

「ほんとだ、美味しい！！　すごい、煌ちゃん、天才！！」

心の底から幸せそうに、ヒロインはパクパクとカレーをほおばる。

「和希、ケガしちゃって悲しかったけど、きゅうに元気出てきた。

煌ちゃんのカレーは、魔法のカレーだよ！」

「お、おおげさ！」

ヒロインの向かいに座っていた少年　煌は、少し赤面してぶっきらぼうにそう言うてから、顔をくしゃくしゃにして笑った……。

夢か。

朝、いつもとは違う別荘のベッドで目覚めたおれは、今見た光景を、頭の中でもう一度反芻^{はんすう}する。

夢だけど、あのカレーの匂いといい、机に置かれたコップの外側に浮かんだ水滴といい、細部までもともリアルで、これはきつとヒロインの忘れていた『記憶』なのだろうと確信する。

あいつ、中学の時に会ったとかいってたけど、大嘘つきめ。

あんなガキの頃から、知り合いなんじゃねーか……。

でも、なんで普通に覚えていないんだろう。まあ、あのくらいの幼い時の記憶なんて、あやふやなもんだけださ。

53・練習もしてます

朝食に向かおうと部屋の扉を開くと、中途半端に片手をあげた煌がすぐそこに立っていた。

ギョツとして見つめ合ってから、その互いのあからさまな動転っぷりに、二人して吹きだしてしまう。

「……なんだよ、ビクリさせんなよ」

「それはこっちの台詞。やっと覚悟決めてノックしようとしたらいきなり出てくるとか。心臓止まるかと思ったぜ」

苦笑を交わしてから、「で、なに？」とうながすと、煌はすつと真面目な顔になり、頭を下げた。

「昨日はごめん。まさか、あの時間におまえがいるなんて思いもしなくて……」

「……ああ、別に、お互い様だし。おれこそ、悪かったな」

どうにもバツが悪くなって、ボソボソと答えながら、まっすぐ見れない。

おれの方は男の裸なんて見慣れてるし、見られたって別にどーってこともないんだけど……こいつの心情を考えるとなんとも複雑だ。好意を持つてる子の裸を見てしまった男の気持ち。リアルに想像できるだけに、いろいろと、辛い。

できれば忘れてほしいけど、そんなの無理だろうしな……ぬあゝ、ダメだ！ 発狂しそうになる。もう、考えるのやめよう！

「あのさ、おまえが昨日、風呂の時間みんなとずらしてたのって……背中の傷のせい？」

おれが尋ねると、煌の眉が一瞬だけ小さくひそめられた。まるで痛みをこらえるように。

「おれの肩にある火傷の跡と、そっくりだった。おれ、この時のことや、おまえと昔会ったことも覚えてなかったけど……昨日、夢を見たんだ。小学校に上がるかどうかってくらいの年の頃、田舎っばい家で、おまえと、おまえの親父さんと、優しそうなばあちゃんと一緒にカレー食べてる夢。あれ、夢じゃなくて、本当にあったことだよな？」

「……………」

沈黙してしまった煌に、おれはたたみかける。

「この火傷って、その時のものなのか？ いったい、何があったんだ？ どうしておれは、何も覚えてないんだろう？」

「……俺は」

いつさい表情の読めない静かな面持ちで、煌が口を開いた。

「おまえが思い出さない限り、なにも話すつもりはないよ」
「なんで……………」

抗議しようとしたおれの頭に、ぽんと手を置いて、言い聞かせるように小さく笑う。

「無理に、思い出さなくていいんだ」

それは優しいけれど、おれの追究心を全てしぼませてしまうような、胸が締め付けられる何かを含んだ笑顔だった。

朝食後、前日に引き続き新曲の練習。

『Aquarium』というこの曲は、疾走感のある美しいメロディに乗って、まるで幻想的な水中世界に溺れるおほような恋のもどかしさと切なさが歌われるジャズ調ポップス。

鮮烈で印象的なギターリフに始まり、深い部分を自在に撫で上げ興奮を誘う心地よいベース、水に漂うようなスウィングのリズムでかき鳴らされる即興風のピアノ、くすぶる恋心を煽り立てるように多彩なパターンで刻まれるドラム……とすべての楽器がそれぞれに見せ場満載で、歌詞もレトリックに富んで洗練されている。

カッコよすぎて悶絶ものの神曲　なのだが、音域は広いし、リズムがとりにくく、なかなかグルーブを生むことができなかった。

「ごめん……今回も、おれが足、ひっぱってるな」

うまく歌えないことの一つに、この大人っぽい曲に見合うような色気が全然足りていないこともありそうだった。みんなはまだ不完全とはいえ、音には既にゾクゾクするような艶つやが滲にじんでいるのに……。

「和希ちゃんが謝る必要なんてないよ。こっちこそごめん。君の特性を生かせるような曲作りっていう今までのコンセプトからは、外れている楽曲だね」

「最近のセンパイの表現力、どんどん広がってるから、また新しい側面を引き出せたらっていう挑戦の意味もあったんだけど、背伸びしすぎたかな……大会用は、他の曲にする？」

申し訳なさそうな王子と静流に、おれはぶんぶんと首を振った。

「いや、絶対この曲がいい！ でも……なんでおまえらはそんな、なんていうか、艶っぽい音が出せるんだ？」

落ち込みながら尋ねたところ、四人は当惑したように顔を見合わせた。

苦笑しながら、王子が言う。

「曲の世界観に共感できるから、かな。溺れるような恋の苦しみやもどかしさ、夢の世界を漂うような陶酔感……」

……やべ、おれ、地雷踏んだ！？

「センパイも恋したらわかるよ。相手はオレとか、どう？ ……とびきり大事にするから」

いたずらっぽくのぞき込んで囁いてくる静流に、ぶんぶんと頭を横に振ってから、「ちよつと煮詰まってきたし散歩してくる」と練習室を後にした。

恋かあ……。小学校低学年の時、隣の席の女の子にほのかな思いを寄せたことはあったけど、淡い初恋で苦しみとかは無縁だった。胸が焦こがれるような強い気持ちを誰かに抱くようになる事なんておれにもあるんだろうか？

潮の匂いがまざった風にそよがれながら緑の小道を歩いていたら、向こうの方に、のどかな周囲の風景から浮きまくりのサイケな衣装を身にまとった、ひよろりと細身のシルエットが現れた。

ロンだ。

それにしても、こいつの格好はいつ見ても独創的である……孔雀^{くじやく}をモチーフにしたらしき極彩色^{ごくさいしき}のプリントタンク。

ボトムもカラフルで、ブロックチェックにとどころランダムなボーダーが走ったポリウムあるサムエルシルエット。

スパンコール付のサンダル。アクセサリーをジャラジャラ。

前髪を長めに伸ばした頭はサイドをツンツンに立てたウルフヘアで色は真っ赤か……とにかくこれでもかというくらい派手＋派手＋派手で、常人には到底理解できないセンスだ。

その奇抜なファッションをまじまじと見つめているうちに、氣だるげに周りの風景を眺めていたあいつもこっちに気づいたらしい。爬虫類^{はちゆうめい}っぽいその瞳をみるみる大きく見開くと「ああーっ」と叫び声をあげ、おれを指差してきた。

なんだこの、幽霊にでも会ったような大げさな反応（汗）

「よう、こんなところでおまえに会うとはな」

ある程度予想はしてたけど、と胸のうちで呟きながら挨拶^{あいさつ}のつもりで上げた手を、いきなりガシツとつかまれた。

「マジかよ、なんつーミラクル！！　オレの目の錯覚とか幻じゃねーよな！？」

「なんだよ、何事だ！？」

眼を瞬くおれに、ロンは、今までのこいつからはとても想像できないくらい真剣な表情で、言った。

「頼む、オレと一緒に来て、あの人に……旺眞に、会ってやってく

れ」

「魔王に？　なんでまた」

そのあまりの必死っぷりに軽く動揺しつつ質問すると、ロンは、
とんでもないことを語り始めた。

53・練習もしてます（後書き）

新曲のイメージは喜兵衛Pのこちらの神曲です。

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm9450347>

全部の楽器がカッコよすぎてたまりません……特にベース！

clearさんxぼこたさんのカバerverは着ったフルで落としたw

大好き。

54・魔王の秘密

「あの人、実はガキの頃から不治の病で　もうすぐ寿命なんだ。20まで生きられないって医者に宣告されてる。だから親も周りもみんな甘やかして、あんなふうに育ったんだ。

本人も自分が長くないことを知ってるから、自暴自棄でやりたい放題でここまできたけど……最近、急に体調が悪化して倒れて、この数日でベッドから起き上がることもできなくなった」

真っ白になったおれの脳裏にゆっくりと蘇ったのは、前に、バーのソファで倒れた魔王のゼエゼエと荒い息を吐く姿。

あいつ、風邪とか言ってやがったけど、本当は……！

「何もかもどうでもいいって、好き勝手やりながらほんととは全に無関心だったあの人が、初めて興味を持った人間がアンタだったんだ。今この近くで静養中だから、最期に一目、アンタに会わせてやりてえんだよ。頼む。一緒に来てくれ……！」

ロンに連れて行かれたのは、案の定、海辺から見たあのもう一つの別荘だった。

うながされてドアを開けると、広い洋室の奥の窓際、天蓋付の大きなベッドの上で、横たわった魔王が瞳を閉じていた。

透き通るような白皙の肌。鴉の濡れ羽のような漆黒の髪。

完璧な造形を誇る、あまりに美しすぎるその面は、まるで魂の宿らない精巧な彫像のようだった。

「魔王……？」

ぴくりとも動かない、少し瘦^やせた端正なその姿に、ゾツとした。

最後にこいつに会った時、おれは何をした？ まさか、あれで全部が終わったとか、そんなこと、ないよな！？

「おい、冗談はよせよ！ 目を開ける！」

おれは思わずベッドに駆け寄り、その肩を乱暴に揺さぶった。

「こんなの、こんなの嫌だ！ お願いだから、死ぬなよ、旺眞！」

祈るような気持ちで叫んだ時、翠がかった深い色の瞳が、ぱちりと開かれた。

「和希……」

心底驚いたように、まじまじと見つめてくる魔王の手を、おれは涙ぐみながらグツと握る。

「馬鹿野郎………なんで、こんなギリギリで呼びつけやがる。本当に勝手な奴！ 病気なら病気だって、もっと早く」
「病気？ なんのことだ？」

魔王がいぶかしげに片眉をあげ、おれの中に一瞬の空白が生まれたその刹那^{せうな}。

ブーツと盛大に吹きだすような音が、背後から聞こえた。

「!?!」

振り返ると、ロンが身をよじって爆笑している。

「信じらんねー。今時、こんな話を1ミリも疑わず真に受けるバカがいるなんてよお！　ちよつと前に流行った純愛モノじゃあるまいし、不治の病ネタなんてそうそう転がっててたまるかっつーの！」

…… 2次元キャラのおまえが言っただけ――！

つとブチ切れそうになったが、なんとか抑え込んだ。

おれだって、この世界じゃなかったらここまであつさり信じなかったっつーの。バーロー！

「お嬢ちゃん、素直すぎ！　いやーマジおもしれえ。魔王サマのお気に入りにじゃなかったら、オレ様の玩具おもちゃにしてやるのに」

なにやら不穏な事をほざきながら、笑いすぎて滲にじんだ涙をふき、ロンはふらりと踵かかとを返す。

「んじゃま、ごゆっくり」

ニヤニヤ笑いとともになんか一言を残し、パタリと閉ざされる扉。

「……俺が死ぬと、本気で思ったのか？」

静かな声で問われて視線を向けると、上体を起こしながら、かすかに笑みを含んだような魔王の眼差し。

羞恥に、かーっと血が上った。

「悪かったな！ てめーのまぎらわしい言動のせいだよ！ なんて真昼間から寝てやがる」

「俺の趣味は酒と女と昼寝だ」

「って自堕落極まりない趣味を偉そうに語るなー！」

不意に魔王の手が伸びてきて、おれの目元の涙をぬぐう。瞬間、からだに謎の震えが奔った。

「泣くほど、心配したか」

「知るかよ」

おもしろそうに口元を緩める魔王の腕を振り払い、顔を背けた。

……相変わらず、わけわからん魔力を放ちやがるぜ、この野郎。危険すぎる。

「……あれがおまえとの最後なんて、後味が悪すぎると思ったんだよ」

ちらつと視線を向けると、魔王の目がすつと細まった。

「おまえ、どうしてあんなに煌につっかかるんだ。……家庭を壊されたから？」

ためらいながらも尋ねると、魔王はフン、と鼻を鳴らした。

「家庭……黒川にそんなもの、もとより存在せぬわ。父も母も、おのおの無数の愛人を持つ。そもそもただ一人を想いあうなど幻想。結婚など契約でしかなく、永遠の愛などというものは現実を見ない

愚か者の世迷いごとよ」

きっぱりと言い切る魔王に、強がるそぶりは見られなかった。

「じゃあ、なんで……」

「あの男は、俺を裏切った」

憎々しげに、吐き捨てる魔王。

「金城煌のドラムは、この俺が認めて、俺が自らバンドに誘ってやったのだ。にもかかわらず、あの男はたった2か月でバンドを抜けるなどと言い出した。親たちのことがわかった以上、俺とやることはできない、などという勝手な理屈で……！」

顔を歪めて悔しげに語る様子に、呆氣にとられた。

こいつ……もしかして煌のこと、本当はめっちゃ好きだったんじゃないか？

氣に入ってたのに（こいつからしたら）一方的な理由で出て行かれて、愛しさ余って憎さ百倍、みたいな感じに思えてきた。

「煌からしたら当然じゃねーか？ 自分の親が、仲間の親と不倫してるなんて知って、今まで通りに過ごせるわけねーよ」

「なぜだ。親は子とは別物だ。親が何をしたからといって、金城煌が氣に病む必要はなかるう。そもそも、たかが不倫の何が悪い」

……なるほど、『価値観の不一致』か……。

「けど、親と子は別物って思ってるなら、なんで祭りの時はあんなこと言っただよ」

おれの指摘に、それまで堂々としていた魔王が初めて、ぐと言
いよんだ。

「あれは……………」

苦虫を噛み潰したような顔で黙りこむが、その瞳に滲むのは……
おそらく、後悔の念。

「ついカッとして、思ってもないことを言っちゃったってのか？」
「……………」

ブスツとしたまま目を伏せたのを、おれは肯定と受け取った。

54・魔王の秘密（後書き）

過去のweb拍手小話を読みたいといっただいたので、
小ネタページを作ってみました。

他愛もないものですが、一応ご報告をば。

『ときメモ』小ネタ集<http://ncode.syosetu.com/n3560w/>

55・ブリーダー和希

「反省してるんなら、煌に謝れよ。『ありがとう』と『ごめんなさい』は人間社会の基本中の基本だぞ」

「この俺が、謝るだど……！？」

「当たり前だ。それから、なんでも自分の物差しで測れると思うな。相手の立場を想像することを覚えねーなら、おれはもうおまえとは会わない」

「貴様、何様のつもりだ……！」

魔王がサツと顔色を変えて眼光を鋭くするや、そのからだから黒い奔流が舞い踊り、激しい風圧に吹き飛ばされそうになった。キヤビネットの小物が倒れ、窓ガラスがビリビリと震える。

うわ、なんだこれ！

内心仰天したが、ここで引いては男がすたる。負けじと両足をこらえて、ひるまずににらみ返し続けると、にわかには魔王がフツと表情を和らげた。

同時に、圧迫感が立ち消え、黒い嵐も霧散する。むさん

「……おもしろい。それでも、意志は萎なえぬか」

『それでも』ってなんだよソレ具体的に説明プリーズ！？ とよほどツツコンでやろうかと思ったが、その前に魔王が言葉を継いだ。

「そうだな……おまえの行動しだいでは、考えてやらぬこともない」

思いつきり不条理な気がしたが、無駄にプライドエベレスト級なこいつには、おれが何かする代わりに「やってやる」という大義名

分が必要なのかもしれない、とふと思った。

「……………どうしろと?」

「今から俺とセツ」

「却下」

「なぜだ。間違いなく、俺とおまえの相性は最高だ」

「てめーはいい加減に自重しろ!」

こんのエロエロ大魔王が……………! と青筋を立てる俺に、「ならば」と魔王は前髪をかき上げながら、つまらなさそうに言った。

「ひとりでもよい。なにか歌え」

「……………ひとりでも?」

「セッションは駄目なのだろう?」

セッション? ……あ、セッションだったんですか。

「……………何を赤くなっている? まさかおまえ、セツク……………」

「わゝわゝわゝ! んなわけねーだろ、馬鹿!」

大声を出してさえぎると、クツ……………クククククツ、と魔王の肩が震えた。

大きな手で覆おおわれているので表情はみえねーけど、確実に爆笑されている。

くそっ……………不覚!

「でもいきなり歌えとか……………なんだよ、おまえ、もしかしておれのファンになったわけ?」

前こいつと出かけたときも、同じように言われたもんな。

「五月蠅い。なんでもよいからさっさと歌うがよい」

なんでもいいって言われても……あんまり長いのも避けたいし、アカペラで気軽に歌える曲……あ。そうだ、巷で大人気のあれにしよう。

「ららーららーららららららー　ららーららーららららー　消
臭力」

「……………」
「……………」
「……………」

……沈黙が、絶望的なほど、重かった。

「なんだ、それは？」

「なんでもいいつつただろ！？　約束だからな、ちゃんと謝れよ
！」

早口でまくしたて、「じゃあな！」と帰ろうとしたら、手首をつかまれた。

「行くな。俺とともにいろ」

「残念ながら、おれは遊びにきてるんじゃないだよ。バンド練習を中抜けしたところだったし」
「そんなもの……」

いいかけて、魔王は口をつぐんだ。チツと心底つまらなそうに舌打ちし、拘束をとく。

お、改善傾向？

「……以前、倒れた時の礼がまだだったな」

唐突な言葉にきょとんとするおれに、魔王はフツと不敵な笑みを浮かべた。

「今宵、おまえに最高の花束を贈^{こしやう}つてやる」

「花あ？ 別にそんな……」

「四の五の言わずに受け取れ。『ありがとう』と『ごめんなさい』は基本中の基本なのだろう」

こ、こんな偉そうな『ありがとう』初めてだけどな……。

呆れつつ、「わかったよ」とうなずくと、魔王はフン、と鼻を鳴らした。

「それでよいのだ。 とつと帰るがよい」

……なんかこいつ、どーしよーもない奴だけど、妙に憎めないんだよな……。

そんなことを思いながら部屋から出ると、廊下で待機していたらしいロンが壁に寄りかかったまま口笛を鳴らした。

「アンタ、すげーな。あの人と渡り合える女なんて初めて見たぜ」
「……さっきはよくも、だましてくれたな？」

おれがにらむと、ロンはいつものニヤニヤ笑いを貼りつかせながら、肩をすくめる。

「先週末の祭りの日以来、あの人、荒れに荒れて手が付けられない状態だったんだぜ？ 散々暴れまくって、さすがに親にこの別荘での謹慎を言い渡されたわけだけど、今度は食事もろくにとらず寝込んでる状態。何かと話を聞いてみたら、どーもアンタに振られたのが原因っぽいじゃん？ 関東大会も間近だったのにいつまでも腑抜けでいられてもオレ達も困るわけよ。そんな時アンタにばったり出会ったけど、喧嘩別れしたなら普通に話したところでついてきてくれるかわかんねえ……という状況で思いついた苦肉の策があのホラ話なのでしたー。チャンチャン」

……よくしゃべる男だな、と呆氣にとられるおれを、ロンは腕組みしながらじろじろと眺め回した。

「こゝんなガキのどこがいいんだって思ってたけど……たしかに、なんか引つかかるとこはあるよな。磨けば光るタイプかも……？」
「んな品定めするような目で人を見るんじゃないよ。失礼な奴だな」

ピシヤリとはねつけて玄関へと向かうおれの背中に、「いいねいいねー」と俄然^{がぜん}テンションを跳ね上げるロン。

「気が強い女は好きだぜ……調教し甲斐がある」

……マジでこいつ、対象外でよかった。

56・夢花火

夕闇に沈み、ちらちらと星の輝きだした海辺。

潮の音をBGMに、熱く焼けた鉄板からもうもつと上がる白い煙。ジュージューツと食欲を刺激する音と肉の焼ける香ばしい匂いに、おれはゴクリと生唾なまつばを飲み込んだ。

「ん、そろそろいい感じだな。ホラ、和希」

煌がよそつてくれた肉に、「いただきまーす」とかぶりついたおれは、瞬間、口から七色の龍が飛び出すような衝撃をおぼえた。

うー・まー・いー・ぞおおおつ!!

昼間にいきなり、煌宛てに届いたクール宅急便。中には「悪かった」の走り書きとともに高級黒毛和牛肉がどっさりと詰め込まれていた。差出人は、魔王。

……唐突かつ素っ気無さ過ぎて「???」状態だった煌におれが説明を補足してやると、大いに苦笑しながら「ありがとな」と礼を言われた。いや、おれに言われても。

というわけで、合宿二日目の夕食は急遽海辺うみべでバーベキューすることに相成ったのだが……なんだよこの肉の「今そこで殺してきまして」みたいな鮮度。

視覚的にも圧巻の霜降りロース。驚異的に分厚いタン。トロットロのカルビにハラミ。

味、食感、肉汁、全てが神がかっており、煌様特製の焼肉のタレ効果も相まって、今なら太平洋をクロールで横断することも宇宙へ飛んでいくことも巨大化して大阪城を破壊することもできそうだった。

た。

「魔王サマも粋なことしてくれるね」

「ん？ 静流も魔王のこと知ってんの？」

「うん、夜遊びしてるうちに知り合った遊び仲間。あの人、おもしろいよねー」

こんなところでも意外なつながりが。

でも中学生が夜遊びすんなよ……と呆れながら、簡易テーブルの上の飲み物に手を伸ばしたところ、静流が焦ったように声をあげた。

「あ、センパイ、それは……」

サイダーだと思ったそれを口に含んだ瞬間、おれはブーツと派手に吹き出した。なななんだこれ！？

「ビックリさせちゃってごめん。それは、オレ用のジンリッキー」

「って酒だろ！？ しかもかなり強いし」

「いいじゃん無礼講ぶれいこうってことで。……にしても、今のセンパイの反応……！」

クククツと肩を震わせる静流。こんの不良少年が……！

「没収！」

「ええっつひどー！」

ぶーたれる静流からコップを奪い、地面に流そうかと思ったが、ふとイタズラ心がわいてきた。

少し離れたところで照明の調節をしていた悠斗に近付き、「お疲れさん」とコップを差し出す。いつも冷静なこいつのリアクション

……ププ、ちよつと見ものかも。

「悪いな」

ジンリッキーを受け取った悠斗は、ワクテカと胸を弾ませる俺の目の前でそれを咽喉のどに流し込み　そのまま、ゴクツゴクツと全部飲み干してしまった。

「えつと……悠斗？」

予想外の反応に戸惑うおれに、悠斗はコップを投げ捨て、ニヤリと口の端を吊り上げた。

「……それで？　俺を酔わせて、どうするつもりだ？」

「ゆ……悠斗……？」

いじわるそうな微笑。その瞳に見たこともないような嗜虐しぎゃく的な色を浮かべながら、悠斗はおれの顎あごをつかんでクイツと持ち上げた。

「やけに積極的じゃねーか、和希。そーだよな、オマエの本性は悪女だからな。清純そうなツラして男を誑たぶらかして、俺達をさんざん翻ほん弄ろうして、楽しいか？　ん？」

ぺろりと自身の唇の周りを舌で舐なめ回してから、固まるおれをいたぶるように、悠斗は囁く。

「オマエが熱い夜を望むなら、一晚中でも付き合ってやるよ。浜辺でつてのも、スリリングじゃん？」

「ば、馬鹿、何言って……！」

「嫌がってみせても好きなんだろ、この痴女が」

「……いい加減にしろ！」「」

瞬間、3つの声が重なっておれの体が引き離され、同時に悠斗には頭からバケツいっぱいの水がぶっ掛けられた。

全身ずぶ濡れになった悠斗は、パチパチと瞬きしてから、「俺は今まで何を……？」と眉をひそめる。

「……酒飲んで人格豹変って、どこまでベタやりつくす気だよ」ときメロ』！！

バーベキューの締めは、手持ち花火だった。

シュボツと点火するや鮮やかな火花を放つ赤や黄色、緑と同時に、もうもうと上がる煙の量が凄まじくて、むせてしまう。

「和希、そっち風下！」

「僕、こういう花火って初めてやるよ」

「って王子、そんなにいくつも束にしてまとめて火をつけんじゃねえっ。あぶねーだろ」

「わ、ネズミ花火もあるんだ。これ、つける時けっこう危ないよね、というわけで悠斗さん点火して」

「その流れで俺を名指しするか？……馬鹿、炎を人に向けるな！」

ぎゃーぎゃー騒ぎながら、花火から花火へと絶え間なく火を継いで、弾ける刹那の輝きを堪能する。

「ん？　なんだこれ」

謎の黒い物体を見つけて首を傾げたら、「知らない？　ヘビ花火

だよー」と芽生が教えてくれた。

点火してみると……うわ、なんか生えてきたー！ 花火と言っても発光はせず、黒く細長い何かがよきによきと飛び出してくるのだった。

「すげー。でもこんな黒いとへびつーよりウン……あぶねっ」
「不適切な発言は慎んでね」

ヒロインにあるまじき単語を口にしかけたおれを、ニツコリ笑顔で牽制する姉貴。だからってロケット花火を人に向けて放つなよ！

「残像で絵や文字も描けるね。……和希ちゃん！」

呼びかけられて振り向くと、王子はニコニコしながら花火を振ってloveと描いて見せた。あるある。

「センパイ、ロケット花火のとばしっこしよう！」

「線香花火は最後にとっておくか」

「ああ、一番最初に落とした奴は罰ゲームな」

炎に照らし出されるみんなの笑顔を眺めているうちに、めっちゃ楽しいのに、ふと、グツと胸を締め付けられるような感覚に襲われた。

大好きな「夏」がもうすぐ終わってしまうという寂寥感^{せきりようかん}。それもあるけど、ただそれだけじゃないような……。

「和希、どうした？」

「なんでもねー。どうだ、二刀流！」

自分でもよくつかめない気持ちを振り払うように、おれは両手の

花火に点火し、ひらひらと大きく振ってみせた。

56・夢花火（後書き）

魚と違って殺したてのお肉は美味しくないそうです。
和希かんちがい！（キャラのせいにするやつ）

57・肝試しと光の花束（前書き）

合宿編ラスト。

57・肝試しと光の花束

たよりない懐中電灯の光が、夜の山道を照らす。

夏の定番、肝試し。とはいえ内容は別荘から2キロほど離れたところにあるお墓の入り口に置いてある目印をとって帰ってくる、という他愛もないものだ。

「えーっと、こっちでいいんだよな」

「センパイ、違う、右」

分かれ道で見事に反対方向へ進みかけ、暗闇の中、静流が苦笑する気配がした。

「ま、オレはコース外れても全然かまわないってかむしろ喜んでっ
て感じだけど」

「いや、こんな夜中に変な道進むと下手すりゃ遭難するだろ」

「いいねーセンパイと遭難！ 山小屋の一夜。人肌で温めあう二人
の心と体……」

おま、おぞましい妄想すんじゃない？ めちゃめちゃサブいば立
ったぞ！

とはいえこの世界ではマジでそんな展開も起こりかねない。

「OK、この先は今まで以上に慎重に進もう」

表情を引き締めて言ったところ、ププツと噴き出す静流。

「変なの。肝試しなのに、お化けよりも迷子が怖いみたい」

一番恐いのはおまえらとラブラブ状況に追い込まれることだけだな……。

ちなみに、他の男どもは基本一人で行っている。おれと芽生だけは、ジャンケンで決めた1位と2位が同行するというルール。……ジャンケン大会でのみんなの気合の入rippりは、思い出すだに頭が痛い……。

「女の子とお化け屋敷なんて行くと、みんな大げさなくらいしがみついてくるもんだけど……センプイはお化けは平気なんだ？」

「平気じゃねーけど、夜の道歩くくらいならな」

墓場に着いたら、多少やばいかもしれない。とはいえやはりブライドもあるので、そうそう情けない姿をさらす気はなかった。

いたって普段どおりに歩を進めるおれに、静流は少しだけつまらなさそうに肩をすくめてから、おもむろにふつと声を和らげた。

「……でもま、変なのはオレもそうかも」

「というと？」

「こんな状況なのに、いつもよりすごく安らかな気分」

そう話す静流は、確かに、肩の力が抜けて穏やかな雰囲気。夜目にも慣れてきて、淡く微笑を浮かべてるのがわかった。

「肝試しで和^{なご}んでーすんだよ」

「ほんとにね。でも、センプイといると、不思議と落ち着くんだよ。もちろん、ドキツとさせられたり、ふとした仕草や反応に可愛い！ってテンションあがりまくりのこともしょっちゅうだけど……どっちかというと、癒^いされる感じ」

「はいはい、そーやって口説くの何人目だ？」

まーた始まった、と軽く流すと、静流は拗ねたように唇を尖らせた。

「……どう伝えれば、信じてもらえるのかなあ」

そうぼつりと呟いて以降、黙り込んでしまった。

リリリリ……ジジジ……と周囲から虫の音だけが、響く。

「静流……？」

闇の中に浮かび上がるまだあどけなさの残る綺麗な横顔は、いつになくむっつりと不機嫌そうで、少し不安になって呼びかけたら「ごめん」と苦笑された。

「ちょっと、自分に腹が立って。センパイがオレの言葉を本気に取れないのだって、全部オレのせいだからさ……あ、そろそろ着いたね」

木立いたちを抜けた先の開けたところに、墓地が広がっていた。

たよりない月明かりに照らし出される墓石や卒塔婆そとば。吹きつけた風にざわざわと木々が揺らめく様も、まるでこの世ならぬものたちがどよめいているような錯覚をうけた。

夜の墓場は、さすがに不気味だ。

「大丈夫？ センパイ、ちょっと震えてるけど」

「気のせいだ！ さあ、目印はどこに……」

瞬間、後ろから、グイツと強い力で肩をつかまれた……静流は前にいるのに！

「ぎゃあああああああああ」

パニックになって、必死で殴りかかる。

「ちょ、センパイ、落ち着いて！」

「やめろ 和希！」

静流の声以外にもう一つ、耳に滑り込んできた低音に、おれはぴたりと手を止める。懐中電灯で浮かび上がったのは、幽霊じゃなくて 魔王。

おれに何度もポカス力殴られた魔王は、ヒクヒクと額を震わせながら妖艶ようえんに笑った。

「ずいぶんな挨拶だな、和希」

「わ、悪い！ でもどうしておまえがこんなところに……まさか、黒魔術の儀式！？」

「なぜ俺がそんなものに手を染めねばならぬ。浜辺での打ち合わせの帰路だ」

打ち合わせ？ と首を傾げるおれに、魔王はいらだたしげに「そんなことより」と続けた。

「おまえこそなぜこのような場所にいる。早く帰るぞ」

「おれ達は肝試しで……ってオイ、なんだよ、押すなよ！ わかった、帰るからその前に目的のものを取らせろって」

早々に目印をゲットして別荘前に戻ると、すでに肝試しを終えて待っていたおれ達以外の全員が、驚いたように目を見張った。視線は一樣に、意外な同伴者に注がれている。

「魔王くん……？」

「なぜ、おまえと一緒に……？」

「そんなことはどうでもよい。この屋敷でもっとも見晴らしのよい場所に案内せよ」

魔王の突然の要請に王子は何事かというように眉をひそめたが、おれがうなずくと内部へ促した。

「こつちだよ」

みんなで2階バルコニーに出てまもなく。

不意に、ドン、と全身を揺さぶるような破裂音とともに、夜空に光が炸裂した。

おれ達の瞳に映ったのは、鮮やかに咲き誇る大輪の花。

ヒューッドン、ドーン。大迫力の響きとともに、いくつもの花火が闇夜を彩る。

すぐ向こうの浜辺から、打ち上げられているようだった。

『今宵、おまえに最高の花束を贈ってやる』

脳裏に蘇ったのは、昼間の言葉。

「すげー……やってくれんじゃん！」

隣の長身を見上げて笑うと、仏頂面の口元が満足げに少しだけ緩んだ。

ドン、ドン、ドーンと骨にまで染み入るような轟音と、見事な百花繚乱に見入っているうちに、ふつつとからだに何かが湧きあがってくるような気がした。

「関東大会、おれ達も、最高の花火をぶっ放してやろうぜ……！」

体内の昂りをそのまま吐き出すように宣言したところ……一瞬の沈黙ののち、プツと一斉に噴き出された。がーん。

「なんでおまえはそう……江戸っ子？」

「でも、和希ちゃんはそのうところかまた可愛いよね」

「花火も何も、俺たちの曲は水中世界の歌だろう」

「打ち上げるのは良いけど、派手に散るのは嫌だなあ」

「俺の歌の前に星となって消えゆくがよい」

みんなして呆れたような笑みを浮かべながらからかってくる。
な、なんだよ。おれ一人盛り上がって恥ずかしいじゃん！！

「……もういいっ」

いたたまれず背をむけたら、また笑われた気配がした。
クソ、無駄に熱血で悪かったな！

「拗ねるなよ。……でっかい花火、咲かそうな」

投げかけられた言葉に、もう、揶揄するような響きは消えていた

けれど。

すぐには振り向くこともできず、おれはだまって夜空に次々と咲き誇る華やかな彩花を見上げていた。

明日からも、また、歌の練習をしよう。

いっぱい歌って、ボイトレもがんばって、もっともっと上手になりたい。

ゲームクリアのため、それはそうなのだけど。

それ以上にステージで、今できる、今しかできない最高の演奏がしたい……そう思った。

58・3年前の出来事

関東大会の4日前。

合宿でみっちり練習しまくった甲斐^{かい}あって、完成がギリギリかと心配された難曲も、各楽器とも既にすっかりモノにしてしまっていた。

おれの歌だけが、あと一步。

リズムには乗れるようになってきたし、音程や高音の声量も問題ないのだが、あとはあれだ……色気が来い。

「僕は今のままでも十分だと思うけどなあ。本当に、和希ちゃんの歌、どんどん上手になってるよね」

「ああ。もともと歌心は群を抜いてたけど、それに技術も加わって目を見張る成長ぶりだと思うぜ」

口々に賞賛され、ちょっと照れる。

ふっふっふ、どーだ、ヒロインはやればできる子なんだぜ？

「でも、和希ちゃん、大丈夫？ ちょっとがんばりすぎじゃない？」

「それは俺も気になってた。おまえ、このところ、かなり遅くまで起きてるよな。早朝の走りこみも距離増やしてるんだろ？ 肺活量を強化したいのはわかるけど……無理はするなよ」

「平気平気。最後の追い込みだし、満足できるまでとことんやりたいからな。……とはいえ、艶^{つや}ってどうやったら出せるんだ……」

お手上げ状態で疑問を口にしたところ、^{こわくてき}蠱惑的な笑みとともに静流の提案。

「オレに一晩預けてくれたら、変えてみせる自信はあるよ？」

即座に「アホ」と一刀両断し、残念、とばかりに静流が肩をすくめた時、着メロが鳴った。

「何？」

ケータイを耳に当てながら部室の外へ出て行った静流だったが、次に戻ってきたとき、その顔は青ざめて、どこことなく強張^{こわば}っていた。

「静流……？」

眉をひそめるおれ達に、静流は、声だけはいつもどおり、「ごめん」と話し出した。

「大会直前のこんなときに、すごく申し訳ないんだけど……しばらく練習、休ませて」
「……！？」

言葉を失う一同に、静流はもう一度、ごめん、と謝る。

「これから、九州に行くことになった。大会当日には、絶対、戻ってくるから。それじゃ」

あまりの急展開に呆然とするおれ達を残し、そのまま立ち去ろうとする静流を呼び止めたのは、「待て」という鋭い声だった。

「もしかして……？」

張り詰めた表情で問いかける悠斗に、静流は一回コクリとうなずく。

「離婚決まったって」

無表情でそれだけ言って、部室を飛び出していく。

足早に遠ざかっていく靴音が完全に消えると、辺りは静寂に包まれた。

オレンジの西日の差し込む室内に、ヒグラシの鳴き声だけが、やけに大きく響いて聞こえる。

「……離婚って、静流の両親が？ あいつの親、子どもほっぽって地方勤務に連れ添うくらい仲良かったんじゃないのかよ？」

混乱しながら問いかけたおれに、悠斗は「いや……」と首を振った。

「むしろ逆だ。何年も前から亀裂きれつが生じていて……静流の母親は、父親の不倫の再発を恐れてついていたのだと聞いた」

「……」

「3年前」

言葉を失ったおれに代わって、口を開いたのは煌だった。

「おまえと静流がコンクールに出場したとき、静流が大会当日にドタキャンしたって。……似てるよな」

悠斗は少し沈黙していたが、大きくため息をつくとき、顔をあげた。

「3年前も、たしかに同じような状況だった。ただ、あの時の静流はまったくなんの心の準備もない状態で……ヒステリー状態に陥った母親に、ひどい言いがかりを受けたんだ。『全部あんたのギター

のせいだ』って」
「……!？」

意味がわからず困惑するおれ達に、悠斗は眉根を寄せながら言葉を継ぐ。

「あいつはかつて2年ほど芸能活動をしていたんだが……母親は自分も仕事をしている上に静流の芸能活動も忙しくて、家庭のことがおろそかになっていたらしい。やがて夫の浮気が発覚してノイローゼになっていた彼女は、それが夫婦のすれ違いの原因だと、静流に八つ当たりしたんだ。『あんたがギターなんてやらなければこんなことにならなかったんだ』……と。自分の仕事第一で放任主義の父親も、あいつをかばうことはなかった」

「そんな……」

「不条理以外の何ものでもない」

苦々しげに吐き捨てて、悠斗にしては珍しく、いきづめ憤ったようにまくしたてる。

「芸能活動のきっかけはスカウトで、別に静流が無茶を言ったわけじゃない。最初は母親も自慢げだった。デビューが決まったときはギター教室で言いふらしていたしな。予想外に出演依頼が増えて、管理しきれなくなったにしろ、静流になんの落ち度もない……筋違いいもいところだ。」

だが、泣いて取り乱した親に突然離婚の危機を告げられて、激しくなじられて、しかもそれが大会前夜だった。あの時のあいつは、到底ステージに立てる状態じゃなかった」

そんなの……あんまりだ。

まだ小学生だった静流のその時の気持ち……想像なんてつくはず

もないけど、胸がつぶれるような思いで、じわり、と視界が滲^{にじ}んだ。

「結局、その時は離婚には至らなかったが、その後すぐに静流はギター教室をやめて、人前での演奏もやめた。一度はギターそのものをやめようとしていたが……それだけは、手放せるわけがないことはわかっていた」

険^{けわ}しい面持ちで語っていた悠斗が、そこで、おれに目を合わせて、少しだけ表情を緩めた。

「あいつが、ステージに立つと言った時、心底驚いたんだ。静流は何よりライブが本当に好きで……でも、3年前のあの日以来、頑^{かたく}なにそれを拒んでいたトラウマは、そうとうのものだったはずだから、おまえの歌が、あいつをステージに呼び戻すきっかけになった。今、たしかにあの時と状況は酷^{こく}似^じしているが、あの時の封印を解き放つきっかけになったおまえとのライブを、静流が放り出すことはないと思う……大丈夫だ。3年前とは、違う」

まるで自分にも言い聞かせるような悠斗の言葉に、首肯^{うけい}を返したけれど。

やるせなさはどうしようもなく、静流がこれ以上辛い思いをしなくてすむように、ただ祈るしかできない自分が、歯がゆくて仕方なかった。

59・静流を捜して

関東大会前日は、悠斗の剣道の大会があつた。

結局団体戦のみに選手登録した悠斗は、大将として出場した試合は全て一本勝ちをしたが、準決勝で先に対戦校に三勝されて、ベスト4で終わった。それでも美楠剣道部としては、なかなかの成績だったらしい。

三年間の部活動の花道に涙を散らすレギュラーたちから「ありがとう」と代わる代わる抱きつかれ、そんな彼らと（当社比でだが）親しげに言葉を交わす悠斗を見て、ホッとした。

バンドのせいで剣道部内で孤立してるのではないかと心配していたが、妬み^{ねた}を抱いていたのは、ごくごく一部の生徒だけだったらしい。夏休みに入ってから、合宿の間以外は偏りなくほぼ両立させていたし、それがどんなに大変なことか、他の部員達も十分に理解してくれているようだった。

夕刻の帰り道の電車の中で。

「お疲れさん。 カッコよかったぜ」

今までの努力をねぎらう気持ちも込めて、本心から伝えたと、悠斗はふいと視線をそらした。あ、照れてやがる。

「なんだよ、なんか返事しろよ。ほんとに、すごいと思ったんだから」

ニヤニヤしてわざと視界に入るようにのぞき込んでやると、悠斗は「おまえな……」と顔をしかめたが、その後何気なく外に向けら

れた目が、みるみると面積を広げていく。

「静流……？」

形の良い唇から零れた眩きに、びつくりして窓に張り付いた。

発車のベルと同時に瞳に飛び込んできたのは、フラフラと危なっかしい足取りで駅の階段に向かっていく細身の美少年の姿。

電車はあつという間に速度を上げ、大きな看板や生垣いけがきが次々に流れていく光景しか見えなくなる。

ドクンドクン、とにわかに速くなる鼓動。

あれが、静流？

ひどく顔色が悪くて、心ここにあらず、といった雰囲気……たしかに顔かたちは静流だったが、まるで別人のようだった。たった今自分の目で見たはずなのに、信じられない。

次の駅に停車するや、ホームに飛び降りて、ケータイを鳴らす。

静流には、通じなかった。

反対車線に入ってきた電車に、衝動的に飛び乗った。

「和希、今更戻って探しても、見つかるとは思えないぞ？」

「だけど……もしかしたら、まだ駅の近くにいないかもしれないし。このまま真っ直ぐ帰るなんてできねーよ」

悠斗は小さくため息をついたが、付き合ってくれらしい。

さっきの駅で降りて、改札を出たが、人の波。山の手沿線の副都心だから、確かにここでもなんの当てもなく探し回るのは無謀というものだろう。

ギリ、と歯を食いしばって、駅前広場で視線をさまよわせていた
ら……

「和希」

背後から、妖艶ようえんな低音が響いた。

「魔王！ ロン！」

意外な人物との遭遇に、目を丸くするおれと悠斗。

「あつれー、なにごと？ 勝気なアンタのそんな途方に暮れた顔見
せられると、どーしよーもなくそそれちゃうんだけど」

軽口を叩くロンをガン無視して、魔王に息せき切って問いかけた。

「おい、静流見なかったか！？」

「紫葉静流……？ 探しているのか？」

大きくうなずくと、魔王はわずかに目を眇すがめてから「あいつのい
きそうなところは……」とライブハウス、クラブ、カラオケボック
ス、公園、ゲームセンターなどいくつかの候補名を挙げた。悠斗が
うなずく。

「そのライブハウスと公園ならわかる」

「分担しよう。魔王、クラブの場所、詳しく教えてくれ」

「ついてこい」

驚いて見上げると、ムスツとしたまま「案内してやる」と顎あごでう
ながす魔王。

「方向感覚皆無のおまえが、一人でたどり着けるとは思えんからな」
「恩に着るぜ！」

魔王にも付き合ってもらってあちこち探し回ったが、どこにも静流の姿を見つけることはできなかった。

「ここも、外れか」

魔王のチツという忌々いまいましげな舌打ちとともに、最後の候補地だった店を出た。外はもう、すっかり暗くなっていた。

「……ありがとな。もう十分だ。あとは、一人で探してみる」
「待て、和希……！」

魔王の制止を振り切って、駆け出した。もう一度、公園のほうへ行ってみよう。

ポツリ。ポツリ……。

降り始めた雨が、まるで静流の流す涙のように思えて、胸がかき乱される。

いくら大人びてるつつつても、見た目は華奢きゃしゃな中学生だ。否が応にも人目を引くあいつが、あんな弱々しい姿で放浪してたら、どんな危険に巻き込まれるともわからない。

走り続けたせいで、心臓が口から飛び出しそうになりながらも、公園にたどり着くと、入り口近くで悠斗とロンが何か話していた。

魔王の指示でやはり搜索に協力してくれていたロンは、駆け込ん

できたずぶ濡れのおれを見て、ピューッと口笛を鳴らす。

「馬鹿、無茶するな」

表情をさつと強張らせて、コンビニで買ったのだろっ、ビール傘をおれの上に差し出す悠斗。

「静流、は……?」

ゼエゼエと苦しい呼吸を整えながら尋ねると、二人は首を左右に振った。

「……諦めよう。大丈夫だ、あいつは、賢い奴だ。自暴自棄じほうじっせになつて無茶な真似をするようなことは、ない」

「……………」

黙ったままうつむいていたら、やや強引に肩を抱かれるようにして、つながされた。

あらが抗う気力はわかず、のろのろと、歩き出す。

「つき合わせて悪かったな」

「ホントになあ。この借りは高くつくぜ? んじゃ明日会場でな」

すぐそばで交わされる二人の会話が、やけに遠く感じられた。

60・慟哭の雨

この濡れネズミじゃ電車にも乗れないということで、公衆トイレで悠斗の剣道部Tシャツとトレパンに着替えて、消沈しながら帰途についた。

「……家に着いたら、すぐに風呂に入って身体を温めて、しっかり睡眠をとるんだぞ」

バラバラと傘に打ち付ける雨音に混じって、悠斗の声。

「夏とは思えないほど、今夜は冷える。明日は本番なのに、あんなに雨に打たれて……どうして、おまえはそう……」

そういつてため息をつくこいつも、傘をほとんどこっちに傾けているせいで、右肩がびしょ濡れだった。

「……人のこと言えねーだろ」

色んな気持ちが渦巻いていたけど、無理矢理でも少し笑ってそう言つと、悠斗はもう一回大きく嘆息した。

重いながらも規則正しく進められていた歩みが、不意に止まったのは、家まであと少し、という距離のことだった。

隣で小さく息をのむ音に、何事かと、うつむきがちだった視線を前方に向けて ドクン、と心臓が大きく跳ねた。

おれの家の前にたたずむ、濡れそぼった一つの影。

力なく、ただただ二階を見上げる静流の頼りなさげな横顔が、街灯の青白い光に照らし出されていた。

「静流……！」

声をあげたおれに、振り返った静流は、瞬間、ホツとしたように、泣くのをこらえるように……いろいろな感情が混ざったように、顔を歪ゆがませた。

「センパイ……」

かすれて震えるようなその声を耳にした瞬間、無意識に駆け寄って、抱きしめていた。

密着した肌が、驚くほど冷たくて、何かが込み上げてくる。

「馬鹿……おまえ、いつからここにいたんだよ!？」

その細い身体を少しでも温めたくて、ぎゅつと背中に回した腕に力を込めると、わかんない、とギリギリ聞き取れるくらいの小さな声。

「気がついたら、ここにきてたから」

「何があつた？」

ちよつとだけ身を離して、真正面からのぞき込むと、静流は自嘲するように弱々しい笑みを浮かべた。

「別に……わかってたことしかなかったよ。もう、どうにもならないって。別れるから、どっちについてくるか、選べって言われた。それだけ」

「……………」

「……3年前に、願掛けしたんだ」

ぽつり、と話し出した静流の声は、やっぱり消え入りそうな音量しかなくて。

ザーザーと降りしきる雨にともすればかき消されてしまいそうなその響きに、全神経を集中させて、言葉の続きを待つ。

「神仏なんて、ハナから信じてないくせに。好きなものを我慢したら、願い事が叶うっていうから……二度とライブをしない代わりに、離婚しませんようにって。馬鹿馬鹿しいって自分でも思いながら、でも、必死だったから、たしかにそう祈ったんだ」

「……………」

「その時は、願いが叶ったと思った。でも、二人の仲はどんどん悪くなる一方で……地方赴任ふにんが決まった時、母さんは意地になってついていく事を選択したけど、もうとつくにダメになってることは、明らかだった。オレは、断ち物たなんか無意味だって空しくなってる。そんな時、センパイの歌を聴いて、センパイ達のライブを見て、もうどうしようもなく一緒に演奏したくなって……誓いを、破った」

次第に、静流の声がボリウムを増し、激情をはらんだものになっていく。

「神頼みなんてらしくない、オレがどんなに祈ったところで、あの人たちのことはあの人たちにしか解決できなくて、なるようにしかならない。そう思って、バンドに入ったけど、きつとそんなの言い訳で、オレは結局、自分の欲に負けたんだ。オレはずるい。オレのせいじゃないけど、オレのせいかもしれない！ 頭じゃ論理的じゃないって理解できてるのに、苦しくて、自分が嫌で、むかついて、吐き気がして、爆発しそうになる。もう、なにがなんだか、わかんないんだ……！ オレは汚い。オレは最低だ。オレなんて消えたほ

うがマシ」

「おまえは悪くない！」

叫ぶように自分を責める静流に居たたまれなくなって、負けないくらいさうきの大声で遮った。

「おまえは何も悪くない。おまえの言うとおり、どうしようもなかったんだ。」

静流はずるくなんかないし、いつもよく周りをみて、人の気持ちを考えて行動できる、優しい奴だ。おまえが自分を責める必要なんて、全然ない」

雨か涙か……しきりにしずくに雫の滴るほおを両手ではさんで、まっすぐに目を見て断言する。

「誓いを破らせて、おまえを引き込んだのはおれだから、もし責任があるって言うなら、おれのせいだ。謝るよ。辛い思いをさせて、ごめんな。でもおれは、おまえと一緒にバンドできるように頑張って本当に嬉しかったし、感謝してる。どんなに憎まれても、恨まれても、おまえと一緒に音楽ができることを、後悔なんてしない。おまえがいてくれて、よかったよ。ありがとう」

心からの思いを伝えて、祈った。

どうか、わかってほしい。おまえは悪くないんだから。傷つく必要なんて無いんだから。

もうそんな悲しいことを、考えないでくれ！

静流は呆然としたようにおれを見つめていたけれど、次第にその顔がくしゃくしゃになるや、こらえていた全てを爆発させるように、

慟^{なげ}哭^くした。

おれは、この激しい雨が静流の悲しみを全て洗い流してくれたらいいのと思いつながら、その身体を、グツと抱きしめ続けた。

61・狂い出す歯車

「二人とも、家に入って、すぐにシャワーだ」

静流の感情が静まってきたのを見計らったようなタイミングで、不意に煌の声がした。騒ぎに気づいて、玄関先に出てきていたらしい。

「静流は、俺の家で浴びるといい。二人とも、このままではいい加減、風邪をひくぞ」

いつのまにか、傘をおれ達の上に差しかけてくれていたらしい悠斗も、そう言いながら全身びちょびちょだった。

シャワーを浴びてリビングに出て行くと、煌が温かいカップを渡してくれた。

本当に、今夜は8月とは思えないくらい寒い。風呂から上がっても、まだゾクゾクと寒気が続いていた。

淹れてもらったココアを一口すると、啞内こつないに広がる甘さと熱に生き返る心地で、自然、大きなため息がついて出た。

「大丈夫か？ 顔、赤いぞ」

心配そうにおれの額に手を当てた煌が、瞬間、ギョツとしたように目を見開く。

何事かと首を傾げた途端、いきなり横抱きに抱えあげられて、狼狽ばいした。

「な、なにすんだ。離せ！」

「うるさい。おまえはもう、問答無用でベッド直行」

煌はおれの抵抗にとりあわず、きっぱり言い切ると移動を始める。降ろせ、と暴れたくても、身体が重くてなぜか力が入らなかった。結局、成すがままに自室のベッドまで運ばれて、布団をかけられた。

いつになく青ざめた芽生がもってきた体温計が示した数値は39度2分。

「静流は……？」

全身に広がり始めた熱と痛みもつらさに朦朧もろろとしながら、氷枕を敷いてくれた煌に尋ねると、淡い笑みとともにくしゃつと頭を撫でられた。

「シャワーからあがったら、ずいぶん落ち着いたらしい。おまえに『ありがとう。明日はがんばるから』って伝言残して、家に帰ったって」

「そう……か。よかった……」

何か作るから薬飲もうな、と煌が階下に降りていったのを確認するや否や。

「あんた何やってんのよ！」

つかみかからんばかりの勢いで、血相を変えた姉貴になじられた。

「こんな……こんな大会直前に体調崩すなんて信じられない。『ときメロ』で病気になるのは、休息を取らずに体力ゲージが5分の1以下になった時……あんた、あたしが決めたスケジュール以外にも、

もしかして勝手に練習してたわけ!？」

「……………」

おれの無言の肯定に、姉貴は頭を抱えた。

「ありえない……あたしは、ギリギリで最良のスケジュールを組んでたのよ？ 体力的にもせいっぱいだったはずなのに、なんでまだやろうとするわけ!？ 睡眠時間^{けず}どんだけ削^{けず}ってたの？ いくらなんでも無茶しすぎよ!」

「……限界まで、できることしたかったんだ。自分では、大丈夫だと……」

「バカバカバカバカ! 倒れたら全イベント放棄^{ほうき}で1週間ベッドに強制はりつけなのよ!？ ここまでやってきてゲームオーバーとかありえない……!」

涙目で告げてくる姉貴の言葉に、しばし目の前が真っ暗になったが、グツと奥歯をかみしめた。

「そんなこと、させない。関東大会には這^はってでも出場して、歌う」

「無理よ」

「無理じゃねえ! この世界は前から、ねーちゃんの知ってる『ときメロ』とは違ってきてるんだろ!？ 『羽鳥和希』はテンプレのヒロインじゃねえ。全てがゲーム通りじゃないんなら、今回だって違う展開にできるはずだ……!」

うなるように宣言するおれに、姉貴はパチパチと涙をこらえるように瞬きしてから、キュツとおれの手を握ってきた。

「…………ごめんね」

泣き声交じりで囁くように零されたのは、耳を疑うような、殊勝な一言。

ばかやろう、縁起でもねーや。百万回謝ったって、今更遅いつつの。

そう、言ってやりたかったけど、もはやそんな余裕はなかった。頭が割れそうにガンガンして、体中がズキズキして、しんどくてたまらない。

負けてたまるか。

おれは、歌うんだ。今まであんなにがんばってきたんだから、絶対、みんなで、最高の演奏を……。

必死に自分を奮い立たせようとしたものの、おれの意識は、そこで途絶え、深い闇へと呑み込まれていった。

62・絶不調の中で

ぴぴぴぴぴ……

けたたましい、電子音。

いつもの朝の光景だが、覚醒した瞬間、全身があわ立った。まさか！？

スタート地点へのループの可能性に戦慄したが、ふとベッドの脇を見ると、煌が床に座ったままコクリ、コクリと頭を揺すりながら寝入っていた。そのかたわらには、タオルケットをかけられて横になった芽生の姿。

氷の溶けきった洗面器の水面が、窓から差し込む朝日を反射し、キラキラと光っている。

顔を動かした時に頭からずり落ちてきた湿ったタオルをつかみ、まだ、ゲームオーバーにはなっていないらしいと胸をなで下ろした。

「……和希」

おれが身体を起こす気配に気付いたのか、煌の目がぱちりと開いた。

「起きたのか。具合はどうだ？」

「ああ、大分楽になった。一晩中ついててくれたんだな……ありがとう」

「おまえ、昨日はほんと死にそうだったからな……」

疲労と安堵が半々ににじんだ笑みを浮かべながら、煌の顔が近付いてくる。

え……？

ボーツとして反応が鈍くなってるおれのひたいに、自分のひたいを合わせると、煌は眉をかすかにしかめた。

「まだ、少し熱があるな」

「ばかやろ。人が動けないと思って何さらす！」

ブン、と振った腕をひょいっと避けながら、「ま、昨日よりは明らかによくなつてはいるけど」とまったく悪びれたところなく言葉を継ぐ煌。

「今日はこのまま寝てた方がいい」

「馬鹿言つな。やつとたどり着いた関東大会だ。絶対出る」

「無茶だ」

「無茶でもやる。咽喉のどはやられてないし、歌える」

そう言ってる間もフラフラしたが、ギュッとシーツを握り締めてこらえ、にらむように宣言した。

「……………」

煌はしばらく黙って見つめ返していたが、おれが頑として譲らないのを悟ると、大きく息を吐き出した。グツと身体を伸ばしながら、部屋のドアへと足を向ける。

「とりあえず、薬だな。すりおろした林檎りんごくらいなら、食べられるか？」

あちこちで不協和音の軋^{きし}みをあげる、鉛^{なまり}のように重い身体。激しい眩暈^{めまい}と汗でかすむ視界。

全身が熱くて、燃えるようだ。

一度は落ち着いたのだが、どうやらまた悪化してきたっぽい。
関東大会の会場内、女子更衣室から控え室までのほんのちよつとの距離も、千里のように果てしない道のりに感じられる。

衣装の長いドレスの裾^{すそ}が、うつつうしくてならない。
階段を踏む足が、ずるり、とずれて、やばい……！ と肝^{きも}を冷やした刹那、力強い腕に抱きとめられた。

「どうみても瀕死^{ひんし}ではないか。こんな状態で、舞台に立とうというのか？」

眉間に深いしわを刻み、間近で見下ろす絶世の面差しは魔王のそれ。髪はうしろで一つに束ね、ゴスロックのハードな黒い舞台衣装に身を包んでいる。

「うるせえ。やると決めたからには、やる」

はあっと息を吐いて体勢を立て直すと、再び階段を上り始める。

「うつつひゃあ、見てらんねー」

言葉とは裏腹にどこか興奮したようなロンの声も聞こえたが、反応する余裕はなかった。

「！？」

不意に、身体が浮いた、と思ったら、肩の上に抱えられるようなかっこうで魔王に抱き上げられていた。

「な……！？」

「感謝しろ。運んでやる」

無愛想にそう言うと、控え室へと歩を進める魔王。

「……悪い」

反抗する気力もなく、ぐだつとそのままもたれかかることにした。はたからみたら、死体を運んでるように見えるかもだ。

「ここだ。……ありがとう」

「どれだけ足掻いたところで、俺に勝てるはずもないものを」

ドアの前で降ろされて、礼を言おうと顔を上げたおれにかけられたのは、そんな憎まれ口だった。

「へっ、おれ達の演奏きいて、度肝抜かすなよ……！」

荒い呼吸をつぎながら、精一杯唇の端を吊り上げて言っでやると、魔王はフツと微笑んだ。

「アンタ、マジでやるつもり？　舞台上で倒れたりしたら無様だぜ」

隣でケラケラと大笑いしてる馬鹿には、思いつきり冷たい無言の一瞥を投げつけてやる。ブルブルツと身を震わせてから、満面の笑

みでペロリと唇に舌を這^はわせるロン……っとな、どーゆー神経してんだよ、こいつ。

「和希ちゃん。大丈夫？」

控え室の扉を開けると、バーテン風の衣装をまとった4人が駆け寄ってきた。

「無理しないで。棄権^{きけん}を選んでも、僕たちは誰も君を責めたりしないよ」

心から氣遣わしげに眉根を寄せる王子。

「いや、どうしても出たいんだ。体調管理が甘くて、ごめんな」

悲痛な表情で、静流が大きく頭を下げる。

「センパイ、本当にごめん、オレのせいで……！」

「やめろって。おまえが気に病むことはねーから」

この体調不良の原因はオーバーワーク。おれさえしっかりしてればこんなことにはならなかったのに、静流はひたすら自分を責めているようだった。うつ、面目ない……。

「おまえこそ、大丈夫か？」

ふらつく足を踏みしめながら問うと、静流は瞬きし、何か言いかけてからそれを飲み込んで、大きくうなずいた。

「もう何を言っても無駄なんだろう？ ……頑固な奴だ」

呆れたように吐息を漏らしながら、心配そうに瞳を曇らせる悠斗。

「おまえに言われたくないっての」

煌は、じっとおれの目を見つめていた。

決意を込めて見つめ返すと、固く結ばれていたその口元がふつと三日月を描く。一言。

「最高の演奏をしようぜ」

「ああ！」

63・関東大会。そして……

ぐらぐらと視界を揺らす眩暈^{めまい}、込み上げる吐き気、全身を苛む激痛。

その全てが、ステージで第一音が生まれた瞬間、どこかへ吹き飛んだ。

おれの意識は、火照り^{ほて}だけ残したまま、苦しくも甘やかな青の幻想世界を漂い、酔ったようにまどろむ。

息つきもままならない溺れるような恋の幻覚に、悶え、焦がれ、多彩に絡み響き合う艶音^{えんおん}に痺れ^{しび}を覚えながら、永遠のような刹那に陶醉する。

耽溺^{たんでき}と浮遊感。

悩乱^{のうらん}と多幸感。

めくるめく感覚の倒錯に半ば恍惚^{こうつう}として、音の海を彷徨^{たぐひ}いもがいていたおれは

“わあああああ……”

割れるような歓声と拍手で、我に返った。

終わった……のか？

「おまえってやつは！」
「最高だ」

「すごいよ、和希ちゃん」

「めっちゃゾクゾクした……！」

幕が下り、興奮で紅潮するみんなに囲まれても、朦朧もろうとしていて

「おれ……歌えてた……？」

笑顔でうなづく4人の姿を見た瞬間、大きな安堵あんどが広がって、最後の糸が切れたように、おれはその場に崩れ落ちた。

熱い。息ができない。苦しい。助けて……！

目の前で、オレンジがかった炎がうさぎのぬいぐるみをみるみるうちに呑み込むのを、おれは、絶望とともに凝視ぎょうししてた。

悪魔のような炎は恐ろしい速さでのた打ち回りながらその魔手を広げ、ぐるりと見回した屋内はあつという間に火の海へと変わっていた。

恐怖で頭が真っ白になり、ガクガクと震えていたおれの肩に、不意に、何かが落ちてくる。あまりの激痛に、声にならない悲鳴が飛び出す。肌の焦げる匂い。

熱い。熱い。痛い。痛い。嫌だ。怖い。死にたくない……！

「和希、しっかりして！ 和希！」

大きく揺さぶられて、覚醒かくせいしたおれのすぐ近くに、今にも泣き出しそうな芽生の顔が見えた。

「あ……夢……」

目を開けたおれに、姉貴は「よかった」と唇をわななかせて呟く。

「あんた、すぐくうなされて……このまま、死んじゃうんじゃないかと思っただわよ」

「みんなは……?」

「今、結果発表を聞きに行ってる。ここは医務室。……大丈夫? 顔色、真っ青よ」

指摘されなくても、わかった。

ドッドッドッドと胸を突き破りそうなほどけたたましく打ち付ける鼓動。

夢とわかってもおなほ、手足はブルブルと震え、心の芯まで凍えるような恐怖が消えない。壮絶な、炎の記憶。

「すごく、リアルで、怖い夢を見た。大きな炎に囲まれて、身動きできなくなってる、夢……」

呆然としたまま告げたところ、姉貴の顔が驚愕きょうがくに満ちたそれに一変した。

「この時期に、煌くんイベント……!? そんなことって……」

その真意を問おうとした時、バタバタと足音が接近してきて、派手に扉が開く。

「優勝だ!」

飛び込んできた4人の笑顔に、しばらく呆気にとられてから、じ

わじわと、なんともいえない波がわき起こっていった。

「 やったー! 」

歡喜の衝動にまかせて勢いよく起き上がった途端、目がくらみ、またぐつたりと横たわるはめになる。

「 センパイ! ? 」

「 大丈夫かい? 」

「 まだ寝ている 」

「 悪い、いきなり起き上がったから…… 」

バツの悪い思いで力なく笑ってから、急に込み上げてくる何かに、ぐつと唇をかみしめた。震えるほお。ジワジワと熱くなる目頭。

……やべ、ちょっと、我慢できねーかも。

突然頭から布団をかぶったおれに、あいつらが、息をのむのわかった。

「 ……………ごめん、熱で、感情セーブできなくなってるっぽい………… 」

ボロボロと、堰が崩壊したようにあふれ出した雫をぬぐいながら、布団の中から言い訳したら、ポンポン、といったわるようにはたかれた。

「 お疲れ様 」

「 ……おまえはすごい奴だ 」

「 本当によくがんばったね 」

「 最高の歌を、ありがとう 」

みんなの声と言葉が、あまりにも優しくて。必死に抑えようとしていたものが、いよいよこらえきれなくなった。

あーあ、恥ずかしいったらねーな。まだ、関東大会なのに……。

そう思いながらも、静かな医務室にしゃくりあげる音がもれるのを、もはやどうすることもできなかった……。

63・関東大会。そして……（後書き）

これにて2nd phase終了です。

でもって節目のお祝いに……というわけでもないのですが、web拍手にてメインの男キャラ5人で対談をさせてみました。シリアス続きの反動でものごつつアホなものになりましたが、よろしかったらどうぞ。変態でゴメンナサイ。

64・炎の追憶（前書き）

3rdステージ開幕。

いきなりへビーな展開ですみませんorz

64・炎の追憶

心身ともに相当まいっていたようで。布団にもぐってグスグス言っているうちに力尽きてまた眠ってしまっていたらしい。

次に気づいた時、おれは病院のベッドの上。

あいつら、過保護すぎ……でもないのだろうか。

大丈夫だと思っていた咽喉^{のど}も、ステージが終わるとズキズキと痛み出し、呼吸も思うようにできない。激しい咳も出てきて、一度咳き込むと止まらないし、とにかく全身が痛い。

倒れたら自宅から動けないというゲーム世界のルールに逆らうようなことをしたせい？

おれ、このまま、消えてしまっただろうか？

熱い。とにかく、熱くてたまらなかった。灼熱^{じやくねつ}地獄であぶられるような感覚

『和希！』

炎の中から、誰かが鬼気迫る声と共に飛び出してきた。瞬間、彼のまもっていた布全体に火が燃え広がり、いまいましげにそれを脱ぎ捨てる。

煌？

違う。煌の、親父さんだった。

その時、胸にわき上がった感情の波は、どう表現したらいいのだろう。

とほうもない安堵^{あんど}。喜び。憧憬^{しやうけい}。しかし同時に、それらのプラスの思い全てをのみ込むような、すさまじい絶望感。

ダメ。アナタハ、キチャダメダッタノニ。

『息、止めとけよ』

決死の形相でまなじりをつり上げた彼は、持っていたバケツに水と一緒に押し込まれていたビチョビチョのシーツですっぱりとおれを包むと、抱き上げ、走り出す。水に浸されていたはずのそれは、業火に熱され、一瞬火傷するかと錯覚するほどだった。

そんなに出口までは遠くなかったのだと思うが、その時間は、無限のように感じられた。

熱気がおさまったと思った瞬間、全身を覆っていた布がひん剥かれる。

『……よかった、た、無事……』

部分的に焼け焦げたシーツのすき間からおれが見たのは……。

「……和希!？」

全身汗だくで覚醒したおれを心配そうにのぞきこんでいたのは、少し年かさのいった優しくそうな女性だった。どこか親近感のわく、見覚えのある面立ち。

「あなた、和希が目を覚ましたわ」

女性の呼びかけを待たずに、壮年の男性が近づいてくる。

「よかった……まる2日も、目覚めなかったんだぞ」

ホッとしたからか泣き笑いのようになって、おれの手を握りしめ

てくる。

混乱するおれをフォローするように、そばにいた芽生が教えてくれた。

「パパとママ、お姉ちゃんが倒れたって煌お兄ちゃんから連絡を受けて、帰ってきてくれたんだよ」

なるほど、彼らはヒロインの両親　確か真治しんじさんと弥生やよいさん、だったか。見覚えあるはずだ、いつも鏡で見るヒロインの顔に似てるんだからな。（順番では逆なんだろうけど。）

「煌の親父さんが死んだのって……おれのせいだったんだな」

カラカラに渴いた咽喉。震える唇から零こぼされたおれの言葉に、真治さんが愕然がくぜんとしたように顔をこわばらせた。

「熱で、思い出したんだ……全部」

九年前の夏。ヒロインは煌と煌の親父さんの3人で、煌の父方の実家のばあちゃんちに宿泊中、火事にあった。

煌の父親が買い物で外出している間の発火。異変に気づいた時点でまっすぐ外に脱出していればよかったのだが……彼にもらったうさぎのぬいぐるみを取りにわざわざ奥の部屋に戻ったヒロインは、一人逃げ遅れてしまったのだ。

まだ大したことはない子ども心で過信していた炎は、すさまじい速さで家全体を覆った。

煌の父が帰宅したのは、そのタイミング。ヒロインを救出するため炎の海に飛び込んだ彼は、その結果、目的は果たしたものの全身に大火傷を負い、死亡したのだった……。

最後に見た、あまりに痛ましい光景。大好きだった　初恋の人

の、変わり果てた悲惨な姿。

やりきれなさに、ボタボタと、大粒の雫があふれだす。

真治さんはつないでいた手にグツと力を込めると、低い声で、話し出す。

「おまえは救出された後、すぐ気を失って……今と同じように、2日間うなされ続けて、ようやく目覚めたとき、火事に関わる全ての出来事を忘れていた。幼稚園に入った頃から毎年、夏にはあの田舎に遊びに行っていたのだけど……金城一家のことだけは、綺麗さっぱり覚えていなかったんだ。医師からは、大きすぎる罪悪感と恐怖による、記憶障害と診断された」

「……煌と、煌のばあちゃんは？」

「煌くんは、おまえがついてきていないことに気付いて中にかえ戻ってすぐ、背中に火傷を負い、帰ってきた崇たかし彼の父親に救い出されたそうだ。おばあさんは、最初の避難で火災はまぬがれたが、体調を崩して事件の一週間後に息をひきとられた。発火の原因は、古い扇風機だったらしい」

「でも、煌の親父さんを殺したのは、おれなんだよな！？ 間接的には、きつとばあちゃんだって。おれが戻らなければ、誰も死なずにすんだのに……！」

うめくようにそう吐き出したおれの頭を抱きながら、真治さんもたぶん、泣いていた。それでも、悲痛ではあるが落ち着いた声音で、言い聞かせるように言葉を継ぐ。

「おまえのせいじゃないよ。直接の原因は扇風機だし……でも、親である私には、責任があると思ったし、できる限りの謝礼と償いつぐながしたかった。けれど、小百合さん……煌くんのお母さんには、私の顔などみたくないと強く拒絶されて、そのうち行方もわからなくな

って 成長した煌くん偶然会った時、彼にだけでも援助を申し出たのだが、それも断られてしまった」

「煌も、内心ではおれを恨んでる……？」

胸にうず巻く大きすぎる感情に、飽和状態で呟いたおれを真っ直ぐ見つめながら、真治さんは「それはない」ときっぱり首を振った。

「彼は、誰も恨んだりしていない。おまえが事件のことを忘れているなら、忘れていられる方がいいと……うちで暮らすようにと誘ったときも、自分の存在が近くにあることでおまえが記憶を取り戻して、おまえが苦しむことになるんじゃないかと、そのことを何より恐れているようだった。そんな彼だったから、私はなおさら、困っているなら助けたいと思ったし、希望があるならできる限り叶えたいと思ったんだ」

「お母さんは、反対だったのよ」

真治さんが席を外した後、青ざめてまだ呆然としているおれの手をぎゅっと握りながら、今度は弥生さんが話し始めた。

「親のエゴかもしれないけど、煌くんがそばにすることで、あなたの記憶が蘇よみがえってしまうかもしれない。記憶をなくすくらい辛い、もうどうにもならない昔の悲劇を、今更思い出しても、苦しみしかないから……お父さんも、その可能性はわかっていて、それでも、彼をあなたに会わせてあげたかったみたい。

彼を家庭の悩みから切り離したいという気持ち以上に、彼の応援がしたかったんだと思うわ。ほんと、すっかり入れ込んでるんだから」

「応援……？」

よく意図が飲み込めず首を傾げるおれに、弥生さんは柔らかに微笑んだ。

「すごくいい子よね、煌くん。……まっすぐに、強くて、本当に、崇さんそっくり」

「……………」

「彼は、自分のせいであなただが辛い記憶を取り戻したらどうしようって本当に心配していたから……あなたが落ち込んで、これまでの明るさや素直さを失ったら、きっと自分を責めれると思う。何も思い出していないふりができるなら、その方が、いいと思うわ」

思い出していない、ふりを、した方がいい……？　そうなのだろうか。

わからなかった。おれはどうしたらよくて、何ができるのか。全然、わからない。

「　　そういえば和希が寝てる間、バンドの友達が代わる代わるお見舞いに来てくれたのよ」

暗い顔で黙り込んだおれの気を取り直そうとしたのか、口調をガラリと変えて、弥生さんが話し始めた。

「それはもう引つ切り無しに。他のバンドの子たちもいたかしら。すごいじゃない和希、びっくりするようなイケメンばかり！　さすが私の子ね！」

「はあ……まあ……そうですか」

「お母さんはずっと悠斗くん推しだったんだけど、あんなにみんなカッコいいと、迷っちゃうわね」

反応に困っていたら、いきなりズイツと顔をのぞき込まれる。

「で、和希は、誰が好きなの？」

「……いや、別に、好きか嫌いかと言えばみんな好きだけどさ」

友達として、と続けようとした言葉は、「ええっ6股!？」という弥生さんの大声にかき消された。オイオイ、おばさん……てちよ、待て、6!?

「6股つて……え? 煌と悠斗と王子と静流と魔王と……あとまさかロンも入れてる!？」

いくらなんでもそれはねーだろ、とほおを引きつらせるおれに、弥生さんはとんでもない爆弾発言をかましたのだ。

「ああ、たしかに紅龍^{ベニリウ}ロンを彼氏ですって紹介されたら、ちょっと戸惑っちゃうわね」

紅、龍?

65・虚構と現実、運命と選択。

「……あいつの名前は、道家ロン、のはずだけど……」

事態が飲み込めず呆然と呟いたおれに、「あ、本名は道家っていうんだ」と弥生さんは目を瞬かせた。

「本名……？」

「知らない？ モデルの紅龍くれないりゅうロン。紅の龍くれないりゅうってかいて、紅龍。あの顔といいファッションセンスといい、どう見ても本人でしょ。1年位前からちよこちよこファッション誌に出てるけど……まあ、確かにちよつとマイナーかしら。でも一部にはマニアックな人気があるのよ」

……えー！？

紅って、色が名前に入ってるってことは……えー！？

パツと芽生の様子をうかがうと、久々に見る、人の悪い笑みをニヤリと顔面いっぱいたたえていた。

えー！？

えー！？

……えー！？

「隠しキャラってやつね」

病室ではなかなかタイミングがつかめず、芽生とようやく二人っきりになれたのは目覚めた翌日、退院して自宅に戻ってからのことだった。

自室に入ってきて扉がパタンと閉まるやいなや、弾かれたようにベッドから身を起こすおれに、姉貴は開口一番そう言った。

「じゃあ、やっぱりロンも攻略可能キャラなわけ？ そんな、今更……」

「心配しなさんな。彼はちよつと特殊な位置づけでね。ベストEDの全員攻略の条件には入らないの。あんた、めっちゃビビッてたわよね。あの時の顔ったらもう……グッジョブ！」

ブブツと思い出し笑う姉貴。

ああ、そうだよ、こいつはこーゆー奴だ……殴りてえ。ボコボコにしてやりてえ……！」

「まあ、ロンには近づかないことを強くオススメするわ。あんたはあたしのことをどsとか言うけど、あれに比べたらあたしなんて全然可愛い方なもの」

「……ありえねえ。どんだけだよ」

「そんなことより気になるのは、シナリオのズレよ」

ガラリとシリアスモードに表情を一変させた姉貴に、おれも怒りはひとまず横に置いて、その先の言葉を待つ。

「本来の『ときメロ』ではヒロインが過去のあの記憶を取り戻すのは、11月。全国大会間近の煌くんシナリオ最終段階のことよ。イベントとして体調を壊して、その時の熱で火事の記憶が蘇るんだけど……あんたが無茶をしたせいで、イベントと同レベルの熱が引き起こされて、結果として、まだ関東大会にもかかわらずシナリオを先取りするような形になったみたい」

「最終段階のシナリオを、先取り……？」

復唱してしまったが、それが何を意味するのか、今ひとつピンとこない。

「先取りっていうより、早倒しっていったほうがいいのかしら。……まあ、彼らの親密度の上昇ぶりを見てたら決して不自然じゃないんだけど」

「上昇ぶりって、芽生には親密度やパラメータが具体的に見えるわけ？」

おれの質問に、姉貴はコクリとうなずいた。

「といっても数値として細かく把握はあくできるわけじゃなく、大まかな感じがつかめるだけなんだけど。もともと、『妹』はゲーム攻略をヒロインにアドバイスするキャラだから、そういう能力を持つてるのよね……で、和希。あんた、はんばないわよ」

腕組みしながらニヤニヤとほおを緩めまくる姉貴。こつという顔をするとき、ろくなこと言わないんだよな、絶対……。

「何がだよ」

「この時点ですでに全キャラほぼ恋愛マックス状態。本来のゲームシステムのありえないペースよ。あんた、ほんつと彼らのツボつつきまくりみたいね。まさか和希にこんな才能があったなんて。よっ、この天然小悪魔！ 男たらし！」

……ゲーム攻略がうまくいつてるのは何よりだけど、素直に喜べない、なんだろうこのジレンマ。

「ま、考えてみれば恋愛マックスなら最終段階のイベントが起こっても不思議はないわけなんだけど。」

前々からあたしが知ってるゲームとは違う展開になってるものや、そもそもゲームには存在しなかったイベントはあったけど、見るともはやシナリオなんてあつてないようなものなのよね。あるのはゲーム製作陣の作った『設定』と『システム』という枠組み……でも、このシステムさえも、狂ってきてる。

さっき言つたような親密度の上昇率もそうだし、何より、関東大会の優勝。本来は、どんなにがんばってもまだ『Der Luxustod』がxustod』には勝てないはずだったのよ」

「え……じゃあまあおれ達は2位通過のはずだったのか？」

「ええ。それにもかかわらず、通常とは違う状態でのぞんだせいか勝てちゃった。結果として今回は『Der Luxustod』が2位通過……これがどういう風にこの先に影響してくるかはわからないけど、もうほんと、何が起るかわかんない感じ。」

ゲームシステムを世界の輪郭りんかくとして受け止めるなら、世界の崩壊が始まってると思えなくもないから、ちょっと、ゾツとしないでもないけど。予定調和よていちやうわじゃない世界になってきてる可能性だってあるわけよ」

……予定調和じゃない世界、か。でも、おれはもともとこの世界が予定調和だなんて考えたことはなかった。

ときメロの世界は、もちろん2次元ならではのありえない設定やベタ過ぎる状況が満載で、虚構だつてわかつてる。それにもかかわらず、リアルと錯覚しそうなほど、流れる日常や感覚は真実味があり、ここに生きてる奴らは確かにこの世界で「生きて」いた。

それぞれがそれぞれの思惑と事情を抱えて行動し、影響を与え合う。

おれの選択しだけで変わっているかもしれない未来もあれば、動かしようのない、まるで運命みたいなやつもある。

ただ、ヒロインであるぶん、おれの世界への影響力はきつと本来とは比べ物にならないほど大きいのだと思うと、恐ろしくはあるけど。

結局おれができるのは、今までと同じ。せいっぱいの事をして、日々を重ねていくだけなんだ。

そうは思っても、このいくつかのズレが、やがて大きなほころびにつながるんじゃないかという不安は、胸の片すみに簡単には消えない黒い点をつけて染みこんでいった……。

66・煌の告白？

退院はしたものの、まもなく始まった新学期はまだ体力が戻りきらないということで欠席。

結局、回復を実感できたのは発熱からほぼ1週間後となる土曜日だった。

「じゃあ、和希、芽生、元気だな。煌くん、二人をよろしく」

その日、再び海外に戻る両親を見送りに来た成田空港で、真治さんはそんな言葉とともに煌の肩を叩いた。

なんかもう、おっさん、ベタ惚れだな……てのがこの数日でよくわかった。亡くなった親友そっくりの息子だったら、無理ないのかもだけど。

二人が搭乗口の向こうに見えなくなると、煌がこっちを振り返る。

「んじゃ、帰るか」

「ああ……」

やべ、また不自然に目をそらしちゃった。

あの記憶が蘇って以来、おれは、どう煌に接していいか、未だにつかみかねていた。

真治さんや弥生さんは、煌は恨んでなんかいないって言ってたけど……ヒロインがいなかったら、父ちゃんもばあちゃんも死なずにすんだんだ。

償い^{つぐな}いきれない過ちを犯してしまったヒロインは、おれじゃないけど、今はおれで。

申し訳なさと、やるせなさと……言葉では表しきれない色々な感情が絡まって、煌の目をまともに見れない。

こんな状態じゃ、記憶を取り戻したこと、隠しとおせる気がしない。そもそも、思い出してないふりするのが正解なのかも、わからないんだけど……。

ため息を飲み込んで帰りの電車の乗り場の方へと踵かかとを返したおれの手首が、不意に、グツとつかまれた。

「……と思ったけど。芽生！」

姉貴を呼ぶと同時に煌は、おれの手首を握ったまま、別方向へと歩を進め始めた。

「お、おい、煌？」

「一箇所、行きたいところがあった。付き合って」

連れて行かれたのは、海。シーズンオフの今は人気もなく、夏の明るさとは一変、物悲しい雰囲気漂っていたけれど……。

「すげー……綺麗だな」

夕暮れ、なんだけど、オレンジじゃなくて。

紫と薄桃色のグラデーションに染まる空。沈んだばかりの太陽の周辺だけがまばゆい金色に輝いて、千切れ雲と穏やかな海は、オーロラのような光を抱いてそこにあった。

トワイライトの絶景に、おれはしばらく言葉を失い、魅入っていた。

「この場所で、おまえを見たんだ」

耳にすべり込んできた優しい声に、驚いて振り返って……また、すぐにうつむいた。煌の顔をみるのが、こわかった。

「……うそ、つくなよ」

しばらく出すように紡いだおれの一言に、煌が小さく身じろぎしたのがわかった。

「おれ達が会ったのは、もっとずっと前だ。思い出したんだ……火事のこと」

やっぱり、何も知らないふりなんて、おれには無理だった。ただのエゴでしかないかもだけど、苦しくて、全て吐き出してしまわなと、おかしくなりそうだった。

「おまえの父親、おれを助けたせいで……！　なのに、当本人のおれは、それも忘れて脳天気生きてきて……ごめん！　ごめんなんて言葉で償えることじゃないけど、恨んでも恨みきれないと思うけど……本当に、ごめん」

静寂が、訪れた。

ざーん、ざーんという潮騒しおさいだけが、鼓膜を震わせる。

「やっぱり、思い出してたんだな」

やがてその場に落とされた煌の声は、目の前の海よりももっと静かで、深かった。

「俺が近くにいたら、いつかこんな日がくるんじゃないかって思ってたけど……辛い思いさせて、ごめんな」

「……なんでだよ！　なんでおまえが謝る！？」

思わず見上げた煌の夕空に照らされた顔は、寂しげだけど、どこまでも優しくて……本当に優しい瞳をしていたから、その瞬間、ぶわっとおれの両目から涙があふれ出した。胸が締め付けられて、おかしくなりそうだった。

「和希は悪くない。逃げ遅れた子どもを救って、その結果命を落とした……そんな親父を、俺は心から誇りに思ってるけど。あの火事は、誰が悪いわけでもない」

「うそだ！　そんな割り切れるもんじゃ」

「

「うそじゃない！」

両肩をつかまれて一喝されて、おれはビクリと身を震わせ、口をつぐんだ。

「単純に、恨めたら、よかったのか……？」

そう続けた煌もなんだか泣き出しそうに見えて、声も、一瞬かすかに震えたけれど、グツと唇を引き締めてから両手を下ろし、視線を海に向けて、言葉を継ぐ。

「俺の初恋は、5歳の時。夏休みに、父親の親友の娘だつて会わされた、一個年下の女の子。親父は普段は忙しくてのんびりできることは滅多になかったけど、毎年、夏の数日間だけは田舎で過ごしてその時はいつも真治さんも泊まりにきてた。俺は、その数日がいっつも本当に楽しみで、心待ちにしてたけど、真治さんの予定が合わずに、小学校に入っただばかりの娘が一人で泊まりにきた夏が、最後の夏だった……」

おれは、ギリギリと全身をさいなむ痛みに耐えるように、奥歯をかみ締める。ドクンドクン、と大きく鼓動が脈打ち、いやな汗が、噴き出す。

何よりも輝いていたそれまでの思い出が、悲劇で塗りつぶされた、夏。

煌はこつちをチラツと見て、蒼白のおれに心配そうに眉をひそめたけれど、思い切ったように言葉を継ぐ。

「正直、おまえを恨めしく思う気持ちもあったよ。一人だけ全部忘れて解放されてるなんてずるいって、思った。親父のことも、俺のことまで忘れてしまったことも、悲しくて悔しかった。でも、よく言うような愛情が一転して全て憎しみに染まるとか、そんな簡単なもんじゃなかった。親父やばあちゃんも一緒の、おまえの笑顔であふれたあの夏の日々は泣きたいくらい幸せで大切な記憶で……色んな感情がうず巻いて、どうしたらいいかわからなかった。

それに、恨むといえば、何もかも恨めしかった。おまえも、買い替え対象になってた古い扇風機を使い続けていたばあちゃんも、俺を残して逝ってしまった親父も、誰かに寄りかからなきゃ生きていけない弱い母親も！ 親父の存在はずっと俺の誇りで、支えで目標だったけど、親父が生きていればこんな思いをしなくてすんだのにつて思うことも、数え切れないほどあった。成長するにつれて負の感情の方が強くなって、心もどんどんすさんでいって……でも、絶望のどん底から救ってくれたのは、和希」

おまえだったんだよ、と真正面から揺るぎ無い視線で見つめながら、煌は言った。

不意に強い風が吹き付けて、おれたちの髪をバサバサとあおいだ。煌が身体の位置をずらしたのは、おれを庇おうとしてだろうか。

凧が戻ってきたところで、話を再開する。

「母親の再婚相手が、絵に描いたような最低男で。酒飲んで暴れてすぐキレて殴ってくる。中1の秋、何もかもが嫌になって、死のうと思った。場所を探してフラフラしてるうちにたまたまここにたどり着いて、おまえに、再会した。」

ちょうど、今日みたいに綺麗な日暮れ時で　そのテトラポットに座って、俺が近くにいることも気付かずに、無心に歌ってた。薄紫の幻想的な景色の中で、どこまでも澄んで、優しい声で歌うおまえの姿に、涙があふれて止まらなかった。

心から、純粹に、好きだと思った。ただ、ひたすら、好きだつて。うまく説明できないんだけど……理屈じゃなくて、ずっと心をぐるぐる巡ってた憎しみも恨みも、その時、消えていったんだ。そして、こんな綺麗なものがあるなら、こんな綺麗な歌が歌えるこの子がこの世界にいるなら、それだけで、まだ生きていけると思った」

67・煌の告白？

「……………」

何も言えずに、ただ見上げているしかできなかったけど、煌は表情を和らげて、流れ続けるおれの涙をハンカチでぬぐった。

「あんまり泣くと、干からびてミイラになるぞ？」

「……………ばか。ならねーよ」

ずびつ、とひっぱり出したティッシュでわざと大きく鼻をすすってやると、煌は小さく笑ってから、壊れ物を扱うみたいにそっとおれの頭をなでた。

「俺に会って、忘れるくらい辛い記憶が蘇って傷つけることになるかもしれない……………それがこわくて、すぐその場を去ったんだけど。おまえと一緒に来てた真治さんは気付いてたみたいで、追いかけてきてくれたんだ。その時、色々相談に乗ってもらって、母親にも連絡を取って……………あのひどい義父と別れたのは、真治さんが尽力してくれたおかげだった。」

この春に再会した時は、羽鳥家に来いって言うてもらえて……………おまえが思い出さないかはすごく心配で、さんざん迷ったけど……………嬉しくてたまらなかった。ずっと好きだった和希がすぐ目の前にいて笑ったり怒ったり呆れたり焦ったり。俺は一生懸命カッコつけて平気なフリしてたけど、おまえの一挙一動にいちいちドキドキして、心臓飛び上がりそうになったり、めっちゃめっちゃテンションあがったり、落ち込んだり……………幸せすぎて、おかしくなりそうなくらい、幸せだった」

そう言って、くしゃりと破願^{はがん}した煌の言葉が心からの偽りない想いであることは、間違いなかった。

……どうして、許せるんだろう。そこまで優しくいられるんだろう。

……どんだけ、好きなんだよ。畜生……。

胸がいつぱいになって、瞬間、突き上げてきたかつてない感情のうねりに、戸惑い、あわてて押し込める。やっと止めたと思った涙がまた零れ^{こぼ}そうになったから、まばたきをくり返してこらえた。

煌はそんなおれから視線を引き離すようにして、また、徐々に宵闇^{やみ}に溶けていく海を見ていたけど、突然「あゝもう！」とがなつてからしゃがみ込んで、自分の頭をぐしゃぐしゃかき回した。

ビックリするおれを仰ぎみて、情けなさそうに力なく笑う。

「やっぱり、思い出して欲しくなかったし……もし思い出したとしたら、絶対こんな風には俺から告白はしないって決めてただけだな」

「……どうして？」

「おまえは優しいから。俺がこんな話と一緒に告つたりしたら、同情して、別に俺のことそーゆー意味で好きじゃなくても応えようとするんじゃないかと思って」

ドキツとした。

こいつの力になりたい、おれができることならなんだってしてやりたい……そんな気持ちになっていたのは、事実だったから。

煌のことは、好きだった。明るくておもしろくて話は合うし、奔放^{ほうほう}な言動に振り回されることもあるけれど、一緒にいると楽しくて居心地がいい。こんな男になれば、って憧れみたいな気持ちもず

つとあった。

そして今。

煌が抱えてきたものの大きさを知って、優しさに触れて……今までは比べ物にならないくらい、どうしようもなく、好きだと思った。

わき起こったのは、抱きしめてやりたいという衝動。こいつを支えたいという、気持ち。

でも……これは、煌が望むものとは違う形のものなのかもしれない。同情、ではないんだけど。

黙りこくってしまったおれの両ほおが、いきなりぐにゃつとつままれて広げられる。

「あにふんはよ!？」

何すんだよ、と抗議するおれに、煌はニヤニヤしながら、ことさら明るく言った。

「辛気臭い顔すんなって。この話は聞かなかったことにして、おまえはいつもどおりのほほんとしてろよ……頼むから」
「……わ」

かったよ、という台詞に、ぐきゅるるる……という特大のおれの腹の虫が見事に被った。

~~~~~なんだよこの絶妙のタイミング!

そりやずつと食欲なくてロクに食べてないから、腹は減ってただるうけど……わかった、ベタが起こりやすいのはこの世界の仕様なんだ、間違いない!

数秒ポカンとしてから弾かれたように爆笑し始めた煌を蹴り飛ば

し、離れたところで貝殻拾いに精を出していた芽生を「帰るぞ！」と呼びつける。

「……煌、いつまで笑ってんだ！」

「だっておまえ、狙ったようなあの返事……今も真っ赤になってゆでダコみたいだし……！」

ギロリ、と全力で睨みつけてやると、ようやくコホン、と咳をして真顔になった。それでも口元はまだ微妙に緩んでいる。

「夕飯は、何がいい？」

「……魔法のカレー」

おれの言葉に、ハッと息をのむ煌。

「おれ、思い出したこと、よかったと思ってる。苦しいけど、だからってこの罪悪感ばかり投げていいもんじゃないと思うし、命の恩人のこと、忘れたままなんて絶対に嫌だ。なにより……おまえの話が聞けて、よかった」

「……………」

「煌がいつも自分のことよりおれのことを考えて、気を遣ってくれたのは、本当にすごく嬉しい。ありがとな。でも、これから、一人でなんでも背負い込もうとすんなよ」

おれは煌の彼女になってやることはできないし。今もなお胸にうず巻くこの感情が、どんな名前がつくものかわからないけど。

煌が抱える痛みや深い感情を、共有できるなら、よかった。

でも、こんな中途半端な状態でこんなこと言うのは、自己満足でしかないのかな……。

いつものように後先考えずに言ってしまったって、ちょっと不安にな

ったけれど。

「……ありがとう」

煌が、目を潤<sup>うる</sup>ませて本当に幸せそうに、穏やかに笑ってくれたから、おれもまた、もらい泣きしそうになった。……まったく、涙腺<sup>なみだ</sup>ぶっ壊れてるな、今日は。

## 68・プールサイド・カブリッチオ

週明けから、ちょっとだけ出遅れた新学期がスタートした。

軽音部としては、とりあえず9月の第3水曜日の夜、煌のバイト先であるお馴染みのライブハウス『T・M GARAGE』で予定されてる対バンライブを目標に、練習を開始。

それはともかくとして、このところ土日のうまり方がはんばなかつた。

煌と海に行った次の週の土曜は王子と水族館。日曜は悠斗とロックフェス。その翌週の土曜は静流と動物園……。

誘いは原則断るな、という姉貴の厳命だが、この節操のなさはずきり言わなくても最低じゃなかるうか……この日、と提案される日がかぶらないのが、不思議でしかたない。

恐るべし、乙女ゲーヒロイン。許せ、みんな（涙）

今日、日曜日は久々に予定のない休日だったので、肺活量強化のボイストレーニングのため、一人で市民プールに泳ぎにきたのだが……。

『本日、改装工事のため休業』

反応しない自動ドアの前に置かれた看板に、脱力した。ちえっ、ついてねーや。

とぼとぼと引き返していたら、道路脇にいきなり黒の高級車が寄ってきてクラクションを鳴らされた。

停車して開かれたウィンドウの中から現れたのは、見た瞬間震えの奔るほど艶麗な面立ち。

「まだ体調が優れぬのか」



「魔王……いや、もう完全回復だぜ。入院中は見舞い、さんきゅな」  
「ではなぜそのように悄然<sup>しんそうぜん</sup>としている？」

プールが休みだったことを話すと、「乗れ」とドアを開けられた。  
……結局今日もデートですか。そうですか。

魔王につれてこられたのは、黒川系列のホテルの最上階に設けられたスイミングプール。

開閉式の全天候型のドーム天井。プールサイドには観葉植物やウツドチェアー、さらにはジャグジーなんかも備えられ、なんとも優雅な雰囲気<sup>ふんぎ</sup>に満ちあふれている。

あんまり激しく泳ぐ感じじゃないなあと思いつつも準備運動をしていたら、「和希」と呼びかけられた。

振り向くとブーメラン水着で仁王立ちする仏頂面の魔王がいて、思いつきり吹いた。

なんつーか、サービスしすぎだろ！ 激しく目のやり場に困るんですけど！

こいつもプールに入るときいて、最初に想像したのは水面に浮かび上がった魔王の長い髪がメデューサの蛇のようにのたくり広がった姿。

見てえ！ と内心わくわくしていたのだが……髪は後ろですつきりと一つのお団子にまとめられていた。

どうせならセーラー ーンみたいなツインお団子だったらおもしろかったのに……っておれは何を魔王に期待してるんだ。

「ほつ……」

魔王はおれを見て目を細める。また水着についてなんか言われるのだろうか。でももう何言われても動じねーぞ……

「その胸、贗物にせものだな」

「な、なぜわかったー！？」

って認めてどーする、おれ！

あせて口をふさぐおれに、魔王は誇らしげにフンと鼻を鳴らした。

「俺の眼力をなめるな。女体のバストの数値であれば、衣服や下着の有無に関わらずミリ単位での確に見抜ける……」

「おまえそれ今度ステージで言ってみろ。一気にファン減るから」

おれのツツコミに魔王は唇をかすかに緩めると、「まあ、それは差し引くにしても」と歩み寄ってきた。

「なかなかおめいに潤いある光景だ」

「ストップ！ プールではおれの半径2メートル以内に入ってこないように言っただけだ」

「……俺は感染性病原体か？」

こんな半ヌードでこいつの接近を許すほどおれだっけつかつじやないのだ。

約束を破ったら即帰る、と伝えていたので、魔王はいらだたしげに舌打ちしたが、それ以上は近付こうとはしなかった。なんか、猛獣手なす懷けたような感じで、ちょっと楽しい。

ほとんど貸切状態のプールで、ひたすら泳いだ。

1時間ほど続けて、さすがに疲れてプールサイドにあがると、手前のコースで悠然と泳ぐ魔王の姿が見えた。無駄のないフォームで水をくぐり、かなりのスピードなのに余裕があって気持ち良さそうだった。

端に手が触れて立ち上がり、落ちてきた濡れ髪をかき上げながら、ふうつとため息を漏らす。

……うーん、しゃべらなければ物凄いイケメンなんだよな、やっぱ。

つくづく惜しいと思っていたら、突然、誰かに背中をつーっとなぞられた。

「か・ず・き・チャン」

「~~~~~ロン!? てめ、何しやる……!」

「キレイな背中が無防備にさらされてたらこりや触らざるをえないでしょ……ってすみません! ほんの出来心!」

ニヤニヤしてたロンだが、いきなりサツと青ざめると大きく後ずさった。

前方に視線を戻すと、全身から黒い渦をぐるぐると発生させた魔王が恐ろしい眼差しで、ザン、と水からあがってくるところだった。ひいひいひい、おっかねええええ。

「ロン……貴様、藻屑の泡と消えたいか……?」

「お、落ち着け、魔王!」

ロンはどーなってもかまわねーけど、こいつが本気で暴れると一般客にもどんな被害が及ぶかわからない。

とっさに駆け寄って、バキボキと鳴らされていた半握りの右の掌を押さえると、すっと殺気が薄れた。

正気に返ったか、とホッとした瞬間。  
両腕で抱きすくめられる。

「近付いた途端なにやってんだてめーは!!」

おれの蹴りが炸裂<sup>さくれつ</sup>し、プールにでかい水柱があがった。

## 68 プールサイド・カプリッチオ（後書き）

妖艶どこいった魔王。

## 69・水曜のハプニング

服を着てラウンジに出ると、ソファに座っていたロンが「よつ」と手を挙げた。相変わらず、ど派手な私服姿。

「さっきは命拾いしたぜ。ありがとさん」

「魔王は？」

「まだ中。あの人、髪長いからさ」

ドライヤーでキューティクルケアしてる魔王を想像してまた吹いた。やべえ、怒ってたのに……いちいちツボつきやがるぜ、あの野郎。

「おもしろいよな、アンタ」

ロンが足をブラブラさせながら、おれをななめから見上げる。

「舞台に立つとまるで別人。こないだの関東大会はマジヤバかったぜ。吐息交じりの歌が超セクシーでゾクゾクビンビン。あの歌声と表情だけで何度もイキそうになった」

「下品」

おれの冷たい言葉に、笑み崩れるロン。こいつには罵<sup>ののし</sup>りも蔑<sup>さげす</sup>みも逆効果なんだよな……もう、どうしろと。

「おまえはいつでも楽しそうでいいな」

呆れるようにいったところ、ロンは「んあ？」と眉をひそめた。

「んなことねーぜ？　ぶつちゃけ毎日退屈で退屈でしかたなくて…  
…なにもかも、ぶつ壊したくなるときがある」

ガラリと雰囲気を変えて吐き捨てるようにそういったロンの目が、  
ゾツとするような狂気を宿したように見えて、おれはわずかに身を  
引いた。

けれどすぐに、ロンはいつものヘラヘラした締まりない笑顔で話  
題を戻す。

「あのひどい体調でよくあそこまで歌えたもんだ……と思ったけど、  
熱に浮かされてるのが逆によかったとか？」

なんだ今の、と内心うろたえながら、「そうかも」とうなずいた。

「今のおれじゃ、あの時みたいには歌えねーからな」

「ヒヤハハッ怪我の功名うまじみってヤツだな！」

……ただ、今となると優勝したほうがよかったのかは、微妙だっ  
た。というのも。

「あのさ、おまえらの……『Der Luxustod』のファン  
で、特に過激な子って心当たりあるか？」

おれの質問の意図を探るように、ロンは爬虫類へいしゅるいめいた瞳をくるり  
と閃ひらめかせた。

「つーと？」

「関東大会以降、イタ電や差出人不明の嫌がらせや剃刀かみそりレターがく  
るようになってさ」

最初はまた王子の親衛隊のセンも疑ったのだが、薫子たちはおれの姿を見ると蒼白になって逃げていく。嫌がらせなんてする余裕もなく、とにかく関わりたくないという様子だった。（いったい何をした王子よ……。）

イタ電は煌が対応することで減っていき、やがて途絶えたのだが、「淫乱」<sup>いんらん</sup>「ビッチ」と罵倒する手紙の頻度<sup>ひんど</sup>はますます上がった。

そんな中、先日「イカサマ」だの「八百長」だのの単語を発見したので、これは魔王ファンからのものじゃないかと思当をつけたのだ。

『COLORFUL』が『Der Luxus tod』に勝ったことが許せない盲目的なファンがいるのではないか。それも、下手すると複数……。

「ん〜オレ達、つか魔王サマのファンって、わりとみんな熱狂的だからなあ。誰でもやりかねないっつーか」

「……そっか、厄介だな」

「俺の追っかけがおまえに何かしているのか？」

不意に、低い声がしてギクリと体が強張る。

振り向くと、魔王が不機嫌そのものの表情で立っていた。こいつに言つとまた面倒なことになりそうで、できるだけ聞かせたくなくなっただけど……仕方なくうなずくと、魔王は底冷えする瞳で断言した。

「話は簡単だ。皆殺しにしてやればよい」

「ダメ、絶対！ 暴力反対！」

こいつだったら本当にやりかねないから恐ろしい。



「しっかし、となると3日後のライブはけっこうデンジャラスな予感？」

きょとんと首を傾げると、ロンは「あれ、知らねーの？」とおもしろがるような口調で続けた。

「今度の『T・M GARAGE』の水曜ライブ、オレ達も出演するんだぜ」

そして運命の水曜日。

今日のライブでは、トリがおれ達『COLORFUL』で、その一つ前が『Der Luxustod』となっていた。

ステージに立つのもだいぶ慣れてきたとはいえ、やはり本番前は緊張する。始まってしまえばそれもどつかへ吹っ飛ばんだけど……。何度目かのトイレに向かう途中の廊下で、ゴスロリドレスに身を包んだ小柄な少女と遭遇した。『Der Luxustod』のベースだ。

年の頃は13歳前後。色白で華奢な姿態。ヘッドドレスをつけた艶やかな長髪は毛先がウェーブした青鈍色。

美少女、といえる非常に整った顔立ちだが、その大きな瞳はガラス玉のように虚ろで、衣装効果も相まってまるで人形のような印象を受けた。

そついや、魔王と同じバンドで紅一点って、この子もそうとうファンのバッシング受けてるんじゃないかなろーか……と思ったとき。

「わたしはだいじょうぶ」

いきなり、少女が無表情のまま語りだしたので、度肝を抜かれた。

「わたしは黒川旺眞のいもうとだから」

い、妹　！？　確かにいわれてみれば似てないこともないけれど。

「はじめてみたときからからふしぎだったのだけど」

どこから突っ込んでいいものやらと戸惑うおれを感情の読めない瞳で見つめながら、少女は抑揚のない声で、言葉を継いだ。

「なぜ、おんなのからだにおとこがはいっているの？」

……………！

もはや言葉もなく立ち尽くしていたところ、「詩衣菜<sup>しいな</sup>！」とロンが向こうからかけ寄ってきた。

「何やってんだよ、もうすぐ出番だぜ！　あり、和希ちゃん？　どこかした？」

「い、いや……ステージ、楽しみにしてるぜ。がんばれよ」

ぎこちなく手を振るおれに、ロンは怪訝<sup>けげん</sup>そうに眉を上げたが、本当に時間が迫っているらしく、詩衣菜をせかしてステージの方へ走っていく。

……ええい、考えるのはあとだ。おれもライブに集中集中！

弾ける光と音。歓声。

ど迫力で叩きつけられる華麗なドラム。切なくなるセンス抜群のギター。淡々となぞるようで熱の燦るベース。鮮やかに鍵盤を滑る如才ないキーボード。

今日もみんな絶好調だ。

心地いいリズム＆ビートに飛び跳ねながら、サビのクライマックスへと向かっておれはステージで声を張り上げる。

客席後方の壁際には、出番を終えた魔王も腕組みして観覧していた。相変わらずの仏頂面も、心なしか楽しげに見える。

さっきのこいつの歌声も、震えがくるほど凄かった。でも、負けないぜ？

目が合って、おれは少しだけ口元をほころばせた。瞬間。

ビュン、と何かが舞台にとんできた。

ぐちゃり。

あわや頭にぶつかりそうになったそれを、おれはとっさに受け止める。

掌でつぶれたそれは、生卵。

フン、こちらら体育祭に向けて運動パラメータ徹底強化中なんだ。妨害工作もある程度予想済み、簡単にくらってたまるかっつての！

しかし立て続けに飛んできた第2弾を目にした途端、おれはカチンと固まった。

おれのすぐ足元に着地したそれは、黄味がかった茶色の毛に覆われた、掌サイズほどもある、大グモ……！

## 70・和希の弱点

「~~~~~!!!!?????」

見るもグロテスクなそれはひょいとジャンプすると、なんとおれのスカパンから伸びた素足へ飛び移り、すごい速さで力サ力サと上にのぼってきた！

「あああああ……！」

全身鳥肌で総毛だつて悲鳴を上げた瞬間、一番そばにいた悠斗がバシッと手で払い落としてくれた。舞台のすみに転がったそれを、静流がぐしゃりと踏みつぶす。

「誰だ！」

煌や王子も血相を変えて立ち上がり、舞台から客席を見回すのがわかったが、おれは情けないことに悠斗にしがみついてガタガタと震えるしかできなかった。

ゴキブリもムカデもナメクジも、遭遇したらそれなりに冷静に対処することができたけれど。

クモだけは昔から、本当にダメだった。生理的に受け付けない。至近距離で目の当たりにしてしまったアレは、思い出すだけで、血が凍り、今にも意識が遠のきそうだった。

パニックで喚きだしたくなる衝動を、必死で抑えていたら

「きゃあああああ」

客席から甲高い悲鳴が上がった。  
視線をやると、魔王が鬼気迫る怒りの形相ぎぎょうしやうで一人の女の髪をつかみ、体を持ち上げていた。

「貴様……どういっつもりだ？」

地の底から響き渡るような低音とともに、もう片方の手で女の顔をグイッとほさみ、詰問きつもんする。

「ごめんなさいごめんなさい、と泣き叫ぶ女　嫌がらせの犯人だろう　を心底不快げにねめつけると、大きく平手を振りかぶる。

「やめろ、魔王！　女相手におまえが本気でしたら死んじまうっ」

「かまうものか、こんな下衆げす」

「落とし前はあとでおれが自分でつける。やめるんだ！」

気を奮い立たせて懸命に叫ぶと、魔王はふうーっと長く息を吐き出してから腕を下げた。

地に足をつけたものの顔をおおってシクシクと泣き出した女を、恐ろしく冷たい瞳で一瞥いちへつしてから、「聞け！」と会場を見回して声を張り上げた。

「今回だけは見逃してやるが……今後その女に手を出すものは、死を覚悟せよ！」

脅しでもなんでもない本気の宣告に、会場はシン、と静まり返ってから、また大きくざわめき出す。

「は、羽鳥和希は、旺眞様のなんなんですか!？」

取り乱したような質問が發せられた方角をギロリとにらみつけてから、魔王は一喝した。

「知るか！ 俺が聞きたいわ！」

そのあまりに偉そうな言い様に、体にはまだ力が入らなかったけど、どちよつとだけ笑ってしまった。

「だが、和希に害を成すものは、俺が許さぬ」

響き渡つたその言葉に、何人もの女子が悲鳴をあげて泣き叫びだし、会場は一氣に騒然となる。

おれの体調の都合もあり、その日のライブはそのまま幕を閉じざるをえなかった。

「……あれ、あの女は？」

「もしかして、もう帰しちゃつたの？」

オーナーへの挨拶で席を外していた煌と王子が、楽屋に戻つてきた途端、眉をひそめた。

「ああ。もうだいぶ遅い時間だしな」

さつきまでここには、現行犯でつかまえた例の女がいたのだが……。

「センパイは甘すぎるよ」

いらだたしげに声を張り上げたのは静流。

「結局あいつ、泣くばかりで反省の様子なんて無かったのに」

「謝ってたじゃん、もうしませんでした」

「口だけならなんとでも言える。あーゆー女は、涙だって自在に操るんだよ？」

不機嫌に指摘されて、おれはぐ、と言いよんだ。

捕まえたら絶対一発殴ってやる、と思っていたのに、目の前で「旺真様が好きなんです……悔しかったんです……」とか弱げに泣かれてしまうと、気もそがれた。

しかも彼女、以前夏祭りの時に、魔王に無理やり帰された女達の中に見覚えがあったのだ。

そりゃ、恨みなくなる気持ちも起こるだろうってなもんで（いや、恨みの対象がおれに向くのは不条理だと思うけど）、あまり強くも言えなくなった、という事情もあった。

「やっぱり、僕も残るべきだったかな……」

すっと目を細める王子を、「いやでも」といさめる。

「静流たちが、もうおれに近付かないって誓約書、書かせたし」

「……ちゃんと本名を書いているか、は怪しいものだな」

ボソリと呟いて、ピツと悠斗が指で弾いた紙切れを受け取った煌が、素早く目を通すや大きいため息をついた。

「不安の中。偽名だ」

「!?!」

目を見開くおれに、煌は渋い表情で首をほぐしながら、言葉を継ぐ。

「俺がDer Luxustodにいた頃から熱心に追っかけてた女だよ。本名は、『檜居まゆか』。一人称まゆかでしょっちゅうアピールしてたから、覚えてる。ここに書いてあるのは、他のおっかけ仲間の名前だ」

……あ、の女……！

かあつと怒りで紅潮してから、どっと凹んだ。

そんな最低女に簡単にだまされちまって、やっぱおれ、馬鹿だなあ……情けねえ。

「ま、犯人がわかれば、手のうち用もある。また何かあつたら、絶対すぐ言えよ？」

落ち込んでいた肩を、ポンといたわるように叩かれる。

「お人よしも数あるセンパイの魅力の一つだし、ね……今日はゆっくり休むんだよ？」

「そんな悲しい顔しないで、和希ちゃん。君が曇っていると、世界まで色を失ってしまう」

「腹が減っただろう？ うまいものでも食べに行こう」

みんなの励ましが、嬉しかった。

……そーだな、あんな奴のせいでいつまでも暗い気持ちでいても悔しいし。反省だけはあとで自分の部屋で存分にすることにして、沈むのはやめにしよう……てスイッチ切り替えようとしたけど、ん



な簡単にいくかー！

やっと落ち込みモード抜けたと思えば、またむしゃくしゃしてきた。嘘つくだけならともかく仲間の名前書くとか、マジでふてえ奴だ。

二度と関わりたくねーけど、もしまだ何かちょっかい出してきやがったら次は絶対許さねーからな……！

## 70・和希の弱点（後書き）

先日、小ネタ集に煌×和希の番外編？をアップしたのでご報告します。

例によってベタなネタですが……

『和希クッキングするの巻』[http://ncode.syo  
setu.com/n3560w/7/](http://ncode.syo<br/>setu.com/n3560w/7/)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7786s/>

---

『ときメロ』 - 恐怖のイケメン学園 -

2011年10月9日13時11分発行